



No 1

東京上等裁判所ニ於テ英商
マゼソン社中ヨリ後藤象二郎ニ係
ル鑛業差止願ノ控訴一件口供



114
△2711
1

印々々々々々

高島石炭坑一件之本訴東京裁判
所之於之審問原被之口供別紙壹綴
御廻申候尚令後之令ハ審問毎之逐次
差進候様可致此段申進候也
明治二年二月十八日 大木司法卿

大隈大藏卿殿

大隈正十一年四月
大隈侯爵邸寄贈

千八百七十八年十二月二日
上等裁判所ニ於テ

ジャルゲンマセソン社中ヨリ後藤象二郎ノ
係ル差留願ノ控訴ニ付

控訴原告代理人

カルクード

同被告代理人

星亨

カルクード氏口供

裁判官ハ控訴原告代理人ヘ向ヒタリ
私ノ趣意等ヲ陳述スルニ先ケ立ケ私ハ願フ
テリ則ケ今日午前第十時ヨリ午後第一時ニ至

大正十一年四月
大隈侯爵邸寄贈



ル迄審問猶豫ノタメ其費用ヲ拂フヘキ様被告
人ノ命テラハレシテ亦ニ其猶豫ノ理合ヲ兼知致
シタリ
該事件ニ付テ被告代人ハ東京裁判所ニ如何ナ
ル用向テリシヤ裁判官ヨリ私ハ告知ラント
ラ要願スルナリ
被告ハ先月三十日前ニ東京裁判所ニ於テ後
答辯ヲナスコトヲ命ゼラレサリシヤ
其猶豫ヲ保証スルタメ被告ハ充分ノ証拠ヲ
出ヘタルヤ
其願ハ東京裁判所ヘ差出タル願ノタメ與ヘラ
レタル判決ニ對シ控訴ノ方法ヲ以テ當裁判所
ヘノ願ナリ而シテ其願ニ於テハ後藤象二郎ト

シヤルデン、マゼソン社中トノ訴訟ノ審門迄東
京裁判所ノ命令及シ差留イニシヨシヲ以テ被
告後藤象二郎ノ或ル行為及シ事物ヲ差出ラレ
ンコトヲ願フタル者ニシテ東京裁判所ヘ差出タ
ル願各ニ記載シマリ而シテ其願書ハ當裁判所ヘ
ノ控訴ノ方法ヲ以テ現今ノ願各ニ添ヘタリ
當裁判所ヘノ願ハ實ニ東京裁判所ヘ願ヒタル
ト同シキ者ナリ其願ハ本訴ノ訴状ニテ輔助サ
レタル者ニシテ其情實ハ「シヨシ」ウ井ツトル
キニケスウ井ツキ氏各自ノ警告ニヨリ眞實ナ
ルモノト證據提出ラレタリ台ノ警告ハ差留願各
ト共ニ控訴ノ方法ヲ以テ差出シタルニ付當裁
判所ノ目前ニアリ右警告ハ神奈川ニアル英國

皇帝陛下ノ領事ノ目前ニ於テ誓盟シタルモノ
ナシト云之ヲ東京裁判官ニ問ヒシ處其答ニ右
誓盟ハ該裁判所ノ規則ニ從ク作証者ノ良心ヲ
以テ嚴肅ニテ誓盟サレシカ如ク同シ効力ヲ有
スル者ト東京裁判所ノ裁判官ニ於テ掌理シタ
リ他項ヲ陳述スルニ先キ立ケテハ當裁判所ニ
向フテアリ則チ當裁判所ニテハ右ノ誓盟ノ夕
ノ同様ノ効力及估價ヲ有スルマ否ヤ或ハ其ノ
如キ口供ヲ欲願ノ証拠トスルタメ各作証者自
カラ當裁判所ノ目前ニテ同シ口供ヲナスヲ要
スルヤ否マ裁判官ニ於テハ英國領事ノ目前ニ
テ誓盟シタル三通ノ誓書ハ其記述セシ所當裁
判所ニテ最モ嚴肅ナリト思量スル方法ヲ以テ

當裁判所ノ目前ニテ各作証者カ申陳セシカ如
ク同シ効力ヲ有スヘシト掌理セリ
右ノ誓書ヲ以テ輔翼シタル訴狀ノ外ニ裁判所
ニテハ原告ニヤルデシマセリ社中ト後藤家
二郎氏トノ間ニ取極メタル種々ノ契約書ヲ有
セリ右ノ契約ノ中ニハ他人々モ亦夕關係セ
リ〇其等ノ契約各ニ於テハ被告ノカ結約シテ
擔任セシ約束及シ義務ノ性質ヲ顯示スルハ明
カナリ又右等ノ箇条ニ付キ尚モ詳細ノ論争ハ
之ヲ將來於テ陳述スヘシ
証拠ヲ以テ輔翼シタル其願ノ夕ノ私ハ陳述ス
ルナリ則チ原告人ニ於テ現今未ムル恢復ヲ有
スルカアルハ第一ニ現出テシムルニ足ルノ

ミナラスニテ一層ノカアルナリノ被告代理人
星亨氏カ東京裁判所へ提供セシ辯解書寫一通
并ニ又其裁判所へ差出シタル或ル証書ノ寫ト
共ニ一箇ノ答辯ヲ差出シタリ。○東京裁判所へ
差出シタル該辯解書及シ證書ニ付キテハ今般
ケノ論議ラナスヘシ
東京裁判所ニテ其願ノ審問ハ先月五日ナリシ
○右審問ノ節被告代理人ハ証書又ハ凡テ証拠
物ヲ一切差出サレシ。○同人ハ第一ニ裁判官
ニ簡短ナル申立ヲ為シ之ヲ書面ニ認メ裁判官
ニ差出シタリシ。然レ凡同人カ該裁判官ニ差出
シタリシ論解書ナリトテ只今差出ス証書ハ先
月五日ニ該裁判官へ同人ヨリ差出シタリシ者

ト決シテ同一ノ書面ニテラス。○先月五日ノ審
問ハ午後三時四十五分ニ至リ翌日ノ正午ニ延
期セラレタリ。○其節ハ被告人ハ自身ニ亦代
言人モ出頭セズ且先月十二日裁判申渡シノ
節ニ同人ハ裁判所ノ席へ出頭セヌ。○同人ハ
論解書并ニ同時ニ該裁判官ニ差出シタリシト
称スル書面ニ於テ公然ト同人ヨリ差出ツ
サリシ又同人カ裁判官ニ差出シタリシノ事
實ヲハ當裁判所ニテ其願ニ對スル同人ノ答
弁ヲ落テスル迄ハ原告人於テモ亦私ニ於テモ兼
知セヌ。○私ニ於テハ初審裁判所ノ部分ニアル
如ク審理ノ方法ヲ欲シテ全ク貴重ナラサル
ヲ示スニタル者トス。其判決ニ於テハ該件ノ

被告論并見合

虚実ニ付テ判ヒサルヲ得ス何トナレハ私ニ於
テ知ラザリシ論弁各ニ對シ答弁スルハ私ニ
於テ能ハザリシカ故ニ初審裁判所ノ判決ニ於
テハ現今ノ願ヲ断決スルタノ當裁判所ノ意見
ヲ立ツヘヨカハ更ニ有セサルモノナルヘシ
第一ニ私ハ東京裁判所ヘ差出シタリシ被告代
言人ノ論弁ニ付テ批評スヘシ而シテ復知ハ當
裁判所ヘノ同人ノ論弁ヲ控送スヘシ
東京裁判所ヘ對スル同人ノ論弁中第一條ニ
同人ハ登載シラ曰ク原告ハ明治十年五月以來
被告ニ計等ヲ為スラ廢地タリ而シテ原告カ
右計等書ヲ請求セラレシニモ頓着ナク右計等
書ヲ得ル能ハザリントノ被告代言人ノ供詞

ケスウキ氏ノ
旨に合せて

ラ支控スルカメニ一切切証拠ヲ差出サ、リシ
故ニ代言人ノ供詞ノミニテハ凡テ証拠ト見做
スヘカラサレハナリノ然レ且右供詞ハ如何程
事實ニ反スルカラ示スカタノ私ハケスウキ
氏(原告人ノ一名)ノ書状ヲ証拠ニ呈スヘシ
ニ私ハケスウキ氏ノ認メタル原告ノ書状ト
称スヘシ何トナレハ右書状ハ一^{明治十年}千八百七十七
年九月廿一日附「ニヤルデン」マゼソン社中ト署
名シ而シテ被告ニ於テ毎月長崎ニ在ル代辦
定帳簿ヲ査閱スルタノ同人自己ノ検査人ヲ余
スヘキヲ該社中ヨリシテ既ニ控送シテ請求
シタリシ者ナレハナリ
私ハ被告代言人カ右書状ノ本紙ヲ取ニ所持ス

ルヲハ之ヲ差出ス一ヲ被告代理人ニ求メサ
ル不ウラス勿シテ若シ所持セズンハ次ノ審問
ノ節持参スヘキ様求メサルヘカラス(是レハ全
号書類ト記スヘシ)

然レテカラ被告ハ常ニ其ノ如キ有理ノ請求
ヲ兼知スル一ヲナサリシ而シテコレ原告ニ
對シテ同人ノ巨額ニシテ且増加スル負債ノ一
ニ付蒙要トリシヨリハ屢々心附ケラル、一ヲ
好マサリ一ノ明瞭ナル理由ノ為メナリ

實ニ原告ハ時々勘定帳ヲ査閲シ且検査スル
一ヲ同人ニ常ニ催促シタリキ然レハ同人ハ不
注意或ハ同人ニ最モ能ク知ラシタル他ノ理合
ノタメニ尤様ニ取計一ヲラセザリシ一

明治九年
十一月八

報告見合

百七十六年三月以来ハ被告ノ正ニ命ニタル
代人タルイ一オウ井ツトル氏ヨリ同人共ニ申
立タル一ノ外ハ原告ニ對シテ勘定ノ一ニ付キ
常ヲ申越シタル一ヲサリキ右「オウ井ツトル
ノ申立ヲハ同人共於テハ即刻且速カニ兼知セ
リノ私カ只今批評スル論争各ノ第一在中ニ報
告ノ一ニ付申述セン一アルヲ見ル右ハ「オール
ト」ホスル横濱ニ在ル勘定方ヨリ得タリシ者ト
知ラル右ノ翻訳ハ初審裁判所ニ差出シタリシ
一ト申説セラル

私ハ此報告ノ本紙ヲ差出ス一ヲ被告代理人ニ
之ニ依頼テ「カ」ルヘカラス(是レハB号書類ト記
スヘシ)

一千八百七十八年十二月二日

原告代言人

モンタギューガルノワード

午記

明治十一年十二月三日午前原告代言人口供大略

- 一 被告人カ証書ノ本文ヲ当廳へ持出スルヲ余令セラレテ今日持出セリ其号ヲ甲乙ト称ス
- 一 昨日ヨリノ續キ
- 一 ホール氏ノ意見書ハ如何ナルモノナルヤ第一ニ述フル所ハ同人ニ午後ニ相成タル計業表ハ誠ニ曖昧ト致シ殆ク精算ヲ立ルニ足ラサルモノナリトホール氏ノ意見書ト申ス者ハ誰ニ依テ依頼ヲ受テ書イタルトモ明載ナシ一加之如何ナルト書イタル

ホール氏意見書
見合セ

レロト云フテモ明言ナシ又如何ナル計業
表カホイル氏ノ予ニ相渡リ夫ニ就テ意見
書ヲ渡サレタルヤモ分ラズ此ホイル氏ノ
予ニ渡サレタル計業表ハ原告ヨリ被告ニ
對シテ渡シタル既ノ計業表ナリト云フ証
據ナシ又其計業表ノ一部分カ予渡サレシ
ヤ又全部共予渡サレタルトノ証ナシ其
予渡カ續シタル目的ハ被告ノ用ニ充テル
為メニ渡セリホイル氏ノ意見書ノ内ニ二
三ノヶ条ヲ擧ケタリ其ヶ條ハ誰カホイル
氏ニ告ケタルカ其人名ハ記載無之其異見
ヲ誰ニ依テ興ヘラレタルヤモ知レズ此ヶ
條ハ第一ノ利息上ニ関シ又其利息カ如何

ニ拂ハレタルト云フアリ券ニハ西曆
ノ差券三ニハ給金其他ノ費用利息ノ高ニ
付テハ原告被ノ向ニ取結タル条約ニ於テ一
對ト明言セリ此利息高カ月々ニ拂ハレタ
リトホイル氏ノ意見書ニアレモ夫ハ誤リ
ナリ本条約ニ於テハ六ヶ月一割ノ割合ナ
リ一ヶ月ニセヨ或ハ六ヶ月ニセヨ其高ハ
巨額ニハ無之無慮二三千四位ノモノナリ
原告ト被告ト代官入タルエトワイルドホ
イッタル氏トニ依テ定メサレタル既ノ計
業表ハ後ニ私カ証據トシテ裁判既ハ差出
スヘシ夫ニ依テ裁判官カ利息ヲ六ヶ月毎
ニ拂ヒ又ハ一ヶ月毎ニ拂フ差ハ本年十月

十四日迄ニ被告ニ取ルヘキ丈ケノ金額ニ
充ワルモノト被告代理人ノホイットル氏
ニ於テ認メタリ右ホイッタル氏ノ詞ヲ奈
告ニ於テ己兼認セリ

一 弟ニハホーハ氏ノ意見書ニアル兩替ノ
差ハ明瞭セカルモノナリ若シモホーハ氏
ノ被告後藤象二郎カ彼ノ盟約ニ依テ切替
ノ差ヲ拂フコト知リタラハ必ス其説ヲ変
ルナラシム其証ハ何時ニテモ裁判所ニ差出
スヘシ其証書ヲホーハ氏カ見ルナレハ大
ニ其惑解クナルヘシ只今申シタル盟約書
ハ裁判所ニ差出スヘク夫ヲ冬ツケテレシ
号ト云フ

千八百七十七月ノ約束
見付セ

一 弟ニハ疑モナリホルル氏ハ本約ヲ
一見セサル所ヨリ誤ノ起リタルモノト信
セリ但シ該本約ノ写ハ願書ト共ニ法庭ニ
差出セリ本約ヲ見ルニ限レハホーハ氏ハ
決テ本約ニ記載スル所ノ費用ヲ拂フタル
コトヲ知ルヘキ筈ナシ其約束ハ千八百七十
五年七月ノ約束中第三條ニ掲ケ有之普通
ノ代人給金ノ息金ハ五歩ノモノナリ

同去省

明治十一年十二月三日午後原告代理人口供大

略

一 原告代理人カ謹テ裁判官閣下ニ上申スル

ホール氏ノ意見書ハ法律上ニ於テ有効ナ

ル証拠ナラズ第一ハ如何ナル計算書ヲ渡

シテ如此意見書ヲ撰ハタルカ第二誰ノ委

托ヲ受ケ書タルカ如何ナル目的ニテ書キ

タルカ第三ホール氏カ原告ノ間ニアル死

ノ條約ノ事實ヲ知ルト云フ証拠ナキ故ニ

自介カ知ラサル條約ニ付テ意見ヲ述ハ能

ハサルヘシ

一 如此意見書ヲ出セハホール氏本人自ラ法

庭へ出テ自ラ意見ヲ書イタル理由ヲ述ハ

後藤ノ手紙
見合

ナルヘカラス故ニ被告差ニ条ニ於テ之ヲ
助リル証拠ナシ

一 原告ノ被告差辨ニ原告於テ計業書ヲ出サ
ル云々有之已ニ此論無証拠立ハ後藤象
二郎ノ手紙アリ此計業ヲ渡サスト云フ過
失ハ後藤自ラノ過失ナリ而シテ後藤ハ自
ラノ失錯ヲ咎ムルヲナクシテ原告ノ失錯
トスルハ世ニ恐ロシキナリ

一 被告カ上ニ申述タル条約ヲ取消ス以前ニ
原告ヨリ被告ヘ貸シタル金ヲ拂ハサルハ
カラズ然ルニ拂ヒマストモ云ハス拂フタ
ルイモナシ此ハ事實内幕力破産セシ故ニ
拂フ力出来ザルナルヘシ

一 被告差辨四條被告ヨリ石炭三十二万噸
已ニ原告ニ渡セリ此代金百六十万四ノモ
ノアリ故ニ却テ被告ヨリ原告ニ對スル
借取ニ非ラスレテ原告ヨリ被告ヘ對スル
借取アルヘシト被告差辨セリ此差辨ハ
事實ニ於テ無根ナル可驚策偽ヲ構ヘタル
差辨ナリ依テ右ヲ助クシ証拠ハ塵程モナ
シ

一 千八百七十六年六月原告被問取結タル契約
其他該件ニ関涉スル書類モ當廳ヘノ証状
ニ添テ差出セリ此ハ寫ナレド其手紙ハ原
告手本ニ有之

一 契約ハ後藤自ラ自ラノ借取ト差誤セリ加

明治九年
法律

之請人保ノ証據立ニアリ千八百七十六年
三月三十一日ニ於テ九拾八万九百拾四円
二十四銭ノ借財アルヲ被告自ラ認メタ
リ

一 右金額ノ外ニ二万二千四八同時ニシムル
ル社中へ拂ヒ渡セリ右受取ハ次審向日ニ
御覽ニアルヘシ

一 契約ヲ結フ時ニ方リテ後藤ハ百万円借財
アルヲ兼送セリ此金額ヨリ生スル一年
一割ノ利息ニシテ一年十萬円程ニ相成ル
外ニ原告ハ被告ノ為メニ種々ノ金田ヲ費
ヤセリ政府ハ鈔ムルノ年賦金六万五千円
程ニ納メタリ千八百七十六年ノ秋ニ失火

代筆ノ契約書
見合セ

ホレハレ氏ノ意見
書見合

ノ為メ殆ント石炭礦滅却ノ件非常ノ金額
ヲ原告於テ費ヤセリ右等ハ不殘原告出金
セリ右失火ニ付非常ノ損害ヲ回復スル際
其為メニ十二月モ掛リ諸雜費ヲ原告於
テ拂ヘリ右金額ニ加フルニ後藤ハ千弗ヲ
一ヶ月毎ニ拂ヘリ其外ニモ種々十諸雜
費ヲ拂ヘリ

一 千八百七十五年七月ヨリ高島石炭礦堀出
諸雜費ハ原告一千ニ之ヲ拂ヘリ千八百七
十四年代筆ノ契約ヲ結フ迄ハ殆ント諸入
費ヲ拂ヒタリト云フモ亘敷程ノ金額ヲ拂
ヘリ

一 原告カ只今被告ノ答弁ヲ正キモノト認ル

モ三十二万トンノ石炭ハ何程ノ金額ヲ生
スルニ耐ユルモノヲアロウヤジヨシソシ
ホルムレ氏ノ意見書ニ依レハ一噸ニ自一
四ヨリ超過セス

一 原告ハ此石炭礦諸雜費ハ不残拂ヘリ夫ハ
原告ノ間ニ存スル瓦ノ計集ニテハ明細ナ
ラス原告ノ公論ニ依レハ初メ千八百七十
四年ヨリ今日ニ至ルマテ被告ヨリ原告へ
送ル石炭三拾二万トン一噸一圓ニテ三十
二万圓ニナレリ千八百七十六年六月ノ条
約ニヨツテモ自テ百万圓借金アルハ美
諾セリ其後又々被告へ拂ハ被告ノ為メニ
他人ニ拂フタル金額ハ定ニ非常ナリ

一 夫火ニ依テ云々以來殆ント損ヲ致レテ利
ナリ石炭ヲ掘リタルモノナリ

一 前ニ申立ル場合テアリナカテ如何シテ被
告代理人ハ此訟庭へ出テ此原告ノ申立カ
不違ナリト答辨出来ヘキヤ実ニ驚入レリ
殊ク之ヲ論スレハ己ニ日本新聞紙ニモ後
藤カ廣告アリテ被告ヨリ原告ニ借金アリ
原告カ拂ハサル云々右廣告ヲ見レハ如何
ニモ至当ト見ユレヒ此ハ實ニ原告ノ名譽
ヲ損スルト云フモ至当ナリ而シテ今日被
告トナルモノハ蓋シ借金ヲ拂ヒ能ハサル
故ナラント考フ

一 原告代理人ハ謹テ再ニ閣下ニ上申ス只今

追駁し来らん処ノ被告ノ卷并ハ其ニ之ヲ
助リル死ノ理由ナキモノト愚察ス只今迄
証拠立ル死ノ被告借金ノ外何故被告ニ於
テハ本年四月東京裁判死ニ於テ原告ヨリ
金手取ラレタル中原告ノ被告ヨリ二十万
円ヲ拂フヘシト云フ手紙ヲ遺ハセリ右ハ
六ヶ月内相拂フト記セリ加之百二十噸ヲ
原告ヘ送ルト云フノ唇状ヲ投セリ右手紙
ノ写ハ已ニ裁判死ノ呈供セリ此手紙ヲ遺
ス譯ハ金手取ラレタル訴訟ヲ引下ルノ懇
望ヲ遂ケンカ為メニ送レリ何故ニ如キ手
紙ヲ遺セシヤ非常ナル借賤アレハコソ如
キ手紙ヲ遺セリ如キ手紙ハ遺セバ被告ハ

今日ニ至ル迄右炭モ送ラサルノミナラス
金額モ送ラヌ概シテ云ハ此手紙ノ約定
ハフマサリシナリ謹テ証拠立シニ其節モ
今日モ非常ナル借金カ原告ニ對シテ有之
実ニ被告ハ憐レナシ有様ナリ右ハ破産ニ
至ントシテ借賤返并相成ラサル場合ニ立
至レハナリ

一 被告卷并炭五余ニ論スル死ハ何故ニ計業
唇ヲ出セト云フ片ニ原告ハ之ヲ拒ム云々
ト有之此ハ實ニ抱腹ニ堪ムナルナリ争実
トハ大ニ及對セリ今其事實ヲ述シニ後藤
カ原告ニ依頼スルニ暫時猶豫致異度為レ
ハ金口誠通ノ道ヲ開キ相拂フヘシト此ハ

グリブル氏ノ手紙見合

ジョシソン氏ノ手紙見合

後藤ノコトヲス証人モ且連印シテ其責ヲ
 帯フル人ニモ同様ノ懇願ニ及ヒタリ
 一 又被告卷ノ五条中一ツノ手紙ノ誤ア
 リ夫ハ原告カ層タルグリブル氏ノ手紙ニ
 付テノトト申出セリ乍依該手紙ハ有之ナ
 レモ被告ノ手紙ノ取方ハ事實ニ及對セリ
 其事實ハ原告ノ一人ジョシソン氏ノ被告
 ニ送ル手紙ニテ計集層ハ正直ナル人トナ
 レハ度々可シ其人ヲシテ精集ヲ致サスモ
 可ナリ又正直ナル人ト原告ニ於テ認めレ
 ハ精集ヲサスルモ宜シト云フ又ケノ手紙
 ナリ原告ノ一人ジョシソン氏ハ一ツノ計
 集ヲ勘定致ス人ノ確カナルカ或ハ如何ナ

ル性質ナルカヲ確メ度思ヒ居レリ實際彼
 ノ名ト申ス者ハ精集ヲ立ル人トハ記載ナ
 シ又原告ニ於テモ決テ彼ヲシテ計集ヲ立
 シハル点ニ一ツノ拒ミヲ狭マス足計集層
 ヲ勘定スヘキコト付テ雜語中其人ノ名ヲ
 申スノコトグリブル氏カ長崎ヨリ東京ヘ到
 着ノ中被告カ申立ル手紙ヲ原告カ認めラ
 レタリ同氏カ精集勘定ハ性質少同氏カ帯
 ブルコト付テ決テ道理ニ於テモ原告ハ拒
 ム誤ナシ手紙ノ件モ同様後藤氏カ至急ナ
 ル人ト認めル人ニ精集ヲサセルニ少シモ
 拒ムス何ナリトモ此計集ヲ立サセルハ奈
 告兼送ナリ

相イタル氏ノ意見
書見合セ

一 被告代人相イタル氏カ原告ニ對シテ其計
果ヲ調フルトニ付テ許シテ受度ト云フ概
念有之也ハ原告ニ於テモ兼該整ヒ居レリ
同氏ノ意見各ハ何ヤニテモ法處ニ携帶ス
ヘシ其唇タルモノハ別被告カ原告ニ向テ
百萬四余ニ至ル程ノ借賤カアルヲ確ニ
証拠之ルニ耐ルモノナリ右ノ理申ナルヲ
以テ被告答弁第五條ハ之ヲ助ルノ証拠ナ
シ又事實ニ及ス
一 被告答弁第六條ニ若シモ此差止メノ令カ
裁判既ヨリ下ル場合ニ至レハ被告ハ之レ
カ为メニ回復ヲ得ヘカラサルニテノ損害ヲ
蒙ルベシ也答弁ニ付テ私ハ先此差止ノ令

ヲ下ケルズテノ条理カアルト云フ条理ヲ
論スルニ方リテ此六條ヲ駁セレ被告ハ差
シモ差止ノ令カ下ラハ非常ノ損害云々申
セ凡若シ差止ノ令カ下ラサレハ差止ノ令
カ下テ被告ノ苦ムヨリ原告ノ苦ムヲハ大
ナルナリ第六條ニ付又申スニ原告カ先例
ヲ沃山下書裁判既ニ申述ヘテリ先例ハ此
訴訟ニ付關係ヲ有セサルモノ故申立ルモ
無益ノモノト申セリ而シテ私ノ論糸結局
ニ至リ私ノ掲ケタル先例ハ適当シタル先
例ニテ差止ヲ下サレラ得ス此立時ノ場
合ニ至ラハ及ノ指止令カ被告ニ對シテ廣
告サレヌハナラス被告論鋒ノ弱キ既ハ被

告カ至廳ニ於テ法理ヲ論スル能ハス又之
レニ耐ユル死ノ先例ヲ奉ルヲモ出来又故
論鋒弱シ

一 被告卷末第六條ノ飲リニ未未ノ破産云々
此場合ハ負擔スル場合ニ至ラサル故ニ云
々卷末セリ乍去謹テ察スルニ被告力高運
ニシテ一朝之カ變シテ金山ニナレハ格別
左ナリハ被告ノ當時ノ有様ハ將來破産ノ
地位ニ立至ルト考フ右ニ旨詔趣ヲ呈セル
其誤ハ去年ノ秋テスラ手紙ニテ非常ノ歎
願ニテ下等裁判中止ヲ願フ位ナリ日々被
告ノ食料其他諸費ヲ拂フヲモ出来サル故
夫サハ原告ニ於テ致吳度トノヲモ有之其

懇望ニ任セ原告ニ於テ拂ヘリ右思惠ヲ受
十カウ其思ニ較ヒサルノミナラス不殘系
告ニ損害ヲ蒙ラシムルハ如何ナル誤ナル
ヤ私ノ論年スル死ハ詐偽ノ性質ヲ持ツト
明言スルヤレハ後藤自ラスルヨリ外他ナ
シ後藤ニ於テ私カ述フル死ヲ詐偽ト申セ
ハ後藤自ラ出テ申立ツヘシ後藤カ奈被問
ノ条約ヲ破リ且大ヒナル信ヲ失シタル度
ハ恰ニ太陽カ青天ヲ照スヤ夕明瞭ナリト
ココブニ後藤ハ破産ノ姿ナル故ニ種々方
法ヲ運シ代年ノ約ヲ取消セリ乍後法律上
ハ取消サヌ後藤ノ詐偽ナリ後藤カ約ニ及
シテ石炭ヲ堀出セル大ケ堀出し賣却シ其

金田ハ原告ハ遺ハサス悉皆自分ノ用ニ
供セリ而シテ原告ニ於テ不取ナレハ法庭
へ訴出ヘシト被告ハ言テ一向構ハサルナ
リ尚差止ノ令カ下ラサレハ不法ナル死業
ヲナシ無理ニ石炭ヲ掘出セリ其後一時
ニ沢山掘出ス故ニ隨テ價モ廉ニナレリ又
多ク掘出スニハ職工ニ沢山使ノ故手間料
又分ニ掛ルナリ右ノ仕末故御審問ノ後裁
判申渡スノ件ニ至テハ彼令原告カ勝訴訟
トナルモ只今ハ利益アル鑛山ニ掘リ荒シ
タル後原告ハ渡サルレハ價ナキモノナリ
仍テ原告ハ勝訴訟トナルモ實際ノ利益ハ
更ニ無之如キ場合ニ於テハ裁判官ノ明裁

ヲ仰テ如キ有様ニ立至ラサル様豫備アラ
ンテラ冀フ

ワ
金
保
受
取
存
日
合
ノ
受
取
存
日
合
セ

明治十一年十二月六日原告代言人口供譯同書

一 原告代言人カニヤルテインマデソン社會
ニ依テ貳万貳千四ラサイベルトブレソワ
ールド社會ニ拂フベキ保証存トデー号ノ
受取証存ヲ之ニ添テ出ス
一 過日ハ被告ガ東京裁判所ニ於テ差出ニテ
ル所ノ答弁ヲ駁ス最中當廳内庭ニ相成被
告代言人ノ該ケ條ニ原告人カ高島礦山ニ
就テノ諸器械ヲ所持スヘキ權利ヲ有スル
ト云ヘ主張ニ就テ論ニ有之被告代言人ノ
申立ニハ初テ被告カ政府ヨリ該礦山堀出
許可ヲ得ルニ方テ己ニ該礦山ニ屬ニタル

既ノ器械アリト申立ハ実ニ正シキモノ
ナルカ原告代理人ノ思フニハ被告代人力
千八百七十五年七月ニ結ビタル所ノ條約
中ニ報告ハ當時高島礦山ニ付屬シアル所
ノ器械ハ悉皆原告ノ手ニ引渡アルト云ヒ
之明言ヲ失念セリト思ヘリ其引渡タルハ
當時被告ノ負債タル七拾六万八千四ヲ拂
フ^迄ハ詎器械ヲ原告ニ讓渡セリ從シテ金
額ハ決テ皆済セ下矣皆済ニ至ル迄ハ原告
ハ詎器械ヲ所持スル既ノ明瞭ノ権アリ詎
器械ハ其契約ヲ結ビタル日ニ詎礦山ニ付
着セシモノナリ故ニ既ノ有権ニ同一原告ノ
手ニ在リ當時礦山ニ供ヘアル器械ト其後

買入タル器械ニ付千八百七十六年六月ニ
於テ盟約ヲ双方ノ間ニ取結ビタルト被
告代理人ハ同ク失念ト考ヘリ謹テ申上ル
ニ只今御案ノ左ノ存写ハ不殘款額存ト共
ニ貴廳ニ差出セリ乍依右ハ字ニテ本紙ハ
只今裁判官閣下ニ差出サン閣下之ヲ策要
ト御認相^成ル上ハ以前差出シタル既ノ写
五年七月ノ証存類ハイエフト記号ハ千
八百七十六年六月ニ取結ビタル取ノ証存
類ハ^明千八百七十六年六月ニ取結ビタル取ノ証存
六月器械ニ付テ取結ビタル条約中ニ左ノ
件以明載セリ詎証存中第二ノ部類ニ屬ス

千八百七十六年
六月
証書

スル所ノ人即原告人共ハ高島礦山ニ付
使用サレタル所ノ並々器械其他種々ノ器
械ヲ彼等自ラノ名ヲ以テ追々買入タリ今記
シタル諸器械ハ該契約ヲ結々タル所ニ方
ラハ証卷第一部分ニ掲ケテアル所ノ人即被
告ノ午ニ未夕引渡サシ又モノナリ加之被
告カ^{某費用拂ハス教ニ部類ノ人々即原告ノ}有品丁リ政府ヨリ高島礦山ヲ堀出
スヘキ許可ヲ得ル所ニ已ニ該場ニ備入有
タル諸器械加之其以後置入タル所ノ器械
共不残原告ノ午ニ於テ拂置タルモノナリ
被告後藤象二郎ハ政府ヨリ礦山堀出ノ許
可ヲ得ル為メ政府ハ拂フ一先ノ金額中加之
諸器械ノ費用ニ付テハ只ノ一銭ナリに任

拂フタルナシハ一先ノ証卷ニ記載スル
無慮四拾五万三千圓ハ原告ヨリ後藤象二
郎氏ハ先拂ヲナセリ其先拂ハ高島礦山ヲ
買フタメニ午渡セシモノニラ之ニ加ワル
ニ後藤象氏が政府ハ四拾万圓拂フト云フ
明言ニ基キ該金額ヲ前拂致シタルモノナ
リ乍去其明言ハ被告之ヲ遂ケス詐偽ヲ攝
ラ原告ヨリ受取タルモノナリ如共惡キ
ワザヲ被告ノ為ニタルハ夫レノミナラス
其後度々有之前申立ル四拾万圓^前金額ヲ政
府ハ拂ハズシテ被告ハ唯貳拾万圓ヲ礦
山ノ計算ニ付政府ハ納メ残貳拾万圓ナリ時
政府ノ或ル者ヨリ被告カ借受タル金額ヲ

拂フ為ノ費用致シタルモノナリ夫ヨリ以
後政府へ可拂年賦金高八年ハ六方五千四
初告カ契約ニ背キタルハ近悉皆原告ノ手
ニ於テ任拂買キタルモノナリ右申立ル通
以卷械ニ付テノ費用ハ不殘原告ノ手ニ於
テ拂置キタルモノ故ニ千八百七十五年七
月ノ契約即イ一号ニ基クニ非サレバ詠卷
械ヲ死守且死有スヘキ權利ハ千八百七十
六年六月ニ取結ビタル死ノ契約即イ一号
ニ據テ明瞭タルモノナリ其契約存ニ據テ
被告カ何キ且如何様ナル方法ヲ以テ右申
入卷械ヲ死守スル權ヲ得ルヤヲ盟約セリ
其契約ハ即増^五ノ如シ第二ノ部類ニ明載シ

タル所ノ人ハ則原告且被告ノ間ニ成立
タル死ノ代理條約ノ法律上カマリ且正
直ト認ムヘキ死ノ期限ニ至レハ被告後
藤象二郎氏ハ何キニテモ前申ス死ノ遺
氣器械其他アラユル器械ヲ買ヘキ權利
ヲ得ルト明言ス原告代官人謹テ上申ス
ルニ代理條約ハ決而未タ消滅セサルモ
ノナリ近頃エトツルヤウツトール即被
告ノ代人ニ於テ同^五後藤象二郎カ原
告ヘ對シテ負フタル所ノ金額ヲ皆済相
成迄ハ其代理條約ハ未タ滅却セサルモ
ノナリ故ニ金額皆済迄ハ後藤氏ハ該器
械ヲ不^五死守^五且之ヲ使用スル權ハ

持ツサルモノナリ且拙キ既リ使用ニ依テ
ハ第一禍災ニ依テ右ノ諸器械ハ直打ナキ
モノトナサザルヲ保証シ難キモノト存セ
リ被告代官人ノ答論同條中ニ失亡サレタ
ル器械ノ部分即原告代官人ノ推量スル既
ニ據シハ石炭ヲ掘出スニ欠クヘカラサル
既ノ器械ニシテ後廢象ニ即カ始ラ政府ヨ
リ礦山掘出許可ヲ得タルハニ方ヲ備ヘ付
アラサルモノナラシ夫ハ九万四千四六ケ
ノ價ノモノト思ヘリ右ノ器械ハ原告ノ手
ニ於テ買置キタルモノニテ政府ヨリ掘出
許可ヲ得テヨリ尠未九万四千四六ケノ入
費ヲ原告カ拂ヒ置タリ右費用ノ金額中少

クハ新礦坑ヲ穿ツニ付且禍災水害等ニ依
テ醸ニタル所ノアラユルハ費ニ費ヤセル
モノニテ該水害ハ千八百七十六年七月ヨ
リ二三月間續キタルモノナリ又同條ニ於
テ被告代官人ハ左ノ答論ヲナシ其答論
ハ則原告カ被告ニ對シテ差出シタル既ノ
計善番中ニ器械ノ價直カ明載ニテ有之ト
答論セリ去如キ不都合ナルハ原告代
官人ノ取ラサル所ナリ被告代官人ノ陳述
ニハ該計善番中ニ掲ケタル器械ノ價直ノ
ミヲ以テ該器械ノ所持且既有推ラ買得ル
ト云フハ甚タ不都合ナル答論ト思ヘリ右
申ス通若シモ証書中ニ器械ノ價直カ明載

こテアル事案ノミヲ以テ右器械ノ所持且
所有権カ変革ナスモノナラハ何故ニ被告
ハ自分ノ代人ニ依テ承諾サレタルヲ以テ
ル計羨春ヲ受取後千八百七十六年六月ニ
於テ付一号ナル契約ヲ取詰而シテ有器械
ハ被告ニ屬スヘカラサルモノト明言シタ
ルヤ右申入通ノ不都合ハ元條約ヲ結フニ
方テハ被告ノ力思慮致サ、ルモノニテ被
告代官人ノミカ唯今如キ不都合ナル端ヲ
之ニ挿ムモノト信用ス其後原告ハ左ノ手
立ヲ始終用ヒ居ル則原告ニ於テ仕譯ヲ致
シタル諸般ノ買入物ハ悉皆時々原告ニ告
ケルニナリ居シリ是ハドコマデモ被告

ラシテ被ノ原告ニ對シテ帶フル所ノ負債
ノ高ハ何程ナルヤヲ熟知セシムル為ノノ
方法ナリト一号契約ニ依テ原告ハ新ニ買
入ヘキ所ノ器械ノ入費又ハ古器械修費ノ
為メノ入費ハ原告ニシテ仕拂フヘキトノ條
約ヲ結ヘリ被告ハ又付一号契約ニ於テ右
申入通器械ヲハ不殘原告ヨリ買戻ストノ
契約ヲ結ヘリ此則原告カ被告ノ為メニ挿
置タル全金額ヲ皆済スヘキトノ條約ナリ
然レ今日迄ニ被告ニ於テ右ノ金額ヲ皆済
セサルナリ故ニ原告ノ間ニ存スル所ノ計
算ヲ精算スル迄ハ被告ハ右ノ諸器械ヲ死
持且所有テス所ノ権ハ毫ニ無之モノト謹

ホワイツタル氏
盟書

ラ信ス被告後藤象二郎ノ代人エドワール
ドウイツタル氏ト原告人トノ同ノ計善表
精善調ニ依テ見レハ礦山ニ付テノ諸雜費
且諸器械ハホイツタル氏ノ盟書ニ掲ケテ
ルモノニシテ其ハ本計善會中ノ一部分ヲ
右ムルモノニハ無之ホイツタル氏ニ依
テ計善サレタル所ヲ原告人カ承諾致シタ
ル故ニ其精善ハ將末原告ノ同ニ効マルモ
ホイツタル氏ノ意見盾ノ如ク計善本部類ニハ
屬セサルモノト認メサルベカラスト考テ
原告人カ只今被告代官人カボイツタル氏
ニ據テ認メラレタル精善表唇ヲ差出ス

ホワイツタル氏
ノ意見書

ク翼フ其ホツイツタル氏ノ盟唇ハ本年十
一月三十日ニ於テ英國領事ノ前ニ於テ認
メタルモノトリ加シ領事ノ差出シタル所
ノ証唇ト午八百七十七年正月廿二日ト記
名ナルダローサー氏ト竹内綱氏トノ前ニ
於テ後藤象二郎カ調印ヲ致シタル所ノ盟
書ヲ差出スヘク翼フ向シテ該書類ハ悉皆
エドワールホツイツタル氏ヨリ本人後藤
象二郎氏ニ手渡サレテアルモノナリ該唇
類ノ寫カ又ハ正副共セ一号ト記シアリ夫
ハホツイツタル氏ニ依テ次ノケ一号ト記
載アル手紙ト共ニジャルデン會社ニ投シ
有之モノナリ而シテ該唇類ヲ確カニ受取

ゼ一号書類
ゲ一号手紙

ト云フ手紙ハ原告人ヨリ差送有之其手紙
ハ工ルト記号ス該手紙ノ本書ヲ此對審ニ
於テ被告代官人ヨリ差出ハク冀フ元来亦
ツクツタル氏ハ破ノ代人ナル故ヲ以テ該
手紙ノ本書ト云フモノハ實際無之凡法律
上ニ於テ効アルヘリ見做得ル既ノ既持有
之モノト信用ス

明治十一年十二月九日

原告代官人陳述スルノ如左

原告代官人ハ過日被告代官人ニ差出ヌ可クト

依頼ハ此ノ骨類ヲ差出ヌヘク乞フ而シテ該書

類ヲ「アイ」号ト記シ其寫ヲ「ロエ」号ト記ス

原告代官人ハ「エ」号并ニ「ケ」号ノ本骨ヲ差出

ス之ニ併スルニ千八百七十八年十一月廿日ニ

「ホイ」ツタル氏カ後為象ニ即ヘ差送リシ尺牘即

チ「エ」号ヲ進呈ス

原告代官人曰ク被告代官人ハ彼ノ答辯第ハ条

ニ去ル十月取結ヒシニ、契約ニ抑テ禁諭令ハ

廣步難相成者ト陳述ス併セテ原告人カ該假ノ

契約ヲ遂ケサルト陳述ス然レ此是ノ答辯ハ事

ホイツタル尺牘
工ル号

實ニ及シタルモノナリ被告人自カラ却テ該契
約ヲ破リタルモノナリ其故ハ日ノ百二十トシ
ノ石炭ヲ原告ニ手渡セサルノミナラス二十萬
弗ノ皆濟ヲ誤テリ

該尺牘ノ寫ハ既ニ控訴狀ト共ニ當廳ニ差出置
タリ而シテ今後本書ヲ「エス」及「オー」号ト記シ
差出ス余以為ラウク被告代言人ハ如安不法ノ答
論ヲ為サ、ル義務アルヘシ而シテ裁判官ハ如
此場合ニ於テハ原告人ノ權利ヲ保護ス可ク義
務之レアルト確信ス是レ迄ニテ東京裁判所ニ
於テ被告代言人カ陳述ナシタル答論ノ駁論終
ル
當廳ニ於テ被告代言人ハ原告代言人ノ頼トシ

テ論スル迄ハ唯々三點ノ右第一点ハ即チ被
告ノ契約ヲ破リタル点ナリ然リトモ是ハ全
ク正シキモノニ非ス

原告代言人ハ今回禁諭令冀望ニ當リ被告ノ一
ノ契約ヲ破リタルノ故ヲ以テ之レヲ請求
スルニ非ス

原告人ハ只今ニテモ被告人ガ原告人ノ權利ヲ
妨害シ種々ノ悪行ヲ働キ原告ニ恢復出来可カ
ラサル損害ヲ蒙ラシムル事ヲ證據トツヘシ
被告ノ契約ヲ破リタル云々ハ這回當廳ニ於テ
論スヘキ点ニ非ス該点ハ即チ本訴裁判ニ於テ
論スヘキ点ナリ

裁判官閣下ニ種々ノ契約書ヲ已ニ呈進シ置

り而ノ原被双方トモ之ヲ諾認ス而ノ右契約等
ノ法律ニ相違スルヤ否ハ被告代理人ノ未ク問
ハサル所故ニ是等ノ契約書カ法律上不正且ツ
無効決定相成ル迄ハ有効ノモノト首做サ、ル
ヲ得ス而ノ是レ等ハ本訴審問ニ於テ決定スヘ
キ点ナリ故ニ本訴判決迄ハ当廳裁判官ハ原告
人ノ權利ヲ保護セザルヲ得ス

被告代理人ノ前申立テタル第二点ハ即チ被告
人ノ原告人ニ對シテノ負債ナリ該點ハ正真正
シテ當今禁諭令ヲ仰クニ當テ論セザルヲ得サ
ル点ナリハ原告人之ヲ承諾ス被告代理人ノ
此点ニ付テ、吾論ハ同人ノ東京裁判所ニ於テ
陳述ナシタル所ノ吾論ト其意ヲ同シフズ即チ

他ニ只原告カ却テ被告ノ三十二万トシ、石
炭ノ手渡ヲ相受ケルニ依リ原告ヨリ被告ニ對
シ却テ負債有之トノ意ナリ

原告代理人ハ右被告代理人ノ吾論ニ對シテ既
ニ東京裁判所ニ於テ條々吾論ナシタリ而シテ
被告ハ如斯破産人ノ答答ヲナシタルニヨリテ
大ニ日本人民社會ニ汚名ヲ被ラシメタリ而シテ
原告人ハ被告ノ他日當廳刑事課ノ裁判ヲ受ケ
ヘキ事ト配慮ス

被告人ハ事實ヲ論スレニ當テ一ノ証拠ヲモ差
出サス且ツ法理ヲ論スルニ當テ一ノ裁定法或
ハ布告或ハ先例等ヲ援引セザルハ到底吾論ナ
リ

方一書教正号
尾版

余ハテ「シヨソソ」氏ヲシテ左ノ條トテ記據立
シメシ
「フランシス・ハルクリー」ジヨソソソ曰ク余ハ「シ
ヤルイン」ツテ「ソソソ」會社ノ一員ニシテ明治十
一年三月一日大日本ニ到着セリ而シテ當時後藤
象次郎ニ對シテ訴訟コレアリ
當時余ハ高宮鑛山ニ付テ諸件ヲ熟視セリ
余ノ日本ニ到着セルハ後藤氏ハ既ニ長崎ニ居
住セリ而シテ余ハ三月廿七日頃同所ヘ赴キ
而シテ「オ」子ノ書類ニ依テ同人ト約定ヲ取結
ス
此ノ「オ」子ノ尺牘ハ即チ余カ後藤氏ノ代理人「ジ
ツケ」氏ニ後藤氏ノ事ニ付面談ヨリ起リ
ル

モノナリ
當時「ジツケ」氏ト後藤氏ト兩名ニテ余ニ被告
ノ負債拂方出来兼ルトノ言葉アリ
余ハ一周間余リ長崎ニ逗留後「ホン」コンニ向テ
「シヤン」ハイ「返」旅行セリ而シテ余ノ出立スル
ニ當リ被告人ト代理假條約ヲ取結ビ具後横濱
ニテ會合スヘキ筈ニテ分袂セリ
余ノ日本ニ帰來スルニ當テ長崎ニ於テ後藤ニ
面會シテ而シテ當時余ト被告トノ間ニ了結ノ
條約ノ事ニ付種々問合而シテ余ハ同氏ニ一ノ正
直ノ人物ヲ選シ余ノ會社ノ代理人ト共ニ横濱
ニ行キ代理條約ニ付テ彼ノ意見ヲ要スト申置
キ
キ

被告ハ余ト只ニ横濱ニ米港スヘキト申作ラ鏡
山安事ニ付之ヲ果サス余ハ度々彼ヲシテ米港
スヘク但セトモ曾テ未ラマ遂ニ訴訟ノ事ヲ聞
キ狼狽遂ニ到着セリ
同人到着後吉田マサハララシテ代理ヲ為サシ
メリ
余ハ同人ニ面會シ後藤氏ト取結可キ答ノ条約
ニ付キ面談シテ此同人ハ之レニ取合ハス
後藤氏ハ長崎ニ於テ余ノ會社ニ對負債ヲ皆濟
スレハ他ノ同人ニ對シテノ債主ニ言訊ナシ加
之後藤ハ吉田ト共ニ良キ手術ヲ企テサレハ後
藤ハ果シテ破産ス可キ旨ヲ告ケ余ノ會社ニ對
シ巨額ノ負債アルヲ同人集ニ兼諾セリ

○ノ管理人ノ答論ヲ以テ
最上此ノ証據ハ後藤氏
ヲケルボルム氏筆
記ノ証書

後藤氏並ニ吉田氏ノ言ニ據レハ破産殘物トシ
テ取ルヘキモノハ唯ニ高嶋礦ノミト信々
石炭ノ利潤ニ関スル証據ハ後藤氏自ラ長崎高
嶋炭礦社員ニ存人レシラケルボルム之レヲ筆
記セリ
此証書ヲレヤ後藤氏ノ兼諾ヲ經テ余之レヲ得
タリ
該書ハ二月廿二日ニ始マリ八月十五日ニ至ル
マテノ答述ニシテ平均利潤ハ一回一錢ナルヲ
明表セリ
此平均利潤ハ或ハ侮謾ナルハシト云モ然レモ
高嶋礦山ノ現状ヲ以テ論セハマコ公平ノ利潤
ナル可シ

日、四百トシノ石炭ヲ穿出サ、レハ其工費ヲ
補フ能ハス

工費即ケ石炭ノ直價ハ全埠ノ計算書ニ筆記之
レテシ

計算簿ハ前以テ整正スヘキ為メニ公平ナルモ
ノヲ撰挙スルヲ余曾テ長崎ニ於テ後藤ニ論
セリ右ノ條ニ引出スルヲ吉田ニ通ルテ處
クナリ

「ゲリブル氏ハ一月某ノ定給ヲ以テ住入レ
ルヲウ炭礦社ノ一員ヨリ余ニ通知セリ

計算簿ヲ検査スル為メ公平ナルモノヲ撰挙ス
ルヲ余曾テ冀望セリ

當時「エトワルド、ホイトワル」氏ノミカ後藤ノ為

ケイ号書如

「ニ計算簿検査ノ任ニアリシ
余ハ「ケイ号ナル書面ヲ「ホイトワル」氏ヨリ請取
リシ

同氏ハ代理人ナル權利及ヒ該計算簿ヲ決定ス
ル權利アルノ理由ヲ表セリ

「「エイ号ナル書類ハ「ケイ号ナル書状ト同封ナ
リ

「ホイトワル」氏ハ躬自カラノ報告書中所屬ノ負
債ニ関セリ然レモ斯ハ數日ヲ費サ、レハ之ヲ
確定スルヲ能ハス

此ノ事實ニ依テハ既ニ揭ケル所ノ總計ト余ノ
計算ノ總計トノ間大ニ差アルヲハ信シ難シ

金額ハ甚ク曖昧ナルモノナレトモ魚慮十萬圓

「エイ号書如
書類

司
去
省

う過キサルモノトス而シテ引去高ハ殆ント四
万弗ヨリ五万弗ノ間ニコレアルヘキモノトス
此夏余カ支那ヨリ日本ニ到着コノカキ石炭坑
ノ形況ハ實ニ錯亂ナリシ
去ル夏中長崎ナル代理人ヨリ職工ノ費用手前
拂請求ノ傳報アリタリ而シテ此ノ前拂ノ出未
サレ上ハ高嶋鏡ニ於テ生スル所ノ妨害實ニ甚
シト為サス
「ライルホルム」氏カ余ニ對シテノ答論ニ依レハ
一月前ハ職工費其他ヲ計算シテ六万圓ナリ
余ハ曾テ此ノ訴訟ノ數額書ヲ了讀セリ
答論ハ悉ク正實ナルモノト認定ス
若シ此ノ訴訟カ取上ケニ成ラサルトキハ余輩

ノ權利ヲ妨害スルコトハ實ニ非常ナル可シト信
ス
石炭坑ニ不時ノ禍災ノ起ルハ蓋シ一夫ヨリ
トモ後藤氏ヨリ回復スルイ無ルヘシ
余ハ曾テ後藤氏ニ計算表ヲ手渡且之ヲ精算ス
ルヲ拒ミシレバ余ハ却テ後藤氏ニ該精算
ヲ依頼シ置タリ
「ガリアル」氏ハ已レノ意見書ヲ余ニ示シタレバ
其理由如何ナルヲ知ラス而シテ余ハ該書ヲ乞
ヒルレモ終ニ之ヲ得ス該意見書ハ計算書ニ誤
アルコトヲ記載シタリ然レモ余ハ如此誤無之ト
深ク信ス故ニ書翰ヲ投シ彼レノ未読ヲ促シ過
ナキヲ面証セント為シタレバ彼レ曾テ未タラ

ス
ジヨシツン氏ハ被告代名人ノ問ニ應シ左ノ通
リ陳白ス

余ハ十一月二十八日ニ於テ「ゲリブル」氏ノ意見
書ヲ一見シヨリ

「ゲリブル」氏ハ該書ヲ余ニ示セ且余ハ精算書中
ニ誤アルコトヲ発見セヌ

当七月中「ホウツ」氏ハ精算書ニ付テ後藤氏
ト程々相談アリヨリト余ハ知ラシヨリ

同氏ハ後藤氏カ余ノ會社ガ付テ撰ケナシヨリ
ト余ニ告ケヨリ故ニ余ハ答テ該精算書ハ誰ニ
テモ公ニ一覽スヘキヲ免サヌ

「ホウツ」氏ハ当七月及八月中數度余輩會社ニ

おれん氏意見書

未訪シヨリ依テ洋テノ精算書ヲ彼ニ示ス故ニ
該書ヲ試験スヘキ自由ヲ與ヘヨリ之レハ同氏
ヨリ一輪ヲ授セラレシ兩三日前ナリ

余ハ「ホウツ」氏ノ精算書ヲ試験シヨリ日限
ヲ記臆セヌ

同氏ハ數度會社ニ未訪シ終ニ精算書ヲ過ナキ
ヲ認メヨリ

余ハ「ホルム」氏ノ意見書ヲ呈進セリ而テ該意見
書ハ後藤自身ノ計算簿ヲ取調ヘシモノナリ而テ
石炭一頓ヲ一回十契ト定メヨリ

星亨被告代名人ハ「ホウツ」氏ノ表明且ツ原
告代名人ノ依頼ニヨリ余カ差出シヨル所ノ寫
ハ之ニ故障ヲ云ハサルヲ得ヌ余ハ第一ニ原告

おウツタル氏ノ

原告人ハ後藤ニ計見書ノ取調ヲ免サレリシ点
 ヲ以テ該「ホウツ」氏ノ表明ヲ異論ス
 「キエー」号書類ニ依テ原告人ハ後藤ノ代人タル
 「ゲリベル」氏ニ計見表ノ試験ヲ免サレリ其以
 謂ハ原告人ハ如何ナル理由ニ依リ「ゲリベル」氏
 ハ被告ノ代人タルヲ問糾シテ
 余ハ当月廿一日ニ於テ後藤氏ノ代人タル「ゲリバ
 ル」氏ニ原告人ハ何故計見調ヲ免サレリシラ
 解セズ如之何故原告人ハ先十一月廿日ニ於テ
 「ホウツ」氏ニ計見調ヲ委任シタルヤラテ知
 セス
 余ハ第ニ「ホウツ」氏ノ表明ノ先十一月廿
 日ト日附ケサレタル点ヲ以テ之ニ異論ス

余ハ原告人カ「ホウツ」氏ノ請求ニ應ズル以
 前後藤氏カ「ホウツ」氏ニ同氏ノ為メニ計見
 取調ヲ依頼シタルヤ否ヲ分明セサルヘカラス
 「ホウツ」氏ノ表明ヲ作文スルニ當テノ形勢
 ハ實ニ曖昧ナルモト信ス故ニ原告人カ「ホウ
 ツ」氏ノ表明ヲ讃證セント欲スル以上ハ該
 表明ノ作文スルニ當テノ事情ヲ明説シ
 且ツ原告ノ証人トシテ「ホウツ」氏ヲ當廳ヘ
 同道セサルヲ得サルナリ
 原告代理人曰ク被告代理人ノ第一ノ故障ハ之
 ヲ讚クヘキ証據更ニナシ「帝星」氏ノ以テ証據ト
 ナスハ只今同氏が朗讀セシ所ノ尺牘ナリ然レ
 モ「ジョン」氏ノ証明ニヨリ何故ニ該尺牘ハ

認ノラレシハ明カナリ
「シヨソソソ」氏ハ明カニ同人カ決シテゲリブル
氏或ハ他ノ被告人ノ為ニ計算表ヲ取調フル
「ラ」拒コサリシハ演説シテ加之同氏ハ決シ
テ「ウ」リブル氏ニ計算調ヲ依頼スヘキ「ラ」ヲ策知
セス只「ホ」ウツルシ「氏」身ニ依頼スヘキト、被告
ノ意ナリ右理由ニ依リ「ホ」ウツルシ「氏」ノ表明書ハ
之レヲ破毀スヘキ為ニ証アルマデハ之レヲ有
効ト為サ、ルヘカラス
第一ニ該表明ニ付キ決シテ曖昧ナル事情之レ
ヲシ
「シヨソソソ」氏ハ已ニ「ホ」ウツルシ「氏」カ已レノ表明
本旨ヲ同氏へ手渡ナシタルト誓言シテ而シ

該本書ノ存在ニ付キ被告代人ハ一言ヲ喋セ
サル以上ハ之レヲ黙許スルモノナリ
加之証據ハトシテ差出シル書簡ニ由リ全筆
ハ「ホ」ウツルシ「氏」ノ代人ナル權利ハ彼レノ先十
一月ニ於テ表明作文ナシタルニ因テ消滅セサ
リシモノナリ
故ニ裁判官ハ右ノ表明書且ツ精算裁檢ハ代人
ノ權利ヲ有スル相當ノ人ニ依リテ為サレタル
モノト見做サ、ルヲ得ヌ而シテ余ハ被告代言
人ノ左ノニ条ヲ証據立ルマデハ余ハ証據人ト
シテホウツルシ「氏」ヲ呼出スヘキ責任之レナシ
第一ニ被告ハ「ホ」ウツルシ「氏」ノ表明書ヲ作ル決
ハ既ニ代人ノ權ハ消滅シタル「ラ」ヲ証明セサル

ハカラス

第二ハ被告代理人ガ余筆原告人ノ、ホウツツル
氏ノ代人権ノ消滅ヲ熟知シアリシコトヲ証據立
テサレハカラス若シ被告代理人カ右ニテ係ヲ
証明シ得ルモ、原告代理人ハ、ホウツツル氏ヲ
呼出サ、レウ得ザル責任ハ蓋シ之レ有ルヘケ
ト信ス

十二月十二日十三日口供

原告代理人ハ、エム号ノ天續ヲ進呈ス
余ハ、レイ号、イ号、エフ号、ロ号、エチ号、ヒエ
号、ケ号、エム号、及シ、カ号、ホ号、本書ヲ差出ス
キ、エム号ハ都テ被告ノ手ニアリ
余ハ只今、テイ号ノ本書ヲ携帯セス、何時ニテ
モ差出スヘシ
右書類ハ大切ナルヲ以テ安全ニ之ヲ守護アラ
シムコトヲ乞フ
如何ナル理由ヲ以テ星氏ハ、ヒヨシソ
今調アルヤ
若シ同氏カ此上、ヒヨシソシ、氏ヲ調ヘ度要スレ

原告ヨリ差出ス
書類記号

エム
テイ
ロ
エチ
ヒエ
ケ
エム
カ
ホ
テイ
ロ
エチ
ヒエ
ケ
エム
カ
ホ
テイ
ロ
エチ
ヒエ
ケ
エム
カ
ホ



司法省

グリナル氏手跡
具陳書

問 答

ハ同人ノ證人ト為テ彼レヲ呼フベシト去リ乍ラ
格別ナル故障モ右調ニ付キ余ハ主張セス
余ハ吉田正春氏ノ代理委任状ヲ一見センコトヲ
乞フ
十二月十二日呈享「ジヨンソン」氏ニ問フ
足下ハ前審問ノ節「ホルム」氏ノ具陳書ハ後藤氏
ノ許諾ヲ以テ認メテ「レ」ト述ヘタルカ君自身
ニテ詎許諾ヲ乞ヒタルヤ
余ハ長崎ニ於テ後藤氏カ石炭坑ニ付テノ具陳
書類ヲ乞ヒタリ而シテ詎具陳書類ハ後藤氏ノ
通辨人丸主氏ヨリ余ニ手渡シセリ而シテ詎具陳
書類ノ或分ハ「グリナル」氏ノ手跡ナリ詎具陳書
ハ石炭坑ノ利益精算上要用ナリモノニシテ且

八月十五日附言

問 答

ツ後藤氏ノ他ノ債主等ト余カ詎利益ヲ分配ス
ヘキコトニ付キ必用ナリタルモノナリ前對審ニ
於テ余カ証據トシテ八月十五日附ノ書類ノ陳
ヘタルカ右ハ前申ス如ク具陳書ノ續ニシテ「ホ
ルム」氏ヨリ余ニ手渡シサレタルモノナリ而シ
余ハ「ホルム」氏カ後藤氏ノ許諾ヲ以テ之ヲ為シ
タリト信ス
丸主氏ハ詎具陳書ヲ後藤氏ノ許諾ヲ以テ君ニ
渡シタルヤ
余ハ確ト信ス如何トナレハ爾未詎具陳書ニ付
後藤氏ト數度談話セリ
君ハ過日「グリナル」氏ノ雇入且ツ給金等ニ付キ
炭坑社員ノ一人ヨリ委細ヲ承知セラレタルト

答 問 答 問 答 問 答

言ハレシカ談人ハ如何ナル人ナリ
タルーガ氏ナリ
何時足下ハ聞キタルヤ
談日限ハ「グリブル」氏ノ名前ヲ記シタル尺牘ヲ
余カ認メシ直キ前ナリ
何如ニ控テ
余ハ請合ハズ
足下ニ於テハ何故「カローガ」氏ノ申ス「ヲ」信ス
ル以前後藤氏ノ代人タル吉田正春氏ニ委細ヲ
承ワラザリシヤ
右ハ「カローガ」氏ノ申分到底信シ難キ故ヲ以テ
余ハ直ニ後藤氏ノ代人ニ問ヒタリ其以謂ハ一日
瞭然タリ「グリブル」氏ハ信用ニ依テ貯蓄金額

問 答 問

ヨリ給金ヲ遣ラスベキモノニテ談金額十分ノ
六ハ余ノ會社ニ来ルベキモノナリ而メ余ハ如
此不法ナル約束ヲ拒ヒタリ
假令ハ「カローガ」氏ノ申分眞實ナルモノナルモ
足下ニ何ニカ關係ノアルヲナルヤ
如何トナレハ「グリブル」氏ハ「鑛山」ノ利益金ヨリ
給金ヲ支ヘベキトノ約束ナレバナリ
足下ハ「グリブル」氏ニ据リテ「シアルタレ」會社ノ
計算表中誤ヲ発見セシ「ヲ」拒ミタリ去リ下ラ
足下ハ千八百七十八年十一月廿八日附ノ尺牘
則チ「アル」及ヒ「エス」号ヲ以テ「グリブル」氏ニ遣ハ
シ過ナキト何故認メタルヤ足下ハ如此及論ヲ
何様弁明シ得ルヤ

アル号
エス号
書牘

法
省

委任状

答

右及論ハ事實ニ趣語セリ余カ申セシ過ハ書吏

問

如何ナル錯誤ヤ

答

日限上ノ錯誤ナリ

問

足下ハホウツタル氏カ精算調ニ付君ニ依頼セ

答

レカ述ヘタレ比同氏ハ何時君ニ依頼セシヤ

問

七月中ト覺ユ

答

上旬ナルヤ或ハ下旬ナルヤ

問

敢テ不知

答

尺牘ヲ以テカ或ハ言語ヲ以テカ

問

言語ヲ以テナリ

答

當時千八百七十七年一月ノ日限ナル委任状ヲ

答

否

問

足下ハ何時該委任状ヲ一覽セシヤ

答

存外迄頃ナレ比確ト不覺

問

計算調ヲホウツタル氏ハ何時初メシヤ

答

余ガ当邦ニ七月到着セシ中ホウツタル氏ハ後

問

藤氏ヨリ預ケラレタル計算簿ヲ余ニ携帶セリ

答

故ニ余ノ計算ハ順序正シキモノト告ケタリ

問

計算調中ホウツタル氏ハ横濱或ハ東京或ハ日

答

本ニ在留セシヤ

問

余ハ右ハ信セス

答

ホウツタル氏ハ八月中精算調ニ来リシヤ

問

判然不覺シ元同氏ガ支那行前ニ相違ナレ十二

答

月十二日原告代官人吉田氏ニ左ノ問ヲ為セシ

ホウワタル氏ハ何人ナルヤ
其他ナキヤ

足下ハ右二人ノホウワタル氏ヲ見知ルヤ
足下ハ兩人中ノ一人ニテ見知ルヤ

右二人中誰カ後藤氏ノ代理委任状ヲ所持スル
ヤ

足下ニ於テハ余カエドワルドホウワタル氏ハ
後藤氏ノ代人タルトノ言葉ヲ信セサルヤ

足下ハエドワルトホウワタル氏カ後藤氏ノ代
人タルヲ何時初メテ聞シヤ

君ハホウワタル氏ハ後藤氏ノ代人ニハ之レヲ
ラザルト明言スルヤ
君ハ同ヲ拒ムヤ

足下ハ何ナル証據ヲ立テシヤ

何故余ノ同ニ於セザルヤ

君ハ去ル十一月廿日ニ於テエドワルトホウワ
タル氏ハ後藤氏ノ代人ニハ之レヲアラス加之現

時ニ於テモ同様ト明言スルヤ

君ハホウワタル氏カ後藤氏ノ代理委任状ヲ所
持アルト聞カバ誓クヤ

今日ニ於テハ後藤氏ハ何処ニ住居スルヤ

君ハ後藤氏カエドワルトホウワタル氏ハ去ル
十一月廿日ニ於テ同氏ノ代人ナリシヤ否ヤヲ

知り得ルト思フヤ

足下ハホウワタル氏自ラ同人ハ去ル十一月廿
日ニ於テ後藤氏ノ代人デアリタルトノ明言ヲ

同法

拒ル已上ハ後藤氏ヲ当廳へ呼出し同人ヲシテ
同様弁明セシメタレハ不都合ナカルベシカ如
何
君ハ終日ニ何時後藤氏ヲ見タルヤ
後藤氏ハ大病ナレヤ
君ハ十一月廿日ニ未後藤氏ハ「ホウツタル氏ニ
面會シタルヤ否ヲ知ラルヤ
君ハ去ル十一月廿日後藤氏カ「ホウツタル氏ニ
面會セシト聞カハ驚クヤ
多分兼知ツク故驚カサルベシ
君ハ自分ノ代理委任状ヲ携帶セシヤ
何知ニ君ハ所持居ルヤ
「ホウツタル氏ノ電報ノ何事ニ関涉スルヤ

「エーリスホウツタル氏ハ「エドワル、ウツト
ルト如何ナル關係アルヤ
君ハ「レヤルテン「會社ヨリ「ホウツタルカ「代理委
任状ヲ受取りレラ如何様知ルヤ
君ハ高島坑山ニ付「「エーリス「或ハ「エドワル
ホウツタル氏カ去ル七月己降「口へルトシヤル
「「氏ヨリ代理權ヲ許サレシヤ否ヲ知ルヤ
君ノ外後藤氏ノ代理委任状ヲ所持スルモ「ア
ルヤ足下ハ部理或ハ総理代人ナルヤ
君ノ所持スル委任状ハ如何ナル目的ニ依テ後
藤氏カ共ヘシヤ
後藤氏ト原告人トノ間ニ成立計算ヲ調フベキ
權ヲ君ハ有スルヤ

君ハ曾テ原告人ニ君ヲシテ計算調ヲ為サシム
 へキト依頼セシトアリヤ
 十二月十三日原告代官人吉田正春ニ問テ同ク
 君ハ何時「シヨシ」氏ニ計算調ヲ依頼セシヤ
 書翰ヲ以テカ或ハ言諾ヲ以テカ
 君ハ洋諾ノ計算表ヲ調フルトヲ得シヤ
 君ハ何處ニ於テ「シヨシ」氏ニ計算ヲ調フベ
 キ許諾ヲ乞ヒタルヤ
 何ナル計算調ヲ乞ヒタルヤ
 「シヨシ」氏ハ曾テ計算調ヲ拒ミタルヤ
 「シヨシ」氏ト吉田氏トノ間ニ成立ヘキ新條
 約何時破レシヤ
 此復ニ付足下ハ最終何時「シヨシ」氏ト面談

セシヤ
 足下ハ先月廿日以未「シヨシ」氏ニ計算ヲ調
 度キハ申聞ケタルヲアルヤ
 君ハ曾テ「シヨシ」氏ニ若シモ同人ト後藤ト
 ノ間ニ或ル約束ヲ結フニ非サシハ後藤氏ハ決
 タ破産ナスヘシト「シヨシ」氏ニ明言シタル
 ニハアラザルヤ
 君ハ大原氏ヲ知ルヤ
 此時間ヲ禁セラレタリ
 原告代官人曰何モ左ノミ論スルニモ及ボズ其
 故ニホウツトル「シヨシ」氏ハ己ニ此場ニ参リ居ルヲ被
 告代官人ハ勝手ニ問ヲ掛ルベシ原告代官人モ
 同様ナスベケレト余ハホウツトル「シヨシ」氏ヲ原告方

ホウワトル氏
表明書

ノ証人トシテハ問ヲ掛クヘカラス
被告代言人曰ク原告代言人「ホウワトル」氏ノ表
明書ヲ当廳ヘ進呈シ置キタルハ原告代言人ハ
同人ノ証知人トシテ「ホウワトル」氏ヲ呼ビ証表
明書ヲ証明セサルヘカラサル義務アリ
原告代言人曰ク「証表明書」ハ既ニ裁判官ガ英國
領事ノ面前ニ於テ認メラシシ者ナルヲ以テ証
知タルベキ致アリト決定セリ故ニ右分明相成
ルコトハ「証表明書」ハ有效ノ証知ト看做サレ
ヲ得ス
茲ニ於テ裁判官ハ被告代言人ヲシテ陳論ナス
ヘシト申渡レタリ
原告代言人曰ク余ハ這回ノ爭論上何様「証」注

此「証」文
カ

論カ関係アルヤヲ解セス「當時裁判官」ノ決定ヲ
要スヘキ点ハ只一ツナリ即チ「星」氏ノ故障ヲ裁
判官ハ受理スルヤ否ノ点ナリ而メ「星」氏ノ故障
ヨリ成立タル決定ヲ要スヘキ点即チ「ホウワト
ル」氏ノ英國領事面前ニ於テ認メ同氏ヨリ之ヲ
原告人ニ進達シ而メ本各ニ通ノ一ツヲ被告人
ニ進達シ當廳ヘ呈シ置タル「証」ホウワトル「氏」
表明書ハ「証」知トナルベキ権カアルヤ否ノ点ナ
リ余為ラク「裁判官」閣下ガ「証表明書」ハ有效ナル
「証」知ト看做ス上ハ若シ被告カ之ヲ相破ラント
欲スル以上ハ「星」氏ノ「証」破毀ヲ立テサルヲ得
サルナリ「若シ」之ニ及シ「裁判官」ガ「証表明書」ハ「証」知
トシテ受理セザルモ「ト」裁決セハ之ヲ破毀

同
法
省

アイ号
シエ号
証書

論スルハ原告人ノ責任ナリ右主点ヲ目的トシテ余ハ商畧ニ之ヲ表明シ且コト被告代理人ノ論争ニ答論セシ然リト虽氏手教ヲ有リカ為メ余カ答弁スヘキ權利ヲ放棄シ而メ直チニ裁判官ノ右点ニ付テノ裁決ヲ乞フテモ若カラズ余ハ裁判官ガホウツトル氏ノ警告ガ証抑トナルベキヤ否ヲ判然決スルコトハホウツトル氏ヲ原告方ノ証抑人トシテ呼フコトヲ肯セス裁判官閣下ニ於テハ「アイ」号及「シエ」号ノ証書類ハ受取置クト虽氏証書類ノ証抑タルベキカノ有死這回ノ訴訟決定スルマテハ判決セスト之ワル、以上ハ余ハ原告方ニ敵對ヘキ証抑人トシテ「ホウツトル」氏ヲ呼ビ而メ同氏ニ証表

明昏ニ付キ回答ヲ要シ卒ニ裁判官ノ今日証表明昏ノ証抑タルザルト判決サルベキ危難ヲ避ケシムルニ至ルヘシト深ク信ス而メ其上ハ「ホウツトル」氏ノ証抑ヲ立ツヘキ方法中ノ欠ヲ補ヒ得ヘキ「ホウツトル」氏ノ到底延引ニ屬スヘシ余ハ断然裁判官ヲシテ余ノ右判決ニ對シテノ故障ヲ筆記シ置カルヘキコトヲ請求セザルベカラズ而メ証筆記後ニ非レハ余ハ「ホウツトル」氏ヲ呼フコトヲ肯セス余ハ對審ノ日ニ之レアラシク願望ス而メ原告被代理人ノ都合ニ依リ審問ヲ尤右スベカラサルモノナリ余ハ余ノ証抑人ヲ呼ビ而テ余ノ所持スル所ノ都テ携帶スベシ故ニ被告人も同様

セザルベカラス然ル後被告代理人ハ当禁諭冀
整訃訟ニ對シテ總論ヲナスベレ而メ原告代
言人ハ再々都テノ証和昏類ヲ調査之上法律上
答論ヲ昏シテ此ヲ進呈スヘシ

明治十一年十二月十二日午前口供

被告代言

呈 亨

証據人

吉田正春

亭問

一 足下ハ後藤トジャーデン社トノ事件ニ付
後藤ノ代理人タルヤ

証據人答

一 ジョソンソン氏横濱ニ着シテ以來ノ代理人
ノ委任ヲ映ヘラレタリ
右ニ付後藤家ニ郎ト同一ノ権利ヲ与ヘラ
レタリ

亭巻

一 委任状ハ原告於テ一見致シ度旨申立レ共
右ハ七月以来引續キ委任ヲ受ケタルハ明
カナレハ今更見ルハ無用ト存候

証據入巻

一 委任状ハ只今持参不致候

同人巻

一 証據入ノ代理人タルハジャヤンソン氏ヨ
リ長崎ニ届在候被告本人ハ宛差越候書翰
モアレハ正シク自分ノ代理人タルハ原
告ニ於テモ見認メ危候事

亭向

一 右ジャヤンソン社ト談判中エドワルワイト

ル氏ノ事ニ付何カ吐カマリタルヤ

証據入巻

一 ワイトル氏元才ノ事ニ付談判中兼リ候事
有之候

目入

一 八月三十一日ニ後藤象二郎ヨリ電信ヲ送
リ候有之ワイトル兄才カ昨日之船ニテ
横濱へ着シ初シテ其^注意ハ龍動ニ於テ口
バルトジャヤルデン氏ヨリ高鳴用立事務ノ
ヲニ付後藤象二郎へ談判致シ候事ヲ頼
レワイトルカ横濱ニ赴キシハ只今シヨ
ン氏ト横濱ニ於テノ談判ヲ破リ其事柄
ヲ裁判所ニ於テ公正ノ所分ヲ受ルトカ申

「フ」ウイトルヨリ後藤象二郎方へ申越
リ且右ニ付ウイトルノ權演着ノ上眞実ニ
其事柄ヲ執行フヤ其事ヲ報セヨト電信ニ
テ後藤象二郎ヨリ申来リ右電信ノ来リシ
日限ハ八月三十一日ニ有之候
一 原告ジヤンソン氏ニ面會致シ右電信ノ来
リシ「フ」ウイトル氏ニ眞実ニ此ノ如キ「フ」アリヤ
ト相尋タル日限ハ記臆不仕ウイトル氏又
ガ着後兩三日ト存候原告「フ」アリヤ「フ」氏ノ答
ニウイトル氏着後ニ度々面會致シタレ
良ニ此談判上ニ付關係スヘキ理由無之勿
シテ「フ」アリヤ社ニ於テノ權利ハ聊カモ
有シ居ラス又後藤象二郎ニ對シテ何事モ

中理由ハ無之此譯切ニ付此談判ニ携ルヘ
キ人ニ無之旨申聞タリ

一 尚原告「フ」アリヤ社ニ於テウイトル氏ヲ自
分目前ニ召喚シテ右之理由ヲ双方へ解キ
明カニスヘキヤ私ハ其事ヲ行ハストモ既
ニ原告ジヤンソン氏ニ於テ此ノ如キノ言
葉ヲ吐ク止ハ之ヲ信據シ右執行ヲ果サ、
リレ「フ」アリヤ而シテ其ウイトル氏又又リ
其一人ノ「フ」ニ付後藤ノ代人タル「フ」ノ權利
ヲ有シ居ルモノトハ世シモ兼リ不申^レ候
事

右之通相違不申上候以上

右

明治十一年十月十二日

星 亨

右

吉田正春

東京上等裁判所

東京上等裁判所

西深判事殿

明治十一年十二月十二日午後口供

被告代言

星 亨

証人

吉田正春

亨問

一 ジョーンソント談判中グリブル氏ヲ以テ後
藤ノ為メ計弄ヲ為サシムルヲジョーンソ
ン氏ハ申入タル時ハ裁取ナルヤ

証人答

一 嘘ニ覺ヘ申ガヌ候ヘドモ八月下旬頃ト覺
ヘシヨーンソン氏ハ咄レタルハ二十一日迄
ニ申入レタル義ト存候事

亨問

一 かりかり氏ノフシジヨソソ氏へ申入レタルハ一度ナルヤ將タ何度ナルヤ

証人答

一 かりかり氏カ長崎ニ於テ計業ノ為メニ被雇候ト申フヲ八月二十一日ニ報知ラ得テヨリ西三度ジヨソソ方へ申入候夫迄ハ只計業人ト申述ニテ其計業人ノ名前ハ不申候

亨卷

一 シヤソン氏ハかりブル氏ノフシ申入レタル時如何答へタルヤ

証人答

一 故障ナシト答へたり

亨卷

一 ジヨソソ氏ニかりブル氏ノフシ西三度申入タル時ジヨソソハ「イトル氏カ後藤ノ代理人トナリ計業セルヲシ吐シタル」アリシヤ

証人

一 世シモウイトル氏ノ計業ノフシ関係アルヲ申タルハ無之

亨問

一 「イヤソソ」かりブル氏ノフシ申入レタル西三度ノ面會ノ外其許カ後藤ノ代理人トナリ「イヤソソ」ト談判シ始メタル以來其談判

此卷ハ原告代官
人尋返シ卷也

ノ整ハサルマテノ間ニ於テシヤソレハ
トレ氏ハ後藤ノ代理人ニシテ計業ヲ調査
シ居ルヲ又調査セシメテ通シタルヲアリ

証人卷

一 此ニモ兼リ不申候

亨申供

一 申立度儀有之候得共原告ハ一應尋返シ之
儀有之哉相尋度存候事

証人卷

一 ウイトル氏ハ只兩人ノコト有之

一 兩人共面部容負覺無之候

一 兩人ハ名前ノコトテ面會致シ候事無之候

一 又右兩人ノ中一人モ面會ハ不仕候

一 兩人ノ内委任ヲ受ケ居ルウイトル氏ハ工
トワルウイトル氏ト原告ノ申立ニ由リ兼

知致シ候事

一 本日ハ後藤象二郎ニ代リ確卷スル為メ出

頭ハ不致候事

一 証人ヨリ原告ノ對シ確卷スル事柄ニハ

無之ト存候事

一 証人ハ事實ヲ具ヘル為メニ出頭致シ候

儀ニテ未夕自分於テノ思想ヲ申立候場合

ニ無之ト存候事

一 証人ハ原告ノ申立ニ批テ始メテ兼知仕
候位ノ事ニ付証人ニ於テ存シ不申候事

同
出
省

一 原告人ノ訴状ニ拠テ始メテ兼知シタル次
才ニ有之候事

一 只今申立候次文ニテ自分ヨリ申立候期ニ
未タ至リ不申候

一 証人トシテハ只今申通りニテ証人ヨリ
申立候場合ニ無之候

一 左様ニ有之自分ハ只事実ヲ具ヘル斗リノ
為メナレハ申立候義ハ無之

一 証人ハ只今迄申立候事柄カ別々事実ニ
有之候ト存候事

一 証人ニ於テハ只今原告ノ向ヒ、卷ハシ
ニ先利ヨリ被告代言人ノ向ニ對シ卷ハシ
ルニ卷ハシテ區別ハ無之同一ノ義ニ

有之

一 卷ハハ都テ真実カ不真実カ証人ニ於テ
自身ニ決シ候譯ケノヒ、無之候事

一 証人於テ考ヘ候處ニテハ此卷仕状ハ此
一 一ニ確ナルヒト存不申候
後藤象二郎ハ高輪南町三於五番地ニ居住

セリ

一 本日ハ後藤ノ代理人トシテ後藤ノ思想ヲ
説明セズ只証人タル思想ニ於テハ右委

任状ハ後藤象二郎ヨリ授与シタル事実ハ
大ニ相違ト相考得ヘキト相心得居候

一 証人ヨリ別ニ卷シスル理由ハ、
候

- 一 後藤象二郎ニハ昨日面會致し候
- 一 昨日ハ後藤象二郎ハ病氣ニ有之宅ニテ面會致し候事
- 一 夫レハ存し不申候
- 一 驚クカ驚カサルカ兼リ不申而ハ難相介候
- 一 夫レハ要用ノ事ト存し不申事故兼リ不申而ハ不相介候
- 一 何ノ委任状カ
- 一 何ノ代人歟
- 一 本日持参不致候ヘトモ自分身ニ付テ既持致し居レリ
- 一 自宅ニ有之八用ナレハ明日ニモ持参致スヘノ候事

- 一 電信ニハ兄オト有之而シテジョソソニ氏ハ面會ノ節ノ談話ハウイトル兄オトニ連涉致し殊ニ其節記臆致したルハ「セムスウイトルハ只今爰ニ来リタルト云サレタリウイトル兄オト電報ニ有之候
- 一 存し不申候
- 一 ウイトル兄オトニハ面會不致候
- 一 シヤソソニ氏ハ面會ノ節ハウイトル兄オトカ如何ノ委任状ヲ口ヘルト、ジャガン氏ヨリ受ケ居ルカヲ問ハス後藤象二郎ヨリノ電報ヲ以テシヤソソニ氏ニ談判致したル義ニ有之候
- 一 誰レヨリノ委任状カ

一 夫レハ存シ不申候

一 何ノ委任状カ

一 代人ニモ種々有之何ノ代人カ

一 総理代人ハ日本ノ国法ニ於テモ後藤象二

郎ハ幾人ヘモ総理代人ノ委任ハナシ得ハ

キモノニ無之ト自分ハ存候事

一 自分ノ委任ヲ受ケシハ夫レ権限ノ定リタ

ル代理人ニ有之候

一 自分ノ委任ヲ受ケタルハ

第一

シヤソン社中ニ係リ談判ヲ結了ス

ル

第二

後藤象二郎於テ日本ノ人ト商法取

引ノヲ無理スル

第三

東京於テ炭坑會社ノ事務ヲ取扱

一 有之候

一 夫レハシヤソン氏トノ談判ヲ結了スル

ニ於テハ第一ニ精算シタルハ其目的ニ有

之委任状ノ文中ニモ記載有之故ニ記憶致

候

被告代言人申供

一 原告代言人ハ証人ナル吉田正春ヲ吟味

スルハ其於テ被告代言人ヨリ先キ申立

タル事柄ノ外ニ涉リタル事立リ為スモノ

ト在候故ニ原告代理人カ前日ノ事柄ニ関
係スルコトヲ証証批入ニ質問致シ位様
御下余有之度候
右之通相違不申上候以上

右

明治十一年

呈

亨

十二月十二日

右

吉田正春

〇

東京上等裁判所
西河判事殿

明治十一年十二月十三日口供

被告代理人

呈

亨

一 被告代理人申上候原告ノ本月三日封審ノ
除呈シタルエドワルドワハットルノ盟書
ハ帝理ニ於テ解スヘカラサル隠秘ニシテ
且控訴スヘキモノナルヲ以テ被告ハ原告
カ誤リヲ付トルヲ原告証批入トシテ立願
ニ出願ヒシメ以テ彼盟書中ニ記載スル所
ノモノヲ一々弁明セサルヘカラサルモノ
ト固信ス其理由ハ左ノ如シ
一 第一本日呈スル所ノ被告五号第六号ノ手
紙ハ共ニ付付トルヘノ委任状ニ記名調

印シタル証人ノ一ツナルボルトカル人
ダローガ氏ノ手ツカウ書シタルモノナリ
其第六号ハ則ケ委任状ヲダローガヨリウ
井ツトル氏ニ送りタル片ノ添書ニシテ其
五号ハセテ添書アリテ當時ノ状況ハ如キ
ト其情况ヲ記シタルモノナリ此兩号ニ據
ルニウ井ツトルガ據テ以テ精算スヘキ確
アリト証スル處ノ彼委任状則明治十年一
月廿二日ノ委任状ハ格別ナル事柄ノ為メ
ニ同氏ニ渡サレタルモノナリ之ヲ細説ス
レハ該委任状ハウ井ツトル氏カゲヤーデ
ンマデッソ社ニ代リ被告ノ用達ヲ務メン
ト望ミタルニ付同氏カ香港ニ在ルゲヤー

デンマデッソノ本社ニ付テ後藤象平郎ジ
ヤデンマデッソントノ勤定ノ如何ヲ査マ
ル為メ渡サレタルモノニシテ則チ該添書
ニ述ヘタルカ如クウ井ツトル氏カ香港ニ
在番スル間ケ用フヘキ為メニ年ヘラレ
タルモノナリ依テ該委任状ハ同氏カ後藤
氏ノ為メニ横濱ニ在テ且勤定ノ数ヶ月後
ニ原告ト被告トノ勤定ヲ精算スル為メニ
用フヘキモノニアラストス此其理由ノ一
ナリ
一 第二昨今両日ニ於テ吉田正春カ証言セシ
如ク正春カ原告ト談判ノ際屢計算ノツ
申入其末ガソングルヲ以テ検査セシムル

一 一ツ申入レタルニ原告ハ無異議之ヲ承諾
ス若シハ井ツトルカ後藤ノ代理人トナリ
テ現ニ検査シ居ルナリハ原告ニ於テ欺ク
ウ井ツトル氏カ現ニ検査ニ從事シアルニ
何故ガリンガルナル者シレテハ検査セシ
メントスルカノ疑問アラサレバカラカ如
キハ常理ニ於テ正ニアラサルヘカウサレ
トタリ也ルニ言ノウ井ツトルノ一及ハ
スレテ承諾セシハ最も怪ムヘキナリ也レ
共理由ノニナリ

一 第一實ニ原告ハウ井ツタルヲシテ計算書
ノ検査ヲ為サシメ同氏カ之レニ從事シ居
ルナレハ初審裁判院ニ於テ對審ノ中被告
カ屢々誤計算検査ノ一ニ言ヒ及ビタルニ
原告ハ一言ノウ井ツタルカ之ニ今從事シ
アル一及ヒタテシ但奮廳ニ於テモ其
初メ之ニ言ヒ及ハサリテ而シテ其始テ也
一ツ言ヒ出シタルハ本月三日ナリトス
モ此ノ計算検査ノ一タルヤ本訴争フ所ノ
事件中最モ大ナルモノナルニ此一ニ對シ
原告ノ如キ死ハ其意ヲ解シ能ハサルナ
リ也其理由ノニナリ

一 第四ウ井ツトルナル者ハ原告ト大ニ関係
アルモノナリ彼原告カ曾テ呈シタル同氏
ノアウ井ツカウツト、稱スル盟書ヲ見ルモ
同氏ハ原告ニ大ニ関係アル一ツ知ラルハ

シ又同氏ハ明治七年中初テ原告ナルカヤ
一デシマセツシ社ヲ以テ賣炭用達ト定メ
タル中原告ノ商社ノ一人ニテ該社ノ商勢
一切ヲ取扱ヒ居リタリ其後モ同商社ノ為
メ被告ト取引ヲナシタル一人ニテ其理
由ノ第四ナリ

一 上未記ニタル如ク第一彼ノ委任状ハ格別
ナル目的ニツクラレ且付シタルモノナル
ヲ以テ其委任権外ニ在リ且委任ノ目的ニ
違ヒタル事柄(則テウサツトル氏カ同氏自
身ノ為メニ作ラレタル委任状後藤氏ノ為
メ用ヒ又香港ニ於テ監査ノ為メ用ヒ又香港在
リ横濱ニ於テ精算ノ為メ用ヒ又香港在

番ノ間即チ一時付権ノ為メニセシテ數十
ヶ月後ナル今日ニ於テ再用セン(一)ハ法理
ニ於テ無効ナルモノトハ第一彼ノ精算ニ
且其相違ナキノ盟書ヲ依リタルウイット
ルハ原告ト大ニ関係ヲ有スルモノニシテ
且原告ノ死為ハ前条第二第三ニ述ベタル
如キ状況ナルヲ以テ其際怪訝ハヘキ廉實
ニ多シ故ニ原告代官人カ彼ヲ井ツトルノ
盟書ニ付ラサントルヲ法庭ニ其証人ト
シテ喚出シ彼盟書ハ正シクシテ且其委任
権外ニ於テ為シタルモノナリトノ弁明ヲ
為サレムルニアラサル以上ハ被告代官人
ハ彼盟書ハ無効ノモノナリト信ス

右之通相違不申上候以上

右

明治十一年十二月十三日

呈

亨

〇

東京上等裁判所

西厚判事殿

明治十一年十二月十三日口供

証人

吉田正春

原告代言人ノ向ニ答フ

- 一 カヨソソソソ氏ニ計業調ノフハ度々申入レ
タレモ月日ハ覺ハス
- 一 イソモ面談ロリ
- 一 計業ノフハ私自身ニ調ヘズ計業人ヲ以テ
取調サス積ナリ
- 一 横濱ジヤードンノ社ニ於テ申入レタリ又
東京炭礦舎ニテモ面談セリ
- 一 都テ計業調ナリ右者ニノ記憶セシハ炭礦
舎ニ於テ勤吏ノ徳高明瞭ニセンコトヲゲヨ

一 ンソシ氏ニ談セシヲナリ
一 イツミ只知リト云ヒシノシニテ實際ノ計
算ハ遷延致シタリ

一 破談トハ別ニ無之後藤象二郎カ帰京迄也
ヲヲ中止スルヲハ九月廿日頃ト記臆セリ

一 終リノ面談ハ右九月廿日頃ト覺ヘリ
一 九月廿日以來ゾソシ氏ニ自身ニテ依
頼セシヲナシ依頼シタルハ多クハ日前ト
心得居ルナリ

但ホ日トハ大凡ノ記臆ナリ
一 破産云々ノナハ其頃和睦談ノ折柄故彼ヨ
リ時トシテハ如キヲ申也自分ハナシカ
ラヌトトノシ存シタル迄ニテ自分ヨリハ

一 諸ヲ申出タルヲナシ

右之通相違不申上候以上

右

明治十一年十二月十三日

吉田公春〇

東京上等裁判所

西瀉判事殿

世中被告代理人曰リ原告代理人ハ誤り申ツト
ルヲ証拠人トシテ呼出スヤ否ノ判決ヲ請フニ
關係ナキ精算ノ下杯ノ同ノ証拠人吉田正春ニ
向テ起セリト原告代理人曰リ昨日被告代理人
ニ誤り申ツトル申出云ニニ關係セサル同ノ為
セリ故ニ原告代理人モ世同ノ起セリト因テ判
事原告代理人ニ對シテ曰ク申ツトルヲ召喚
スルヤ否ノ點ニ關係セサル同ハ止ム可シ

明治十一年十一月十三日

同法省

明治十一年十二月十三日

差留願控訴，件
追呈證據書類寫

東京府京橋區日吉町三十三番地

日生

亭

同法省

同法省

追呈証據書類

第五号

一千八百七十八年十二月四日横濱ニ於テ
ハ、ウキツトル氏ニ交付サレタル委任状ニ付予
ヨリ香港ニ送致シタル節ノ事實ヲ兼知サレタ
キ旨本月廿日付ノ貴翰ヲ落ス予ハ、ウキツトル
氏ニ該委任状ヲ送致スルニ方リ一千八百七十
七年一月二十二日付ノ予カ書翰ヲ添ヘタリ其
書翰タルヤ如何ニ預委任状ヲウキツトル氏ニ
送致セシヤヲ表明スルニ足ルヘキヲ以テ爰ニ
其寫ヲ封送スヘシ而シテ該委任状ハ予カ誤謬
ナリ記臆セリトセハ、香港ニ於テ計算吟味者ト
シテニアラス、ウキツトル氏カ同氏自家ノ為メ

東京上等裁判所
判事西瀉訥殿

十二月十八日口供

原告代理人曰ク余ハ「ホウワト」氏ヲ調フル前
先ノ對審ニ於テ余ノ申立置タル故障ヲ裁判
記録ニ認メ置キシヤ否ヲ知ラント欲ス加之過
日余ノ陳述為レタル裁お手續ノ採用相成ルヤ
否モ之ヲ知ラント欲ス而シテ該手續タルヤ昂キ
被告代理人ハ被告ノ都テ「福松」人ヲ呼出シ原
告代理人モ同様呼出シ乃テ是被告ニ法律上ノ
義務ヲ認ルニ於テハ「即チ」福松調且ハ訴召手續
其意皆卒ルヘシ

被告代理人右ヲ承諾ス

十二月十八日口供

星亨「ウツトル」氏ニ問テ曰ク

足下ハ何時原告會社ヨリ退シヤ

午八百七十六年四月三十日ニ於テ

原告會社ニ用違条約ノ反結ニ相成ルトキ足下

ハ原告會社ノ一員ナリシヤ

然リ

原告會社ニ成立ツ計算欄ニ就テ足下ノ責任

ハ何時消滅セシヤ

右問ヲ解セス

足下ハ原告會社ノ差配人タリシ際後藤氏ニ就

テノ計算上ニ責任ヲ帯ヒタリ而シテ該責任何

時消滅セシヤ

問

答

問

答

問

答

問

答

答 余カ千八百七十六年中退社セシ氏ニ於テ消
滅セリ

問 且下ノ右責任ノ消滅セシ際後孫ハ何歳原告會
社ニ負債アリシヤ

答 凡ソ八十萬圓ナリ

問 且下ハ千八百七十七年二月二日ニ於テ横濱ニ
行キ其後二三日過テ後孫ニ面會シタリト述ヘ
タルカ且下ハ面談ノ日限ヲ慥ニ記憶スルヤ

答 不然

問 午前ナリシヤ午後ナリシヤ
余ハ一時十五分ノ乗車ニテ参リタルハ夜分ニ
シハ之レナシ

問 且下カ後孫ニ面談セシ氏同人ハ健カナリシヤ又

答 ハ不快ナリシヤ
容貌健カニ見ヘタリ

問 後孫後孫ハ原告會社ニ就テノ計算ニ付何カ問
タルヤ

答 問ハサリシト信ス
然ラハ何ヲ咄シタルヤ

問 知已トシテ後孫ヲ尋子タルノミニテ高法上ノ
話ハセサリキ

答 何時間面談セシヤ
王時ト覺

問 何ニ高法上ノ話ナカリシヤ
余ハ右様信スレト確ト覺ヘス

問 且下ハ述日談面談ニ於テ委任状ノ話ヲ為シシ

答

リト云々只今ハ高法上ノ咄ナカリシト云フト
魚凡何レカ真ナルヤ

問

余ハ右ノ如ク粗語シタルヲ云ヒシラ覺ヘ
スレバ腰ニ付テハ話ハ日本ニ於テハ高法上ノ談
ト云フト虽モ該尺牘ニ於テハ不然
然リト虽モ該尺牘ニ付テハ話ハ高法上ノ誇シ
ルヲ免レサハナリ

問

余ハ該條右尺牘ヲ讀取タルト而已云ヒタリ
只下ハ後藤ニ面談セシ片通弁人故ハ他ノ立合
人ナカリシヤ

答

通弁人アリシ

問

右ハ誰ナリシヤ
タルザ氏ナリシ

問

只下ハ「ホンコン」ヨリ日本ニ到着セシ片代理委
任状ヲ載シタル書翰ヲ受取タリト云ヒシカ古
ハ何日ナリシゾ

答

余ハ英國ヨリ逆テ「ホンコン」ニ取リテ日本ニ到
着セシニテ「ホンコン」ヨリ日本ニ歸着ナシタル
ニ非ス

問

右ハ何日ナルゾ
余ノ日本ニ到着後凡ソ一周間或ハ十日後ナリ
シ

問

該日限ヲ記憶セサルヤ

答

該尺牘ハ何処ニ於テ受取リシヤ
横濱ニ於テ

問 答 問 答

足下ハ「ホニコ」ヨリノ郵便ニテ受取リシヤ
然リ

「ドルザ」氏ヨリ
足下ハ誰ヨリ足下ニ投シタルモノナルヤ

星亨「カ」ホウツトル氏ニ「足下」ノ本層ヲ法廷ニ
携帶セン「フ」ヲ乞ヒタリ

証人ハ「足下」ノ本層ヲ進呈ス
被告代々人々「フ」号ト記ス

「足下」ハ如何ナル旨意ヲ含ムヤ
「足下」ハ「余」ニ代理委任状ヲ托シタルモノナリ

「足下」委任状ハ「足下」ノ依頼ニヨリ「カ」或ハ「後」ノ
利益ノ為メニ「共」ヘタレシモノナタルヤ

「余」ハ「掌」ヲ之テ受取ルヘク依頼セシ「フ」ナシ全ク
「後」ノ利益ノ為メニ「余」ハ受取リタルモノナリ

問

若シ「足下」委任状「カ」ホニコニ於テ「足下」ニ到来ナ
シタラハ如何シキ足下ハ「足下」委任状「後」ノ利
益ノ為メニ使用ナシ得タルヤ

「ホニコ」ニ於テ「都」ヲノ計算「後」ノ為メ
ニ「調」フヘク使用シ得ヘキモノナリ

然ラハ「足下」委任状「後」ノ為メニ用ユルハ「ホ」
「コ」ニ「限」ルヤ「横」或ハ「寄」ホニ於テハ「無」
用ナシモノヤ

何処ニ於テ「余」ニ得ヘキモノナリ
然レハ「仮令」重立タル「社」カ負債ナリト「虽」
「前」述ノ計算「調」ハ為シ得ヘキモノナリシヤ

然リ

問 答 問 答

問 答 問 答 問 答 問 答

然うハ如何ナル理由ヲ以テ足下ハ「おんコンニ
計算調ノ為メ行キタルヤ
余ハ如何ナル理由ナルヲ知ラス只右ハ後藤氏ノ
意ニ基キシモノナリ
然ラハ足下ハ何故後藤氏カ後任状ヲ「おんコン
ニ於テ足下ニ送リタルヲ足下ハ解ラセサルヤ
余ハ只「おんコン」ヲ通行シタル左ノミヲ以テノ
外他ノ理由ヲ知ラス
足下ハ日本ヲ抜錯以前後任状ニ付キ何カ後
戻ト話タルヲナキヤ
決シテナシ
然ラハ足下ニ於テハ不意ニ計算ヲ調フヘキ依
頼ヲ受ケタルモノヤ

問 答 問 答 問 答 問 答

然リ
足下ハ何日日本ヲ抜錯セシヤ
千八百七十六年ノ初メナリ
足下ハ日本ヲ離ル、以前後藤氏ト原告会社ヨ
リ代弁權ヲ足下ニ轉任スヘキ点ニ付後藤氏
話シタルヲナキヤ
後藤氏ハ友ニ余ニ高富礦山ニ付テノ用途トナ
ルヘクト難話セリ
右ヲ兼知シタルヤ
否如何トナレハ後藤氏ハ右ヲ余ニ確然依頼セ
シテナケレハナリ
何日如此話ヲ為シタルヤ
千八百七十五年ノ末再々話シタリ時トシテハ

吾輩ヲ販スルヤ

問 答 問 答

然ラハ是下カ「おんコン」ニ於テ後藤氏ノ用達ト
 ナリ計算潤ヲ為シタル條後藤ハ何哉原告会社
 ニ負フタルヤ
 ○
 是下ハ委任状ヲ是下ノ為メニ受取シヤ
 否
 是下ハ誓約ヲ以テ右答ヲ得ルヤ
 然リ

問 答 問 答 問

後藤氏ニ直達ハセサリシモ同点ニ付「タルザ氏
 ト屢々話シタルアリ
 右ノ如クナレハ是下ハ原告会社ノ支配人タラザ
 リシヤ
 然リ去ナカラ余ハ千八百七十六年四月廿日ニ
 於テ退社スヘシト明クシ置タリ
 然ラハ是下ハ後藤氏カ是下ヲ用達ト為サント
 欲シタルニ付キ自分原告会社ノ一員タルヲ顧
 ス偏ニ己レノ利益ヲノミ謀リ該会社ヲ退去セ
 ントナシタルヤ
 不然
 然レハ後藤氏カ原告会社ヨリ用達權ヲ棄テ是下
 ニ該權ヲ与ヘント為シタルハ是下ハ端々之ニ

問

口下ハ「ホニコシ」ニ於テノ「計算調」ヲ為スヘク
委任状ヲ「ダロザ」氏ヨリノ「箱」ニテ「後藤」氏ヨリ
「麦」灰タルヤ否ヤ

答

「ホニコシ」而已ニ於テ「計算」ヲ調フヘキ為メノ「
後」委任状ヲ「麦」灰ラサリキ

問

如何様「口下」ハ「右」ノ如ク「悟」リタルヤ
右ハ「証」居ノ「文面」ヨリ且ツ「余」カ「横濱」ヘ到「着」後藤
氏ニ都テ「ノ」計算表ヲ「余」ニ手渡シタル状況ヨリ
「悟」リ得タルモノナリ

問

右「河」唇トハ何ヲ云フヤ
委任状ヲ云フナリ

問

口下ニ於テハ「ダロザ」氏ヨリ右委任状ヲ「
下」ニ投シタル「ハ」腰ノ「ハ」唇面ニ就テ「口下」ハ「ホニ」

問

「ホニ」ヨリ他ノ場所ニ於テ「後」委任状ヲ使用シ得
ル「権利」ヲ有シタル「ハ」信スルヤ

問

然リ
口下ハ「英文」ヲ解シ得ルヤ

問

然ラハ「ホニ」コシ「右」留中トハ如何ナル意味ゾ「右」
ハ「横濱」長崎及「其他」ノ場所ニ於テモ使用シ得

問

ヘキ「文面」ト解スルヤ
否「右」ハ「余」カ「ホニ」コシ「左」留中ノ意ナリ

問

然ラハ「口下」ガ「ホニ」コシ「右」留中ノミト云フ「文面」
ハ「口下」カ「横濱」及「長崎」互留云々ノ意味ヲ「含」ム

問

モ「ト」信スルヤ
否「余」ハ一人ニテ「同時」ニ「列」所ニ「立」ルハ「余」

答

問 ハ後委任状ヲ横濱ニ於テ落手シタリ而シテ後
 友氏ハ系告会社ヨリ同人ノ受取タル都テノ計
 算者ヲ余ニ精算スヘク手放シタリ而シテ後友
 氏ハ始終余カ後友氏ノ代理委任權ヲ有シ居ル
 俸ノ取扱ヲ為シタレハナリ
 委任状ハ「おんこ」ヨリノ郵便ニテ足下ハ横濱
 ニ於テ落手セシモノニシテ後友氏ハ之ヲ横濱
 ニ足下ニ送りシモノニ非ルナリ
 委任状ヲ取シタル尺牘ハ「おんこ」ニ向テ投セ
 ラレタレ氏余ノ不在ナルヲ以テ朋友ノ一人カ該
 尺牘ヲ郵便ニテ余、横濱ニ於テ落手ナサシメ
 タルモノナリ
 右朋友ハ誰ノ

答 余ハ覺エス「おんこ」ニ在ル系告会社ノ層記ヨ
 リ之ヲ送りタルモノナリ
 問 足下ハ返刻歐洲ヨリ帰来ノ後後友氏カ系告會
 社ヨリ受取タル計算者類ヲ足下ニ手放シナシ
 タト陳シルガ右ハ幾年何月何日ナルヤ
 答 余ハ月日トモニ記憶セサレ氏千八百七十七年
 中余カ歐洲ヨリ帰来ノ後數日ヲ経ス三月カ四
 月頃ト覺ユル
 問 何処ニ於テ後友氏ハ計算者類ヲ足下ニ手放ナ
 シタルゾ
 答 後友氏ハ「おんこ」ガ氏ヲシテ右計算者類ヲ余ニ送
 達セリ余ハ何処ナルヲ確ト覺エ其時余ハ余
 ノ朋友ト同居シ余カ自來ノ家ニ居住セサリキ

明治十一年十二月十八日口供

被告代理人

星 亨

一 被告代理人ハ日本人ニ有之多少英語ニ通シ
 居候一トモ法廷ニ於テ質問スルカ如キ要事
 ニ付テハ英語ヲ以テ質問スルハ誤謬ナキ
 トハ信シ難クハ向本邦ノ詞ヲ以テ質問致度
 其時々其質問ノ下ラ当所裁判所ノ通事官シ
 以テ質問サレヘキ人ハ精通シ相成候様願及
 候

エドワルド、ホヰツタルノ問

- 一 証人ハ原告ノ社中ヲ何處迄キタルヤ
- 一 証人ハ原告者カ後及ノ用達ヲ引受タルヤ

該社ノ支配人ナルヤ

一 証拠人ハ後及ト原告者トノ討美ノ一ヲ付テハ何レハ其追責ニ任スル人ニ有之ヤ

一 証拠人カ原告者ノ支配人トシテ後及ノ身定ニ付テノ責任カ止ニタルキニ於テ後及ハ原告社ニ幾許ノ負債アリタリヤ

一 証拠人ノ退社ノ其後ノ社中ハ彼ノ後及ノ負債ヲ幾許ノ債ト見積リテ引受ケタルヤ

但 証拠人ニ於テ此答ヲ為サシルニ原告代
言人ニ於テ申立者之ニ付テニ上申ス

一 原告代
言人ハ被告代
言人ノ問フ所ハ本訴ニ
不用ナリト申立ルモ原告ヨリ差出ス盟誓ハ
己ニ被告代
言人ノ申立ル一ヲ記載シテハ

其ノ一付被告代
言人カ問ラ起スハ固ヨリ本
訴ニ大ニ関係シタレモ
ニシテ決シテ不用
ナル問ニ無之ト存候

判事曰

一 該委任権ノ有無ニ関スル條件ノ外問ラ止ム

ヘシ

右ヲ付第五項ノ問ラ止ム

同十二月十八日午後六時

ハ丹ツタレ一問

一 証拠人ハ千八百七十七年二月二日ニ英國ヨ
リ日本国ニ到着シ其後直チニ後及ニ面會セ
リト申立タリ其直チニ面會シタルトハ何決
ナルヤ

一 肉間トカニ肉間トカナルヤ
 一 時ハ朝ナルヤ夕ナルヤ
 一 其時後及ハ病氣ハナリシヤ否
 一 後及ハ此時ハキヤードントノ計美ノトヲ尋
 一 不レトアリヤ
 一 何ノ談話カアリシヤ
 一 其面會ハ何時間程面會セシヤ
 一 其時ハ何事モ談話セガリシヤ
 一 河加人ハ前ニ代理ヲ付テ談話アリシト云ヘ
 一 リ右ハ虚ナルヤ
 一 後及ニ面會ノ節ハ一人ニテ面會セシヤ又ハ
 一 通弁人ニモ付添ヒシヤ
 一 後及ノ方ニ居リシ通弁ハ誰々ナルヤ

一 委任状ノ封入セル手紙ヲ香港ヘアテ差出し
 一 行違ニテ右手紙横濱ヘ戻レリ若ハ何頃ナル
 一 ヤ
 一 何頃何処ニテ清取シヤ
 一 其旨ハ分ラヌヤ
 一 場所ハ何處ナルヤ
 一 送りタルハ香港ノ郵便屋ヨリナルヤ
 一 該手紙ハ誰ヨリ送りタルヤ
 一 該手紙原書差出ス様致シタシ
 一 証拠人ハ該手紙ノ意味ヲ如何解シ居ルヤ
 一 該委任状ハ証拠人ノ祭意ニ由テ成シタルヤ
 一 又ハ後及ノ祭意ナルヤ
 一 若シ該委任状ヲ香港ニテ用ヒル如何ナル利

益の後返ニアルヤ

一 新定并ニ入費酒ホノ一ノ如キハ長崎横濱ホ

ニテハ為シ難キヤ何トナレハ長崎横濱トモ

原多者ノ社中アルヲ以テナリ

一 重立タル善配人カ居ラリル所ニテモ為シ難

フヤ

一 然レハ何ノ為ノニ香港ニテ討美等ヲ為シタ

ルヤ

一 社中人ノ助成ニテハ慇々香港ニテ為シリ

理由ハ如何ヤ

一 社中人カ未タ日本ヲ出立セリル前ニ該委任

状ノ談話アリシヤ

一 不意ニダローザヨリ手紙ヲ出シ吟味ノ一ヲ

頼ミシヤ

一 何頃日本ヲ出立シ英國へ行キシヤ

一 社中人カ日本ヲ出立スル前此度ハ石炭ノ用

途ヲヂヤードンマゼソン社中ヨリ引上ケ自

分即チ社中人カ引受ルト云フ一ヲ後返へ送

話セシ一アリシヤ

一 社中人ハ後返ヨリ石炭用途ノ依頼アリシト

右ハ社中人ニ於テ承諾セシヤ

一 其談話ハ何頃ナレヤ

一 社中人カ未タマゼソン社中ノ支配人デアリ

シヤノ一ナルヤ

一 今社中人ノ申立ニハ用途ヲ自分引受ケレハ

喜ハシク然レハ該用途ハ利益アルモノニテ

一 代理人ハ右利益アル 処ノ用途ヲ模索シ他ノ
仲間ノ者ニ害ヲ興フル心得ナルヤ
一 委任状ハ代理人カ用途ヲ引受テ為メニ香港
ニアルマデソン本社ニ於テ後述トノ郵便ハ
如何アルカラ認ムル為メニ委任状ヲ代理人
人ニ興ヘタルモノナリ 代理人ノ如何心得居
ルヤ

一 誓ノ上ニテ申し得ルヤ
一 第六号ノ手紙ニ批レハ委任状ハ香港ニテ
用フヘキモノナリ 代理人ノ如何心得居ルヤ
一 然ラハ委任状ハ何所ニテ用フルモノナル
ヤ

一 ドクメントトハ委任状ヲ指スマヤ 第六号

ノ手紙ヲ指スマヤ

一 ダローザガウキツトルニ送リタル手紙ニ批
テ見ルモ該委任状ハ香港ノ外何所ニテ用
ヒテ可ナシモノナルヤ

一 代理人ハ英國ノ文章ヲ知レルヤ

一 ホワイル、イン、ホンコンノ意味ハ何ノ意味ナ
ルヤ 横濱長壽ホニテモ用ヒテ可ナリト云フ
意味ナリヤ

一 長崎横濱等ニテモ精製吟味ヲ為スナリ、意味
ツ合メルヤ

一 横濱ニテ清取タルハ郵便ニテ受取タルナリニ
テ後述又ハダローザヨリ受取リタル訳ニハ
無之

一 用友トハ何人タルヤ
 一 沼根人ハ横濱へ来り 後友ト共ニ沼根人ノ宅
 ニ於テゲヤードン、マゼッレヨリ、帳面ヲ檢
 査シタリト云フガ 右ハ何年何月ナルヤ
 一 何所ニテ検査セシヤ
 古之通相違ハ申上候以上

明治十二年十二月十六日

星 亨 (不)

東京上等裁判所
 西海判事殿

千八百七十八年十二月十九日 上北裁判所ニ於
 テ後藤象二郎ニ對シタルシニマテザン社中
 星亨氏ノ同前未ウイル氏ノ答
 前審曰ニ於テ足下ノ言ニ後藤氏ハ六月或ハ七
 月ニシカルシニマテザンノ勘定昏ヲ足下ニ送
 シトト而シテ昨日足下ハ勘定昏ヲ三月或ハ四
 月ニ送ラシタリト然ルハ足下ノ答ニ於テ勘定
 昏ノ送り月ニ大ナル差異アリ此故如何
 予ハ右勘定昏ヲ三月或ハ四月ニ受取リ而シテ
 後藤氏ト共ニ勘定ノ調査ヲナシテ七月或ハ八
 月ニ終シリト回フ然レハ足下ノ云フ所誤ナル

勘定昏

ヤ答之し言辭ノ通夫ナリ

星氏曰ノ後藤氏ノ送りレ如ノ勘定昏ヲ足下所

持スト右勘定昏ノ一覽ヲ云フ

一昏ヲ出セリ

足下ノ後藤氏ヨリ受取リシ勘定昏ハ此一昏ニ

ラ具備セルヤ

然リ

足下ハ何人ヨリ此勘定昏ヲ受取リシヤ

ダロ一廿氏ニ由テ後藤氏此勘定昏ヲ予ニ送与

セリ

此勘定昏ノ記者ハ何人ナルヤ

予ハ記スル如ク見サル故ニ記者ハ何人ナルヲ

知ラス

足下此勘定昏ヲ受取リシ時後藤氏ノ添昏アリ

シヤ

無し

足下ノ言ニ此勘定昏ヲ三月或ハ四月ニ受取リ

シト然リト雖モ其以前ニ昏取リシニアラヌ

予ハ其以前ニ受取リシト覺ヘス

足下ハ勘定昏ヲ始メニハ六月或ハ七月ニ受取

リシト云ヒ後トニハ三月或ハ四月ニ受取リ

ト茲ニ於テ足下ハ記憶カ之ノシテ或ハ其以前

ニ受取リシヤノ想像起ル

予ノ云フ如ク信セサレハダロサ氏ヲ呼出シ其

証ヲ取ルヲ善トス

足下ノ差因スレ如甚シキ煩授ノリメリ予ハ今

同法省

足下ニ対シテ聞ヒスニアリ故ニ足下ノ知ル如
及ニ記憶スル知ヲ以テ答アラシクテ欲ス
予ハ二様ノ答ヲナシタルニアラス星氏ニ乞フ
足下ニ様縁由ノ一辺ニ付テ云ツレシテ予ハ
誤言ト説明セリ然レモ記憶^弱之ト説明セス
ダ^如サ氏ヨリ此勘定昏ヲ受取リタル并足下言
辞或ハ昏尙ニ於テ何莫カズツカシヤ
同人ハ詰セントモ此昏尙ナシ
同人ハ何莫ヲ云ヒシヤ
同人ハ自身ニ勘定昏ヲ考定シ過誤或ハ附掛ヲ
指示スヘシト此昏ヲ予ニ渡セリ同人ノ詰セシ
所右ノ如シ且同人曰ク此勘定昏ハシマルシ
マデ^如シ^シ會社ヨリ後藤氏ノ受ケ取りタル勘定

昏ナリト
足下ハ此勘定昏ヲ調査セシヤ
然リ
何時
此勘定昏ヲ予ニ送致セラレシ時ヨリ自身ニ之
ヲ取扱ヒ而シテ六月或ハ七月ニ後藤氏ト共ニ
精細ニ之ヲ調査シ予ニ於テハ過度ト考フル知
ノ雜費ヲ差示セリ
後藤氏ト夫ニ何地ニ於テ調査セシヤ
横濱山手百二十六番ノ自宅ニ於テ
一日月ニ調査終レリヤ或ハ之レヨリ永ク日教
ヲ經シヤ
午後ノ或時間ニ於テ終レリ

同法省

此時列席セシ者ハ後藤氏只一人ナルヤ
否

後藤氏ト共ニ何人カ列席セシヤ

ダロサ氏ナリ

其他ニ何人モ列席セサリシヤ

尤様ニ存ス

足下ハ此時(足下カ後藤氏ト共ニ勘定昏ヲ調査

セシト告白スル時ヲ云フ)後藤氏ハ東京ニ在ラ

ス又横濱ニモ在ラサリシヲ知ルヤ

予ハ六月或ハ七月ハ後藤氏ノ横濱ニ在リシヲ

知ル其故ハ同氏予ト共ニ勘定昏ノ調査ヲナセ

此勘定昏ノ六月或ハ七月ノ調査後足下ハ再ヒ

足下一人或ハ後藤氏ト共ニ調査セシ莫アリヤ
ルヤ

予一人ニテ教度調査セリ

足下一人ニテ調査セシハ後藤氏ノ依頼ニ因レ

ルヤ

否後藤氏ノ依頼ニ非ス然レモ元来此月途ニ於

テ予ニ送致セシ故ニ之ヲ調査セリ

此勘定昏ヲ受取りシ后々足下ハビヤルビンマ

デリン會社ニ到リ勘定昏ヲ調査シ或ハ勘定昏

ニ就テ同會社ト談話セシ莫アリヤ

予ハ勘定昏ニ就テケスウイワク氏ト談話セリ

何時談話セシヤ

後藤氏カ其他ノ勘定昏ヲ請取ラスト予ニ話シ

調査
去
首

予同會社ニ於テ何故ニ其他ノ勘定昏ヲ渡サ、
ルヤヲ尋問ニ同會社ニ到リシ後而チ千八百七
十四年ニ教度於話セリ
足下ハ前審問ニ於テ九月ニ勘定昏ニ就テケス
ウイヅク氏ト面談セリトモ足下ノ於テ話セシト
云フハ北面談ヲ指スヤ
否九月ニケスウイヅク氏ト談話シ而シテ同人勘
定昏ト共ニ後藤氏ニ送致セル旨ヨリ予ニ示セ
リ然レ夫以前ニ教度同人ト勘定ニ就テ面會セ
リ
此時足下ニ示セシケスウイヅク氏ノ旨商ハ此
勘定昏外ノ勘定昏ニ同ス然ラハ斯ノ如キ他ノ
勘定昏ヲ見シヤ

予ケスウイヅク氏ニ面會セシ片同人ハ後藤氏
ニ原昏ヲ送致シ横濱ニ於テ其字ヲ所持セズ其
副書長崎ヨリ着セザリシト雖モ其後チ此ウキ
シスノ役所ニ於テ此勘定書ヲ見タリ
足下ハ何時ジツキンス氏ノ役所ニ此ノ之ヲ見シ
ヤ
一月ト存スト雖足下ハ精細ノ人タルヲ以テ一
月或ハ二月ト云フヘシ
足下ハ時ヲ知ラサルヲ得ズ然レモ時ヲ云ヒ能
ハサルヤ
予ハ書ニ記憶スル如ク云フ而已且ツ依ルヘキ
ノ書類ナレ然ルニ足下ハ精細ノ人タルヲ以テ
時限ヲ斯ク云フサルヲ得ズ予ハ再々失念セ

トテ欲セス

足下ハジツキンス氏ノ役所ニ於テ此勘定書ヲ見シト云フ何程ノ勘定書アリシヤ

種々ノ枝紙ノ書アリ
足下ハ此勘定書ヲ見ル為メニジツキンス氏ノ役所ニ到リシヤ或ハ偶然ニ之ヲ見シヤ或ハ或人ノ依頼ニ因テ之ヲ見シヤ

予ハ後藤氏ニ関係ノ所用及ビシヤルジツマテ
リン會社ヨリ此勘定書ヲ受取ラザルニ就テ後藤氏ノ心算スルヲ面話セン為メ及ビ此社ニテ

此勘定書ヲ渡セシ度ヲ予ニ告知セシ度ノ為メ
ニジツキンス氏面會シ而シテジツキンス氏が
會社ニテ勘定書ヲ渡サス旨ニ決意書ヲ渡セシ

ト云ヘリ茲ニ於テ予モ此會社ノ社員タルヲ以テ此度ヲシ其送致セシ旨ハ當ニ決意書ニ非ス
コテ取引帳タルヲ知ルヲ以テ其旨ヲ見シトテ
乞ヘリジツキンスハ始メ之ヲ拒メリト後藤氏後
トハ見セント云ヒテ紙箱ヨリ取り出シテ予ニ
示セリ予之ヲ一覽スルニシヤルジツマデリン
會社ト高島石炭高人トノ取引帳タルヲ予ジツキ
ンス氏ノ要スル如ク勘定書ヲ示シケレハ同人
之ヲ要スル如ク証拠物クヲト云ヘリ而シテ予
同人ニ告ケテ曰ク若シ足下ヨリ後藤氏ノ勘定
書ヲ同會社ニ請求セハ必ス渡スヘキト必ヒリ
ト而シテ双方ノ間ニ信アレハ取引帳ト共ニ証
書ヲ送ルハ緊要ノ事ニ非ス

何寺ノ目途ニ向テジツキンス氏ハ此勘定各ヲ
有スルヤ

予ハ其故ヲ曰人ニ同ハザリシ
足下ノ知ル如ク曰氏ハ法律師ナリ而シテ曰氏
ノ此勘定各ヲ有スルニ就キ何北ノ故アリテ同
氏ハ此証各ヲ有スルヤノ故ヲ足下ハ説明シ得
サルヤ

同氏ハ予ニ何様ノ竹條ニテ高島石炭坑ノ支配
人トナルヤヲ問フ為メニ予ヲ呼ヒテ予ハ其
時曰人ガ後藤氏ト共ニ或是業ヲナシテアサ
ルヲ得スト假定セリ而シテ其他ニ何是モ同ハ
ザリシ

足下ハ此是業ハ何様タルヤノ考アラザリシヤ

此時予ハ女シモ考アラザリシ
足下ハ其後此復業ニ純テ用シ復ハ只ニ風用タ
リシト断然ト云ニ能フヤ或ハ此復業ハ何ノ復
業ニテアリシト知リ為スヤ
予ハ之ヲ用シ而已ニテ見ザルヲ以テ之レ風用
ヲ~~タ~~タリ
足下カ去月三十日附ノ書簡ニ後藤氏ガ此勘定
昏ノ調査ヲ為スヘシト数度依頼セリト昏セリ
後藤氏ハ斯ノ如キ依頼ヲ何度ナセシヤ
甚々多シ
何頃ヨリ何頃迄何程ノ日月ヲ置テ此依頼ヲナ
セシヤ
予ノ獲遺ニ到着セシ始メヨリ後藤氏ノ長崎ニ

出立セシ迄後藤氏自身ニ事リテ依頼シ或ハ依
者ヲ以テ依頼セリ
何頃後藤氏ハ長崎ニ出立セシヤ
予ハ同氏ノ出立セシ時日ヲ知ラス其故ハ同氏
ノ出立セシ時ハ予ニ塾海ニ行クト云ヘリ故ニ
其時日ヲ云ニ能フス而シテ同氏ノ塾海ニ行ノ
ト予ニ昏状ヲ送致セシハ一月ノ末或ハ二月ノ
始メナリ其後予同氏ハ矣ラス予ハ同氏ノ長崎
ニ在ル矣ヲ聞
足下ハ今後藤氏ガ数度此勘定書ノ調査ヲ依頼
セリト云ヘリ而シテ或ハ使者ニテ依頼シ或ハ
自身ニ依頼セリト~~同~~同氏ノ自身ニ依頼セシハ
時ニテ依頼セシヤ或ハ昏状ニテ依頼セシヤ

言辭ニテ依頼セリ

使者ハ何人ナリシヤ

タロサ氏ナリ

足下ハ今後藤氏ノ依頼ヲ言辭ニテ受ケタリト

云ヘリ足下ハ何度言辭ノ依頼ヲ受ケント云ヒ

能ワザルヤ

予ハ云ヒ能ワス其依頼ハ九度或ハ十度ナル可

シ然レモ何度依頼ヲ受ケント記シ置ザリシ而

シテ予ハ数度後藤氏ヲ尋問セリ然レ共其度教

ヲ知ラズ後藤氏ハジヤルンマテソソ會社ヨ

リ其他ノ勘定者ヲ請取ラザルモ支テ予ニ話セリ

予ハ此勘定者ヲ受取ル為メニ尽カセリ

勘定者ヲ受取リシヤ

受取レリ

足下ハ之ヲ何人ニ渡セシヤ

之ヲ調査スル為メニ受取レリ

此勘定者ハ何様ノ勘定者ナルヤ

長崎及ヒ高島ニ於テ都テ坑業上ノ勘定者ナリ

即チ此島ニ於ケル人夫及ヒ外国人ノ給料シヤ

ルンマテソソ會社ノ手数金及ヒ利金等ノ都

テノ勘定者ナリ

何頃足下ハ此勘定書ヲジヤルンマテソソ會

社ヨリ受取レシヤ

今年ノ十一月

何日ニ

予ハ云ヒ能ワス十一月ノ始ニテ此勘定者ハ予

言辭ニテ依頼セリ

言辭ニテ依頼セリ

ノ以前受取シ勘定昏ニ非スレテ或他ノ勘定昏
ナリ
今足下ハ十一月ノ始メニ高島及ニ長崎ノ都テ
ノ勘定昏ヲ受取タリト然ルニ再ヒ答ヲ受シテ
或勘定昏ヲ受取タリト
種々ノ勘定昏ノアルヲ以テ此疑問ニ於テ何ノ勘定
昏ヲ問フヤヲ知ル莫難シ其故ハ調査第八ノ昏
ハ此前ニ予受取リタリ而シテ予ノ云フ所ハ十
一月ニ都テノ勘定昏ノ最後ノ調査ヲ爲シタル
莫ラ云フナリ
足下ハ十一月ニ都テノ勘定昏ヲ受取シト然ラ
ハ何様ノ勘定昏ヲ受取シヤ
予ハ十一月ニ抗業勘定昏タル長崎ノ勘定昏ヲ

受取シ此勘定昏未メ曾テ見サリシ如ク勘定昏
ナリ
足下此時ニ香港及ニ上海ノ勘定昏ヲ請取ラザ
リシヤ
此知ニ香港及ニ上海ノ勘定昏決ニテナレ此勘
定昏ハ長崎ニ保存シテアリ
横濱勘定昏ハ何如
今横濱勘定昏ハ甚々好フシテ予ガ以前調査セ
シ者モノアリ然レニ或時間ニ年余此勘定昏ハ
保存シテ又支那及ニ香港ニ送りシ石炭ノ舟送
帳ハ去月調査ノ爲メ予ニ渡サレタリ
後藤氏ノ長崎ニ出立セシハ足下ガビッキン
氏ノ役所ニ於テ此勘定昏ヲ見シ後ナルヤ或ハ

其ナルヤ

後ケナリ

何程後レタルヤ且ツ今朝足下ハ一月或ハ二月
 ニシツキンス氏ノ役所ニ於テ此勘定昏ヲ見シ
 ト云ヘリ然ルニ足下ハ又一月或ハ二月ニ後藤
 氏ハ長崎ニ行ケリト云フ
 予ハ同氏が長崎ニ行シト云シ更ナシ熱海ニ行
 シト云ヘリ
 然リト云氏足下ハ正ニ同氏が長崎ニ行キシ後
 ナシツキンス氏ノ役所ニ於テ此勘定昏ヲ見シ
 ト云ヘリ此勘定昏ヲ見シハ今ヲ云ル何程ノ日
 月ナルヤ
 予ハ斯ノ如ク云ワサリシ予ハ前ノ巻ヲ変ヒシ

予ハ予ノ其故一斯リ云ヘリト云フ予ハ後藤
 氏カ熱海ニ行キシト云ヘリト考フ故ナリ而シ
 テ実ニ同氏ノ行キシヲ知ラス同氏ハ予ニ熱海
 ニ行クトノ昏状ヲ送致セリ
 後藤氏ノ熱海ニ出立ハシツキンス氏ノ役所ニ於
 テ足下ガ此勘定昏ヲ見シ後ナルヤ或ハ其前ナ
 リシヤ
 此勘定昏ヲ見シハ後藤氏カ熱海ニ行クトノ昏
 状ヲ受取タル後ケナリ
 足下カシツキンス氏ノ役所ニ於テ此勘定昏ヲ
 見シハ後藤氏ノ此昏状ヲ受取リシ何日後ケナ
 ルヤ
 予ハ予ニ能ワス

足下ハ今年ノ一月ニ訂法アリシヲ知ラスヤ
予ハ知ラス

日月ハ置キテ其夏矣ヲ知レリヤ

訂証アリシヲ知ラスニヤルジニマデリン會

社ニテ予ニ之ヲ告ケス後藤氏モ又訂証アリシ

夏ヲ告ケシヲ曾ラナシ

足下ハ一月或ハ三月横濱ニ在リシヤ

然リ

足下ハ横濱ノ英語新聞紙ヲ讀ムヤ

然リ

一月或ハ二月頃此新聞紙ニ後藤象二郎ニ對ス

ルシヤルンマデリン會社ノ訂証ヲ記載セザリ

シヤ

此訂証ヲ記載シアルハレ記載シアルハ予ハ讀

タルト假定ス然レ何頃ナルヤヲ知ラス

然ラハ足下ハ此夏件ニ関係セサルヤ

予ハ此夏件ニ関係セス

此夏件ニ就テ足下ハ足下ノ友人反テダロサ氏

ヨリ何夏カ聞シ夏アラザルヲ得ス

予聞キタル夏甚々多シ

足下聞キタル夏多ケレハ足下ハシヤルジニマ

デリン會社及ニ後藤ノ煩擾タル夏及ニ訂法ノ

進ンテアリシ夏ヲ知ラスニハ非ス

予ハシヤルジニマデリン會社ト後藤氏ノ同ニ

紛擾生ヒシ夏ヲ知リシ然レ何頃法ニ就テハ何

夏モ用カザリシ

足下ハ今年ノ十一月一日ニ東京ニ於テ後藤象
次郎ニ對シテ「シヤルジン」マデリン會社ガ請求セシ
莫ヲ今云ヒ「此年月頃ニ開カザリシヤ
然リ之レニ「親テ開キタルナリ」
何時或何頃ナルヤ
予ハ云フ能ク「ス」其故ハ日附ノ帳簿ヲ持タザル
ヲ以テナリ」
十一月後何日迄キナリシヤ且ツ足下ハ其時ヲ
失念セシヤ
予ハ決シテ時ノ書留ヲナサス故失念セシニ非
ズ
足下ハ去月始マシ「後藤象次郎」ニ對スル「シヤル
ジン」マデリン會社ノ訂込ニ關係セザリシヤ

予ハ双方ヨリ夫議ヲ受ケザリシ故ニ關係セザ
リシ
足下ノ言ニ「足下ハ「シヤルジン」マデリン會社ヨリ
去月長壽勘定昏ヲ受取シト何人カ此勘定昏ニ
捺印セシヤ
此勘定昏ハ「ロベルト」マデリン氏捺印セリ
今「ロベルト」マデリン氏何地ニ在ルヤ
曰人ハ「横濱」ニアリ
ロベルトマデリン氏ハ去月十三日ニ長壽ヨリ来シ
ルト見エ足下ハ何人ヨリ此時ニ長壽勘定昏ヲ
受取リシヤ
否
然ラハ足下ハ何地ニテ此勘定昏ヲ受取ラレシ

予ハ此勘定昏ヲ悉皆同人ヨリ受取リナサス
予ハ「ジャル」マデリン「會社」此勘定昏ヲ受取
リシ
足下ハロ「ベルトリ」氏カ去月十三日頃ニ着セ
シ「夏」ヲ知シヤ
否予ハ同人ノ着ヒシ「夏」ヲ知ルノ「シ」ニテ着セシ
時日ヲ知ラス予ハ同人ヲ「横濱」ニ於テ見シ故ニ
同人ノ着ヒシ「夏」ヲ知ルナリ
何時足下ハ同人ヲ「横濱」ニ於テ見シヤ
予ハ日附ヲナサハル故ニ其日ヲ知ラス若シモ
星氏カ其日ヲ知ルヲ要セシ「夏」ヲ知ラハ其日ヲ
帳簿ニ記載スヘキナリ

足下カ「ジャル」マデリン「會社」ヨリ此勘定昏
ヲ受取シ時ト「横濱」ニ於テ「ロベルトリ」氏ヲ見
ント何レガ前ナリシヤ
予ハ記憶セズ
足下ハ何程カ以前ニ「代言代」ノ權ヲ得其右「シ」
ヤル「シ」マデリン「會社」此勘定書ヲ一月或ハ二
月ニ「シ」マデリン「會社」ノ役所ニ於テ見一月頃ニ「シ」
ヤル「シ」マデリン「會社」ト後藤トノ同ニ紛擾生
セシ事「シ」マデリン「會社」ヨリ多ク用キ且「シ」再々今手
ノ十一月ニ再々「シ」マデリン「會社」ヨリ起リシヲ知シテ而シテ
若シ此勘定書ニ就テノ議論此「シ」マデリン「會社」ト主
タル中ハ「代言人」ノ權古ク得ル「夏」且其權ノ保護
ヲ得テ「シ」マデリン「會社」ト後藤トノ同

ノ勘定各ヲ裁判スルヲ足下ハ考へサルマ且カ
クナスハ足下ノ為メニ審タムルヲ考へサルマ
予ハ之ヲ及對ト考へナス

十八百七十八年
十二月四日
登録

明治十一年十二月十九日口供

原告代理人曰ク余ハ星氏ガ「ダロ」サ「氏」ヨリ後

藤氏ハ十八百七十八年十二月四日附ノ書翰ヲ

証拠トスルヲ故障ス其理尤ノ如シ

第一 誤昏ハ「ダロ」サ「氏」カ誤日限ニ於テ原告

人ノ用建好リタル「ノ」証拠判然ナリ前

ハ右書翰原告人ノ許諾ヲ以テ認めラシ

タルモ「ト」ガ認め難シ

第五 誤昏翰中ノ「笑」ノ証拠トシテ右書翰ハ

裁判所ヘ呈シ能クサルモ「ノ」ナリ其故ハ

誤書翰ハ被告ト「三」ノ人「即」テ當訴証ニ

関係ナキ人「ト」ノ通信ナシハナリ

故ニ誤昏中ノ「天」言ヲ認主ガ証拠立テサ

同
法
書

ルヲ得ザルナリ故ニ而メ被告代理人ノ右
書認主ヲ当廳ニ呼出シ候旨面ヲ証拠立
テサスル迄ハ之ヲ有効ノ証拠物トハ認
メ難シ通般星氏ハ、ホウワトル氏ノ英同
領吏面前ニ於テ認メタル表明書ヲ証拠
トシテ余ガ当廳ニ進呈ナシタル際決書
ハ領吏面前ニ於テ認メラレタルモ、
ルモ認主ノ当廳ニ参リ右書面ヲ言認
以テ証拠立ルニ非サレハ、有効ノ証拠ト
ハ認メ難シト陳述スルモ自分ニ於テハ
後藤家二郎氏ノ用達ノ認メタル旨類ヲ
認主ノ当廳ニ於テ言語ヲ以テ証明ヲ遂
ケズシテ有効ノ証拠書類ト主張スルハ

如何ナル故ゾ

裁判官曰ク日本裁判所ニ於テハ最初ヨリ全ク
関係ナキモノト認ムルニ非レハ原被双方正証
拠トシテ差出スモノハ都テ之ヲ受取置キ後ニ
至リテ結末ノ裁決ハ夫ニ其効ノ有無ヲ裁決ス
ルヲ以テ常法トス故ニ右証拠トシテ差出スモ
ノヲ受取置キ際ハ後ニ至リテ決メ差出セシモ
ノ、証拠タルベキ効ノ有無ハ裁判官之ヲ預決
セス
原告代理人曰ク余ハ裁判官ガ右述ベラレタル
言ヲ証拠立ルニ足ルヘキ裁判規則各及ニ其位
ノ先例等之ニ有ラハ願クハ御指示ヲ乞フ蓋シ
当廳ニ於テハ証拠調ノ方法ハ悉皆慣習ニ由リ

ヲ管理シアルモノナルヤ兼知致度候
裁判官右ニ答テ曰ク証拠調ノ手續ハ悉皆裁判
所ノ慣習ニ依リ之ヲ管理スマキ明文律ナシ

明治十一年十二月十九日午前五口供

被告代言人

星亨

エトワールドウサツトリルハ向

一 昨日証人申立ニハ千八百七十七年三月

カニ後藤ト帳面ヲ検査シタリト前ノ吟味

ノハハ六月カ七月ト言ヘリ右ノ相違ハ如

何ナル譯カ

一 前之言ハ向違ナルヤ

一 後藤ヨリ渡シ証人カ吟味シタル計算書

証人ニ於テ取持タル趣右差出入様致度

一 証人カ後藤ヨリ受取タル書類ハ四一冊

ナルヤ

一 誰ヨリ直付ニ受取タルヤ
 一 誰カ書キタルヤ
 一 証帳ヲ送ル件後藤ヨリ手紙ニテモ添タルヤ
 一 証帳ハ三月四月頃ニ受取レリト証據人ハ言ヘルカ其以前ニ受取タルニハ非スヤ
 一 証據人ハ前ニハ六七月頃ト云ヒ後ニハ三四月頃ト云ヒ前後相違アレハ三月前ニ不受取ト確言ハ為シ難カルヘシ
 一 証據人ノ詞ニ相違アレハ三月前ニ受取タリト言ヒ得サル譯ナシ何テ証據人ノ考ノ中スヘシ
 一 証書ヲダコロガヨリ証據人へ渡ル件何ニ

カロ上ニテ申述ヘタルトアリヤ或ハ手紙ニテモ添ヘタルヤ
 一 何ヲ言ヒシヤ
 一 証書ヲ証據人ハ吟味セシヤ
 一 何頃ナルヤ
 一 後藤ト共ニ取調ヘタルハ何レノ場所ナルヤ
 一 天レハ其日一日カ又ハ連日ナルヤ
 一 其席ニハ後藤一人ナリシヤ又ハ他ニ人アリヤ
 一 席ニ連ナリタル者ハ誰ナルヤ
 一 其外ニハ居ラザルヤ
 一 世計算ヲ為シタル月後藤ハ東京及横濱ニ

居ラハ外ニ居シレテ知レルヤ

一 横濱ニ後藤カ居リシヤ

一 詠計業ヲ六七月頃或ル日取調ヘタル後詠

塊ハ一人又ハ後藤ト共ニ取調ヘタルヲア

リシヤ

一 後藤ノ望ニ依テ同人ノ為メニ取調ヘタル

ヤ

一 三四月ノ頃詠書ヲ受取タル後イツカマビ

ソン社ノ方ヘ至リ業用ヲ取調ヘ又ハ話シ

タルトアリシヤ

一 夫レハ何頃ナリシヤ

一 証據人カ先ノ件申立タル九月ノ一ヲ言フ

ヤ

一 然ラハ午試ノ内ニ詠書ノ外ニ本ヲ送りタ

ルヲ記セリ在奉ヲ証據人ハ見タルヲア

リヤ

此ハ原告代言人ハ被告代言人ノ該向ハ關係ナ

キ云々ノ申立ヲナセリ

被告代言人曰

一 被告代言人が向フ所ハ己ニ原告代言人が

初メニ証據人ヘ尋問セシメテ原告代言

人カ問フテ可ナルトハ被告代言人ニ於テ

向フモ可ナリト思ヘリ且詠向ハ委任権ニ

モ關係セシメテ及令關係セサルモ原告

代言人が前ニ向ヒシテハ被告代言人が向

フモ可ナリト信セリ

同法

又曰

一 原告代理人ニ於テ千八百七十七年九月ノ
手紙ヲ証拠人ニ示シ何故言ヒレカ此ハ何
ノ為メナルヤ

判事曰

一 計集ノ取譯或ハ誤謬ホノ尋問ハ無用ナレ
氏委任権アリテ為シタルト云フ午續ノ問
ハ可ナリ

被告代理人ウキツタールニ問

一 テツキンスノ店ニテ見タルハ何頃ナルヤ
一 何月ナリトノ答ヲ為ス可シ
一 証拠人ハテツキンスノ店ニテ見タリト共
中ハ幾許ノ計集書アリシヤ

一 如何ナル理由ニテ該書ヲテツキンスノ店
ニテ見シヤ

一 証拠人ハ其見タル所ノ計集書ハ何ノ為メ
ニテツキンスノ方ニアルヲ知ルヤ

一 テツキンス方ニテ計集書ノアリシハ何ノ
為ト証拠人ハ考ヘシヤ

一 証拠人ノ考ニテハ該計集書ハ何ノ為メニ
テツキンス方ニアリト云フヲハ分ラザル
ヤ

一 其後ハ如何

此中原告代理人ニ於テ

一 該問ハ後ノテニテ証拠人ヲ問タルヲナレハ
無用ニ屬ス云々申立タリ

同法省

被告代言人曰

一 又對シタル証據人ヲ被告代言人カ吟味セ
リ知ラサルコトハ知ラスト答フベシ

被告代言人ウ申タールニ曰

一 証據人ハ本年十一月三十日後藤へ送りし
手紙中ニ証據人が後藤ヨリ屢々勘定ヲ吟
味致吳度趣記載セリ右屢々トハ幾度頼
シテナルヤ

一 大抵何頃ヨリ何頃迄ノ屢々ナルヤ

一 後藤が長崎へ行キシハ何頃ナルヤ

一 今証據人カ勘定ヲ致吳度趣後藤自ラ頼
又ハ代人ヲ以テ頼シト云ヘリ右ハ後藤
自身ニ面會ノ上頼シシヤ又代人ハ誰ナル

ヤ

一 証據人カ日本へ来リ其後後藤カ長崎へ行
キシ迄ノ間数ト云フハ大抵何度程ナル

ヤ

一 計兼書ハ取レシヤ

一 取りテ誰ニ渡セシヤ

一 何ノ計兼書ナルヤ

一 何頃アツカウキヤヲ受取レシヤ

一 本年十一月何日ナルヤ

一 其月ノ初旬カ下旬歟

一 高嶋ニ關係スル都テノ勘定書ヲ十一月下
旬ニ受取タリト云ヒ後ニハ或レモノハ其
以前ニ受取タリト云ヒ右都テト云ヒ又或

ルモノトハ何等ノモノヲ指スカ
一 十一月中、アツカウシトシ受取タルトアリ
右ハ何々ノ本ヲ指スカ
一 香港シヤンハンノ分ハ受取ラサルヤ
一 横濱ノ分ハ如何

此中原告代理人ニ於テ該問ハ關係ナシト云々ト
ハ申立タリ

被告代理人曰

一 大ニ關係セリト信ス

判事曰

一 被告代理人ノ問ハ全ク關係ナキモノトモ
認メ難シ候ニ被告代理人ニ於テ可成要用
ナシ問ヲ為スヘク様注意スヘキトナリ

同午後口供

一 日本ノ裁判ノ手續、於テ一書ヲ証拠物ト
シテ呈スルニ付必スシモ其書ヲ認メタル
人ヲ該庭ニ召喚セサルヲ得サルトノトハ
有之間敷ト存候候ニ原告ガ被告ヲ五号シ
差出スルニ付非難シ中ニ候ヘハ其之ヲ書
シタル人ヲ為証拠人召喚スヘク候

一 今年後藤カ長崎へ行キシハ証拠人カテツキ
シスノ店ニテ計弄書ヲ見タル前ナルヤ後
ナルヤ

一 右計弄書ヲ見タルハ今年ノ一月カ二月ト
云ヒ後藤カ長崎へ行キシモ一月カ二月カ
ト云ヘリ其日数何程後ニ相成ルヤ

一 証據人ハカツキンスノ底ニ計果書ヲ見シ
 ハ後藤カ長崎ヘ行キレ後ナリト言ヒシニ
 非ズヤ
 一 後藤カ熱海ヘ行キレ日ト証據人カカツキ
 ンスノ底ニ計果ヲ見タル日トハ何レカ
 前ナルヤ後ナルヤ
 一 其熱海行ノ報知シタル日ト証計果ヲ見タ
 レ日ト何日程隔タリシヤ
 一 月ヨリサキヤ
 一 証據人ハ今年ノ二月後藤トガヤードント
 不和ニ相成タルヲ知レルヤ
 一 ガヤードント後藤ト今年二月頃ハ不和ニ
 相成居ルヲ知レルヤ

一 証據人ハ二三月ノ頃横濱ニ居リシヤ
 一 横濱発行イヤリス新聞ヲ証據人常ニ讀マ
 サルヤ
 一 証據人中ニガヤードンヨリ後藤ヘ對シ訴
 訟ヲ起セルヲハ記載ナキヤ
 一 証據人ハ後藤ノ事柄ニ充分心ヲ入レテ見
 サルモノト思ヘリ如何
 一 証事件ニ付証據人ノ朋友ナルガローガヨ
 リ聞キシヲナキヤ
 一 然レハ訴訟ノ起リタルヲ知リ居ル者右
 ハ如何
 一 本年ノ十一月一日ニガヤードンマゼソン
 ヨリ後藤ヘ對シ東京裁判所ヘ訴ヲ起シメ

ルトハ其日ノ近クニ向カサリシヤ
 一 自分向フ所ハ僅カ先月ノトナリ右ニ証提
 人ハ忘却セシヤ
 一 先月時分ニ於テモ後藤トゲヤデシマゼソ
 ントノトニ付テ深ク注意セサル様見ヘリ
 果シテ然ルヤ
 一 証提人ハガヤリデシヨリ長崎ノアツカウ
 ントヲ受取ト云ヘリ右ニハ誰ノ査印有之
 ヤ
 一 コベルソンハ今何所ニ居ルヤ
 一 コベルソンハ先月十三日ニ横濱へ来レリ
 勘定書ハ其日コベルソンヨリ受取タルニ
 ハ無之ヤ

一 イツ受取シヤ
 一 コベルソンが十三日頃ニ来リシトハ知レル
 ヤ
 一 道ニテ見シトハ何頃ナルヤ
 一 証提人ノ考ニテハコベルソント違ヒシ中
 トゲヤリデシヨリ勘定書ヲ受取タル時ト
 何レカ早キヤ
 一 証提人ハ前ニ後藤ヨリ委任状ヲ受ケ其後
 明治十一年一月ノ二月頃デシキンスノ家
 ニ奉ノアルトシ認メ又本年十一月ニコ
 ヤリデシマゼソト後藤トノ訴訟カ起リ
 レトテ聞キ居リナカラ前受取タル委任状
 ヲ用ヒ後藤ニ一應ノ相談モセス十一月三

十日ニケヤードンマゼソント勘定ヲ為シ
タルハ其ニ不並ナル委任状ノ用ヒ方トハ
思ハサルヤ

右之通兩達不申上候以上

右

明治十一年十二月十九日

呈

亨^(印)

東京上等裁判所
西澤判事殿

一千八百七十八年十二月廿日東京裁判所ニ於
テ「チヤル」ガ「イン」マゼソシ會社ヨリ後藤象次郎
ニ對シタル事件

星亨氏ヨリ「ウ」ット「ール」氏ニ對シタル問及ヒカ
カ「ット」ール氏ヨリ同氏「答

貴下本年十一月一日原告代理人ノ依頼ニテ東京
裁判所ニ於テ誓書ヲ出シタル「記」臆シアルヤ
余之ヲ署名シテ則チ之ヲ原告代理人「手」ハタリ
貴下本年二月ニ原告代理人ノ依頼ニテ東京裁判
所ニ於テ右ノ誓書ヲ出サ「リ」シヤ
二月ニ余之ヲ為シタリ則チ誓書ニ署名シテ之ヲ
原告代理人「手」ハタリ余自ラ東京裁判所ニ到ラ
ス

同
法
省

然レ氏昨日貴下ニ於テハ本年ノ始メニ「ヂヤル
インマセリン」會社ト後藤氏ト紛議アルヲ
聽聞シ裁判所ニ於テ其紛議ノ續テアルヲ知
ラサル趣ヲ言ヘリ且ツ貴下今原告代官入ノ依
頼ニテ本年二月ニ誓書ニ署名シテ之ヲ原告入
ト与ヘタル趣ヲ言ヘリ然レハ爰ニ疑アラサル
トヲ得ス

然レ氏余此紛訟ノ事ヲ知ラス
一千八百七拾八年十一月一日貴下ノ誓書中第
二章ニ居記セル趣ニ從テ余細カニ此事件ニ付
キ歎折ノ趣ヲ熟讀セリ然ルニ尚ホリレニテモ其
時ハ裁判所ニ於テ唯聽聞シタルノミノ事ヲ固
守スルヤ

余證人トシテ裁判所ニ召喚セラル一ヲ防カン
カ为メニ誓書ニ署名セリ余歎折居ヲ読ミシハ
ハ此事件ハ未タ裁判所ニ到ラス之ヲ裁判所ニ
差出シタルハ余カ之ヲ読ミタル後カ前カ余之
ヲ知ラス

原告代官入ノ歎折書ヲ東京裁判所ニ送リタル
貴下始メテ見出シタルハ何時頃ナルヤ
何時之ヲ送りシヤ余之ヲ聞カス
貴下今之ヲ知ルヤ
余裁判所ニ於テ歎折居ヲ見ス余ハ唯其字ヲ見
タリ然レ氏其居必ス裁判所ニ在ル可シ
然レハ貴下ハ横濱英國新聞紙ヲ読シタルヤ
余読ミタリ

此新聞紙中ニ本年十一月三日ニ「キヤルダイン」
マテッソ^ン會社ヨリ後藤象次郎ニ對シタル事件
ニ付東京裁判所ニ於テ訂訟ヲ始メタルヲ載
セタリモ下此新聞ヲ讀ミタルヤ否ヤ
ウ井ツト^ルル氏何レノ新聞ニ其事ハアルヤ
星氏「カゼツ」ト新聞中ニ在リ
余此訂訟ノ始メヲ看キタル日本カゼツト新聞
ヲ讀マサルナリ
貴下之ヲ他ノ新聞中ニテ讀ミタルヤ
余之ヲ一新聞中ニテ讀ミタリ然レ氏余歎服看
ヲ讀マス余ハ唯訂訟ノ事ノミヲ讀ミタリ
貴下既ニ新聞ヲ見ル上ハ「キヤルダイン」マゼリ
ン會社ト後藤氏ノ間ニ訂訟ヲ始メ且ツ原告代

言人ニ此請求ノ為メ其二三日前誓看ニ署名シ
テ之ヲ右代言人ニ与ヘタル後ハ貴下ニ於テ心
ヲス歎服看ト共ニ誓看ヲ送達シタルト察セ
サル可カラス
余之ヲ全ク察セス
貴下願クハ少シク考察シ而ツ我カ問ニ答ヘン
ヤ
余意ヲニ歎服看ト共ニ我カ誓看モ心ス到リタ
ラント考察ス然レ氏其時余全ク此事ヲ察セス
且余爰ニ考フルヲ解ハス
何時ヨリ貴下ハ一千八百七十八年十一月三十
日ノ説明看ヲ作ル為メ後藤象二郎氏ト「キヤル
ダイン」マゼリ^ン會社トノ勅定ヲ検査セシヤ

余七月ヨリヲヂヤル^ルイ^ンマセリ^ン會社ノ役所
ニ於テ折ニ勘定ノ検査ヲ初メタリ結弓ノ勘定
ヲ十一月ニ於テ検査セリ其時長寄ヨリ其勘定
来リタリ

七月何日ニ貴下其勘定ヲ始メタルヤ
余話ス能ハズ七月ニ始メタリト雖モ其日ヲ知
ラス

七月ノ上旬中旬或ハ下旬ナルヤ是レ貴下心ス
了知アル可キナリ乞フ余ニ答弁アラン^トヲ
七月上旬中旬下旬ノ何レカナルモ余其日ヲ知
ラス然レ氏二十七日後ニハアラス二十七日後
ハ余横濱ヲ退去シタルヲ以テナリ故ニ必ス二
十七日前ノ事トス

七月二十七日横濱ヲ去ル前ニ貴下何ホノ勘定
ヲカレタルヤ

(判ルクカ^トト^ト氏此問ニ執論ス
一裁判所ニテ此問ヲ許シタリ

其ノ勘定ヲ為シタリ
其ノ勘定トハ貴下ノ後藤氏ヨリ受取リタル
勘定者^ハ云フヤ又ハ其他ヲ云フヤ或ハ
夫此ヲ云フヤ

余ハ此者ニ干係ナキ勘定ヲ云ナリ
貴下何レノ勘定タルヲ知ルヤ
勘定^ト云^ルレ^ンツ^レナリ其字ハ預メ後藤氏ニ渡
シタリ

誰ヨリ此勘定者ヲ受取リシヤ

余之ヲ「ヂヤル」ダイシ「會社」ヨリ「受取」タリ
貴下今七月二十七日ニ「横濱」ヲ去リタル「ト」ヲ去
ヘリ
其後「横濱」ニ「歸」リ「何項」再々「勘定」ヲ「検査」ヲ「始メ
タル」ヤ
余九月ニ「某」ノ「勘定」ヲ「見」タリ然レ「氏」之ヲ「検査」セス
九月其「勘定」ヲ「見」テ「後」何項「ヂヤル」ダイシ「會社」ト
後「藤氏」ト「同」ノ「勘定」ヲ「検査」スル「ト」ヲ「始メ」タル
ヤ
余其日ヲ「知」ラス蓋シ「十月」ナリ
十月ハ「初メ」ナル「ヤ」又ハ「未」ナル「ヤ」
余之ヲ「話」ス能ハス「十月」數ニ「之ヲ」為セリ
十月何「ホ」ノ「勘定」ヲ「検査」セシ「ヤ」

生シタル「石炭」ノ「勘定」ナリ
何時ヨリ生シタル「石炭」ヲ「云フ」ヤ
一千八百七十四年十二月「ヂヤル」ダイシ「マセ」リ
ン「會社」ノ「代」入「ト」ナリタル「始メ」ヨリ「云フ」
何項「追」フ「云フ」ヤ
炭坑ニ「千倍」ノ「事」ヲ「為」サ「ル」追「フ」云フ然レ「氏」其
時未タ「某」ノ「勘定」來着セス其後「到着」セリ
十月又ハ「九月」ニ「其他」ノ「勘定」ヲ「検査」セシ「ヤ」
「打」ル「ク」ウ「ト」シ「氏」此「同」ニ「抗」論ス蓋シ「此」同ニ「主」論
ノ「同」ト「全」ク「別」事ニシテ「唯」勘定ヲ「見」出ス事「フ」ニ
「ア」リ「判」事ハ「主」論ノ「同」ニ「就」テ「為」ス可キ事ニ「非
サ」ル「ト」ヲ「見」サルニ「ア」ラ「ス」然レ「氏」主「論」ノ「同」ニ「千
倍」シ「テ」為「ス」可キ「ト」見「タリ」此「抗」論ヲ「破」除ス

○貴下七月ニ始
テ勘定ノ検査ヲ
始メタルハマシ
ノ依頼ニ依リ然ル
又ハ貴下自己ノ勝手
ニ出ルヤ後藤氏ハ
ニ我勝手ニテ為シタリ

余為シタリ

何レキルクウート氏抗論ス此抗論破毀セラレ

余元テノ勘定ノ検査ヲ遂ケタリ

何頃凡テノ勘定ノ検査ヲ了リタルヤ

九月末ナリ

七月九月ノ間ニ唯勘定ノ検査ノミニ若干ノ時

間ヲ費シタルヤ

數日ナリ

教日トハ何ヲ云フヤキルクウート氏抗論ス

チヤルタルイソマセソレ會社ト後藤氏トノ此大

勘定ヲ數日ニシテ検査スルイヨ得ルヤキルク

ウート氏抗論ス

勘定ハ検査ニ永クカニラサルヤウ正整セリ貴

下七月廿七日ニ横濱ヲ退去セリ再ヒ横濱ニ歸

リタル時マセソレ會社ノ勘定ヲ検査ス可キセ

ウ誰ヨリ貴下ニ依頼セシヤ又ハ貴下ヨリ之ヲ

望ミタルヤ

余ハ前ニ始メタル事ノミヲ行ヒタリ

十八日ノ貴下ノ口唇ト本日ノモト相違セリ

貴下七月マセソレ會社ヨリ勘定ヲ為ス可キ依

頼ヲ受タル事ヲ述ヘタリ

余ハ我カ勝手ニテ検査セリ會社ヨリハ我カ欲

スル時ハ何時モ検査ス可キ旨ヲ託シタリ余カ

勘定ヲ検査シタルハ全ク會社ノ依頼ニアラサ

ルナリ

貴下七月始メテ勘定ノ検査ニ行キタル時後藤

同
法
省

氏ヨリ代入ノ権カアルヲ頭ハシタルヤ否
貴下之ヲ會社ニ跋ハカ、リシヤ
頭ハシタリ

何頃ナリヤ

九月ナリ

一千八百七十八年十一月ハ何頃ナル貴下其日
ヲ知ラスヤ其月ノ始メカ末カ

余言フ能ハス一千八百七十八年十一月ナリ誰
ニ之ヲ跋ハシタルヤ

シヨソソソ氏ハ頭ハシタリ

シヨソソソ氏ノミヘカ

リレソミナリ余「ケスウ井ツキ」氏ノ其場ニ在リ
タルヲヲ思ハス

此會社外ノ何人ニカ貴下之ヲ頭ハシタルヤ數
入ニ

貴下原告代言人ノ権カアルヲ跋ハシタルヤ
余之ヲ我協議人タル「キルクウ」氏ニ跋ハシ

且ツ之ヲ同氏ニ委托セリ

代言人ノ権カハ何レニ於テアルヤ

裁判所ニ於テアリ

貴下「シヨソソソ」氏ニ代言人ノ権カヲ跋ハシタル

時同氏何ヲ言タルヤ

同氏格別ノ事ヲ言ハス

何ホ、為メニ貴下之ヲ同氏ニ頭ハシタルヤ余
後藤氏ノ為メニ代言人ノ権カアルヲ頭ハス
為メ之ヲ同氏ニ頭ハシタリ

去ル七月勘定ノ検査ヲマテ
ル時貴下何ヲ言タルヤ其時
言入ノ権力アルヲ頭ハサ
リシヤ
余代言入ノ権力アルヲ頭
ハサス勘定ヲ検査スル
前會社ヨリ余ニ望ミタリ
余其他ノ事ヲ演スルヲ
要セス
マテソシ會社ニテハ貴下
代言入ノ権力アルヲ見
スシテ勘定ノ検査ヲ為
サシタルヲ満足セシヤ
然リ其後會社ニテ右様
為ス可キヲ依取セリ且
ツ會社ニテハ余カ代言
ノ権力ヲ有スルヲ知
ラス
會社ニテ今之ヲ知り
タルヤ

同
法
道

然り

十一月代言人ノ権カアルトテ会社ニ顯ハシタル時會社ニテハ貴下此権カアルヲ知リタルヲ始メタルヤ

余意フ此時ヲ以テ始トス

マテソン會社ハ貴下代言人ノ権カアルトテ知ラス又其下後藤氏ノ代言人タルヲ知ラスシテ勘定ヲ検査セシメタルヤ

然り

十一月代言人ノ権カアルトテ会社ニ示シタル後貴下某ノ勘定ヲ検査セシヤ

余其後検査ヲ遂タリ

貴下ハ何時原告ノ代言人及テ汝ノ協談人ニ代

言人ノ権カアルトテ頭ハシタルヤ

余ハ之ヲ去ル三月原告代言人ニ渡シタリ

何等ノ為メニ渡シタルヤ

余カ他ノ證卷中ニ保存スル為メナリ

シヨソソソ氏ニ貴下代言人ノ権カヲ見ハシタル

時何ヲ言タルヤ

後藤氏ヨリ代言人ノ権カ有ル趣ヲ述ヘタリ

言タル事ハワレノミカ

代言人ノ権カニ干係シテ言マタル事ハワレノ

ミナリ余ハ後藤氏ヨリ頼談ヲ受タル和談ノ約

定ニ干係シテ其事ヲ議センカ為メシヨソソ

氏ハ面會ニ趣キタリ余等勘定ヲ検査シテ後藤

氏ニ我カ勘定ノ決定ヲ渡ストテ善トス可且ツ

自己ニ後藤氏ヨリマデリン會社ニ拂フ可キモ
フヲ見ルラ良トス可キトニ決定セリ余等并ニ
英國領事ノ前ニ於テ取リタル証状ニ因テ事ヲ
決ス可キトニ同意セリ余之ニ同意セリ其故ハ
後藤氏ハ我レニ大ナル信用ヲ有スル者ニテ余
曰氏ニ對シテハ「マデリン會社ヨリモ甚々懇信
ニ扱ハル・イヲ同氏ニ於テ承知セリ余後藤氏
ニ面會シタル後右ノ約定ニ干渉シテ同氏ヨリ
數ニ服信ヲ受タリ又後藤氏ヨリ余ニ右ノ約
定トシテ相違ナク若干ノ金子ヲ扱フ可キノ
契アリ此事惜ニテ余カ先月未ニ為ス可キ勘定
ノ真謀ニ未ル可キトラ當然ト思量ス余ハ後藤
氏ニ之カ為メ書翰ヲ送りタリ其後同氏ヲ謁見

ニ赴キ同氏余カ唇翰ヲ受取テ承諾シテ余ニ誤
言ヲ述ヘタリ若シ後藤氏此裁判所ニ於テ我カ
前ニ出ル時ハ曰氏ニ於テハ余カ是迄為シタル
事ハ曰氏ノ許可ニ適シタルノ契アルト懣カナ
リ余ハ唯後藤氏ハ某氏ノ得ル所トナリ之カ為
此裁判所ニ出ルトテ妨ケラル・ナラント推察
ス後藤氏若シ此裁判所ニ呼出サル・片ハ凡テ此
事件ヲ決スルト最モ容易ナリ是ハ既ニ無用ノ
問ヲ受テ三日間ヲ費シタリ
貴下領事ノ前ニテ説明唇ヲ作ル可キ事ハ「シヨ
リン氏ノ考ニ出ル・トスルヤ
余輩此事ノ談話ニ及ヒテ遂ニ事茲ニ決シタリ全
ク我等一曰ノ存意ニ出ル所トス貴下兩人共曰時

ニ同意ヲ發シタルヤ

余ホ大器ニ非ス故ニ此ノ如キ事ヲ為サス
然ラハ貴下代言人ノ権カヲ用イテ「マデソン」會
社ト後藤氏ト和談ノ約定ノ為メニ「ミ」此説明
肩ヲ任ソタルヤ

吾余勘定ノ取極メニ同意シタル「マ」頭ハサン
カ為ノニ之ヲ作リタリ

前月四日ニ後藤氏ヨリ貴下肩翰ヲ受取リタルヤ
其肩翰ハ前月三十日ノ貴翰ノ答肩タルヲ以テ
ナリ

其ハ四日ト思ヘリ其肩翰ハ後藤氏ノ肩キタル
モ「ニ」非ス後藤氏其肩ニ署名セリ意フニ其肩
ハ同氏同僚ノ肩ク所ナラシカ（此続キハ被告ノ

代辦人ニ同テ抗論セラレタリ被告代辦人ノ同

ニ答フルニ非サル故ナリ「キ」ル「ウ」ド氏之ヲ
證據ニ取ラレ度「マ」主張セリ

此如京語出入三陪禮
雅キモノアリ故ニ脱訳ス

貴下此書翰ノ本書ヲ見示スルヲ得ルヤ
余之ヲ持参セス然レモ裁判所ニ此書ヲ差出ス
「ト」甚々幸ヤリ次ノ審問ノ時之ヲ送ルヘシ

貴下十一月三十日後ノ火曜日ニ後藤氏ニ出會
シ同氏ニ於テ貴下ノ書翰ノ受取ヲ兼知シタル

趣ヲ言ヘリ其時後藤氏ハ貴下ニ對シテ書翰モ
説明書モ未タ訳サス故ニ同氏ニ於テハ其事ニ

就テ談スル「ト」能ハサル趣ヲ言ハサリシヤ
同氏ニ於テ此ノ如ク言ハス

後藤氏ハ「訳」官知「ロ」ザ氏ヲ以テ此ノ如ク言ハサ

同
法
省

リシヤ

否

貴下ハ此事ニ誓ヲ立ツルヲ得ルヤ

余後藤氏ハ自身ニテモ亦譯官ヲ以テモ一モ此

ノ如キ事ヲ言ハサルノ誓ヲ立ツルヲ得ル

ナリ

其日ニ後藤氏ハ自身ニテモ亦訳官ヲ以テモ説

明書ノ事ニ就テハ何モ言ハサリシヤ

一言モ言ハス

然ラハ同氏ハ何等ノ為メニ貴下ニ對シテ禮言

ヲ演ヘシヤ余カ書翰ト勘定ノ検査ニ行キタル

言トノ為メト推察ス

勘定ヲ検査シテ後貴下ハ説明書ヲ造リタリ其

ハ後藤氏ノ為メニナシタル趣ヲ言ヘリ何レノ

方法ニテ後藤氏ノ為メニナルヤ

後藤氏ハ勘定ノ検査ヲ要シタレハナリ余之ヲ

検査シ余分ナル処ハ之ヲ減シ差ニ過分ナル処

モ有キタリ其勘定ハ未タ精密ニ至ラス其故ハ

勘定ノ取極メニ於テ掇ナキ減省ヲ為スニハ後

藤氏ニ聞カンテヲ欲スレハナリ然レモ後藤氏

ハ未タ十一月三十日ノ書翰ニ返答ヲ為サレ

ナリ

説明書中ニ分散資財及ヒ負債ノ口書トアルハ

全リ本書ト同一ナルヤ(キルクワード氏抗論ス

裁判所ニ於テ此同ヲ許ルシタリ)

分散資財及ヒ負債ノ寫ハ本書ト同一ナリ書記

同法省

ノ誤モアル可ケレバ其高異ナルヲナシ
十月中此書ニ署名セタルコトハルトリン氏ハ何
処ニ在ルヤ
余之ヲ知ラス
貴下往來ニテ同氏ニ出會セタル趣ヲ言ヘリ其
ハ何頃コトナルヤ
前日ト思ヘリ然レバ余慥カニ知ラス
コトハルトリン氏ハ説明書中ニ記ル資財負債ニ
關係ノ部ニ署名セシハ何處ニ在テセシヤ
余知ラス余同氏ノ署名スルヲ見ス
貴下十一月三十日後或ル日後藤氏ニ出會シタ
ル時二十五弗ノ為メニコトアリシ會社ト和談ノ
約定ハ感觸セララル可キコトヲ同氏ニ言ヘリ然ラ

スヤ

余此ノ如キ事ヲ言ハス

一千八百七十八年十二月二十日

原告代辨人
カ井ツトール
キルクウート

同
法
省

キルクウート氏^ウ井ツトール氏ニ對シテノ

再審

一千八百七十七年三月又ハ四月^ウローザ氏貴
下ニ畵定書ヲ齎ラシタル時同氏ハ誰レノ為メ
ニ之ヲ貴下ニ渡シタルヤ且ツ貴下ハ後藤氏或
ハ後藤氏ニ屬シタル者ニ因テ之ヲ返ス可キ^ト
ヲ望マレタルヤ
同氏ハ之ヲ後藤氏ノ為メニ余ニ共ヘタリ且ツ
之ヲ返スヘキ^トヲ望マレサルナリ
本月一日前カ或ハ本月四日前ニ證拠トシテ直
ニ若シクハ直ニアラサルモ渡スヘキ^トヲ望マ
レタル書翰ヲ貴下ニ於テ受取リタル時前件貴
下ニ共ヘタル代言人ノ權カヲ後藤氏又ハ後藤

氏ニ属スル者ニ因テ取戻シタルコトアルヤ
否

貴下對審ニ於テ被告ノ代弁人ニ因テ言語ヲ停
止セラレ、時其場ニ於テ答ヲ続リコトヲ得ヘキ

何故然ルヤ

其故ハ先日午後余後藤氏ニ面會セリ其時同氏
我カ書翰ノ受取ヲ兼知シテ之レカ為メ禮言ヲ
述ヘタリ

被告ノ代弁人ヨリ貴下ニ歎ハシタル此書ヲ作
ル時ヨリ今日ニ至ル迄テ貴下之ヲ見タルヤ貴
下其レニ管係シテ為シタル事ヲ悉ク知ルヤ
余之ヲ見ス亦其如何ナリシヤヲ知ラス

キルクワート

一千八百七十八年十二月二十日ウツトール

明治十一年十二月廿日口供

被告代言人

星

亨

エドワルドウキツタールニ問

一 証人ハ今年ノ十一月一日ニ原被告ノ依頼ニ
依テアツキ争ダイト、稱スル誓書ヲ東京裁
判所ニ差出シタルヤ

一 今年二月頃原告頼ニ依テ前同様ナル誓書ヲ
東京裁判所ニ差出シタルヤ

一 然ラハ証人ハ昨日迄原告ト争ヒ、了
ルハ聞タレモ然ラハ知ラサル趣申立テシカ
今誓書ヲ差出シタルトノ言ニ依レハ昨日ノ
申立ハ真ナラサルヘシ

一 沼根人ヨリ調印ノ上原告へ渡シタル十一月
 一日誓書ノ第二条ニ此訴訟ニ於ケル訴訟ヲ
 深ク注意シテ読ムト云フヲ記載セリ然レ
 ハ沼根人ハ能ク記憶スヘキ事ナリ然ルニ尚
 聞キレ迄ト申立ヲ為スヤ
 一 原告カ東京裁判所へ訴状ヲ差出シタル下ハ
 何頃ナルカ知リシヤ
 一 今日ハ知レルヤ
 一 沼根人ハ常ニ横濱出版イギリス新聞ヲ読マ
 サルヤ
 一 十一月三日新聞紙ニ原告カ後爰ニ向テ訴訟
 ヲ起シタルヲ記載アリ右ヲ読ミシヤ
 一 ガゼット新聞紙ナリ

一 一部分ヲ讀ミシテアリヤ
 一 沼根人ハ十一月一日原告ノ頼ニ依テ誓書ヲ
 出シ其後佗ノ新聞ニテ原告ヨリ訴訟ヲ起シ
 タル由ヲ讀ミタリトスレハ沼根人ハ其誓書
 カ訴状ニ付シ呈セラレタル下ヲ知ルヘキ筈
 ナリ
 一 沼根人於テ原告ト後爰トノ間ノ勘定ニ何頃
 ヨリ取掛リシヤ
 一 其七月ハ何日ニ始メタルヤ
 一 七月ノ始メ然タルヤ
 一 七月二十七日出立前ニ如何ナル勘定帳ヲ仕
 上シヤ
 此片ニ於テ原告代理人ヨリ該問ハ關係ナキ云々

ノ申立アリ

一 証人カ云フ所ノ或ハ勘定トハ後ヨリ更
所タリト稱スル第ハ号ナル勘定書ナルヤ又
ハ他ニ有之ヤ

一 何ノ計美カハ知ラサルヤ

一 誰ヨリ受取タルモノナルヤ

一 証人ハ七月二十七日外方へ出立帰後何頃
ヨリ取調ヘシヤ

一 九月ニ於テ見タル後何頃ヨリ取調初メタル
ヤ

一 大凡十月ノ初迄終リカ分ラサルヤ

一 如何ナル勘定帳ヲ取調ヘタルヤ

一 石炭出高ノ帳面ヲ取調ヘタリト古ハ何頃ヨ

リノ出方ナルヤ

一 イツ迄ナルヤ

一 其他ニ如何ナル勘定帳ヲ取調ヘシヤ

一 何時頃調ヘ終リシヤ

一 七月ヨリ其終迄吟味ノ為メ幾日数程掛リシ
ヤ

一 如此僅カノ日数ニテ終リシヤ

一 如此多クノ勘定ヲ綿密ニセラルデイノ内
ニ為レ得シヤ

一 七月ノ勘定エレ片ハ原告ヨリ依頼ヲ受ケシ
ヤ証人自ラ往キ取調ヘシヤ

一 其時ビヤードンヨリ吟味ヲ乞ヒシヤ又ハ証
人自ラ往キ調ヘシヤ

一 沼根人ハ九月中外方ヨリ歸リタル後ヂヤ
デシヨリ依頼ヲ受テ吟味セシヤ、或ハ沼根人
自ラ往キ吟味セシヤ

一 沼根人ハ去ル十八日ハ七月ニ於テヂヤ
デシヨリ検査スル。テラ頼マレタリト云ヒ然
ルニ只今自分ヨリ往キ吟味セシト此相違ハ
如何

一 七月初ノラヂヤデシニ頼ミシヤハ後為ヨ
リ受ケタル委任状ヲ見セシヤ
少シモ見セサルヤ

一 イツ見セシヤ
一 十一月ノ初ノタルヤ終タルヤ
一 誰ニ見セシヤ

一 真作、見セタルモノハナキヤ

一 ゲヨシソシノ外世界中ニ見セタルモノナキ
ヤ

一 沼根人ハ委任状ヲ原告代理人ニ示レタル
アリヤ

一 何レニラモ可ナリ
一 今ハ原告代理人即チカルクワードノ手ニア
ルヤ

一 沼根人カ委任状ヲゲヨシソシニ示ス氏同人
ハ何ト云ヒシヤ

一 何ノ為メニゲヨシソシニ示レタルヤ
一 本年七月始テ沼根人カ勘定書ヲ吟味スルヤ
ゲヤデシハ何ト云テ吟味セシヤ

一 何故見セザルヤ

一 委任状ヲ見セザルモデヤードンニ於テ所扱人カ勘定書ヲ見ルカ或ハ吟味スレトテ承諾セシヤ

一 ジヤードン於テ何故所扱人カ委任状ヲ所持セシトテ知レルヤ

一 ナテ月委任状ヲデヤードンニ示レタリト此時初テ同人ハ所扱人カ委任状ヲ所持セルトテ知レルヤ

一 デヤードンハ所扱人カ委任状ヲ所持スルトモ知ラス又後為ノ代理タルトモ知ラス計美書ヲ示シ吟味致サセタルヤ

一 委任状ヲデヤードンニ示レタレ以後計美層

ヲ吟味シタレトアリシヤ

一 原告代官人即所扱人ノ法律家カークードニ示シタルハ何故ナルヤ

一 何ノ為メナルヤ

一 委任状ヲゲヨリンニ見セタル氏所扱人ハ何ト言テ見セシヤ

一 夫レノミタルヤ何カ其時談話ハナキヤ

一 デクテレレシヨンテ作ルトハゲヨンソレカ発意ニテ同人カ作ラレタル様思ヘリ

一 二人トモ発意ガ暗合シタルカ

一 所扱人カ委任状ヲ用ヒテデクテレレシヨンヲ指ヘタルハ特ニ後為トデヤードント示談ヲサセル為メニ成立タルモノナルヤ

一 証人ハ先月四日ニ後為ヨリ手紙ヲ受
取タルトアリシヤ

但し証人カ三十日付ノ手紙ノ返事トシ
テ送りタルモノナリ

一 該書面ヲ差出ス様致度

一 証人ハ十一月三十日後ノ火曜日ニ後為ニ
逢ヒシト云ヘリ其時後為ハ証人ヨリ三十
日付ヲ以テ送りタル手紙并ニデクラレシ
ヨシハ未タ翻訳セリルニ付其話ナラレ
ハ話スベシト云ヒシヲ覺ヘリヤ

一 ダローザト云フ通年ヲ以テ右ノ趣ヲ通シ
タリ

一 誓ヒラ以テ其ト申立得ルヤ

一 其日デクラレシヨシトハ何共後為ヨリ

証人ニ諍セザルヤ

一 然ラハ難有ト云フ詞ハ何ノ為ナルヤ

一 此計美ヲ所調査主ヲ指ヘタルハ後為ノ利益
ナリト証人ハ言ヘリ如何ニシテ利益トナ
ルヤ証人ヲ考テ兼知致クシ

一 証人ハ該デクラレシヨシノ計美ノ部分
ハ原書ト相違ナレト認ムルヤ

一 デクラレシヨシニ査印ナシタルコト
ソレハ今年十月時分ハ何処ニ居リシコト知レ
ルヤ

一 此程送ニテ逢ヘリト云ヘリ此ハ何頃逢ヘリ
ヤ

一 ロベルトリン「ガ」デク「ラ」レ「シ」ヨシニ「査」印シ
 タルハ「何」知ナレヤ
 一 証人「ガ」十一月三十日以後或ル日「後」五、面
 會セシキ「デ」ヤ「レ」ト「後」為「ト」ノ「争」ハ「或」十「万」
 円ニ「テ」ハ「滿」方ニ「可」相「成」証人「カ」云「ヒ」レ「イ」ラ「記」
 憶セリヤ
 右之通相違カ申上候以上

明治十一年十二月廿日 星 亨 印

東京上等裁判所
 西瀉判事殿

明治十一年十二月廿四日口供
 原告代理人証人ニ問テ曰リ
 足下ノ姓名ハ如何
 シヨシワサリヤム、ド「ー」ネ「ー」
 何處ニ居住スルヤ
 横濱
 何番館ナルヤ
 山手二百四十四番
 千八百七十七年ノ初ニ於テ何處ニ居住シタ
 ルヤ
 品川ニ於テ「ガ」ロ「ー」サ「ク」ト「同」居セリ
 當時「ガ」ロ「ー」サ「ク」ハ「後」藤「ク」ト「教」度「通」信「為」シ「居」リ
 タルヤ

問 吾

問 吾

問 吾

問 吾

問 吾

問 吾

日ルノ様ニ

足下ハ千八百七十七年一月申後藤氏がホウツト

ル氏ノ代理委任状ヲ渡シタルヲ知ルヤ

確然之ヲ知ル

足下右代理委任状ニ添へタル書翰(即チ此号)ヲ

認メタルトアリヤ

余ハ右書翰ハ其(意)ヲ同フシタルモノヲ認メタリ

談書翰ハ誰カ此名シタルヤ

カローゲ氏ナリ

足下ハ此(意)未右委任状ハ香港ニ差送ル可キ旨ヲ以

テ認メラレタルモノナルヤ否ヲ知ルヤ

最初ハ右ノ目途ニ依テ認メラレタルモノニハ之

レアラスル去其後カローゲ氏カ英國ヨリ道ヲ

香港ニ取リ日本ニ帰着為ス故香港ニ於テ同氏

ニ差送ル可キト取極リタリ

足下ノ右書翰ヲ認メタル際該委任状ハ已ニ出

来モアリタルヤ

吾余ハ右書翰ヲ香港ニ郵便船ノ出帆ナシタル

日ニ於テ認メ而シ其時香港ニ委任状ヲ投スル

リト決定セリ余ハカローゲ氏カ後藤氏ハ横濱

ニ旅行為シタル際カローゲ氏ヨリ依頼ヲ受テ

テ右書翰ヲ認メタリ

如何ナル理由ヲ以テ右委任状ハホウツトル氏

ニ与ヘラレタルモノナルヤ

右向ハ裁判官之ヲ停止セリ

系告代官人右ノ停止ニ左ノ二三ヲ以テ故障ヲ

此ノ委任状ヲ
後藤氏ヨリ
依頼シテ
カローゲ氏
ニ送リタル

問

吾

問

香港ニ取リ日本ニ帰着為ス故香港ニ於テ同氏

ニ差送ル可キト取極リタリ

足下ノ右書翰ヲ認メタル際該委任状ハ已ニ出

来モアリタルヤ

吾余ハ右書翰ヲ香港ニ郵便船ノ出帆ナシタル

日ニ於テ認メ而シ其時香港ニ委任状ヲ投スル

リト決定セリ余ハカローゲ氏カ後藤氏ハ横濱

ニ旅行為シタル際カローゲ氏ヨリ依頼ヲ受テ

テ右書翰ヲ認メタリ

如何ナル理由ヲ以テ右委任状ハホウツトル氏

ニ与ヘラレタルモノナルヤ

右向ハ裁判官之ヲ停止セリ

系告代官人右ノ停止ニ左ノ二三ヲ以テ故障ヲ

申立タリ

第一裁判官ハ被告代言人ノ証人ニ依テ認
ラシカローガ氏ニ依テ犯名セシタル千八百七十七
年一月廿二日附ノ書翰ヲ被告人カ如何ナル所存
ニ由リテ右委任状ヲホウワルル氏ニ与ヘタル下
ヲ証明セン為メ進呈マシテ受理シ而シテ該書翰
ハ認主ニ依テ証明セサルハカラサル命令ヲ下
サバリキ

第二裁判官カ被告代言人ノ証人ニ依テ認
ラシカローガ氏ニ依テ犯名セシタル千八百七十八年十二月
四日附ノ書翰ヲ右カローガ氏ノ当廳ニ於テ該書翰
ヲ証明セサルモ之ヲ受理シタリキ而シテ右書翰
ハ被告代言人カ如何ナル所存ヲ以テ被告人カ

問 答 問

代理委任状ヲ与ヘタルヲ証明セン為メ差出セ
シモノヤリ

氏下ハ千八百七十七年一月廿日カローガ氏ト右
代理委任状ニ付辱々該旨セシテアリヤ

然リカローガ氏ハ數々余ニ該委任状ノ下且ツ
其目的ニ付治シタリ

右等ノ該治見ニカローガ氏ヨリノ報告ニ依リ
ホウワルル氏ニ与ヘラシタル委任状ハ如何ナ
ル旨意ニ依リテ与ヘラシタルモノナルヤ

裁判官曰ク拾取故障アルニ非シハ裁判官ハ敢
テ向答ヲ禁止セサルモ目下被告代言人カ次ノ

証人ニ對シテ故障ヲ申立タリ加之余ハ原告
代言人ノ證ヲ至ラシト認ル故右同ヲ禁止ス

ルモノナリ

原告代理人右裁判官、申渡ニ故障ヲ主張シテ
曰リ裁判官ハ被告代理人カガロイガ氏ノ認
ムルニ應、書籍ヲ証拠トシテ(余カ之ニ故障ヲ
陳述セシモ)差出シタルヨリガロイガ氏ヲ当廳へ
呼出後藤ノ目的如何ヲ問ハスニテ之レヲ受理
シタル而テ余ハ目下ガロイガ氏カ千八百七十
七年、一月ニ於テ後藤氏ノ代理委任状ヲ出
為ニタル所存ハガロイガ氏カ千八百七十八年
十二月四日附ノ書籍ニ掲載サレタルハ及對テ
ルヲ証拠立シロ欲スルヲ裁判官ハ之レヲ禁止
シタリ
裁判官曰リ後藤氏ノ所存是ノ証拠人ノ知ル道

吾 問

理ナケレハ余ハ同証拠人ヲシテ右後藤氏ノ所
存ヲ証明センコトヲ禁止ス
原告代理人曰リ余ハ右裁判官ノ命ニ從ヒ後藤
氏ノ所存ニ就テハ最早問ヲ掛ルノ能ハサシ
レ余ハ烈シク右裁判官ノ命令ニ故障ヲ云ハサ
ルヲ得ス如何トナシハ目下当廳ニ於テ是レ
後藤氏カ如何ナル所存ニテ換奉仕状ヲ示ラ
ハル氏ノ年一ナルコトヲ以テ証拠人ニ告知セ
リテ証拠ナシハナリ余ハ右裁判官ノ命令ヲ
奉シ左ノ如ク問フ
目下ニ推シ命令ニ依テ千八百七十七年一月廿
二日附ノ書籍ヲ認メタルヤ
ガロイガ氏ノ命令ニ依リテナリ

吾問

答

如何ナル命令ナリニヤ
ガロ一ガ氏カ余ニ委任状ノ目的ヲ短約ニ指シ
其止ニテ余ニ之レ一添フヘキ書翰ヲ認ムヘキ
命令ヲ下シタリ

裁判官曰ク其方カ此証人ヲ書翰ヲ認ムル
ノ事矣ヲノヘ同フヲ行サン余依余ハ右書
翰ノ如何ヲ問フトハ之レヲ禁止ス其故ハ此証
人ハガロ一ガ氏ノ命ヲ受ケ認ムルト同一ナレハガ
ロ一ガ氏カ親自ラ認ムルト同一ナレハガ
ロ一ガ氏コソ相当ノ証人タルヘキモノナリ
証書翰ハ悉皆書取ニ依テナサレタルモノナリ
原告代理人曰ク右証人ノ答ヲ裁判官カ問リ

ニ於余カ如何ナル命令ヲ証人ニ付トシガ氏
ヨリ受メルヤフ決昏翰ノ意ヲ分明ニセシメ
同フヲ禁止スルヤ裁判官ハガロ一ガ氏ノ申
立ハ不破毀ノ証ト認メ余ヲシテ他ノ證人ヲ
呼出シ右ガロ一ガ氏ノ証人味定フ破毀スル
能ハサルヤ
裁判官曰ク若シ原告双方ノ証人申立ラ他ノ
證人ノ申立ヲ以テ破毀シ右破毀スルニ堪エ
ル事ニシテ証人ノ申立ヲ再ヒ加三ノ証人ノ
申立ヲ以テ破毀スルヲ免ス以上ハ到底無除限
ニ屬スヘシ故ニ免サス
原告代理人曰ク余ハ此証人同ハ右裁判官ノ
云ハレル如ク場合トハ異ナルモノナリ而シテ余

三階限ナリ証松被毀ヲ願望セント欲スル意ナ
シ被系代官人ハダローガ氏ヲ呼出サスシテ同
氏ノ認メタル二通ノ書翰ヲ証松トシテ當願一
進呈シ裁判官ニ托ラシ余ノ故障モ不辨受
理シタルヲアラガレヤ余ハ此証松人ヲシテ并
一ニ彼レノ千八百七十八年一月廿二日ニ書翰
ヲ認メタルト及ニ後書翰ヲ認メテ如何ナル
年令ヲ受ケ且ツ如何ナル場合ニ托ラ後書翰ハ
認メラレタルモノナルヲ代理委任状ハ如何
ナル懸念ニ依テ香港ニ差送ラレタルヲ判然マ
シ為メナリテ亦ニ余ハ此ノ証松人ヲシテダロー
ガ氏ノ認メタル千八百七十八年十二月四日附ノ
書翰ハ如何ナル事案且ツ状況ニ由テ右代理委

任状ハ香港へ送ラレタルヲ正直ニ記載アラ
サルヲ証明セント欲ス
第三ニ余ハ此ノ証松人ヲシテダローガ氏ト後
藤氏トノ右代理委任状ヲ附共ニシテ以前及ニ
其後ノダローガ氏ト後藤氏トノ間ノ關係ヲ明
白ニ証松立テシメント欲ス
裁判官ハ右三種ノ向フ悉皆許スヤ或ハ一二ヲ
許スヤ兼リ度候
裁判官申渡シテ曰リ原告代官人ハ第一第二種
ノ向フ為スモ昔カラスト等ニ原告代官人ハダ
ローガ氏ト此証松人トノ右委任状ヲ封シタル
書翰ヲ認メタル際ノ事實ノミニ付テ同ノ為スヘ
シ然リト等ニカルクウツトハ此ノ証松人ノ意

見尋ニ付質向スルヲ許サス第三ノ問ハ余ニ
 於テ之ニ一ヲ肝要ナルモソトハ余ハ認ス
 ハルリウレト曰リ右裁判官ノ申渡ニ依リテ見
 ルハ裁判官ハ既ニガロトガ氏ハ千八百七十
 七年一月廿二日ニ於テ書翰ヲ認メタルハ及ニ
 其以前及ニ其後共後藤氏ノ用達且ツ代人ガ之
 一アリタルト認メ居ラレハヤニ信用ス故ニ余
 ハ確然右ノ通ナルト否ヲ兼知マシテ之ヲ
 裁判官曰リ余ハ第三ノ問ヲ全ク禁止シタルニ
 ハ非ラス只之レヲ不用ノモノト認メタルハ
 ナレハ其方ニ於テ之レヲ緊要ト信用為ス止ハ
 右問ヲ撰クルモ散テ差向ナシ
 第六号ノ書翰中(香港在留中)トノ文言之レアリ

右ハ如何ナル意味ニテ認メラルヤ
 右ハ余ノ意ヨリ出テタル文意ニテ強テハ
 ロトガ氏ノ確然決意ニ命令マシタルモノニハ
 アラス余ハ右文言ヲ凡ノ意ヲ以テ認メタリ(即
 テ足下ハ英國ヨリ帰路途中三日ヲ香港ニ於
 テ暮スヘシ而シテウチヤムケヒツリハ(重ナル
 原告社員)モ當時其地在留中ナレハ余ハ此ノ
 委任状ヲ差送ル故書翰中ニ記載アルトニ付キ
 香港在留中何ガ取調度リ之レアラハ右委任状
 ナリテハ成リ難ク故之レヲ送致ス(其他代
 理委任状)ホウワトルハ一送致セラレタル理
 由ハケヒツリハカ後藤ト原告トノ間ノ肝要ナ
 ル用事ニ就テハ常ニ決テ香港ニ取シハナリ故

同
 法
 第

回答

ニ在外ノ遅滞ヲ醸スヲ以テ右遅滞ヲ補フ為メ
香港へ代理委任状ヲ差送タルモノナリ
呈言曰ク余ハ此ノ証松人が其他代理委任状之
ヲ申立ハ同ニ成セサルモノ故之レヲ故障ス
裁判官ハ右答ヲ行シタリ
原告代理人同ク見下ハ只今代理委任状ノ香港
へ送致サレタル^{地他}理由ヲ述ベタルカ右理由
ハ誰ヨリ見下ニ於テ兼知シタルヤ
如クローザ氏カ度々右理由ヲ余ニ示シタリ
見下ガ如クローザ氏ヨリ受テタル命令ヲホウツ
ルル氏カ同人ノ附與セラレタル代理委任状ハ
香港ニ於テ^ト有効ノモノト為スヘキ^トノ意
ヲ含シタルヲアルヤ

答

右尋ノ命令ハ当時且ツ其後共決シラ之レナキ
モノナリ余ハ屢々ホウツルル氏ハ日本へ到着
後計乗油ヲ為スヘキモノト云フ^トヲ聞キ知リ
タリ
右証松トシテ余ハ同氏カ日本へ帰来前^トカ
ガ氏ヲ經テ後藤ヨリホウツルル氏ノ調ニ供ス
ヘキ斗算書ヲ寫シ渡シタリ而テ當時ホウツト
ルル氏ハ右申ス斗算書ヲ寫フ所持之レタルヘキ
ト信ス
見下ハ四五年間カローザ氏ト心安スカリシヤ
余ハ殆ント三年半間カローザ氏ト可ナリ親カ
リシ余ハ後藤氏及ヒカローザ氏ト同時ニ知已
ト相成タリ

問

同
去
首

答 問 答 問 答 問 答 問 答

然り
如口一ガ氏ヲ教々同道マレトアリヤ
摩々ニハアラサレ共救度ナリシ
如口一ガ氏ノ後藤氏ノ代理委任状ヲ所有シ居
リタルトテ下ハ知ルヤ
然り
以テ三四年以降如口一ガ氏ハ差テ後藤氏ノ代
人トナリタルトアリヤ
然り用達且ツ代人タリキ
摩々ナルヤ或ハ吾ラナルヤ
余ハ右同氏ニシテ肯テヌ
右年同如口一ガ氏ハ後藤氏ハ親睦ニ交リシヤ
然り

問 答 問 答 問 答 問 答

右年同如口一ガ氏ハ何処ニ居住ナシ居タルヤ
三分ハ近沃マテ品川ニ居住シ居リタルヤ
品川ナル後藤氏ノ宅ヨリ隔リ居リタルヤ
否近鄰ナリキ
數月同定下ハ如口一ガ氏ノ宅へ出入マシヤ
余ハ右ト信ス
一年ハ或ハ其餘カ
余ハ暫ラク同氏ト同居シ居リタルヲ而テ其後二
年同余ニ出入シタルトアリ
同如口一ガ氏ノ後藤氏ニ面會シタルトアリ
然り
定下ハ後藤氏ノ宅ヲ訪フタルトアリヤ

同 答 同 答 同
 足下ハ右年同中如何様知ロリザハ後藤氏
 為ニ働ラサタルヤ
 右同ニ度スルヲ肯テス後同ハ右西人ニ關係ア
 レニ知ニ關係ノヤナリ
 右ハ後藤及ニダロリザハモニ不依同様告革
 ニ關係アルモノナシハ之レヲ告ルヲ肯テヨ知
 何
 余ハ不悉如何トナシハ右答ハ大ニ他人ニ迷惑
 ラ疎クヤミ預斗ニ進リ加之オワリトルハ代
 理委任状ニハ關係ノヤナリ
 然ラハ足下ニ於テハ實際後藤氏ヨリダロリザ
 氏ハ千八百七十五年中英同ニ於テ鋼鉄股ヲ買
 入レキ權利ヲ後藤氏ヨリ共ニラシムルヤ

同 答 同 答
 知ルヤ
 余ハ此同ハ決テ答フルヲ肯テス如何トナシハ
 大ニ他ニ迷惑ヲ醸スニキ向ナシハナリ
 裁判官ハ右同ヲ禁ヒマシ
 アルリウリト曰リ余ハ右裁判官ノ禁止ニ服マ
 ス如何トナシハ當時且ツ其後ハ藤氏ト知ロリ
 ザハ右ノ同ノ關係ヲ証明スルハ大ニ肝要ノ点
 ト認ムルハナリ
 千八百七十五年中知ニシテザハ英國ニ行キマ
 ルヤ
 然リ
 足下ハ鋼鉄股買入ノ件ニ付ニ付証立ルヲ拒ヒ
 タルカ夫レハ足下カ右買入ニ關係アル以テ

テ右ハ吾ノサルヤ
裁判官右同ヲ禁止ス

十二月廿六日口供

如口一ガ曰リ余ハ誰ノ依頼ニテ当雇へ呼出
シムルヤ兼知致度シ若カ領事ヨリ当雇へ出頭
可致旨通知有之及許共誰ノ依頼ニヨリ且ツ何
故出張可致哉是レ亦兼知致度候
裁判官曰リ当雇ニテハ如口一ガ曰ラ呼出し
ル實ナシ故ニ原告人ノ申ニテ誰カ同氏ヲ当雇
へ可呼出依頼ヲ同人領事へ為シタルヲアリヤ
カシクウト曰リ余カ紫雲之節ニハダモ一ガ
氏カ当雇へ出頭有之度旨ホシトカレ領事館へ
出張致シ置キタリ余ハ同氏ヲ余ノ証人トシ
テハ当雇へ呼出テスレバ同氏ノ同雇へ出頭
ノシノ依頼ヲ為シタリ而テ裁判官ハ彼ヲ是雇

又ニ呼出スノ權アラス
裁判官曰ク原告代理人ハダローガ氏ノ當廳へ
出頭アラントシホルトガル領事へ依頼シ置キ
タリト云フ

原告代理人曰ク余ハ証人トシテ幾何人負シ右証
人オ、答自リ領事ノ當廳へ出頭ヲ至リト認
ムル以上ハ當廳へ出頭可致情状スル權アリ然レ
トモ余ニ於テ右証人等ヲ呼出スヘキ義務
ハ之レナリ故ニ右等ノ當廳ニ於テ証人トシテ
呼出サル、違失シテ當証人ニ關係アル証人
トハ認メ難シ故ニ右証人ノ領事ヨリ同人ヲ
呼出スヘキ状中ニ如何ナル文言ヲ記載アルモ
電モ響キシ陳サハルモナリ余カダローガ氏

ヲシテ當廳へ出頭セシメタル故ハ即チ同氏カ
當証人ニ最モ緊要ナル關係ヲ有シタル人ナレ
ハナリ加之同氏ヲシテ當廳ニ在ラシメハ被告
代理人ニ於テハ第五号及第六号ノ如キ不法ノ
証人トシテ主張スヘキ要ヲ裁断スヘキト信用ス
レハナリ余ハダローガ氏ヲ余ハ証人トシテ
當廳へ呼出スヘキヲ嫌忌ス其所謂ハ同氏ハ後藤
氏無ニ用度ニシテ加之呈出ニ於テ同氏ノ証
人トシテ呼出スヘキハ余ニ於テ同氏ノ証明ヲ
破毀スヘキ要ヲ裁断スヘキ要ヲ裁断スヘキハ余
ノ今日ハ如何トシガ氏ノ在廳ヲ要ス右ハ余
ノ思量ノシ
カハク、ト曰リ余ハ此ノ旨ヲ
翰ノ証人トシテ

展一差出スラ故障ス其理由ハ被告ニシテ故
事スルニ違アラカハ^{行程}概シテ尤ニ違フ
第一星氏ニ於テハ何故^心シキニ^心氏ヲ^心鹿^心同^心氏
ノ横濱ヨリ東京ハ旅行ニ及ハザル旨ヲ陳述セ
レシハ右ツテ明セサルハ^心ラ^心ス^心加^心之^心横^心濱^心ニ^心於
テ代理証松岡ノ日限ヲ^心明^心白^心ニ^心報^心道^心セ^心サル^心可
カラ^心ス^心而^心テ^心該^心代^心理^心証^心松^心岡^心ノ^心節^心ハ^心余^心ニ^心心^心ツ^心キ^心
氏^心ノ^心對^心告^心セ^心サル^心ハ^心カ^心ラ^心サル^心ハ^心之^心故^心ニ^心右^心明^心白^心ナ
ル^心迄^心ハ^心余^心ハ^心強^心ク^心故^心障^心ヲ^心主^心張^心ス
余^心ハ^心過^心渡^心ヨリ^心シ^心ツ^心キ^心ン^心氏^心ノ^心不^心快^心ナル^心事^心ヲ^心兼^心知
致^心シ^心居^心リ^心加^心之^心同^心氏^心ノ^心怨^心意^心ナ^心レ^心ハ^心同^心氏^心ノ^心未^心京
一^心本^心張^心シ^心能^心ハ^心サル^心ハ^心ノ^心書^心翰^心ノ^心ニ^心テ^心同^心氏^心ノ^心横
濱^心ニ^心於^心テ^心同^心氏^心ノ^心馬^心足^心ス^心ハ^心シ^心而^心シ^心星^心氏^心ノ^心右^心心

リ^心キ^心ン^心氏^心ノ^心書^心翰^心ヲ^心得^心ル^心ハ^心余^心カ^心疑^心ヲ^心容^心レ^心サル
所^心ナ^心リ^心故^心ニ^心裁^心判^心官^心ニ^心於^心テ^心横^心濱^心裁^心判^心所^心ハ^心シ^心ツ^心キ
ン^心氏^心ノ^心延^心松^心岡^心ノ^心一^心言^心ヲ^心未^心ハ^心廿^心八^心日^心ト^心取^心極^心メ^心御
報^心道^心有^心之^心度^心候
余^心ハ^心不^心幸^心ニ^心シ^心テ^心事^心ヲ^心得^心ル^心ニ^心甚^心ク^心暗^心ラ^心シ^心余^心ハ^心原
告^心代^心言^心人^心ト^心シ^心テ^心兼^心張^心ヲ^心為^心ス^心ニ^心罪^心シ^心ハ^心裁^心判^心官^心ニ
於^心テ^心ハ^心シ^心ツ^心キ^心ン^心氏^心カ^心不^心快^心ニ^心テ^心當^心張^心ハ^心出^心張^心成^心リ
社^心リ^心旨^心ノ^心医^心眞^心診^心斷^心書^心ヲ^心被^心告^心代^心言^心人^心ヨリ^心差^心出^心サ
シ^心ム^心ハ^心キ^心義^心務^心有^心之^心ハ^心キ^心ト^心信^心ス^心然^心ル^心ト^心モ^心余^心ハ
右^心等^心ノ^心年^心數^心ヲ^心シ^心ツ^心キ^心ン^心氏^心ノ^心為^心メ^心ニ^心者^心カ^心ン^心ト^心存
シ^心ム^心ル^心故^心同^心氏^心ノ^心書^心翰^心ニ^心テ^心馬^心足^心ス^心ハ^心シ^心ト^心申^心立^心テ
ム^心ル^心ニ^心被^心告^心代^心言^心人^心ニ^心於^心テ^心此^心數^心彼^心哉^心ノ^心故^心障^心ヲ^心主
張^心ス^心ル^心上^心カ^心ラ^心ハ^心余^心ニ^心於^心テ^心モ^心原^心告^心代^心言^心人^心ノ^心權^心利

ラ主張し右物折書ノ当願ハ差出サ、ル前ニハ
決シテ横濱ニ放ラシツキニ此証松酒ヲ故障ス

明治十一年十二月廿七日口供

向

吾

向

テニリン氏ハ、ハ、ネ、ハ、ラ、對、持、シ、テ、曰、ク、
是下ハ香港在留中ノ字義ヲ承明ナシタルが依
兵明ハ、知、ロ、ク、ハ、ハ、ハ、如何ナル言持ニ依リテ為
シタルモノヤ
書翰ハ、余カ、隨意ニ認メタルモノニシテ、右香港
在留中ノ、且、字ニ、同一、余カ、隨意ニ、出、シ、タル、モノ
ニ、シ、テ、決、テ、知、ロ、ク、ハ、ハ、右、上、字、ヲ、認、メ、是、レ、ヨ
リ、ノ、命、令、ヲ、カ、リ、キ、而、シ、テ、知、ロ、ク、ハ、ハ、於、テ、ハ、早
ニ、余ニ、代理、委任、状ニ、添、エ、ハ、キ、一、ツ、ノ、書、翰、ヲ、認
メ、是、ヨ、リ、ノ、依、頼、ヲ、為、シ、タル、而、シ、テ、ハ、止、リ
然、ラ、ハ、知、ロ、ク、ハ、ハ、於、テ、ハ、右、書、翰、全、部、或、ハ、一
部、分ニ、就、キ、何、カ、格、段、ノ、差、因、ア、リ、タル、ヤ

吾

此時被告代理人、書翰ノ寫ヲ當業証抄人ニ示シ、
同テ曰リ

同

足下ハ古画ハ真正ナルモノト誓得ル乎

同

比較スルニ眼ヤハ能クス

同

足下ハ右書翰本書中ニ香港在画中ノ五字ノ認
在ルヲ誓得ルヲ以テ首肯シ得ルヤ

同

然リ

同

足下ハ許業詞ニ使委任状ヲ案スルナシハ、
數

同

言、右書翰本書中ニ認在ルヤヲ誓得ルニ依テ首
肯スルヤ

同

此際原告代理人ニ於テ右同ニ付テ故障ヲ容シ
タリ

但シ右原告代理人ノ故障ハ損取セラレタリ

同

カ、ルクウ、ト云ハ、
余ハ他日此書翰即テ第六号、証明セラレタル

同

写シ、足下ニ示シ置キタリ是レカ右、写、本書

同

ナルカ右、足下、半証ナルヤ

同

然リ

同

右、記名ハ誰レノ半証ナルヤ

同

マ、ロ、ガ、云、半証ナリ

同

足下ハ右書翰ノ認メラシメ、
ル為メ原告人カ依頼ヲ受ケ、
當業へ去取ナミタ

同

ルヤ將テ足下カ自ラ好テ来リシヤ

同

余ハ道義ヲ重シシ自ラ好シテ當業へ去取シタ

問

トモ、ナリ、其故ハ、即チ余ハ新聞紙ニ、於テ余
カ曾テ認メタル、千八百七十七年一月、附、書翰
カ、當十二月四日、附、前書翰、ハ同様ノ記名ヲ帶
タル、昏翰ニ依リ、右余カ認メタル、昏翰ノ、首意カ
大ニ不正ナル、辭明ニ由リ、概認サレタル、ヲ、是
シタル、ハ、右不正ノ、事實ヲ、証明セシ、為、ノ、當、廳、ハ
去、訴、ト、シ、タル、モノ、ナリ

過般疑

下ハ、甲鉄艦買入及、右ニ付、キ、維、持、在、面

日本云、使カ、日本、政府ニ、對シ、右、甲鉄艦買入ノ
委任權ハ、瑞、行、タル、ヲ、免、レ、サル、モノ、ハ、廣、告、メ
シ、タル、等、ノ、事件ノ、悉、細、ヲ、証明、ス、ル、ヲ、肯、セ、サ、リ
シ、カ、何、モ、他人ニ、劇、烈、ナル、關係、ヲ、有、セ、サル、向、テ
シ、ハ、右、際、後、藤、氏、ハ、官、吏、タ、リ、シ、ヲ、否、テ、今、日、証、明

答

此、異、レ、サル、ヤ、如何

然リ、後、藤、氏、ハ、右、際、參、議、兼、元、老、院、議、長、タ、リ、シ、ト

信、ス、然、レ、ト、モ、右、甲鉄艦買入ノ、事件、ニ、付、キ、其、他

ノ、向、ニ、是、否、セ、ン、ト、ヲ、肯、セ、ス

是、下、ニ、於、テ、ハ、被、告、カ、右、不、正、ナル、契、約、ノ、カ、ニ、依

リ、原、告、ヨリ、金、額、若、ク、ハ、附、シ、ヤ、否、ク、知、リ、得、ル、ヤ

余、ハ、已、ニ、右、不、正、ノ、契、約、ニ、付、キ、尚、ホ、看、多、ク、向、テ

吾、フ、ル、ト、ヲ、肯、セ、サル、ハ、陳、述、シ、置、キ、タ、リ

右、向、ハ、檢、査、ニ、屬、セ、ラ、レ、タ、リ

是、下、カ、右、ホ、ノ、實、情、ニ、反、マ、ル、由、故、ハ、後、藤、ノ、外

他、ノ、參、議、或、ハ、其、他、ノ、官、吏、ホ、ノ、任、事、件、ニ、關、係、ア

ル、ヲ、以、テ、ナ、ル、ヤ、否

蓋、シ、然、リ、蓋、シ、否、ラ、ス、余、ハ、右、向、ニ、志、ス、ル、ヲ、肯、セ

答

蓋、シ、然、リ、蓋、シ、否、ラ、ス、余、ハ、右、向、ニ、志、ス、ル、ヲ、肯、セ

然レハ右ホノ向ラ止メ其他ノ賛同ヲ為スヘシ
 足下ハ去年ノ土佐紛争ヲ聞知シタルヲアルヤ
 此時裁判官曰リ如何ナル理由ニテ右等ノ賛同
 ヲ為スヤカハルヲ曰リ第一ニ右事件ニ付キ
 原告人ハ被告ノ金田ヲ費用シタルハ之レヲ分
 明セシメテラセテ故ナリ
 第二余ハ右事件ニ付キカロトガ氏カ後藤氏ニ
 對シ最モ信用ヲ有シタル用達及ヒ代人ナリタ
 シトテ(当訴訟ニ關係ヲ有スル故)証明セシムル
 スレハナリ第一被告三余ハ裁判官ヲシテ被告人ハ如
 何ナル性質ノ人ナルヤヲ知ラシムルニト欲スレ
 ハナリ而シテ原告被双方ノ性質及ヒ關係ハ當業論

其望抑法ニ放テ其証明ヲ察票ノ証拠立テ信用
 小右ハ重立タル理由ナリ
 此時裁判官ハ右最終ノ向ラ禁止ナシタリ其故
 ハ裁判官ニ放テ被告代理人ノ答辯ヲ至當ト認
 メタレハナリ
 後藤氏ハ高知人ナルヤ
 足下ハ当人ヲ當願一召連シ而シテ同クヘシ
 足下ニ放テハカロトガ氏ト後藤氏トハ千八百
 七十七年ノ土佐暴徒ノ為メニ此器ヲ買入シ可
 キ契約ニ關係アリタルヤ否ヲ知ルヤ
 此時裁判官ハ原告人ノ向ラ禁止セタリ
 カルコト曰リ然ラハ余ハ當訴訟ニ放テハ
 後藤氏トカロトガ氏トト去ルニ年来ノ關係ヲ

託於立ルヲ禁要ト認ルモ古ホテ証拠立ツハ
キ同ヲ為スヲ片テハ加之余ニ於テ後藤氏
ハ如何ナル性質ノ人ナルヤ云々ヲ証明ニ能ク
サルヤ此特裁判官ハ右後藤氏ノ性質ニ關係ス
ル事ノ向ハ悉皆之ヲ禁止スルモ後藤及ヒカ
イテトノ關係ヲ証明セシムル當証拠人ノ十八
百七十七年一月廿二日附ノ各翰ヲ認メタル際
成立テタル關係ノ止マルハシハ申渡サレ
タリ
裁判官再ニ曰ク當禁衛軍駐在ニ付テハ原告
代理人ハ確定ナル証拠立テ而シテ止マリ決シ
テ疑ハシキ及ヒ不充分ナル証拠ホハ當訴返シ
翼賛スル効ナキモノト信スヘシ而シテ原告代

言人ノ向ハ疑ハシキ及ヒ不充分ナルモノナレ
ハ之ヲ止メ代ニルニ完結ノ術ホシテスヘシ
裁判官申渡テ曰ク明朝九時三十分ハシツキニ
氏カ病氣ニテ當廳へ出頭シ能ハサル前ノ各翰
ヲ呈シタリハ同人ヲ横渡裁判所ニ於テ詰問ノ
所庭ヲ同クヘシ
カルリウート曰ク裁判官カ右ノ通リ申渡シタ
ル上ハ余ハ當証拠人個ヲ論ニ止ムヘテシモ余
ハ余ノ向ハシト欲シタル向ハ必要ノ向ナリト
確認ス而シテ余ハ當裁判所ニ於テ禁止ナルハ以
上ハ他ノ裁判所ニ於テ都テノ事實ヲ申立ツヘ
シ

明治十一年十二月廿七日口供

カハルウイド曰リ余ハ星亨氏ノ存外知覚ニ昧
キ性来ナルヲ己ニ申置キタリ昨日余ハ星氏
ニシツキニ氏ノ横濱ニ於テ代理証状調ハ同人
ヨリ昏翰ヲ以テ同氏ハ不快ニテ当靴ハ去頭モ
能ハサル申送ニハ古横濱ニ於テモツキニ氏
ヲ發向スヘキヲ肯シタリト云ニ置キタリ被
吉代官人ノ一人カ昨日横濱ニ在リタリハ此
キニ氏ニ依テナシ同氏ノ昏翰ヲ得ヘキヲハ客
易ナリトシ右昏翰ヲ持来ラサルヒカラハ余
ハ新言セシ即チ当靴ハ此ツキニ氏ノ疾病ヲ証
於立ツルニ堪ヌヘキ相当ノ医員ヲ診新昏ヲ得
ルマラハ決シテシツキニ氏ヲ横濱ニ於テ調ヘ

テニ不苦ト申渡サルハ推判ナシク今ノ秋況
ハ昨日ノ秋況ニ同一ナレハ余ハ同一ノ論年ヲ
之ニ陳述セリ余ハレワキニ此ノ書翰ヲ送レ
テ強テモコカルリウレド此ハ当十二月廿四日
附ノ書翰ヲ指示シテ曰リ裁判官ハ此ノ書翰ハ
後藤氏ノ代人ヨリ本人ニ對シテ送リタル書翰
タルヲ知ラズカラスト云ヘリ

千八百七十八年十二月廿八日

横濱裁判所ニ於テ

「ガヤル」等ニマゼリシ社中ヨリ後藤家ニ郎ハ
掛ル所ニ付テツキンス此ノ証状ヲ取ルコト
ニリシ此ヨリテフキンス此ニ向テツキンス
當回ヲ出立セシムル而シテ同人ハ病氣ニ因リ
テ此等裁判所ニモ訴スル能ワサルニ付ラツキ
レス此ヲ調査スル目的ヲ以テ余ハ此等裁判
所ニ親ヒタル此等調査ヲナスナリ
此証状ハ後藤家ニ郎ノ為メニ取ルモノニシテ
而シテ此等裁判所ノ審問ニ付同氏ニ於テ用ユ
ヘキモノナリ
今取ルル証状ハ未タ云出スルカラスモ

ノナルカ故ニ余ハ報告者共力是去スルヲ申
情セラル、ソ業ス

然レモ此ハ唯、方法ニ管スル事柄ナリ而シテ
原告代人ニ托ラ同人共力是去ヲ業セサルハ
カ故ニ余ハ同人共力是去ヲ業セサルハ

証人ニ白テ曰リ

足下ノ名ハ何ト申スヤ

「フ」テアリキ、ウイクトル、デッキニス

足下ハ横濱ノ何レニ住スルヤ

三十二番ニ住スルナリ

足下ハ本年ヲ始メニ後藤象二郎氏ノ為ノ法律
顧問ノ事業ヲ以テ辦理ヲナシテアリシヤ

余ハ其事業ヲナシテアリシヤ

其事業ヲ無理セシ同ニエド、ホウイリルハ後
藤氏ノ營業ノ事ニ付テ足下方ハ未訪セシヤ

同人ハ未訪セシナリ

同氏ハ一度ヒヨリモ多ク未訪ヲナセシヤ

余カ記憶スルヤ以テスルニ同氏ハ唯一度
未訪ヲナセシナリ

同氏ハ何時未訪セシヤ

余ハ記憶マス然レモ余ノ考ニテハ女レハ当
年ノ始メニ後藤氏カ長崎ニ到着後ノ事ナリ

シナリ

足下ハ未訪スル「フ」同氏ニ依頼セシヤ

各ラス

ホウイリタルハ上尋裁判所ノ目前ニテ証言シ

テ曰ク足下ハ同人カ高島炭坑ノ代人権ヲ如何
ナル茶約ヲ以テセハ擔任スルカト云フコト
氏ニ尋ヌルハアタノ曰ク申意セシナリト
シハ実ナリシヤ
吾ラヌ○余ハ何人ニモ代人権ヲ附与スル
ニ付後藤氏ヨリ指揮ヲ受ケテ居ラザリシ
ホウイタルハ代人権ヲ擔任スル事柄ヨ言後
セシヤ
如コトガハホウイタルハ是ニ来リシヤ
又兩人ノ内何シノモノカ最初ニ之ヲ言後
セシヤハ余ニ放テ知ラス
足下ハ如何ナル返答ヲナセシヤ

談話ノ要領ハ則テ左ノ通りナリシナリ
ホウイタルハ代人権ヲ有シタリト見
一タリ
余ハ余ニ放テ正シキ茶約ト思考セシコトヲ
一般ニ弁解シ而シテ余ハ更ニ代人権ノ
ニ付キ指揮ヲ受ケテアラス更ニ発言モナシ
得ヤリシ又発言ヲ允諾スルコトヲ得ヤリシ
而シテ若シ茶要ナルコトナラハ其事ヲ後藤
氏ノ消息ニ能ク知ルコト言後シタリ○談話
始ハ甚ク不定ニテ更ニ結果ヲ生マザリシ
ナリ
ホウイタルハ其時ナリ或ハ他ノ時ニ於テナ
リ同人カ後藤氏ノ代理委任権ヲ有マシ事ヲ足

下ニ告知マシヤ或ハ了解スルタメ足下ニ與ヘ
シヤ

カシタリトミ左様ノ下ハ決メ孤サリシナ
リ〇若シ同人カ左様ナセシナラハ余ハ直テ
ニ代理奉仕推シ終局スヘキ心置シナスヘ
キナリ

足下ハ曾テ後藤氏ナリ或ハ後藤氏ニ関係セシ
人ヨリボウイタルハ代理奉仕推シ有セシ
了解マシヤ

カハリウノ下ハ異存ナシ
(設問題ハ変ヘタリ)

足下ハ曾テボウイタルハ後藤氏ノ代奉仕推
シ有セシ事ナリ了解マシヤ

吾ラス

「カルクウ」ト云ハ左ノ理合ヲ以テ具存ナシ
タリ則チ此問題ニ於テハ「ボウイタル」氏カ後藤
氏ノ代理奉仕推シ有セシカ或ハ有マサリシカ
ノ情実ヲ此ノ証人ニ於テ知ルパルノ向題ナ
ルハシ〇設問題ノ意ニテハ左ノ如クニナ
リ則チカシガ曾テ足下ニ語マシカ而シテ如斯
ク問答ハ又相当ナクモナリ

デニリンシ云ヨリ

余ノ署名ハ左ノ如シ則チ余ニ於テ証明マシト
スルヲラリ十月三十日ニボウイタルハ氏カ代理
セシハ於テ代理奉仕推シ全ク誤カラ考ヘ付キ
タルモノナリ同人ハ助定ノ下更ニ知ラサリ

御
法
省

ミヤリ同人ハ原基人ヨリ左様ニ助言サシシマ
テ計算ノ調査及終整ツナスヲ更ラニナリシ
ナリ、ホウイタルハニ放テマスヲ求メシ此終
整ハ定ニ原基人ニ托テサセシモノナリノ若シ
ホウイタルハニ放テサセシ前ニ後藤氏ノ
為メニ承理スレキ委任権ヲ有セシ事ヲ知リシ
ナラハ其情実ハ顯然ナリシナルニ而シテ後
藤氏ノ代人タルガワキレシハハ勿論又事ヲ聞
キ知ルヘキナリ（カルリウート）ハ、異存ハ命ケ
ラシタリ）
ホウイタルハニ放テサセシ、或ハ其他ノ時ニ放
テ、ホウイタルハニ放テサセシ、或ハ其他ノ時ニ放
整スルナリ、後藤氏ニ委任サシシ、或ハ終

説セシヤ、或ハ同人ニ於テ後藤氏ノ為メ計算ヲ
完結シ、或ハ終整マンナリ言説セシヤ、或ハ之ヲ
完結シ、或ハ終整マンナリ言説セシヤ
若ラス、○当年ノ始メヨリ余ハ後藤氏トガ
ナルテ、マゼン社中ノ向ニ現存スル
諸事及諸計算ヲ完結スレキ後藤氏ノ代理
委任権ヲ有シタリ。○後藤氏ハ余ト相込ツ
ナスニ同人ニ代理スレキ人々ノ名前唇ヲ
余ニ與ヘタリ。○此等ノ人々ハ別チガテノ
ウチ、カルリウートハ、此名前唇ヲ出タセシ
ニ非サレハ、異存アリト言ヘリ。○余ハ最早
換名前唇ヲ所持セス。○換名前唇ニハ唯日
本ノ文字ニテ記シタル名前アルノシ。○換

人々ハ後藤氏ヨリ口上ニテ指名サシモナ
リ「カ」ルリウ「ト」ハ、異存ヲ述「タ」リ。○此
証松ハ原告人ニ對スル証松トシテ被告
人ヨリ示出ス「カ」ラス。又被告
人ニ對スル証
松ハ「シ」テ原告人「ト」為「ル」余ヨリ示出シ能テ
ハモ「リ」ナリ。其理合ニ於テハ別テ特許ナル
消息ナル「カ」キヲ以テナリ。○是等裁判所ニ於
テ此ノ最終ノ問題ノ事ヲ決マリ「ト」裁判官
ハ言「ハ」リ
ホウ「イ」タル「ハ」各前ハ其名前中ニアリシヤ
ナル「カ」ウ「ド」ハ、此問題ニ對シテ異存ヲ
述「タ」リ。○コレニ對スル原告及他ノ問題ニ
對スル原告「ト」ナス「カ」リ。而シテ若シ異存

生セシ「タ」ラハ其異存「ト」罷止テ裁判所ニ
於テ裁裁ス「カ」シ「ト」裁判官ハ言「ハ」リ
ホウ「イ」タル「ハ」各前中ニ記載マラレテアラ
ス
「カ」ロ「イ」ザ「ハ」記載マラレテアリシヤ
同人ハ記載セラシ「カ」ラス
「カ」ヤ「ル」デ「ン」マゼ「リ」シ社中ヨリ後藤氏ニ「タ」シ
ル計集會「ト」シ會合「ト」シ「カ」足下ハ所持シ「タ」リシ
ヤ
伊藤謹之助氏 ○
中村成功氏 ○
中石傳高再氏 ○
吉田慎一氏 ○

余ハ所持シタリシヤ

足下ハソレヲホウサタル氏ハ示セシヤ

私ハ示シタリ

同人ハ注意シテソレヲ調査セシヤ

然ラズ同人ハ調度ワレヲ音々リ

此等ノ計畫昏ニハ如何ニ誤昏セラレシヤ

一股ノ計畫昏ナリ

何故ニ足下ハソレヲホウサタル氏ハ示セシヤ

私ハ最初ニ猶豫マリ何トナレハ私ハ如何

ナル結果トナルヘキヲ見サレハナリ○私

カ候計畫昏ヲ同人ハ示セシト云フハ私ノタ

メニ製シタル馬ヲ同人ハ示セシ意味ナリ

○此レハ一股ノ計畫昏ト誤昏セラレシナリ

足下ハ誰カ此馬ヲ製セシカ知ルヤ

私ハホソル氏ナリト思考ス○ソレハ一般

ノ計畫昏ト誤昏セラレタリト云ハ通算ノ

昏式ニ製サレシナリ

足下ハ此等ノ計畫昏ノ一ニ付ホウサタル氏ハ

何々ニ云ヒタリ

私ハ重利是ノ探算為替ノ探算或ハ其相違

ヲ拒シタリ○其他私ハ計畫通リ候計畫ヲ

拒マサリ也然レモ私ハ言説ヲナシリシハ

私ノ目的ノタメ不~~亮~~分ナリ何トナレハ其

小誤まりハ教尾ニテ成リ立チ而シテ其大

ナル^至額ニ誤解ヲ与ヘサリシカ故メナレハ

ナリトマシ

足下ハゴヤルテシマセリニ社中ハ後藤氏ト取
結ハタル契約ノ約定ニ對シ該社中ハ計算ヲ為
サハルト付ホウ井田氏ハ何等ノトツ云ハ
シヤ

私ハ言説ヲナシ此計算ハ契約ニテ与テハ
シトセシ物ニアラズ而シテ該契約ニヨツ
テ思量セシ様ナハ計算各ハ私ニ於テ得ル
ルノトキナリト言ケリ○右ニ私ハ該計算
看ノト付陳述シタル要旨ナリ
ホウ井田氏ハ如何ナハ語ツ以テ後藤氏ノ
ヲ詰セシヤ

同人ハ同人ノ行為ヲ非難ヤリ

同人ハ到ルリ同人ヲ非難マシヤ

同人ハ後藤氏ニ對シ強ク言説シナセ
リ

同時ニ同人ハ淺鏡山ノ代理権ヲ甘シモテ擔任
スヘク見ヘシヤ

同人ハ世ニシテ擔任スヘリ見ヘシナリ

足下ハ本斗後藤氏ニ因涉タル事業ニ付去等ノ行
ヒヤ

私ハ春ニ行ヒナリ

後藤氏ハ足下ヲ經由スルカ或ハ足下ノ業知ラ
ヒヤデシマセリト社中ノタメニ二十万井或ハ其
他ノ概救ヲ得ハトテ全ク自己ニ約定セシヤ

同人ハ六月間ニ二十万井ノ概救ヲ得シ
トテ尽カヌヘニ付私ヲ經由シテ同人自身

ニ約束したり（千八百七十七年十月十五日）
附テフキコトニ氏ヨリ後夏象ニ即氏ノ昏
籍ヲ指示タリ

足下ハ此昏籍ヲ認メシヤ

私ハ認メナリ（カ）ルリウーロトトハハ誤昏籍ヲ

証松ハシテ差出サレタルヲ拒ヒタリ

シヤルデシママリン社中カ利益月々ノ金利口

銭元ニ為昏ヲ誤シ誤社中ヨリ後夏象ニ即一与

ハタル計集昏ニ對シ足下ノ知ハ所ヲ以テスル

ニ更後ヲ内了スルニハ何程長ク概ルト足下ハ

思考スルヤ或ハ足下ハ^カ誤テ誤計集ヲ取消スル

ヲアリハ思考スルハ

（カ）ルリウーロトトハハ拒メリ）

吾 松ハ私ノ目前ニアリシカキ計集ノ調査

ニ對シ自己ノ私設ヲ更々一能フナリ○後

夏象ノ更後ハ毎年増加マシテ而シテ石炭ノ

増^カ高カ若シ著シリ増加スルニアテサレ

ハ^カ誤テ誤更後ヲ内了スルニ機會ハ些サナ

リニナリ

シヤルデシママリン社中ハ此テ誤サレハ費利

足ニ年數料ハ總テ誤鑛山ノ利益ヲ吸收ヤレ

者トスルハ足下ノ見^カニテアリシヤ（カ）ルリウ

ーロトトハ拒メリ

吾 松ハ充分善リ記帳セス（春狀ヲ証拠人ノ示

マリ）

吾 ッシハ私ノ見^カナリシナリ

足下ハ後返氏ノタノ付書ヲ取ル^レトニ付ケス
ウキリ^レハト候後セシヤ

私ハ長壽ヨリ帰リシキニ後藤氏ニ北テ細
密ニ同氏ノ地位ヲ知リ而シテ二十万并ノ
額ヲ得ルタメ同氏尽カシテ一層善ク約束
ヲ履行ス^レキ様ニ連カニ付書ヲ取ル^レ
トト後返氏ヨリノ指押ニ従ヒ私ハ改行算
ヲナス^レトニ付一寄籠ニ在ル^レカス内并リ^レハ
ヲ坊同セリ^レケス内并リ^レハ^レヲナス^レキ
^レヲ兼指シ^レシ^レヲ取ル^レト^レノ方法ヲ告知マ
リ私ハ之ヲ允諾セシナリ
然レハ調度其節長壽在酒ノコ^レル^レト^レニ
此^レ人^ノ神^ノ如^クハ^レ病ニ罹リテ長壽ヲ去^レ廢^レモ
此^レ早^クナリ^レト^レナリ

而シテ或ル時向不在ナリシナリ^レコ^レシ^レカ
タノ付書ヲ為ス^レト^レノ途途マ^リ而シテ其後
自分ハ丑月ノ未^レ返ヨリ病ニ罹^レリ^レ而シテ
其時以來ハ事業ヲナス能ハサリ^レナ^リ
然^レラハ採用セ^レ目論見ハ行ハ^レサ^リシ^レヤ
私^レノ知^ルハ丈^テニ^レ行ハ^レサ^リシ^レヤ
フ^レデ^レリ^レク^レテ^レキ^レス

被告代官人

エツチダフルエー、テニソレ

明治十一年十二月九日 午前口供

被告代言人

星 亨

一 原告代言人カ唯今証人ニ質問スルハ
 証人吟味方ニ者ヒタルモノト存候何ト
 十レハ六凡証人ヲ質問スルニハ其証人
 人カ自身見タルモノカ又ハ自身ニテ知リ
 タル事実ヲ問フヘキナリ也ルニ原告代言
 人ノ問ハ自身見タル又ハ自身知リタルモ
 ノニ依ル証人ニ就キ後藤象二郎カ委
 任状ヲ造リタル目的如何ヲ問フハ証人
 吟味方ニ背ヒタルモノト存候
 一 原告代言人カ該証人ニ就キ委任状ヲ造

ル目的ヲ質問スルニ方リ其目的ハ即ケ後
藤ノ目的ヲ指スルベシ然レハ其目的ヲ
通シタルモノハ証人へ直々ニ通シタ
ルニ非ヌ由テ其後藤ノ目的ヲ知ラントセ
バ後藤ガ直々ニ通シタル少クサニ同フ
ベキナリ然ルヲ後藤ヨリ直々ニ聞取タル
人ニ非ル所ノ証人ニ對シ後藤ノ目的
如何ヲ問フハ証人吟味方ニ付當ラ夫レ
タルモノト存候

同午後

右之通相違不申上候以上

古

明治十一年十二月六日

星

亨〇

東京上等裁判所

西澤判事殿

明治十一年十二月廿六日口供

被告代言人

星 二号

一 在廳人少口一ガハヂヤ一デンヨリ後藤へ
 係レ件ニ付为証拠人同入ノ領事館ヨリ被
 呼出タリト申立候ニ付右ハ原告ノ執レノ
 証拠人トシテ被呼出候ト有之ヤ兼リ置
 度候

一 原告代言人ハ被告代言人カ如世向リ余ス
 ハ干権ナレト申立ルニ被告代言人ニツイ
 テ原告代言人カ一昨日ノ証拠人ト子一氏
 ノ質問スル以前本件ニ関シ執立度廉有之
 ヲ以テガロ一ガカ突然申立リ为シタルカ

一 為メ被告ノ願主シ妨ルカ為メニ世言ヲ祭
ニタリ世原告代官人カガロ一ガニ對シ言
ヲ祭シタル理由ト同キナリ故ニ被告代官
人ハ世言ヲ祭スルノ權アリモト存候
一 原告代官人ハガロ一ガヲ呼出シタル廳ニ
孰キ如世申之ハ為スヘキナリ由ルニ當裁
判既ニ之ヲ為スハ不當ナリト申主ルト虽
モ御或ル訴訟ニ付奈被告ノ孰レカ其名ヲ
用ヒラルハ申ハ其用ヒラレタルモノハ其
事柄ニ對シ尋問スルノ權アリトスルモノ
ナリ故ニ被告代官人ハガロ一ガ氏ハ本訴
原告ノ孰レノ為メニ証拠人トシテ召喚セ
ラレシヤヲ問フヘキ權アリト固信ス

一 該本月六日付ノ手紙ハ在横濱ゲツオン
スヨリ参リタリ同人ハガロ一デント後藤
トノ事件ニ付テハ隨分整知シタル人ニ付
近頃同氏カ横濱ノ新聞ヲ見ルニ原告ノ差
出ス証拠人ノ申之ハ事實ニ相違セルヲ覺
ヘタルニ付該手紙ヲ以テ同氏ハ其相違ノ
廉ヲ後藤ニ申送レリ該手紙ノ末章ニ世言
試ヲ以テ証拠ト為スモ一向不吾ヲヲ載セ
リ若シ原告代官人カ世言ヲ証拠トスル
ヲテ肯セサルニ付テハ同氏ヲ質問セサル
ヘカフサルヲト在候由レモ同氏ハ病ニ罹
リ殊ニ輕カラサルニ付東京へ出テ當裁判
所ニ於テ質問ヲ受クルハ堪難キヲ付横

廣ナル我カ裁判所ニ同氏ヲ召喚シ該訴ニ
於テ原告代理人ノ目前ニ於テ質問致度候
且若シ同氏ヲ横濱裁判所ニ於テ質問スル
様相成片ハ同氏ハ己ニ未ル一月一日ニ英
國ニ帰國セント決シタルニ付遅クトモ明
九七日又ハ八日ニ横濱裁判所ニ於テ質
問致度候由ニテ原告代理人ノ該書面ヲ証
拠トシテ呈スルヲ許諾スルヤ又ハ否ラサ
ルヤヲ裁り度候

一 ナツキンスカ東京へ出テ当廳へ出頭し得
サル譯ハ同氏久シク病ニ罹リ其病状亦甚
ク重シ故ニ鉄道ノ如キ烈キ動搖ヲ起スモ
ノニ業リ東京ノ如キ遠キ所へ出ルハ甚ク

難シ其同氏カ重病ニ罹リタルハ原告代
言人又其他ノ人モ皆知ルナリ其實ニ明カ
ナル証ナリ

一 横濱裁判所ニ於テ代理ヲ以テナツキンス
テ質問スル中ハ固ヨリ原告代理人ニ告知
原告代理人ノ及對質問ヲ受ケヘキナリ
一 原告代理人ハナツキンスカ重病ニ罹リタ
ルヲ知リ知レリト云ヘリ此レハ原告代
言人ハ己ニナツキンスノ重病タルヲ知リ
タル上ハ必ス同氏カ重病タルノ手紙ヲ要
スルニモ不及ト存候且ナツキンスカ東京
へ出ルヲ能ハサルハ同氏カ本月八日付
ヲ以テ後藤へ宛タル手紙ノ追加部中ニ若

レ予カ申之ヘキ証言ヲ横濱ニ於テ取ルニ
於テハ差支ナシト云ヘリ以テ同氏カ東京
ニ出テ難キヲ知ルニ是ルニシ
一 ゲツキンスノ東京ニ出ル能ハサルハ如キ
ナルニ付原告代理人ハ強テ同氏ノ書面ヲ
要スルヲ主張セサルト信ス
一 被告代理人ハ原告代理人カ言ヲ如クゲツ
キンス氏ヨリ書面ヲ取ルニ付容易ナル
ト存候得共今原告代理人ハゲツキンス
氏カ病氣タルヲ知りタル上ハ原告代
人カ言ノ如ク午紙ヲ取ルハ不用ナル業
ト存候也レモ被告代理人ハ彼ノ午紙ヲ
ゲツキンス氏ヨリ受取ル様ニ勤ムニシ

右之通相違不申上候以上

右

明治十一年十二月廿六日

星

亨

東京上等裁判所

西澤判事殿

レ予カ申之ヘキ証言ヲ横濱ニ於テ取ルニ
於テハ差支ナシト云ヘリ以テ同氏カ東京
ニ出テ難キヲ知ルニ是ルニシ
一 ゲツキンスノ東京ニ出ル能ハサルハ如キ
ナルニ付原告代理人ハ強テ同氏ノ書面ヲ
要スルヲ主張セサルト信ス
一 被告代理人ハ原告代理人カ言フ如クゲツ
キンス氏ヨリ書面ヲ取ルニ付容易ナルヲ
ト存候得共今原告代理人ハゲツキンス
氏カ病氣タルヲ知りタル上ハ原告代
人カ言フ如ク午紙ヲ取ルハ不用ナル業ト
存候也レモ被告代理人ハ彼ノ午紙ヲゲツ
キンス氏ヨリ受取ル様ニ勤ムヘシ

右之通相違不申上候以上

右

明治十一年十二月廿六日

星

亨

東京上等裁判所

西澤判事殿

明治十一年十二月廿七日午前口供

被告代言人

星 亨

一 原告代言人ハ昨日被告カ呈セントスル千
ツキンス手紙ニ付答論ヲ申立同カカ病丸
ニテ出京ノ出来サル手紙ヲ出スニ非サレ
ハ横濱裁判所ニ於テ同カヲ吟味スル別
ナル吟味方ニ於テ同意セサルヘシト申立ル
モ柳原告代言人ハギツキンスカ病丸タル
イヲ知りタル以上ハ別ニギツキンスカ筆
ヲ以テ其病ニ罹リ出京スルヲ得サルトノ
手紙ヲ要スルハ實ニ愚カナル申立ナリ故
ニ若シ不幸ニシテ被告代言人ハギツキン

一
スノ手紙ヲ得ルヲ能ハスシテ遂ニ同弋ノ
如キ願ル要ナル証據人ヲ吟味スルヲ得
サルニ至リタルハ被告代言人ハデツキ
ニスカ被告ニ渡シタル本月廿四日付ノ手
紙ヲ直チニ呈シ以テ本件ノ証據トナシヘ
キノ理アリト存候

一
被告代言人ハカノ及フ丈ケデツキンスカ
病氣ニテ出京シ終ハサル旨ノ手紙ヲ得ル
トテ勤ムヘシ然レモ其手紙ヲ得ルヲ能ハ
スレテデツキンスヲ吟味スル能ハサレハ
本月廿四日付ノ手紙ヲ証據ト致シ呈スル
積リ

一
原告代言人ハ本月廿四日付ノデツキンス

一
ノ手紙ハ即チ同弋ハ被告ノ法律上相談人
ナルモノニ付信用シ難シト云フモデツキ
ンスハ嘗テ後藤ノ代言人タリシモ今ハ然
ラス且同弋ノ手紙ハ其嘗テ取扱ヒタル事
柄ヲ直写セシモノニ有之哉

一
被告証據人トシテ可差出デツキンスハ現
時病ニ罹リ當廳へ出頭致シハ判然タ
ルモ原告代言人カ同弋ノ養体書ヲ要スル
ニ付横濱裁判所へ同弋ヲ吟立吟味スル
ハ未タ該養體書ヲ得サル間ハ未定ナルニ
付該養体書ヲ得ル迄ハ當御裁判所ヨリ同
弋ノ領事へ寫合來ルルハ日午前第九時三
十分ニ當廳へ出頭致シ様致度モ同弋病氣

ニテ當廳へ出頭致難様致更同日同判横濱
裁判所へ出頭致様同國領事へ以惣合有
之度奉願改原告代名人カ錢艦ノ儀ニ付テ
ノ問ハ不用ナルモノト改
一 土佐ノ一揆ニ付テノハ事件ニ關係シタ
ルモノニ無之存ハ原告代名人ハ彼ノ土
佐一揆ノ下カ事件ニ關係セシヤヲ示スヘ
キモノト改

一 原告代名人カ第一ニ被告へ貸與ヘタル金
子ノ行末ヲ尋ヌルハ無用ノ業ト存改何ト
ナレハ大元金ヲ借りタル人ハ其好ニ任
セ使用スルノ權アリトスレハナリ
一 第二ノ下ハ証證據人トネーニ尋ネルヨリ

原告代名人カ呼ヒタルダローザニ問フヘ
シ何トナレハダローザハ原告ノ証據人ナ
レハナリ
一 第三ノ下ハ明カニ差止メ願ニ不用ナルニ
付其理由ヲ説明スルニ及ハス

同日午後口供
右之通相連不申上候以也

明治十一年十二月廿七日 星 亨 (印)

東京上等裁判所
西浮判事殿

明治十一年三月廿六日供ノ鏡

「カルクウード」キヨリ「デッキンス」ギヘノ詰問

「ホウ井タル」ギカ足下ノ見世へ来リシ其誰カ同人
ト来リシヤ

「カローザ」キナリ

「カローザ」キハ以前足下ノ見世へ来リ而シテ後
藤氏ノ事業ニ付キ足下へ談話セシヤ

「私ニ於テハ私カ」ホウ井タル氏ニ面會セシ前ニ
ホウ井タル氏ニ於テ代理人トナリタキ情願或

ハ希望ノイラダ「カローザ」カ私ハ談話セシト信
思スレ氏保証セサルナリ

「ホウ井タル」氏ニ足下カ面會セシ前ニ「カローザ」氏
足下ノ許ニ来リ而メ後藤氏ノ事業ニ付キ足下
へ談話セタリシヤ

然り、屢々ナリ也。此後及之ノ代理人トシテア
ラサリ也。
此ラハ誰ノ代理人トシテアリシヤ
私カ知ル処ニテハ誰ノ代理人ニテモアラサリ
也。
誰ノタメナリシヤ
私ハ答フル能ワス所ントナレバ私ハ知ラザレ
ハナリ。の多分自己ノタメナリ。の實ニ後及之ノ
タメナラス所トナレバ私ニ於テ後及之ノタメ
高後スヘシト曰ギヨリ私へ話セシ人々ノ名前
目錄中ニ同ノ名前ハアラサリ也ナリ
此目錄ハ何時足下へ与ヘテレシヤ
本年ノ早キ頃ナリ也

二月ニテアリシヤ
私ハ知らス然レバソレハ後及之カ長寄へ行キ
也前ニテアリシナリ
ソレハ何頃ナリシヤ
ソレハ二月ニテアリシト私ハ思考ス也。此全
ク確カナラス
ダローザ氏ハ足下カ此目錄ヲ落寄セ也前ニ屢
々足下ニ面会スヘク東ラサリシヤ
也。ラス私カダローザ氏ニ尤モ多ク面会セシ
ハ後及之カ長寄、行キ也後ノ一ニテアリシナ
リ
是下ハ千八百七十七年ノ秋ニ足下ノ見世ニテ
ダローザ氏ニ面会セシヤ

私ハ多分ナセニ然レ氏記臆セス
是下カ伸陳セシ計算各ヲ誰カ是下へ渡セシヤ
實ニ私ハ記臆ニ能ハス○私ハソレヲ泣サレタ
ルイヲ記臆セス○ソレハ私カ来リニ片私ノ見
世ニマリニ
是下ハダローザギカ是下へソレヲ泣サ、リニ
一ヲ確定ニ申供スルヤ
世ラス私ハ確定ニ申供スヘカラサルナリ
ホウ井タルギカダローザギノ依頼ニ付是下ノ
見世へ来ル一井ニ「ダローザギノ確説ニ對シ是
下ハ代理権擔任ノ一ニ付同人ニ面會スルヲ
欲セシハ充分ニ堅実ナラサルヤ
私ハ「ダローザギトホウ井タルギトノ間ニ為ニ

タルる柄ヲ知ラヌ○只私ノ知ル一ニラハ別ナ
私ニ於テ決ミテホウ井タルギへ申越ハサ、リ
ニナリ○「ダローザギニ於テハ私カ「ホウ井タル
ギへ申越ハセシ一ヲ「ホウ井タルギニテ行思ニ
セシメ得ル一ハ全ク能フヘキナリ○然レ氏若
ニ左様ナレハ私ノ委任ナキナリ
是下ニ於テハ「ホウ井タルギノ委任状ヲ讀ラ廢
シ或ハ取戻サレシ一ノ情実ヲ知ルヤ
然ラス私ハ知ラヌ○然レ氏同人カ本年ノ初メ
ニ私へ面會セシ片私カ後後ギノタメ取扱ヒサ
ナセシ一ヲ同人於テ知ラサルヲ得サルナリ
是下ハ後後ギノ法律顧問トシテ取扱ヒヲナセ
シヲ私ハ行思ス○然ルヤ

然リ。○私ハ尚ホ同ノ委任状ヲ有シタリシナ
リ
是下ハ「ホウ井タル」キカ「ダローザ」キト共ニ是下
ノ見世ヘ奉リシ片是下カ此委任状ヲ所持セシ
「フ」ホウ井タルキハ「治」セシヤ
私ニ於テ「候」委任状ヲ所持セシ「フ」治セシト私
ハ思考ス然レ氏私カ「候」計算ヲ為シツ、アリシ
「フ」同人ニ「治」セシナリ
是下ハ「勘定」方ナルヤ
私ハ「勘定」方ニテアラス
是下ハ「鳥」坑ニ付キ此ノ如キ計算并ニ原告ト
被告トノ計算ヲ調査修整清数スル「フ」自己ニ
適宜ト思慮スルヤ

勘定方或ハ帳簿方ノ補助ナシニハ然ラス○私
ニ於テ私カ計算ヲ為ス「フ」取扱ヒシト云フハ
私於テ切要ナレハ如斯キ補助人ヲ雇入レ能ヒ
シ「フ」理考セシトノ意味ナリ
又理考ニ於テハ現行セシヤ
私於テ如斯キ計算ヲ為スヘキ時モ有セス亦経
験ヲモ有セサル「フ」ハ口上或ハ書面ヲ以テ後
後氏へ通信ヲナシタリ
是下ハ「膏」テリレボノ計算ヲ調査清数スル「フ」ラ
何ボノ人へ命セシヤ
私ハ私ノ目前ニアリシ計算ヲ調査シ而シテソ
シカタメ報告スル「フ」ユ「ダブル」エ「ホ」
ル氏、命セシナリ○私ハ他ノ命令ヲ為サ、リ

三何トナレハ私ノ管理中ニム他ノ計算ヲ有セ
サレハナリ
是下ハ何時世命令ヲナセシヤ
本年ノ早キ頃ノ一ニテアリシナリ
後報告各ハ何頃製サレシヤ
私ハ知ラス○本年ノ早キ頃ノ一ニテアリシナ
リ
是下於テ後委任状ヲ得ニ後ニ是下ハ後命令ヲ
ナシ而シテ報告書ヲ落手セシ一ノ情実ヲ是下
ハ申供スルヤ
私ハ全ク保証セス○私於テハソレハ私カ委任
状ヲ得之前ノ一ナリト寧ロ思考ス○然レ氏
私カ委任状ヲ得之前ニテモ私ハ後後弋ヨリ口

上ニテ委任ヲ受ケタリ
是下ハ如何程長キ前ナリト思考スルヤソレハ
本年ノ一ナリシヤ
一然リ私ハ本年ノ一ナリト思考ス然レ氏
保証セサルナリ
是下ハ嘗テ是下ハ委任サレシ計算書ヲ注意シ
閱ラセシヤ
是下ハ何時後長ハソレボノ計算書ノ一ヲ報
告セシヤ
私ハ知ラス○私於テハ私ノ通行ヲ閱覽セサレ
ハ殊途ニ能ハサルナリ○私ハ昨年中ノ或ル時
ノ一ナリト思考ス○私ハ「ホール」セノ報告書モ

亦昨年中ノ或ル時ノ日附々ニテアリエト思考
ス
後後氏へノ是下ノ報告層ハ「ホール」也ノ報告者
ニ基キエヤ或ハ然ラサルヤ
ソレハ主トモチ「ホール」也ノ報告層ニ基キエ者
ナリノ私ニ於テ私ノ報告層ト云フハ只私ノ通
行ト云フ意味ナリ
是下カ有スル計算者ノ「」ニ付キ後後氏ニ於テ
如何スヘキカノ「」ニ関シ後後氏、業スル是下
ノ法律助之ハ「ホール」也ノ報告層ニ基キエカ或
ハ否ラサリエヤ
或ル部分ハ左様ニアリエナレトモ然テ左様ニテ
ハアラサリエナリ

是下ニ於テ是下カ扱後ニタル計算層ハ「」ナリ
「」ヲ申供ス○是下ハ嘗テソレヲ比較セエヤ
私ハ決エテソレヲ比較セサリエ○ソレハ「ホール」
氏カ製エタル者ナリ○私ハ只通告ニソレ
ヲ比較セリ而テソレカ細密ノ写ナリ「」ヲ
申供ニ能ハサルナリ○私ハ自己ノ使用ノタメ
ニ製エタル該写ヲ有エタリ○該本紙ハ安全ナ
ル場所ニ保有エテアリエナリ
是下ハ是下カ扱後セ「」写ニハ「」ヤ「」マゼソ
ニ社中ヨリ後後氏ニ「」付与セ「」從計算者ノ
写ヲ包括セ「」ノ情実ヲ申供ニ能フヤ
勿論私ハ他ノ計算者カアリ得ル「」ヲ申供ニ能
ハス然レモ若シ左様ナレハソレハ私ノ手許ニ

アラサリニナリ

被告カ他ノ計算ヲ仕舞ワントスル目的ニ適ス
ルカぬキ計算ノミヲ足下ニ渡サ、リニテ足
下ハ如何ニテ知ルヤ

私ニ於テハ被告ノ計算ヲ仕舞置カサリニテ
知ラスノ筈ニ私ハ日人カ為セニテ思考ス
ヘキ理合ヲ有セス

被告ノ品行ハ足下ノ承知スル所ヲ以テスルニ
足下於テハ如何スキ一ハ為ス能ハサル考ト思考
スルヤ

私ニ於テハ考ニ被告ト自分トノ引合ニ付キ完
分ニ被告人ヲ正直ナル人ト見當メタリ然レモ
日人ハ日人ノタメ種々ナル悪ニキ助ス人ヲ有

セリト私ハ思考ス〇私ハ私カ病ニカ・リニ付
近ニ被告カ一日ニ石炭百二十噸ヲ原告ニ渡ス
ヘキ後契約ヲ履行セシテ尚ホ申付ニ得ルナ
リ

日人ハ二十万弗ヲ被告ニ付シヤ
私ハ知ラス〇私ニ於テハ本年五月ノ末以來自
己ノ知ル所ヲ以テスルニ何ボノフモ知ラス

後若氏カ足下ノ見世へ来リニ付日人ハ常テ
ローザギト回導セラレシヤ

甚ク稀ナリの日人ハ考ニテエタクシヤ
シダギトハ尤モ屢々ナリ

日人カエタクシギト最初ニ足下ノ見世へ来
リニハ何時ナリニヤ

ヨシヨシ
ナリ

私ハソレヲ陈述ニ能ハサルナリ
曰クハ嘗テ本年ノ前ニ「ジョー」ヘタク「ギト」足下ノ
見世ヘ来リシヤ

私ハ曰ク「カ」来リシト「思考」ス。然レ「氏」私ノ「見世」
ニ「ラ」アリシヤ又ハ「東京」ニ「テ」アリシヤハ「保証」セ
ス

東京ノ「何」レニ「テ」アリシヤ

一ノ場所ハ「本所」ナリシ。他ノ場所ハ「ジョウ」シウ
シヤ。ニ「テ」アリシト「私」ハ「思考」ス。而シテ「私」ハ「ジョー」
エタク「ギ」ノ「定」ニ「テ」アリシト「思考」ス

「後」及「キ」「ジョー」ヘタク「ギ」ト「デ」ツ「キ」ニス「レ」ギトノ「ゴ」ニ
「テ」何ニ「テ」為セシヤ
(「デ」ニ「ソ」ン「ギ」ハ「去」ラ「テ」拒「メ」リ)

答「渡」鏡山并ニ「ジヤ」デ「ン」ニ「ゼ」ソ「ン」社中ト「後」及「象」

ニ「即」トノ「間」ノ「子」柄ニ「付」キ「種」ナル「コ」ノ「概」淺ナリ
是下ニ「於」テ「後」及「ギ」カ「女」鏡山ヲ「取」押ヘ「シ」ト「ス」ル

企「テ」初「メ」テ「知」リシハ「何」時ナリシヤ
カ「モ」以「テ」「お」ノ「コ」ナリ。○「渡」鏡山ヲ「押」フルニア「ラ」ス

併シ「曰」ク「自己」ノ「物」品ヲ「取」ル「タ」メナリ
誰カ「曰」ク「自己」ノ「物」品ノ「タ」メ「私」ヒシヤ
私ハ「曰」ク「カ」私ヒシト「思考」ス

是下ハ「ソ」レ「等」ノ「小」沢「青」ヲ「何」ニ「モ」見「サ」リシ。然「ラ」
ハ「私」ハ「是」下カ「所」指セシ「渡」計「算」中「物」品「買」入ノ「タ」
メナリト「思考」ス。何
私ハ「記」憶セ「サ」ルナリ
然「ラ」ハ「是」下ニ「於」テ「ハ」以「テ」立「ラ」レシ「足」下ノ「見

司
法
省

之ニヨリ漢姓并ニ暗昧ナル祀臆ヲ以テ後計等
ノ現今ノ見込ヲ立ツルヤ或ハ是下ハ行ニ基キ
クヤ
私ニ於テ見込ヲ立ツルハ私ノ見込カ今朝私ハ
示サレタル一通ノ旨筋ニテ引起サレニ処ノ分
明ナル祀臆ニ基クナリ
是ラハ後計等ニ付キ是下ノ現今ノ見込ハ唯今
朝是下ニ示セシ各筋ニ基キシヤ
否^カカ
是ラハソレ何ニ基キタルヤ
私ハ是下ニ話シタリ而シテモ早ヤ是下ニ話サ
ルヘシ
(カルクウードハ今朝ノ旨筋ヲ見ニト要メタリ)

(カニソシハソレヲ示ス^テラ拒メリ)
裁判所於テハ若シカルクウード氏カ証拠トシ
テ各筋ヲ差出ス^テラ許ルスナラハカルクウー
ド氏ハソレヲ見得ルナリ^カ若シソレヲ証
拠トシテ差出サルナラハ^ハソレヲ見ルヘ
キ権アラスト裁裁スルナリ
是下ニ於テシヤデンマゼソシ社中ヨリ後後氏
ハ付世セシ一般ノ計等各ノ写ナリト申供スル
其事柄ヲ是下カ注意ニテ調査セリト云フ○是
下ハ正金ノ如行程ナル額ヲ該鑛山ノ工業ノ費
ヲ除キ原告ヨリ被告へ用達タルハ其計等ニ
ヨウテ顯ハルカ私、陳述ニ能ワヤ
出勘定ノ部ニアルヤ一ノ小記ニアル四十万弗

ノ用達金ヲ正ニキ者ト私ハ思考ス○然レ氏私
ハ記憶ヨリ引用スル者ニテ保証ニ能ハサルナ
リ
足下ハ其ハ記ニテ為ニタル金額并ニ用達金ノ
他ノ小記ヲ記憶スルヤ
私ハ該計算ニ付キ何ゾノ詳細ヲ記憶ニ能ハサ
ルナリ○私ハ該計算ハ凡百ノ事ナル入勘定ノ
残額ナリト思考ス
足下ノ計算各ト云井ハソレハ「ホー」氏カ報告
ヲナシタル計算各ト曰モノナルヤ
私ハソレナリト思考ス○私カ記憶スル所ヲ
以テスルニ私ハ私ノ見世ニ三通ノ計算各ヲ有
セリ則チ本紙并ニ二通ノ写ナリ

足下ハ如何程長ク二通ノ写ヲ保有セシヤ
私ハ知ラス○私ハ只今該写中ノ一箇ヲ有スト
私ハ思考ス
今一通ノ写ハ如何ナリシヤ
ソレハ本紙ト共ニ後象象ニ申ヘ返戻セリ
此ガノ計算ハ何カナル日限迄ニ進ミシヤ
私ハ細密ナル告知ヲ足下ニ共フル能ハス然レ
氏私ハソレハ千八百七十六年三月後迄進ムト
思考ス然レ氏其余ノ「私ハ陳述ニ能ハサル
ナリ
足下カ恨儀セシ此計算各ノ写中ニ該鑛山ノ工
業ノ費ヲ顯ハセシヤ或ハ然ラザリシヤ
私ハソノ入費ヲ顯ハセシニ違ヒト思考ス

此レ私ハ記憶之能ハサルナリ

工算入費ハ其計算書中ニ如何ナル形式ニテ顯

出セシヤ

私ハ知ラス〇私ハ留意シテ数ヶ月ノ旨決事柄

ヲ者サリシ而シテ私ハ計算書ノ件々ニ付キ私

ニ於テ既ニ察ヘシヨリ外ニ証状ヲ察ヘ能ハサ

ルナリ

是下ハ四十万其ナル負債ノハ沢ヲ顯出セリト

我輩ハ話シヨリ〇是下ニ於テソレハ該鑛山ノ

目的ノタメ負債セシ者ト否トヲ知ルヤ

私ハソレヲ知ラサルナリ

是下於テハ正金ノ用途ハ百其ヲ超過セサリシ

モノト申供シ能フヤ

此ラス〇私ニ於テハ私カ申供シタルノ外ハ

正金用途ノ一ニ付キ何ボノ一モ申供シ能ハサ

ルナリ

是下ノ見込ニテハ該鑛山ノ利益ヲ以テ原告ハ

辨度スヘキ被告ノ負債及ヒ課算ノ數ニ決テ

私度スニ充テラサルヘシ何トナレハ用途金

ハ對スル課算ハ從利益ヲ吸收シタレハナリト

是下ハ供述セリ〇此ルヤ

私ハ左様ニ陳述セサリシナリ〇私カ此ヘシ著

ハ均シケレド同シクハアラサリシナリ

是下ハ後後氏ノ負債ハ毎年ニ増加セリ而シテ

石炭ノ掘出シ言カ著シク増サレハ常テ該

負債ヲ消了スヘキ機會些少ナリト是下ニ見

負債ヲ消了スヘキ機會些少ナリト是下ニ見

一之旨ヲ呈下ハ申供セリ〇呈下ハ何ニ基ヒテ
ソレヲ見定メシヤ
私ノ心ニ浮ヒテ通リ本件ノ経事情ニ付テナリレ
何頃ナルヤ
私カ其見込ヲ存休セシハ何頃ナリシヤ私ハ知
ラサルナリ
後者翰ハ何ナル日付ナリシヤ
テニソシ氏ニ於テ後者翰ヲ証松トシテ差出セ
シエアラサレハ後者翰ニ付キ問題及ヒ調査ス
ルヲ拒メリ
若私カ後者翰ヲ見ルニアラサレバ私ハ知ラサ
ルナリ
何ナル各翰ナルヤ

(テニソシハ拒メリ)
今朝ノ各翰ニ對シテナリ
後者氏ノ負債カ増加セシゴノ足下ノ見込ハ
後計算各ニ基キテ考ナルヤ或ハ然ラサリシヤレ
私カ既ニ此問題ニ興ヘシ考ノ外ハ私於テ興フ
ヘキ他ノ答ヲ有セス
計算ノ外ニ何ナル他ノ事情ニ於テ足下ハ能
ク足下ノ見込ヲ立テ能フヤ
私ノ心ニ浮ヒタル後件ニ付テノ他ノ事情
ニ付テナリ
此ボノ事情ノ何レノ考ニテモ私ハ話スヤ
然ラス
足下ハ私ニ對シ答ヲナスコトヲ拒ムヤ

私ハ其点ニ付キ他ノ答ヲ與フルヲ拒ムナリ
○オ一ニハソレハ委任ヲ置キニ通任ナリ而シ
テオ二ニハ既ニ充分ニ返答セリ
是下ニ於テハ充分ニ工業ヲナセニ片後鑛山ノ
利益ハ如何程ナリシガ知ルヤ
私ハ知ラス

鑛山ヨリ尋常ノ掘出言ハ一日ニ何程ナルカ是
下ハ知ルヤ
私ハ六百トンカ相当ナル掘出ニ言ニシテ七百
トシカ善キ掘出ニ言ナリト思考ス然レ氏私ハ
知ラサルナリ
然レ氏若シ是下ハ後鑛山ノ如何ナル利益カ尋
常ナル工業ノ年ニアルカヲ知ラサルナリハ後

利益カ年々ノ課業ヲ原告人ニ私ヒ而シテ負債
ノ部分ヲ償却スルニ足ラサルナリ何故陳述ニ
得ルヤ

私ハ左様ニ陳述セス○私ニ於テ陳述スル所ハ
則チ今朝私ニ示サレタル唇翰ノ日附ノ頃ニ私
ノ意ニ浮ヒシ凡テノ事情ニ基ヒセシ私ノ見
ニテハ後後象ニ中ノ負債カ漸次ニ空マントス
而シテ曰人カ負債ヲ脱スヘキノ景況ナリナリ
シトシテアリシナリ○ソレハ私ノ見トナリシ
○ソレカ正ニタアリシト否トヲ私ハ陳述ニ能
ハサルナリ
然ラハソノ時足下ノ意ニ浮ヒシ負債ノ増加ハ
翻復セシ正金ノ用違ニ係ラス而シテ後鑛山ノ

工業ノ利益カ不告ノ算課ヲ松フニ足ラサリニ
トノ情実ニハアヲサリニヤ○或ハ足下ハ何故
ニ反對ナルニ説ヲナセシヤ
私カ記憶スル丈ケノ意ニテハ則チ鑛山ハ該課
算政府ヘ松フヘキ料月々ノ重利或ル為替ノ夕
メ一弗ニ付キ四「ベ」ス宛ナル為替ノ課算并ニ
各種ノ出来ヲヨリ生スヘキ或ル入費ニ当ツル
能ハサリニナリ
私ノ推知スル所ニテハ計算考ニ案ニテ成ラサ
リニ該意ニ於テハ足下カ原告人ニアラサレ他
人ノ若異ナル原因ヲ採リ得ニ通告者ノ報告并ニ
告知ノ結果ナリニトス○然ルヤ
足下若シ私ノ意カ輕クナリニ者ト意味スルナ

ラハ足下ハ正シカラサルナリ○足下若シ私カ
甚説ヲ採リ而シテソレニ付キ取扱ヒシコトヲ暗
説スルナラハ足下ハ僅ニ有禮ナリ○該情実ニ
於テハ則チ私ノ意ハ一部分ハ計算ニ付テ成リ
一部分ハ被共ヨリ私ヘ付与ニタル物及ヒ日人
ヲ困^使スル物トニ付テ成リ一部分ハ私自巳ノ
所識及ヒ言島鑛山ノ事柄ニ付キ前以テノ熟知
ヨリ生セシ該鑛山ノ能力トニ付テ成リニ者ナ
リユレハ實ニ五ヶ年恐ラクハ六ヶ年ヲノイニ
モテ私ノ見世ニアリニ者ナリ
足下カ有ニタル計算ニ付キ足下ハ為替ノ相違
ニ付キ算課ヲ拒ミタリト陳述シタリ○然ルヤ
然リ

其片足下ハ此キ算課ヲ掲載セシ被告ト原告
トノ間ニ取結ヒタル契約ヲ知リシヤ

此此キ契約ハ其時モ或ハ其已後モ私ハ示サレ
サリシナリ

若シ其片ニ此此キ契約カ存在セシナラハソレ
ハ足下ハ付与セラル・イト足下ハ思慮セサル

ソレヲ私ハ付与スル一ハ一層善クアルヘシト
私ハ思考ス

若シ利足ヲ月々ニセスニラ六ヶ月毎ニ為セシ
ナラハ液計算ニ付キ此行ナルお違ヲ生スルカ

足下ハ知ルヤ
然ラス○私カ所思スル所ニテハ該甚定ハ私ノ

タメニ為セシ考ナリ然レ氏私ハ只今ソレヲ記
臆セザルナリ

足下ハソレカ一ヲ弗ヲ超過スヘシト思考スル
ヤ

私ハ陈述ニ能ハサルナリ
ホールルガカ報告者ヲ製シ不シテ足下カ査閲ニ

テ其見込ヲ後後戈ノ之況セシ時ニ足下カ拒ミ
ニ算課ノ金額ハ此何程ノ言ニナルヘシト足下

ハ思考セシヤ
私ハソレヲ足下ニ陈述ニ能ハサルナリ○私ハ

一箇ノ小沢者ニ付キ只陈述ニ能フ不シテソレ
ハ為務ノお違ニ付テナリ

足下ハ原告ヨリ被告ニ送シタル計算書ノ何レ

ハ為務ノお違ニ付テナリ

ニ於テ為務ノお違カ悉皆四万五千弗以上ニ十
ルヲ情実ニ付キ申供スル用意アリシヤ
私ノ記憶スル所ヲ以テスルニ原告ヨリ被告へ
送致セシ各齣ニモ又ハ計算各ニモ為務ノお違
ト云フ小沢カアリシ其額ハ一万二千ポンドハ
一万三千ポンドトノ間ナリシ私ノ思考ニテハ
ソレハ六万弗ヲ超過スル数ニテ弗ニ為サレタ
リトスルナリ
ソレハ私ノ答ニアラスナリ○然ルヤ
和ハ私カ調交ヲ為セシ方法ヨリ外ニハ何ゾノ換
ハリタル方法ヲ以テ申供シ能ハサルナリ
是下ハ二箇ノ他ノ算得ニ異論ヲ為セシヤ
然リ

七十六万八千弗ノ負債アルコトヲ承認シタル契
約各ヲ千八百七十五年七月ニ是下へ示セシヤ
然リ○私於テハソレヲ私へ示サレシト思考ス
○一部分ハ蓬萊社ノ計算各ニシテ一部分ハ鏡
山ノ計算各ナリト私ハ思考ス○然レトモ其言
ヲ顯シタル計算各ヲ私へ示サレサリシナリ
該契約各ヲ読讀シテ是下カ陳述スル如ク
該鏡山ニ於テ事柄ノ景況ヲ能ク熟知セシニ付
キ、ホールギカ報告各ヲ製シタル片ニ原告者へ
ノ後及ギ、負債ハ如何アリシト是下ハ思慮ス
ルヤ
デニソシキハ此問ヲ拒ミタリ
此問ハ退ケテラレタルニ付キ此問へ答ヲ与ヘサ

リニナリ

面會セシ片ホウ井タルギニ於ラ委任状ヲ有ニ
タリシカラ曰人、尋子ニヤ

然ラス私於テ訊查スヘキ一何モアラサリニ

是下ノ委任状ハ何頃取戻サレシヤ

ソレハ決シテ後後ギ、取戻サレサリニ

私カ曰人、ソレヲ返却セシト思考ス

是下カ最早ヤ後後ギノタメ取扱フヘキ一能ハ

サリシト是下ハ何片曰人へ告知セシヤ

私カ常テ曰人へ告知セシト私ハ思考セサルナ

リ
是下ハ何時曰人ノ代理者、告知セシヤ

私カ常テ曰人共、告知セシト私ハ思考セサルナ

リ

是下ハ何時後後ギノタメ取扱フイヲ止メシヤ

私カ取扱ヲナスタメ不適當ニナリニ時ヨリナ

是下ハ何時後後ギノ曰人ノ唇面ヲ返却セシヤ

私ハ一ヶ月前頃ナリト思考スノ本件ノ訴状ヲ

差出セシ暫時後ナリ

可号唇類ヲ証拠人へ示セリソレハ是下ノ自筆

ナルヤ

是下ノ自筆文字ニテ認メタルハ凡テ私ノ自筆

ナリ

コレハ是下ノ自筆ナルカ(此号唇類ヲ初テ差出

セリ)

(デニソシ)ギハ此書類ヲ差出タルイヲ拒ミタリ
是下カ此各面ヲ退メタル節ハ是下ハ後後ギノ
代シ人タリシヤ不シラ是下ハ原告ノ代シ人ナ
ル「子」ギヘソレヲ書通セシヤ

然リ

是下ハ後後ギノ金錢ノ情状ニ付キ金錢ノ利金
ヲ有スルヤ

(デニソシ)ギハ拒ミシ

デツキンス氏之ク私ハ此キ冥滞ナキ間ニ答
フルイヲ拒ムナリ〇然レ私ハ出訴中ノ訴答
ノ結果ハ何レニモ私ニ冥滞スヘカウサルイヲ
云フヘシ

後後氏ハ過ル四月中一万五千弗或ハ廿四ノ言

ノ負債カ是下ニアラサリニカ

私ハ此間ニ答フルイヲ拒ムナリ

(カルクウ)ド氏ハ証人於テ返答スヘキ様命
令アラシイヲ裁判官ノ願フナリ

裁判官於テハ証人若モコレヲ曰人ノ私事ナ
ルイト云フナラハ曰人ハ答フルニ及ハスサレ

氏若シ右ハ此訴訟ニ緊要ナルイニテ私事ニア
ラスンバ曰人ハ返答セサルヲ得サルナリ

裁判官ハ此訴訟ヲ審問セサリニ故ニ裁判官ハコレ
ヲ決定スル能ハストヤ制セリ

デツキンス)ギハ任任上ノ通任或ハ私事ニ關係
アリトノ理由ニテ後後氏ト自分トノ言ニアリ

ニ事柄ニ關スル間ニ答フルイヲ拒メリ

私ハ陳述スルイアリ則チ私ノ異論ニ拘ハラズ
テウキンス氏ハ被告代官ノ答ニ答ヘ曰人カ
後差ギハ通行ニタル各齋ヲ指陳セシメク曰人
ト後差ギトノ言ニ為ニタル事柄ヲ申供セシ故
ニ私於テハ只今實ニ曰人カ原告ヨリハ寧コ後
差ギノ方ニ傾カサルヲ得サルト并ニ又曰人於
テハ曰人ト後差ギトノ言ニ契約カアリシトテ
私カ通知セラレシニ付キ他ノ或ル人ニヨウテ
計算ヲ依整ニ并ニ清數セラレスニ自己ニテ之
ヲ依整并ニ清數スルトニ関セシトテ示明スル
向テ曰人ニ尋ヌルトハ自由ナルナリ
テウキンス氏ハ此申供ヲ堅フスル証拠アラサ
ルトノ理由ニテ拒メリ

デニソン氏曰ク自分於テハ該証拠人ト後差ト
ノ言ニ為ニタル任任上ノ通任ヲ現示セサルヘ
シ該証拠人ニ尋子タリ又自己ニ於テハテウキ
ンス氏ト其批証者トノ言ニテ往復セシ各齋ノ
イニ付キテウキンス氏ヲ吟味セシトモアラサ
リニナリ
是下ニ於テハテウキンス氏カチヘタル總証拠
ハ曰シ批証者ノ二名ノ代人即チホウ井タルギ
并ニテウキンス氏トノ間ニ為ニタル任任上ノ
事柄ナリト云ヒ得ニナラン
コレハカルリウードギニ於テテ説セラレシ者
ナリ
デニソン氏云ク我輩ハホウ井タルギカ其時或

ハ其後後差ギノ代人ナリニイテ先諾セヌ所ニ
テ原告ニ左様ニ助テセラレタル後ニ白人ハ此
成キ代人トシテ取扱フイテ只要メルナリ
ソレハ是下カ戻計算ノ修整并ニ清数ナニニ為
ニタル事業ノタメ或ル額ヲ受取ルハリ又是下
カ長寄ヨリ歸リタル後足下若ニ白人ノ依頼ニ
付キ戻計算ヲ修整并ニ清数セニテナリハ尚ホ一
万五千弗或ハ廿四ノ言ヲ足下カ受取ルヘキ契
約ヲ是下ト後差ギトノ旨ニ取結ヒニテノ情実
アリサリシヤ

私ノ取償ノタメノ契約アリニナリ○其契約ハ
カルクウードトギカ申候ニタル由キモノニアラ
サリシ○ソレハ他ノ契約ヲ以テ改メテラレタリ而
シテ他ノ契約ハ何レノ方法ニ於テモ現今ノ所
私ノ結果ニハ停仗セサルナリ
其契約ハ何時改メラレシヤ
幾何月前ノナリ

フレデリック・ウー・デウキンス

同法

附録 三月廿七日

明治十一年三月廿四日

原告代理人於此証人トシテ曰フニ
藤、意、少、乃、ヨ、以、テ、セ、リ、被、告、代、言、人、之、ヲ
知、難、ス

判事曰

原告代理人カ藤、意、少、乃、ヲ、曰、フ、ニ、
ナ、リ、何、ト、シ、レ、ハ、証、人、ト、シ、テ、曰、フ、ニ、
接、セ、ス、レ、テ、カ、ロ、一、サ、ト、証、接、シ、タ、ル、ニ、
サ、ノ、言、フ、所、ニ、果、テ、藤、意、少、乃、ト、シ、テ、
ル、ハ、カ、ラ、ス、又、証、人、ト、シ、テ、曰、フ、ニ、
知、ル、ニ、由、リ、シ、テ、以、テ、原、告、代、言、人、ト、
カ、知、ル、一、ハ、判、事、ト、シ、テ、曰、フ、ニ、
シ、於、是、該、詞、ヲ、止、ム、而、シ、テ、原、告、代、言、人、ト、

ヲ此難ス

原告代理人ハ其ノ旨ヲ証人ニ問フニ信々藤ノ
目的如何ニ及ヘリ此時被告代理人曰
信々藤ノ目的如何ヲ知ラント歟セハ信
孫ト直接ニタルカコトハ問フベクシテ
証人ニ問フヘカラス 數回原告抗辯
の上

別事曰

故障ナキハ此ノ別事之ヲ止メス被
代理人於テ該證據調付故障ヲ申立
シテ其申立ニ道理マケルモノト思料ス由
テ該證據調ヲ止ムヘシ原告代理人
原告代理人許ラザ得テ他ノ證據調ヲ

始ム

別事曰

原告面ヲ認メタル事實ノ問ハ許ス
可レハ其意味ヲ問フヲ許サス何トナ
レハ該手紙ハ証人カカコトザノ年ヲ
受テ認メタル上ハ意味ヲ知ルカコト
サレテ証人ニ此サレハナリ依テ該
証人ニ對シテ其認メタル事實ノ問
ハ起スラズ

原告代理人曰

如此ナレハカコトハナリ破毀スル
能ハス
別事曰

司法省

一 甲、為ナレド、証人出テ又ニ、為ナレド
、証人出テ、甲乙丙丁、累ニ、單出
際限ナレド

一 於此原告代理人、証人吟味ヲ乞フニ
第ニ、申至、申至カ為セリ

同日午後

一 別事原告代理人ニ對シテ

一 申前、申至、第ニ、條ハ、申至、要
ナレド、付同ハ、ナレド、第一、第二、
ハ、其事實、ニ、同フコトナリ

原告代理人曰

一 如口一、ガ、被告、人又ハ、申達
ハ、別事ニ、於テ、認メ、有シヤ

別事曰

一 原告代理人ニ、於テ、カ、被告、人代
人又ハ、申達、ナレド、要申ト、認ム、
ナレド、同フコトナリ

一 於此証人調ヲ始ム

一 原告代理人カ、被告、申至、証人、
認メ、証人、
ニ、示シ、尋問ナルコト

被告代理人曰

一 被告、申至、証人、一、示、文字、ヲ、
コト、証人、コト、示、シ、此、サ、レ、ハ、不、可、
ナレド、思、科、
ス

原告代理人曰

一 被告、申至、証人、一、示、文字、ヲ、
コト、証人、コト、示、シ、此、サ、レ、ハ、不、可、
ナレド、思、科、
ス

判事曰

一 裁判官は視察ニテ問フモノナリト思
科ス

一 証人ノ答ニ付

被告代言人曰

一 道理云々トハ、証人自カ考ヘタル所
ノ原理ナレカ又ハ、問アリタル所ノ道理
ナレカ被告代言人ハ、証人ノ答ハ事實
ニ非スト思科ス

証人ト云ー曰

一 悉ク自カ考ヘニ非ズルコト一サヨリ問
クナリナリ

判事曰

一 然ラハ、証人ノ証言ニテ

被告代言人曰

一 外口一ガカ後、其証言受ルルト名
ニ、第五号ニテ、其連テス然レハ、原
告代言人ハ、証人ニ問フヲ得サルモノナ
リトナシ、証人紙、一ト付原告代言
人ハ、証人ヲ出タル所ナリ

原告代言人曰

一 証人ハ、被告カ言フ所ノ一トシテ、其
出シタルニ非ズ、第一、口ナリ、其言
ハ、被告ニテ、

被告代言人曰

一 第五号ニテ、即チ外口一ガノ言ニ

司法省

クルト破ルカ有ノ原告也言人ハ此証據
人ヲ要セリ有レハ朝証人ト出
シタルハ何ノ為メナリヤ則チ事ノ同ニ原
告也言人ハ被告ヲ予予六号証ト爲メ
ト善ハクリト被告也言人ハ記憶スル
ルニ原告也言人ハ同ニ予予六号証ト爲メ
ノトニ涉ルヲ以テ疑同スルナリ

原告也言人曰

一前ニ第五六号ノ一ナリ今ハ吾ラ
一其是証據調リ始メ

被告也言人曰

一鉄軍艦ニ向ニ該件ニ関係ナキコト
ヲ同フヘキト非ス

原告也言人曰

一関係セリ

証人ト云フ曰

一該同ニ関係ニ関係セズ其ノハ若
ナル様ニ

則チ事曰

一該同ヲ止ムヘシ

原告也言人
之ヲ証據ス

被告也言人曰

一証人カ来リ該答ヲ嫌ハサレ以テ則チ被告
也言人ハ言ニ依リ裁量スルコト該同ヲ

止メラレタリ有レバ口一ガカ英國
行ク云々同ヲ起スヲ得サルヘシ

原告也言人曰

同法省

一 該回ヲ為スニ關係ナキヲ表スル為メナ
リ云々

判事曰

一 前年ナレハ向フヘシ

被告ハ言人曰

一 該回ニテクニレシヨシハルハニ關係

セス向フヘキト非ス

判事曰

一 關係ナキト思料セズ該回ヲ止ムヘシ

判事 原告ハ言人カレクドモ被告

一 原告ハ言人ハ該差止願一併ニ付テハ明カ

ナレ該差止願ニ於テハ被告ハ常ニ該差止願

ヲ為シ被告ハ物ヲ採ルノ様ニテハ此

様ニテハ差止願ニ對シテ効力ヲ見ルヘキ

ナシ又今日近ノ該差止願ハ被告ハ止テ

是ラサレテ自由信スルカ如ク被告ハ

テラサレテ該差止願ヲ止メ被告ハ申立テ

スラ勤メテ然ルヘシ

明治十一年一月廿七日

司法官

明治十二年一月八日 借

「^レニ^レ氏[」]「^レド^レネ^レ氏[」]ヲ^レ勸^レ法^レテ^レ曰

余ノ^レ好^レ尾ノ^レ問[」]ハ^レ即^チ「^レ足^レ下[」]ハ^レ計[」]算[」]調[」]也

就[」]テ[」]同[」]上[」]ヲ[」]要[」]ス[」]ル[」]ヤ[」]レ[」]ハ[」]ノ[」]文[」]字[」]カ[」] 中[」]書[」]ニ

認[」]メ[」]サ[」]ル[」]ヲ[」]拒[」]テ[」]ヤ[」]レ[」]而[」]ノ[」]足[」]下[」]ハ[」]之[」]ニ[」]答[」]ス[」]ル

ニ[」]余[」]ハ[」]能[」]ハ[」]ス[」]ト[」]云[」]ハ[」]サ[」]リ[」]シ[」]ヤ

其[」]時[」]余[」]ノ[」]答[」]ハ[」]思[」]フ[」]ニ[」]中[」]書[」]ヲ[」]視[」]ル[」]ヲ[」]法[」]ニ

タ[」]リ[」]然[」]レ[」]氏[」]「^レデ^レニ^レ氏[」]ハ[」]之[」]ヲ[」]拒[」]ミ[」]タ[」]リ[」]故[」]ニ

余[」]ハ[」]都[」]テ[」]確[」]ク[」]下[」]認[」]ル[」]ニ[」]非[」]レ[」]ハ[」]拒[」]テ[」]ヤ[」]レ[」]能[」]ク

ハ[」]不[」]説[」]レ[」]ヤ[」]中[」]書[」]ト[」]寫[」]ヲ[」]比[」]較[」]ス[」]ル[」]ニ[」]能[」]ク[」]サ[」]ル

カ[」]ヤ

足[」]下[」]ハ[」]中[」]書[」]中[」]ニ[」]於[」]テ[」]計[」]算[」]調[」]を[」]以[」]テ[」]中[」]書[」]ノ[」]字

ノ[」]認[」]メ[」]タ[」]リ[」]ニ[」]ヤ[」]否[」]ヲ[」] 確[」]然[」]知[」]リ[」]得[」]ル[」]ヤ

同 法 省

問

答

問

余ハ在教字ト同一ノ字ノ義ヲ有シタル教
字、本書ニ誤リアリシテ、確知スルモ在教字
ノ字中ニ誤ナル如ク其後、言モ文言上
ノ変化無之有リ、傳抄書ニ誤ナル
ヤ否ハ敢テ保シテ云

是下ハ過日、香港在為中、五字、本書
翰抄書中ニ誤リアリシト云ハサリシヤ

然リ

香港在為中、一五字、就テ、何按
調、代リニ誤ス。調ニ就テ、同上ヲ要ス
ルナレハ、教字ニ付テ、何異同ナルナレハ
是下ニ於テ、先ツ抄書ト寫テ比較セ
サルモ在教、美調云々、教字、何按

二掲ケアリタルヤ否ヲ明言シ得タルヤ否

余ハ在教字中ニ在、計集、調云々、教字
ト同意、教字、誤ナルナレハ、此明言シ得ル
是下ハ、香港在為中、五字、何右寫
中ニ掲ケタル、文言、本書ニ誤ナル
一、明言シ得ルヤ

此時、カルク、ウ、ト、氏ハ、當証據人、裁判
所ニ於テ、直ナルヲ、誤メシタル寫ニ付テ
質問ナレタルモ、ト云フ、譯ヲ以テ、右問、故障
ヲ申シタリ

此時、裁判官ハ、右、テ、コ、シ、氏、同、當、訴
訟、關係、アラサルモノナリ、以テ、之、停止

セラレタリ

此時「テニ」氏曰ク「若シ余カ當証人
人、為証コキ、上ニ此証人調
ハ悉皆之ヲ停止セラレシトシ、當証
人、因人、認ノル者、翰ヤ、有之
音、漢在、留中、五字、就テ、証人調
ヲ受ケタリ、因人、五字、意味、法、
辨明シタリ、故ニ余、同氏、誤者、翰、就
キ、一般ノ知ル所、調、レト、款、止、當証人
人、五音、漢在、留中、五字、本、書、
認、マ、ル、ト、カ、然、ル、言、レ、タ、リ、
但、シ、何、處、同、止、セ、タ、リ、

此時「ハル」ウ、ド、曰、ク、若シ裁判官

「テ」ニ「シ」氏、掲ケタル「寫」中、或ル文
言、ノ、認、メ、キ、ヤ、否、ヲ、定、メ、ン、ル、為、メ、
「證」人、明、白、ナ、レ、バ、無、用、ノ、同、ナ、リ、ト
「證」人、明、白、ナ、レ、バ、無、用、ノ、同、ナ、リ、ト
省、キ、シ、ト、理、止、証、人、明、白、ナ、レ、バ、無、用、ノ、同、ナ、リ、ト
示、
シ、而、テ、後、者、面、中、ニ、掲、ケ、ル、文、字
ニ、認、キ、當、同、ナ、レ、タ、ル、事、ハ、免、ル、是、レ、リ、ト
候、ス、

以、時「テ」ニ「シ」氏曰ク「余、口、為、當証人
ヲ、調、査、ス、ル、法、ハ、ハ、ル、ク、ウ、ド、氏、カ、同、人、ヲ
調、ヘ、タ、ル、方、法、ニ、依、テ、行、フ、之、レ、アル、モ、ノ、ナ、レ、バ、後
以、法、才、法、ノ、不、良、ナル、ハ、即、チ、ハ、ル、ク、ウ、ド、
氏、失、策、ニ、出、ラ、タ、ル、モ、ノ、ナ、レ、バ、同、氏、カ、九

考任ヲ真フモノナリト 信ス甚故ニ「カルクウ
ド」氏ハ書翰申付テノ越之ヲ破定
セシ有メテ書翰ノ寫ヲ以テ當御使
人ヲ御へ名ハ余ハ只カ「カルクウド」氏ノ
女ヲ後ヲ採用シタルノコナリシ也
既ニ當御使人ノ後ニ置カレタレハ同
氏ハ之ヲ再ニ御使アルハ定易ト信ス
此時裁判官曰ク既ニ同ニ停止シ置キタレハ
之方ハ後立ニ親キ^也角辨辨ヲ為スラ
許サス

同

是レ下ニ 初御ニ於テ 書翰申付中ノ五
字ニ親キ御使ノ了解ノ之レアリタルヲ
國知シタリト云言シタルガ後ニ 國知シタルヤ
此時裁判官令レテ曰ク 當御使人御
使ニ 停止ス

「デニソシ」氏曰ク 余ハ當御使人ノ御使
ヘキ控ヲ有スルハ 然レニ長ニ當御使人
ノ初御 (最初「カルクウド」氏ノ御使
ハ之ニ同ラ充シタルモ 余ハ只ニ當御使人
一ガレ三四ノ同ノミナラデハ 變ニ同セサリキ
余ハ余ノ當御使人ノ御使ヲ許カニ成
ルヤ或ハ當御使人ノ御使セシ件ノハ悉
皆之ヲ御使サレヤ承知取シタレ
此時裁判官令レテ曰ク 其方ノ當御使
人ヲ以テ御使アルハ之ヲ許サルモ 當御使
人ノ是レ也ノ口供ヲ悉皆御使マヤ否

今之ヲ改め之セス

「デニソシ」氏曰ク「願クハ余ノ如ク法律ニ裁
マラシトヲシテ其故障ハ即チ余ハ初メ
ニ於テ以テ察サレタル都テノ件ニ就テ初メ
人ヲ為テ法スヘキ程ノ利ヲ有スレハナリ

裁判官「カルクワード」曰ク「其方ハ以テ
海江ニ関シテ初メ初メ書ク所ナリシヤ
「カルクワード」之ニ答テ曰ク「余ハ尚ホ「ドネー」
及ヒ「ケス」井ツク「アム」氏且ツ「ふ」教人ヲ初
ヘサルヲ得ス

裁判官曰ク「デニソシ」氏、此初メ初メ人若
法ヲ行サリシ故ニ其方モ然ク再ヒ初
アルノ程ナシ

「カルクワード」曰ク「デニソシ」氏ハ「己」初メ初メ人若
法ヲ行サレタルモノニシテ只「同」氏カ「同」係アラサル
同ヲ裁ケタル故ヲ以テ「暫」時對裁判官ヨリ
停止セラレタルノミニ止マルモノナリ而シテ余ハ
「余」先代主人タルノ限ヲ有スレハ「當」初メ初メ
人ヲ再法ナスヘキ程ノ利アリト「確」信ス
以テ對裁判官ハ「再」法ノ停止ヲ申付
ス

裁判官「カルクワード」氏曰ク「如クナル
事ニ付キ「同」氏ハ「何」ナル者ニシテ以テ其方ハ
「ケ」ジツク「氏」ヲ初メ初メ人若
「同」氏曰ク「「同」氏ハ左ノ教人ニ付キ「ケ」ジツク
「同」氏ハ「同」氏ナリ

○ 第一 湯島氏ノ原告人ニ對シテノ莫大ナル
ル更ノ債ヲ償ハセシメルメ

○ 第二 龜山及ヒ梅城ハ原告ヨリ其債
ヲ返済 置キタル

○ 第三 梅城ノ原告ノ所有タルヘキ
茨四系告人ハ既ニ返済ハシテ入置キタル

○ 千八百九十二年及ヒ其後七十六年ノ
契約ヲ履行ハシ加ヒ之ヲ其ノ其ノ細事

ノ事分ノ原告人ガ履行セザルハ以テ白
ナルモ其ハ被告人ノ承諾ヲ以テ履行ハ

○ セザリシモノナリト云フコトヲ 被告主ツヘキ
又五日下被告人ノ承諾及ヒ 被告主ツ

○ 置タル債地及ヒ其他ノ状況ニ付キ 被告主ツ

○ 及ヒ梅城等ノ日ニ是報ノ中ニ置カレ
ルコトヲ

○ 第六 其ノ理由ヨリ 申渡幾度ノ日マデ
被告等ハ之レヲラガルコトノ原告人ハ

○ 大ナル損害ヲ蒙ラシムルコト
其ハ被告等ノ承諾ニ付シタル

○ 第七 條ハ余カケジツクニ氏ヲ補ベトシ
スルニ原ノ承諾ニ付シタル

○ 此時ニテニシテ氏ガ債ヲ申立テ曰ク余ハ
初補ニ付テ問ハレタルダケノ点ニ付テ原告

○ ノ自由ヲ裁判官臨マヘラル、是ハ原告
人ノ承諾ニ付テケジツクニ及ヒ其ノ他、

○ 初補ヲ拒ミ申候
其時ニテニシテ氏曰ク余ハ次ノ事案問ハトシ

○ 初補ヲ拒ミ申候

氏ノ當座へ出臥アルヘキ哉以テ令
コレアリタレ

「カルクワード」星氏ノ備年ニテ曰ク「當
海江ニ就テテ教テノ多ク後ハ既ニ公ニ判
事申取ノ行テテ去ル十二月十八日於
ラ星氏ト御来シタルモコレテ裁判記
録ニ於テ餘ノノ事ヲ諾アルモ此レハ右
御来ニ之ヲ違フ背スヘキ様ヲ御告代
テ人ニ有サヌモノナリ」而シテ余ハ此約
束ヲ履行セシト雖モ其解約ノ事法
セズニテ之ヲ違フ親テノ以テ此レ他
ノ懸念タル様行テテ後テ其効ヲ
失ハサルモノナリ

此時裁判官白リ事彼両方ノ事ハ既
ヒタル御来ニ之ニ於テ豫ノ起ラサルモ此有
効ナルモノナリ故ニ御告代テ人カ於豫
ヲ至長スル以上ハ其方ヲ行テテ第一ニ
法律上ノ後備ヲ備述シ之ラレテ彼
御告代テ人ニ之ヲ備セシムルニ當リテ
ト法定メス其理由ニ即テ其方ハ東京
裁判所ノ裁判ハ法律上ニ於テ心ノモノナリ
トシテ當座ノ控訴ハ行ラレバナリ

明治十二年一月八日口供

被告代言人

星 亨

一 被告代言人等本件申立手續ニ付申上候原告
代言人ハ去ル十二月九日ニ於テ判官殿ノ席
下諭ニ應シ法律ニ管スル申立ハ証拠人ヲ吟
味シタル後唇面ヲ以テ可申立ト申立タリ故
ニ原告代言人ハ原被告カ各其証拠人ヲ吟味
シタル後ハ彼ノ九日ニ於テ申立タル如ク法
律上ノ論弁ヲ唇面ヲ以テ申立候様致度而シ
テ被告ハ已ニ呈シタル答弁唇中ニ言尽サリ、
ル廉有之トキハ其言ヒ尽サ、ル分丈ケテ申
立尋テ原告代言人ハ本件ノ全体ニ付再ヒ答

并致サセ度ハ蓋シ此手續ハ当所裁判所ノ手
續ニ適合セシモノト存候
右之通相違不申上候以上

右

明治十二年一月八日 星 亨 (印)

東京上等裁判所
西瀉判事殿

追加

一 前述ノ申立ハ、我裁判所ノ手續ニ適合シタル
モノナリ抑訴訟人ノ私約ヲ以テ裁判所ノ成
規ヲ破ルヲ得サルモノナリ是天下ノ通理ナ

リ故ニ訴訟人ノ間ニ在テ如何ナル約束ヲ結
フモ此成規ヲ破ルヲ得サルモノト存候

明治十二年一月十一日口供

被告代理人

星 亨

一 被告代理人申上候原告代理人ハケスウ弁ツ
 キラ吟味スル所ノケ條ノ第一第二第三ニ付
 判事殿カ令セラレタルヲ誤解シ申立ル其
 誤解トハ曩キニ判事殿カ令セラレタル言ニ
 付キ見レハ明ナリ其判事殿ノ令セラレタル
 ハ即チ第一第二第三ノケ條ハ己ニ原告ヨリ
 書面ヲ差出シタルニ付其書面ニ記載シアル
 丈ケノ事柄ハ明カナリ故ニ其記載シアル丈
 ケノ事柄ニ付ケスウ弁ツキヲ以テ証言スル
 ハ無用ナリトノ意ニシテ決テ原告代理人カ

強テ想像スルカ如ク詠ニケ条ニ付判事殿ノ
令スルノ意ハ其ニケ条ニ管スル各類ニ記載
セシテ柄ガ實際存在シ且ツ十分ニ証明セラ
レ後日ニ至ラ之ヲ拒ムラ得サルトノ意ニハ
非ルナリ

一 原告代官人ハ判事殿ノ命令ハ英語ヲ以テ記
スルモノヲ原唇トナシ且ツ裁判所ハ其英語
ノ意味ニ依テ束縛セララル、ナルベシト申立
ルト虽モ当裁判所ニ於テ用フル詞ハ即ケ日
本語ナリ故ニ裁判官ガ令スル言ハ一々日本
ノ語ヲ以テ原唇トナシ又其詞ノ意味ニ拠テ
束縛セララルヘキモノト存候此全國中ニ裁判
所ニ於テ慣行スル例規ト存候

右之通相違不申上候以上

右

明治十二年一月十日

星

亨不

東京上等裁判所

西瀆判事殿

明治十二年一月十一日口供

裁判官「カルクード」ニ問テ曰ク「貴方ハ前審問ノ

際ニ於テ「ケジツク」氏ヲ証人トシテ調ケルト

陳述シタリシガ「田」氏ノ外ニ他ノ証人ヲ調ヘ

ント欲スルカ

「カルクード」曰ク「余ハ今豫メ其調否ヲ陳述スル

能ハス

余ハ被告が此上被告ノ証人ヲ調ケルニ依リテ

レバ敢テ他ノ証人ヲ調ケルノ意ナシニテ

被告証人ノ証言ニ従テ余ハ他ノ証人ノ調

否ヲ視ルヘシ

裁判官「カルクード」ニ問テ曰ク「前審問ニ於テ貴

方ノ「ケジツク」氏ヲ調ケル為メニ陳ヘタル理由

ヲ見ルニ初メノ三点ニテ曰ク酒フルハ目下
不要ニ属スヘシ其故如何トナレハ戻三点ハ其
方カ已ニ差出シタル方類ニ記載アレハナリ
中四及ヒ才五ノ兩点ハ当訴証ニ関セズシテ本
訴ニ係ル故ニ此ノ兩点ニ就テケジツクモ酒
フルヲ免サズ才六点ニ就テノ証松酒ハ当訴松
人ノ實際知ル所ノ事実ノシニ付キ之ヲ許ス才
七点ハ当証松人ヲ酒フル処ノ点ニアラズ右ノ
外尚ホ数点ニ就テ当証松人ヲ酒フルヲ要ス
ト殊ヘタレ凡其数点ヲ明ニセサレバ之ヲ許サ
ス其方ハ今日マテ在多ノ例ヲ取シタリシガ右
ハ悉ク本訴ニ関シテ尚禁論ニ係ラズト虽氏
戈判有ハ或ハ当訴証ニ関係アルヲ以テ其明ニハ

ニト思フ故ニ之ヲ許可セリ然レ氏ハ其多訴証
ニ係ルヲサル例ヲ取ス其ハ戈判官ハ速ニ之ヲ
禁止スベシ而メ其方ハ今才六点ニ就テ当証松
人ヲ酒フルヲ許ラス
カルリド曰ク戈判官が余ノ初メノ三点ニ就
テケジツクモ氏ヲ酒フルハ既ニ進呈モタル証
松有妻ニ依テ十分証松立テラレタルト云フ
ハ之ヲ了解ス然リ而メ戈判官ハ此ノ理由ヲ以
テ余ノ後三点ニ就キケジツクモ氏ヲ酒フルヲ
止ムト知ル而メ戈判官ハ中才五ハ当訴証ニ
関セサルモノト令セリ其故ハ即才五ノ兩点ハ
寧ろ本訴ニ属シテ当禁論訴証ニ関セサルヲ以
テナリ是ヲ以テ余ハ戈判官ニ於テハ其判令ニ

依リテ余カ右ニテ解_レ成_シ在_ル如ク曰一ノ中判
 令ヲ為サレタリトノ心組ニテケジウク氏ヲ調
 ベニトス余ハ戈_ノお友_ノお令_ノ莫_ク文_ニ信_リタルハ
 当_レ証_レ記録_ノ女_ヲ下_レシテ戈_ノお友_ノ諸_ノ子_ニ依_テ
 出_テ下_サルヲ得_サルモト思量_ス
 戈_ノお友_曰ク女_方ハ先_ウ沖_六点_ニ基_ヒテ証_レ松_調
 ヲ始_ムベシ然_レ氏_前ニ女_方ハ戈_ノお友_カ持_テ証
 松_ニ立_ウ或_ハ立_タサハト思量_ニ付_右ニ臆_レ説_ヲ
 述_ハタレ氏_斯ノ如_キ臆_説ハ戈_ノお友_ニ持_テ之_ヲ要
 セス女_友ハ収_尾証_決ノ付_ナラ_ズハ右_証不_証ノ
 件_ニ付_女証_決ヲ下_サレハナリ
 カルクド_曰ク裁_判お友_ハ余_ノ意_ヲ誤_解スト思
 考_ス余_カ右_ニ陳_述シタル方_意ハ即_チ當_レ戈_ノお友_所

ノお決_ヲ不服_ト証_メ上_告スル際_特ニ_テ御_取申_上且
 ヲ松_庭ノ情_況アルニ照_サレハ大_審院_ノ更_ニ女
 他_ノ証_松ヲ呈_スル能_ハサルヲ以_テ當_レ戈_ノお友_所
 記録_ノ此_ニ基_ヒテ上_告ヲ得_サレハナリ爰_ヲ以_テ
 テ當_レ証_松ヲ補_翼スル為_メニ學_用ト_証ムル女_ノ
 証_松ヲ悉_ク當_レ証_ニ呈_スルハ余_ノ職_務ナリト行
 之_レ若_シ戈_ノお友_カ此_ノ如_ク証_ニテ受_理スルヲ拒
 ム片_ハ只_思フニ次_ノ二_理由_ナルベシ一ハ即_チ
 其_當証_松ニ関_セサルヲ以_テナリ而_テ一ハ即_チ
 其_當証_松を_証明_セン為_メニ呈_スル所_ノ証_松ハ既_ニ
 已_ニ充_分証_松立_ラレタルヲ以_テナリ余_ハ戈
 お友_ヲ以_テ女_友お令_曰ク女_友お令_ニ依_テ余_ノ陳_述
 セ_ル所_ノ理_由ニ就_テ注_目ヲ要_セニメザルヲ得

又加之下ゴヤお所ニ於テ余ノ具陳セシ外ノ事
實ハ不完分ノ証ナリトモテ當訴証ヲ許スコトヲ
拒ミタリ故ニ余ノ前案ノ申立ニ付テお友ハ注
目アラレテ欲ス
カルクードヤお友ニ問フテ曰クヤお友ノお令
莫訳ヲハテヤお友ヲ下スカ否ヲ知ラシメニテ
之ヲ

又お友曰ク今原告代官ハお友ノ下令ハ日本
文或ハ英文ヲ以テスルカ又ハ日本文ヲ以テヤ
お所記録ハお友ト爲スカ或ハ通弁官ノ訳文ヲ
以テスルカヲ疑問スト虽氏當所ハ余ヨリ日本
國ノヤお所ナルヲ以テヤお友ハ日本ノ風ニ從
テヤお友ヲ訳文ハ唯ニ原告ノ便宜ヲ甚シクス

ルノミニシテ之ヲ以テヤお友ノ確令ト
ナサズ

カルタカドド曰ク大審院ハ唯ニ不法ナルモノ
ヲ破毀スルニ止ル不メ當ヤお所ニ於テ或ハ酒
ヲ止ムルハ之ヲ固所ノ記録ニ備フテテ若シヤ
お令タル法ニ違セサルハ大審院ニ於テ之ヲ
破毀ス生シモ多庭中ハヤお友ノお令且ツ意見
ハ毫モ之ヲ変更スル能ハス又タ固所ノヤお友
ハ大審院ニ於テハ此ヲ破毀シ彼ヲ破毀セザル
ハ余ヨリ決定スル能ハス今原告代官ハ初メ
ノ三点ニ就テケジツクモ証松酒ヲ禁止セラ
レタリ之ヲ以テ原告代官ハ此ノ三点ニ就テ
ノ証言ハ悉ク業止セラレタルト決ス然レ氏斯

ハ原告代理人ノ誤ナリ原告代理人ハ初メノ二
点ニ就テハ既ニ書类ヲ以テ之ヲ進退セリ右ハ
其実当証人即チシヤルデニマセソシ社ヨリ
之ヲ出セリ故ニ既ニ進呈ニタル書类ニ依テ明
シカナレバ爰ニ口演ヲ以テ再ヒスルハ寧ロ明
要ニ属ス又タ原告ガ鏡山且ツ樺木ノ為メニ若
干金ヲ払ヒシコトハ原告ノ差出ニタル書類
中ニ於テ明瞭ナリ才三点ハ即チ樺木ハ原告ノ
ニ属スルノ語ナリ右ハ法律上ノ間ニシテ原告
原告代理人カ之ヲ論弁セリ故ニ該点ニ就テ当
証人ヲ調フルコトヲ要セズ以上理由ニテ原告
及ハ該諸点ニ就テ当証人ノ調ハテ書类ニ於テ
凡該諸点ニ就テノ証言ハ決テ拒ムコトヲカ
ル

ナリ
又被告曰ク其方ハ既ニ供述セシ如ク最初ケ
ツクテラ調フベシ而メ尚ホおニ証人ヲ調ハ
ント欲スルナレバ先ツ其証人ヲ被告ニ通
スベシ然ラバ其旨否ヲ決スベシ

附録一月十八日

証人
ドネーナリ

明治十二年一月一日

判事被告代理人デニソシへ若し

一は証人調ハ該証人ニ付費用ナラサルモノト認

ルニ因リ只今ノ原告代理人ノ非難ニ拘

ハラズ此証人調ヲ中止ス

該局デニソシ於テ該証人ノ証人調ハ都テ取

消ノ様ニ成交スル中ニ立ニ付申事曰

一該証人へ若し証人調ハ申事許サス而シ

テ取消スト若トハ後ニ整理ニ由ルニ決

スヘシ

おる原告代理人へ若し

一控訴ノ趣意中ニ立ハ最モ早キ信ニシヤ

原告代理人曰

司法省

一此証人ヲ再ニ取調フルノ権アリ又新
タル証人ヲ取調ス

お事曰

一過日該証人ノ証候調ハ停止置ケリ
依テ取調フルニ及ラズ

原告代官人曰

一被告代官人ノ此証人ニ對シニ取調
ケルコトアリ右取調タル權ニ對シ取調
交

お事曰

一該証人ハ取調フルニ及ラス

原告代官人曰

一ケスベキヲ取調交

お事曰

一此コトナル廉ヲ取調ルヤケルヲ以テ申
出ツヘシ

一因テ原告代官人ハ七ヶ条ノ申立ヲおセ
リ

一法律上論議ノ儀ニ付原告被告ニ於テ
ヲ以テお事ヲ左ノ如クお事ヲ下ス

一去月十日原告被告ノ約束ハ原告ニ於テ
障ナシハ被告ニ於テ被告ニ於テ取調ヲ

申立タル上裁断お事ハ原告法即チ一
般ノ訴訟手續ニ依リテ得ルハ先ツ

原告ヨリ法律上論議書ヲ呈シ被告
出シカモ原告ハモトメテ被告

司法省

法ノミナラスル事理ヲ於テモ當然ナリトス何
トナレハ原告控訴状ヲ東京裁判所ノ
裁断ハ法律ニ適セザル趣ヲ記載セリ
然ルモ原告於テ法律上ノ論ノ為テ
即チ控訴ノ趣旨ナリ原告カ控訴ノ趣
旨ヲ述ヘスニテ原告ノ待ツ理由ナレ
ハナリ

被告代理人曰

一ドホー証據調ノ假ハ今一度御許可
有之ヤ
おる事由
一動考スヘモ

明治十二年一月十日

判事原告代理人へ對シテ

一去ルハ日々スウ井一キニ依テ証據立ノ假
ヲ申立タリ此ケスウ井一キノ外ニモ証人
有之ヤ

原告代理人曰

一唯今ノ所ニテハ預メ申上ラレス被告代
言人於テ証據調ヲセハ夫ニ就テ又証
據調ヲナストモ可有イケレバ唯今ノ所
ニテハケスウ井一キニテ是レリト思ヘリ

判事曰

一去ルハ日々スウ井一キニ對シ証據立ラ

同法

のサントスと云ふ事ヲ見ルニ第一第二第三
ハ既ニ原告証據等類ニ記載アルヲ以テ
今又証言ヲ聴リニ及ハス第四第五ハ
專ラ被告証據スルニテ差止願ニ要
用ナラス故ニ此証據調ヲ許サス第六ニ
至テ被告カ負債ヲ払フヲ能ハサル
鑛山ノ器械ヲ使用シ石炭ヲ掘出居
ハ原告ニ危険アル云々トハ証人ノ実
際知ル所ノ事實ヲ申立ルヲ許ス
第七ニ至テハ証人ニ問フヘキトナラサル故
ニ証人ノ申立ヲ聴リニ及ハス其外細
小ノ事ニ至ラハ云々トマルハ云々モ明カ
ナラサル故ニ此証據調ヲ許サス元來原告

告代言人ハ此迄テ訴ニ關係ノ証據立
ト見ユルモノ屬ク有之然レ其内ニハ
差押ノ事ニ取纏メルナラント思料シ
聽居レリ然レ其今日ニ至ル迄其申立
モ無ク此上ハ一切大テ訴ニ關係スルモノ
ト認ルルハ証據立ヲ聴カス故ニ八日申
立ケ条ノ内第六ノ事實ノ吟味ヲ始
ムヘシ

原告代言人曰

第一第二第三ノ証據調ヲ許サレサル
ハ此迄差出シタル証據等類ニテ明カ
ナリト裁判官カ思料セラルハ故ニ許
サレサルト思惟ス第四第五ハ差止願

同法

ニ關係セスト判決セラレタル故ニ第六ノ
廉ニ付ケスウ井一キヲ取調フヘシ云々
又ソ英文ノ方ニテ裁判所ヘ記録相成ル
トト思料ス

判事曰

一第六ノ證據調ヲ為スヘシ作供原告
代官人カ只今ノ申立ハ裁判官ノ思料
ヲ推量シテ申立タリ裁お友ノ思料ハ
めつナル點ニアルヤお決ヲ待テ知ルモノ
ニテ預ノ推量ノ申立ヲ為スニ及ハス

原告代官人曰

一裁判所ノ記録ハ英文ナルヤ
判事曰

一日本裁判所ニテ日本裁判官カ言フ
所ノ言ハ日本文字ヲ以テ記載スヘキト
ナリ然ルニ原告口供ヘ英語ヲ以テ譯シ
アルモノハ一時ノ便宜ヲ以テ原告ニ示スニ
便利ヲ謀リタルモノニテ裁判所ノ慣行ニ
アラス

原告代官人曰

一大審院上告ノ節當廳ヘ不差出
立新ナル證據ハ差出サレサル故ニ證據物
ハ可成當廳ヘ差出置度又此證據立
テ許サレサルハ二ツノ道理ト思料ス其
一ハ不差出願ニ關係ナキ故ニ許サレス
其ニハ差出シタル證據ハ沢山ア

同法省

リテ明カナル故ニ許サレヌ故ニ前判決
ハ息ク大切ナル判決ト思料ス又東
宗裁判所ニテハ証拠カ不足ナル故ニ
止願ヲ許サレサル故ニ当廳ヘハ成ルヘリ
差出交ナリ

判事曰

一 大審院ハ不法ナルヲ破毀スルモノナ
リ而シテ此裁判所カ証拠調ヲ許
サ、ルコトハ載テ記録ニアリ若シ許
スヘキモノヲ許サスハ大審院ハ不法トシ
テ破毀スヘシ且上告ノ慮リノ為メニ
当法庭カ已レノ見込ヲ猶豫スルコ
ト能ハス又原告ハ第一第二第三ノ証

據調ヲ差止タルニ付証拠ヲ入ル、コトヲ法
庭カ拒絶シタルト思ヘルハ甚タシキ誤リ
ナリ第一第二ノコトニ至テハ原告ノ既
ニ差出シタル証拠書類ニ記載シアリ
此書類ヲ出シタルモノハ即ケ今ノ証
人即ケゲアーデン、モソシ社中ナリ然レハ
別ニ証言ヲ聞ニ及ハスト云、意味ナリ
又第二、鐘山及苦楸ノ人並ヲ出シタル
ト云フコトハ証拠書類ニ最モ能ク明カ
ニ記載アリ第三ノ点ニ至テハ此苦楸ハ
原告ヨリ金ヲ出シタルモノ故ニ原告ノ所
有ナリト云フコトニテ此ハ法律上ニ係ル論
点カ重モニアリ此論ハ既ニ原告代官

司法省

ノ申立モアルトニテ証人ニ問フヘキトニ
非スル此事ナルニ依リ之ヲ差止タルナリ
証據ヲ入ル、トテ無故拒ルニ決テ無之

明治十二年一月十三日口供

「カルクウ」曰ク「ト」氏ノ証明ナシタル
件々ハ既ニ二日間モ満費シ加之裁判官ニ於テ
之ヲ領収セラレタルモノナレハ古証明ノ部分
ヲ却取消ニ相成ルト余ニ於テ之ヲ肯セズ
裁判官ハ故障アラサル質問ニ應シタル故障ア
ラサル答ヲ取消ス可キ権ナシ若シ裁判官ガ右
取消ノ権ヲ有スルモノナレハ余ハ証拠調ニ數
時間ヲ徒勞ニ費スヘキ恐レナキヲ免レサルベ
シ其理由ハ裁判官カ取消サレサル部分ハ取消
サレタル部分ト比較スルニ非サレバ悉皆其趣
意ヲ了解シ能ハサレハナリ
然リト虽モ裁判官ニ於テ証人ハ到底信用ヲ

置キ難キ者ト認マル場合ニ於テハ右証人ノ
証明ナシタル件々ヲ悉皆取消サル、ノ權ナキ
ニシモ非ラサレ氏余ハ目下裁判官カ証人ノ
答ヲ全ク終リタル後ニ至テ同人ノ証明ナシタ
ルモノハ多分ヲ取消サル、トハ余ニ於テ之ヲ
解シ能ハス

余ハ裁判官カ「タローザ氏ノ三通ノ各翰及ヒ其
狀況ニ就キ余ノ証人タル「ドーネ」氏ノ証明
ノ多分ハ取消サル、モ尚ホ被告代言人カ進呈
ナシタル右三通ノ各翰ハ証人トシテ之ヲ領収
シ得ヘキモノト令セラル、ヤ否ヲ承知セント
欲ス

「ド」氏曰ク証人ノ申立ハ被告代言人ノ同

証人對詰後及ヒ右對詰權ヲ放棄シタル後ナ
ラテハ証人トナルヘキ効ナシ

余ハ未タ証人對詰ヲ完全ナシタニモ之レ無
ク又ハ右對詰權ヲ放棄ナシタル覺モ之レナシ
余ハ「ド」氏ノ千八百七十七年一月二十二
日附ノ各翰ニ就テ「タローザ」氏ヨリ得タル認
權ハ部理及ヒ總理ナルヤ点ニ付キ「ド」氏
ヲ對詰ナシタルモノノミナリ
「カルクウ」氏曰ク右「ド」氏ノ陳述ハ駁
テ免レサルモノナリ其故ハ同氏ハ既ニ當証人
人ヲ對詰ナシタルモノニシテ唯裁判官カ同氏
ノ問フ關係アラサルモノト認メラレタル故之
レヲ中止サレタルモノノミナリ

此時裁判官曰ク余ハ「ローザ」ノ二通ノ唇翰ニ
就テ「ド」ネ「ノ」証明ハ未タ悉皆之ヲ取消シ
タルヲナシ

既ニ被告代言人へ申聞セタル如キ一人ノ証明
ノ一部分ハ之ヲ取消シ一部分ハ之ヲ存スル等
ノ「ハ」為「能」ハサルモノナリ故ニ「ド」ネ「ノ」氏
ノ証明「ローザ」ノ唇翰ヲ証立ツルニ堪ユヘ
キモノナルヤ否ハ後日収尾ノ裁判申渡ニ依リ
テ之ヲ知ルヘシ

「カルクウ」ド「ゲ」レツク氏ヲ調べテ曰ク

問 足下ノ姓名ハ如何

答 「ド」エ「ム」ス「レ」ヨ「ニ」ス「ト」ニ「ケ」レツクナリ余
ハ原告會社ノ一員ニシテ當時日本橋濱第

一番ニ住居ス

問 足下ハ原告會社ノ当所ニ於テノ支配員ナ

ルヤ

答 然リ

問 足下ハ何ツ頃ヨリ事業支配ヲ擔當ナレタ

ヤ

答 千八百七十六年一月中

問 足下ハ何ツ頃日本へ来着ナレタルヤ

答 千八百七十五年八月中

問 足下カ千八百七十六年一月中事業支配ヲ

擔當セラレタル片後為氏ハ金融上何如ナ

ル地位ニ在リタルヤ

答 同氏ハ余カ會社ヨリ月々遣ハシタル金額

(アリモネー)ノ外ハ悉皆金融ノ自由ヲ失ヒ
居リタリ

問 足下ハ被告人カ鑛山ノ地券ヲ渡シ居レハ
キ旨ヲ足下ノ會社へ依頼ナシタルトテ記
憶スルヤ

答 然リ

問 何ワ頃ナルヤ

答 千八百七十五年八月中

問 何故右地券ヲ入用ナリト後藤氏ハ云ヒタ
ルヤ

答 同氏ハ高島坑山ニ沿フタル對島ノ所有証
ヲ右地券へ記入致度旨ヲ以テ入用ナリト
申シタリ

此時被告代言人故障ヲ容レタリ

此時裁判官令シテ曰ク悉皆間ハ千八百七十八

年一月以降ノトニ就テノミ為スベシ

「カルクウード」曰ク余ハ裁判官ガ千八百七十八

年一月一日此前ノ事實ニ就テハ當証人ヲ調

フルトテ禁止セラレタルモノナリト信ス故ニ

余ハ右令ニ基キ証人調ヲ致スモ余ハ強テ右令

ニ對シ故障ス其故ハ即チ余カ後藤象二郎ハ主

重ナル關係ヲ有スル所持及ヒ管理スルニ堪ユ

ヘキ品行ノ人ニ之レアラサルトテ証人立ツル

ト能ハサレバナリ

此時トシソニ氏故障ニ加之裁判官ガ右等ノ問

ヨリ被告人ヲ保護セシトテ乞ヒタリ其理由ハ

即チ後藤氏ノ不正ナル所行及ヒ同氏カ詭偽ニ依リ金圓ヲ得タル等ノ毫末ノ証モアラサレハナリ

右等ノ問ハ原被双方共同様裁判官ニ保護ヲ乞フ可キ權アリ

「カルクウー」ト「氏」デ「ソ」ニ氏ニ對テ曰ク余ハ余ノ証如立ツヘキ地位ニ居テ所要ト認メル点ノミニ付キ被告人ニ對シテ襲辨ヲ逞フスルヲ欲セス

余ハ代言人ノ分限ヲ僭過セス而シテ余カ目下ノ故障ハ大ニ其範圍ヲ狭ハメラレタリ其理由ハ即チ裁判官ハ余カ鑛山カ目下危険ナル地位ニ置カレタルト云フ一ツノ理由ハ即チ被告人

ノ所行ナリ

被告人ノ如キハ品行及ヒ庸耻等ヲ弁ヘ又人ナレハ貴重ナル鑛山等ハ所持スベカラサルモノナリ

余ハ尚ホ裁判官ノ令ニ故障ス其故ハ即チ裁判官ハ余カ後藤象二郎ハ千八百七十五年己降ハ判然其以前モ蓋シ可破産ノ位置ニ在リタルヲ証據立ツルヲ禁シテシタルハナリ其外同氏ノ可破産ノ状態ハ公衆一般ノ知ル所トナリタレハ同氏ノ原告ト契約ヲシタル目的即チ鑛山ニ大ナル損害ヲ醸ス程ノ無益ノ契約ヲモ肯スルナラテハ公衆一般カ同氏ヘ信ヲ置キ約束等一般取結ハサルベシ

右等ノ点ハ第六条中ニ含蓄シアルニ付過日裁
判官カ余カ「ケジツク」氏ヲ右点ニ付キ調ブヘキ
許可ヲ為シタリ

此時「デニソ」氏ハ右被告ノ詐偽及ヒ其騙欺ニ
ヨリ金田ヲ得タル等ノ問ニ付キ故障ス
「カルクウー」ト「ケジツク」ニ問フテ曰ク

問 千八百七十八年一月中被告人ハ且下ニ金
田ヲ借用シ度キ旨ヲ申入レタル「フ」之レア
ルヤ

答 然リ

問 此遷延ノ請取則チ「ウ」号ハ同氏ノ請取
書ナルヤ

答 然リ

問 千八百七十八年一月中右ノ外其他金田若
干ヲ被告人ヘ拂ヒタル「フ」アルヤ

答 然リ

問 其額幾何ナリシヤ

答 負債者ノ請求ニヨリ被告人カ拂ハサルヲ
得サリシ金額ニテ(其田ナルカ或ハ弗ナル
カヲ保証セサルモ)六千田或ハ弗ナリキ

問 右金額ハ且下カ被告人ノ再度切ナル依頼
ヲ受ケタル後チ拂ヒタルモノナルヤ否ヤ

答 後藤象二郎氏ハ右金田拂渡前數年間再々
切ニ借金ヲ致シ度キ旨ヲ依頼スル癖アリ
右場合ニ於テモ失張リ被告人ハ誤癖ヲ打
捨テサリキ

問 呈下ハ何故一千円ヲ被告人へ拂ヒタルヤ
答 給育料トシテ拂ヒタリ

問 呈下ハ千八百七十八年中被告ノ依頼ニヨ
リ同氏ノ為メニ政府へ夥多ノ金円ヲ拂ヒ
シヤ
答 然リ

問 右政府へ對シテノ仕拂ハ如何ナル方法ニ
テ為サレタルヤ
答 右仕拂ハ原告會社ノ責任ヲ負フタル為替
手形ヲ大藏省中國債寮へ引渡シタル方法
ニ依テ為シタリ

問 此「ダブリユー」号ハ被告ノ請取ナルヤ
答 然リ

問 呈下ハ何頃右為替手形ノ期限ハ来ルモノ
ナルヤヲ知ルヤ
答 毎月一日ナリ

問 古為替手形ハ何円ヲ額ハシタルモノナル
ヤ
答 右手形中六箇ハ五千円一箇ハ二千五百円
ナリキ

問 然テハ三万二千五百円ノ為替手形ハ既ニ
拂ハレ而シテ千六百五十円ノ手形ハ拂ハ
ル可ク差出サレタルモノナリヤ
答 三万二千五百円ノ為替手形ハ悉皆原告會
社ニ於テ仕拂ヒタリ而シテ千六百五十円
ノ為替手形ハ余カ記憶ヲシテ正シカラシ

ノハ一千八百七十八年七月カ或ハ八月哉ニ
其期限ニ至リタレ氏金田ト引替ノ請求ハ
ナカリキ

問 何故是下ハ右拂ヲ被告ヘ為シタルヤ

答 後藤氏ガ自カラ仕拂フ能ハサレハナリ

「デニソニ氏カ右等ノ問ニ故障ヲナシタリ其理
由ハ原告代言人ハ当証人ニ對シテ誘問スレ
ハナリ

問 後藤親カラ右様話シタルヤ

答 同氏ハ平常ノ癖ニ依リ親カラ申聞ケタリ

問 後藤氏ハ再々何ヲ申癖アリシヤ

答 後藤氏ハ再々余ニ語テ曰ク高寫坑山ニ就
キテノ良キ望之レアラハ早晚余輩ヨリ借

用ナシタル金田ハ該坑山ノ利益ヲ以テ未
来ニハ仕拂モ相成ルハ瞭然ナレ氏何分夫
レ迄ハ余輩ヨリ後藤氏へ月々遣ハス處ノ
金田ノミナラデハ融通絶テ之レナキト云
ヘリ

問 是下ハ月々給育金トシテ或田ヲ同氏へ與
ヘタルヤ

答 常ニ千田宛拂ヒタレ氏時トシテハ格段ナ
ル理由ノ為メニ右金額ハ加減ナシタルヲ
アリ

問 是下ハ三万二千五百田ノ為替手形引替後
及ヒ千六百五十田及ヒ六千田ノ為替手形
ヲ債主ノ請求ニ充ツヘキ後藤へ遣ハシ加

之千八百七十八年一月廿八日ニ於テ給育
金トシテ千円ヲ遣ハシタル後被告ハ何ヲ
云ヒタルヤ

答 被告人ハ密ニ失踪シ高島坑山ヲ暴認シタ
リ

明治十二年一月十三日口供

被告代言人

星 亨

一 去ル八日ノ對審ニ於テ原告代言人カ其証
拠入ノ一人ナルドネー氏ヲ吟味シタル後
被告代言人カ同ノ付及對ノ吟味ヲ爲シ
カケタル中判事殿ハ被告代言人ノドネー
氏ヲ吟味スルヲ差止メラレタリ而シテ
同日午後ニ於テ被告代言人ハ判事殿ニ向
ヒ判事殿ノ同日午前ニ於テドネー氏ヲ吟味シ
熟ラノ判決再考ヲ願ヒタリ依テ被告代言
人ハ本日判事殿ノ御再考結果ヲ差リ度候

判事曰

一 再考スレドモドネー取調ノ要用ナル点ヲ
見出サズ

被告代言人曰

一 此レハ判事殿カ被告代言人ヲシテドネー
ヲ吟味セシメサルハ全体ドネーノ証言ス
ル所ハ都テ本件ニ對シ不用ナルモノト御
見做シ有之テドネーノ吟味ヲ御差止メ相
成リタレ儀ニ有之候

判事曰

一 其事ハ既ニデニソレヨリドネー証言取調
ノ儀ヲ申立タル節判決シ置タリ

被告代言人曰

一 去ルハ日ニ於テ判事殿ノデニソレノ願ニ

証ニ判決セラレタルハドネー氏ノ証言採
用又ハ不採用ハ後考ニ付スベシトノリニ
有之候仍テ今日被告カドネー氏ヲ吟味ス
ル様御許相成度候

判事曰

一 去ルハ日判決ノ意味ハ本件判決ノ節条理
ニ照シ採用ト否トシテ判決スルト云フナ
リ

被告代言人曰

一 被告代言人竊カニ考フルニ或ル証人ヲ
原被告両造ノ一方ニ於テ吟味イタシ候ハ、
其原被告ノ他方ニ於テ又其証人ニ及對ノ
吟味ヲ掛ケ候ハ普通ノ法理ニ可有之ト存

同
法
首

候故ニ本件ノ原告カドネー氏ヲ吟味致し
候ハハ被告ハ之ニ及對ノ吟味ヲ致シ候様
有之モノニシテ判事殿ト至モ恐クハ被告
ノ此權ヲ用フルヲ拒ムハナリ理有之ヘカラ
サルモノト存候由レモ本件ニ付ドネー氏
ノ証拠立ハ格別ナル道理アリテ被告ヲメ
同氏ヲ吟味スルニ及ハサルモノト判事殿
ニ於テ見做サル、ニ於テ、被告ハ被告ノ
及對ノ吟味ヲ為ス權ヲ施スヲ得サル場合
ニ立至ルニ付ドネー氏ノ原告ノタメニ証
言シタル証言ハ直々ニ御取附シ相成り候
テ可也ト存候

一 差シ前述スル如ク被告ノ願意御採用有之
ニ付テハドネー氏ヲ被告カ吟味スルニ於
テハ可成大ケキ短カニ吟味可致心組ニ有
之候

判事曰

一 ドネー氏ノ証言ハ被告カ既ニ及對ノ問題
ニ付答ヘタル条件ノ外ドネー氏ノ証言本件
ニ要用ナラスト認ムルニ付差止メタルナ
リ

被告代理人曰

一 去ル八日ニ於テ被告代理人カドネー氏ノ
吟味シタル判事殿ニ於テ差止メニナリ
タル問題ハ本々全ク向ラサルモノニ有
之候ニ付此問題ヲ向ラり候迄ノ疑問ヲ被

司法省

老ニ御許致度候

判事曰

一 其以前ニ卷ハタルケ条アルハシ

被告代言人曰

一 手紙ノリリ向了候様御許相成度候

判事曰

一 向ハサル可ナリ

被告代言人曰

一 差シ判事殿^〇御判決ノ如クナレハドネ

氏力原告ノ为メニ証言シタルモノハ皆御

採用無之様ニ至ルヘリト存候果シテドネ

ハ被告ハ手紙ノリリ向ハスト相止ノ可

申候

判事曰

一 前言ノ通其餘申ニ照シテ半ヲ取り半ヲ取

ル可カラサル道理アル中ハ皆之ヲ棄ル

アルニシ

被告代言人曰

一 ドネト氏ノ証言中被告力反對ノ吟味ヲカ

ケタルハ一項中ノモノナリニ付彼ヲ取り

是ヲ取ラサルハ已ニ明瞭ニシテ別ニ条理

ニ照シテ始ラケルハキモノニ無之ト存候

向若し取ルヘリモノト取ル可カラサルニ

ノト有之候ハ直々ニ御判決相成度候

判事曰

同法書

一 証言ノ通

被告代官人曰

一 出レハ被告代官人ハ証人ニ及對ノ吟味

ヲ為ス國有ノ権ヲ保持シ決テ譲リ不申候

同日午後

右之通相違不申上候以上

右

明治十二年一月十二日

日星

亨(印)

東京上等裁判所
西海判事殿

明治十二年一月十五日口供

被告代官人

日星

亨

証書面ノ付

一 唯今原告代官人ノ申上候ハ其將ニ呈セ

ントスル証物ヲ書キタル人ハ被告ノ代

人タルヲカヌハ被告カ該書ヲ書セルメタ

ルヲ証スルモノニ世之只原告代官人カ

無暗ニ多量ノ費ヤスト被考候ニ付原告

代官人ハ判事殿カ該書ニ付テ判決セラレ

タル通ナルニ付其他ノ点ニ付テ

ツキツ吟味スル様相成度候

同日午後

司法省

一 原告代理人ハ此証人ニ對シ向フ廿八過
日審問ニ於テ判事殿カ判決シタル時間ニ
限リ向フ起ス様為致度且証人ニ其時間
中ノ事情ニ付答ヘ候様致度候而シテ原告
代理人ハ但々此時間外ニ答ヘタル間ヲ答
シ且証人ハ其時間外ニ答ヘタル為シ候依テ
如此ハ一切御差止メ相成度候
長崎ニ於テ証人カ聞タル事ヲ答フルニ付
今此証人カ言フ事ハ自分自ラ目撃シタ
ルモノニ非ズシテ他人ヨリ傳聞シタルニ
ノニ付裁判死ニ於テ証人ニハキモノニ無
之ト在候故ニ如此申立ハ差止相成様致度
候

一 今ノ証人申立ハ所謂傳聞上ノ申立ナル
ニ付當廳ノ記録ヨリ取除キ相成度候
ホームノ付
一 証人ホームヨリ聞ヒタル事ニ申立
ヘカラサルト存候何トナルハホーム十
ル者ハ名義ハ後藤ノ雇人ナリシモ實ハ原
告ノ指顧ニ從フモノナリ其証ハ千八百七
十八年六月十九日付ノホームヨリ後藤ニ
送レル書中ニ予ハ予ヨリシノ許可ヲ得
テ貴下ノ雇人ナルヲ諾ストアリ又千八
百七十八年十一月二日ノ手紙ニ後藤氏ト
テアードメントノ談判破レタルニ付予ハ予
アードメント社ノ依頼ニ依リ以未予ノ身分十

ル同社ノ代理人ヲ位置ニ據スルニ付貴社
ニ奉仕スルヲ謝スルト云ヘリ此ホーム氏
ハ後藤ノ代理人ニ非スシテ却テ原告代理
人ニシテ且原告ト密ナル關係ヲ有スル人
タルヲ証スルニ足ルヘリ候
前述ノ如ク此証拠人カ長善ニ在テ岡及々
ル申立ハ傳聞ナルカ又ハホーム氏ノ如キ
原告ノ代人ヨリ聞タルモノニ付素ヨリ証
拠トナスヘキモノニ非ス故ニ右ニ列スル
証拠人ノ申立ハ当廳ノ記録ヨリ取除キ相
成候様致度候
一 今證據人カ言フ所ハホームヨリ聞ヘタル
ト然ラハ其傳聞ヲ答フルナリ

右之通相違不申上候以上

右

明治十二年一月十五日 星 亨 (印)

東京上等裁判所
西瀉判事殿

追加

一 原告代言人ハホームヲ呼寄ルヲ申立候
素ヨリ証拠人ノ言フタルヲ証拠立ルニ
ハ其証拠人ヲ裁判所ヘ可差出ハ原告代言
人モ亦ニ知ルベキナリ然ルニ今ホームノ
言フタルヲ依テ証拠人ヲ以テ証拠立レ

トスルニ付被告代理人ハ其可ナラサルヲ
申立タルナリ素ヨリ原告代理人カ申立ル
知リ被告代理人ノ所業ニ依リホムヲ爰
ニ呼出ス様ニナリタルニ非ルナリ而シテ
原告代理人ハ日延ヲ厭フテ付如此クヲ
申立ツルノ外別ニ乏ラ勝リタハ道理ヲ有
セサルモノナル様覺候

附録 一月十日

明治十二年一月十三日

原告代理人曰

原告代理人カドネーノ証言ハ取捨サ
レタルヤ

被告曰

被告代理人ノ証拠吟味ヲ差止タルハ被
告代理人ノ向來証人ニ吟味ラセノ部
分ハ該件ニ要ナラズト認めルヲ以テ其反
對ノ吟味ヲ許サレナリ

原告代理人曰

取捨ナラサル部分ハ如何

被告曰

原被告其吟味モタル際ハ了知ナルナリハ

原告代理人曰

一 既に裁審官カ許サレタル証拠調ナレハ其証
言ハ証拠ト原告代理人ハ思料ス

判事曰

一 取調此々ノ廉ナルヲニ申立ヘシ

此ハ証拠調取消ノヲニ付原告代理人
非難ノヲアリ被告代理人デニソシ曰

一 原告代理人 証拠人ニ對シ証拠調ヲナ
シタル廉カニ 對シ被告ハ悉ク反對ノ吟
味ヲ為ス能ハス故ニ原告カ吟味シテ被
告ノ吟味スル能ハサル部分ハ因ヨリ証
拠ニ為ルヘカラス云々

原告代理人曰

一 タローサノ手紙ニ付云々

判事曰

一 タローサノ手紙ノ付テハ既に言済シ

ナリ通ナリ且トホカ 証言ノ部分

ニ於テ悉ク取捨シタリト云フモ非ス今

被告代理人ニ言フ如ク連続スル 証言

ハ事ヲ捨テ半ラ取ルト云フアアサレハ

結局誤知判決ノ節 條理ニ照シテ

ネー 証言ノタローサカ 証書ニ對シタル

効ノ有無ヲ判決セラル、トナリ

被告代理人デニソシ曰

一 原告代理人カ 証拠調ヲラハ被告ニモ

其吟味ヲ許サルヤ

書事曰

一 通常ハ許スヘシ然レモ原告カ証拠吟味ノ模倣ニ依リ或ハ其増其反對ノ吟味ヲ許カサルヲアルヘシ

一 原告代官人ケスベツキニ對シ証拠吟味ヲ略ス原告代官人カ「アイドル」云々ト云フ

被告代官人曰

一 原告代官人カ該証拠人ニ對シ吟味スル「鏡山及器械」カ今日ノ若様ニテハ危殆ナリト云フ廉ナレハ昔時ノ「同」フハ當ラ失フタルモノナリ

原告抗辯ノ上

書事曰

一 去ル八日ケ案書第廿六現在「同」ヲ「同」ヲ記載シアルヲ以テ之ヲ許シタリ故ニ該訴訟ノ起ル頃ヨリ「同」ヲ「同」トハ

原告代官人曰

一 然ラハ何頃ヨリ相尋ケテ「可然ヤ」書事曰

一 昨年「同」挿「同」ヲ然ルヘシ

原告代官人曰

一 昨年ト云フハ「同」月何日ヨリト云フヤ

お事曰

一月一日ヨリ以来、
同日迄

原告代理人ハ能難ノ言ヲナセ

デニソソ曰

原告代理人ハ能難ニ無用ノ事ナリ云

お事原告代理人ニ對シテ曰

該能難ヲ止メテ証拠調ヲ為スヘシ

原告代理人曰

能難ヲ許ササルヤ

お事曰

一 許サス

原告代理人能難ノ事ニ付デニソソヨリ該
能難ヲ差止メラレタキ云々申立ヲナ
セリ

原告代理人ハデニソソノ申立ニ對シテ決

テ証拠立ラサレ杯ノ事ハ不申立云々

等答ヲ稱セリ又お事ノ判決ニ對シ

能難ノ言ヲ為ス

お事曰

該証拠調ヲ始メシ

原告代理人証拠調ヲ始メ三時ニ至
リ止ム

明治十二年一月十五日

原告代理人ハ、フクスウ井ツキニ對シ証拠調
ヲ始ム

原告代理人カ日本文ノ証書ヲ横文ニ譯
シタルモノヲ以テ証拠ヲ調スルニ付被告
代理人デニソシテ難ス

原告代理人ノ証拠調明治十一年一
月一日以前ニ涉ルヲ以テ被告代理人
星亨ヲ難ス

書事曰

該問ヲ止ムヘシ
原告代理人カ問ヲ起シ方ニ付デニソシテ之

水難ス

お事曰

答ヲ取ル可ナリ

原告代理人ヨリ瓜生ナル者、書面ニ差出スニ付

デニソソ曰

該瓜生ナル者、關係ナキヲ以テ証拠トシテ差入ルハキモ、水難依テ右書面ヲ被告カ認メタル証拠立有之迄ハ水難ス

原告代理人曰

其証ハデニソソニ拠テ証拠立ツヘシ

デニソソ曰

此迄デニソソヲ取調ヘタルハ又同人ヲ取調フルヲ水難ス

お事曰

デニソソノ調ヲ止クヘシ

原告代理人曰

被告カダローザノ書面ヲ差出スモ原告カ該瓜生ノ書面ヲ差出スモ同様ナルニ付裁お所ハデニソソノ証拠調ヲ許サルヘキナリ

デニソソ曰

ダローザカ書面ハビツタルニ拠テ証拠立ラレタリ

原告代理人ハ該お度ニ付云々上申セリ右

明治

申立ニ付星亨ヨリ申立セリ供有口
お事原告代 言人ニ對シテ

一 前お決ノ通リナリケス井ツキノ証據調
ニ付テ第六項ノ問題ヲ許シ有之ガ
コソシノ証據調ヲ許シタル場合ニ有之
然ルニデコソシノ証據立ラレタル上ニ有之
テハ不相成ト云フ証據調ハケス井ツキ
ニ對シ証據調ヲ許シタル場合ニハ許
サレル

今日午塔

一 原告代 言人ハケス井ツキニ對シ証據調
ヲ始ム
一 原告代 言人ハ何方ニ付デニソシ
非難

ス

お事曰

一 答ヲ取ルモ可ナリ

此ハ星亨申立アリ供有口

一 証據人ハ長岑ヲ於テ傳聞セシヲ答
フルニ付被告代 言人星亨ヨリ申立
アリ供有口

但証據人申立ハ取除相成爲趣

お事曰

一 傳聞ノ申立ハ取消ス後藤ヨリ親ク
聞ヒタルヲアラ改テ問フヘシ
一 原告代 言人カホシムノヲ問フニ付
星亨ヨリ申立ヲナセリ此ハ口供ニ付ス

同法省

原告代言人曰

一 呈亨ノ申立ニ裁書所ニ取テハカナシ
ト考ヘリ

右ニ付呈亨ヨリ申立_付ナセリ 供_出者_ニ口
判事曰

一 其位置ヲ問フハ可ナリ

原告代言人カホ_一ムヨリ聞キタル_一問ニ
付

呈亨之ヲ_一氷難ス_一 口供アリ

判事曰

一 ホ_一ムヨリ聞ヒタル_一ハ被告代言人
ノ申立ニ依レハ原告社中ノ命令ニ
依テ進退ヲ為シ又ハ原告代理人タル

模様ヲリ然ルニ原告代言人_一於テ之ヲ

否ラストスル_一明言ヲ呈セサル_一限リハホ

一ムヨリ聞ク_一所ノ詞ヲ以テ_一証拠ト

ナス_一ハ採用セス

原告代言人ハ右判決ニ付_一氷難ヲ為シ

且ホ_一ム呼寄_一ノ_一ヲ申立タリ

一 被告代言人呈亨ハ此原告代言人

ノ申立ニ對シ申立アリ 口供ニ
証ス

判事曰

一 被告代言人カホ_一ムノ_一付ホ_一ムガ

身位ノ事實ヲ述_一以テ之ヲ拒_一ミタル

ニ原告代言人ノ_一其事實_一否ラストス

ル明言ナキ_一ヲ_一以テ_一前ノ_一如ク_一判決シ

タリ
一ホーロラ呼寄ルハ若シカラス日延ノ儀
ハ勘考スヘシ

東京上等裁判所於テ

一千八百七十九年一月十五日

ジャルデインマズイソン 社中ヨリ後藤象
二郎へ掛ル一件

カルクウード氏ケスマウイツキ氏ニ尋問
過ル一月中ニ或ル切迫スル債主ヲ沈黙ヤシム
ルタメ瓦ソ六千圓ノ金額ヲ足下ハ後藤氏へ掛
ヘリト足下ハ先日審問ノ節ニ申述セリヌハ右
金額ニ對シ同人ノ受取届ナシカ

右ハ同人ノ受取届ナリ(其号届類
何ノ為メニ足下ハ右金額ヲ同人へ掛ヒシカ
切迫スル債主ニ拂フタメニ同人ノ懇求ニ

司法省

テ私ハ同人ノ之ヲ拂ヒタリ

同人カ世金子ヲ拂フヘキ人々ヨリ右ノ人々カ
受取りタル金高ノ受取書ヲ足下ヘ渡し且右金
子ノ剩余若シアラバ其レヲ足下ヘ返却セント
後藤氏ハ世書面ニテ契約ス同人ハ足下ヘ受取
書ヲ渡しシカ且ウ若シ渡しシナラバ幾許ノ金
高ナリシカ

(ア)ニソン氏

ケスウイウキ氏ハ受取書ノ翻訳ニ付尋問セラ
ルノ理由ニテ私ハ世尋問ヲ拒マサルヘカラ
バ

(カ)ルリウート氏

私ハ右翻訳ヲ証人ヘ呈モ示サ、リシ

(裁判官裁判シテ云フ

カルリウート氏カ同人ノ目前ニ有スル右翻訳
アラバ同人一己ノ手扣ニテ裁判官於テ証人ニ
要ムル一紙ヲスカルリウード氏ハ右書面ノ本
紙派写トモ既ニ差出セリ)

答

私ハ教業ノ受取書ヲ得タリ也レトモ六ニ
二千〇二十五圓ノ金高ニ過キス
同人ハ足下ニ六千四ノ残額ヲ返却セシカ或ハ
其部令ヲ返却セシカ

否

世取扱ニ付同人ノ行為ハ如何ナルモノナリシ
ト足下ハ思考スルカ

私ハ同人ノ行為ヲ鄙陋ニシテ卑賤ナル詐
偽ナリト思考ス。何トナルハ私ハ同人カ
債主ニ拂フヲ做サ、リシトノ意見ナ
ノニナラス。実ニ同人於テ私ノ會社ニ對シ
同人ノ嚴肅ナル義務ヲ踐行スヘキナリ。時
ニテ私ヨリ同人カ此金子ヲ得シ時ニ同人
於テハ右金子ヲ受取シ時ニ右義務ニ違背
セシト決定シタリ
如何シテ右義務ニ違背セシカ
私邸ニ長崎ニ赴キテ數年間存在セシ嚴肅
ナル典當ニ違背シテ高島坑山ヲ^保住シテ
ナリ
何時同人ハ坑山ヲ捉住セシカ

一千八百七十八年二月ニ於テ

右月ノ始メカ

然リ

一千八百七十六年中ニ坑山ニ大ナル火災アリ
シト私ハ信ス。右火災ノ後ニ何時ニ至リ右坑山
ヨリ免カノ堀出シ高アリシカ

右坑山ハ一千八百七十七年ノ十二月迄ハ
充分堀出シ高アルニ至ラザリシ

右一千八百七十七年十二月ノ前ハ右堀出シ高
ハ費用ヲ積フニ足りシカ。或ハ足ラザリシカ

デニソン氏ハ右ハ一千八百七十八年^前アリシ
ナリトノ理由ニテ拒^レシタリ

裁判官ハ右向テ制セリ

問

一千八百七十八年一月、於テ右坑山ノ工業勘定ハ前ノ十八ヶ月間ノ利益或ハ損失ヲ示セシ

カ

（デニソン氏ハ右ハ同一ノ向ナリトノ理由ニテ拒シタリ）

（裁判官ハ右同ヲ割セリ）

問

足下ハ一千八百七十八年一月、於テ後藤氏ニ之ヲ解セシカ

（デニソン氏ハ其ハ誘引ノ同ナリトノ理由ニテ拒メリ）

問

足下ハ一千八百七十八年一月、於テ右坑山ノ工業勘定ニ示シタル利益或ハ損失ノ其頃ノ情状至ニ以前ノ情状ヲ後藤氏ニ解セシカ
（デニソン氏ハ右ハ証人ニ答テ知ラストノ
フニテ拒シタリ）

答

私ハ私ノ會社ト後藤氏ノ勘定ノ景状ヲ後藤氏ニ説明シ且同人ノ負債ノ金額ハ高島坑山ノ工業不利ナルカ為メニ不斷増加シテアリシトノ事實ニヨリテ毎回累ク拒シ
同人ノ貸金ヲナセシトテ再ニ及覆シテ
同人ノ指陳シタリ私ハ一千八百七十八年
中ノ火災ニ由リテ生シタル巨大ノ入費ヲ

同去省

同人ニ知ラシメタリ右時々ノ後ハ右坑山
ノ工業ハ其費用ヲ殆ント償ハカリシ実ニ
一千八百七十七年十二月迄ハ充分ナル堀
出し高アラカリシ私ハ又勘定ノ付ニ付
ザル費用ノ大ナル額ニ相成ルヲ屢々指
味スルノ概會アリシ

後藤氏力長崎ニ赴キテ坑山ヲ振住セシ前ニ同
人ハ足下ノ代理権及ヒ取扱ヲ視ハントスル
ヲ足下ニ告知セシカ

同人ハ告知セカリシ
同人ハ過ルニ二月中長崎ニ赴ク前ニ同人ノ契約
ニヨリ足下ヲ代理人トセシ右坑山ヨリ堀出ス

モノヲ足下ヨリ視ハントセシヲ足下へ告知
セシカ

決シテ告知セザリシ
同人カ足下ノ代理権ヲ視ハントスルヲ付足
下ノ得タル最初ノ告知ハ如何ナルモノナリシ
カ

後藤氏カ秘カ^ニ跡ヲ晦マシタル後ニ同人^{ヨリ}
居次ヲ請取リタリ

後藤氏ハ過ルニ二月ノ前ニ足下カ坑山ノ取扱並
ニ代理権ニ付テ不滿意ナルヲ述ヘ出セシカ
夫シテ述ヘ出サレリシノ調度又對ナリ
出スレハ右坑山カ一千八百七十七年十二月中
ニ充分ナル堀^出高アルニ至リシ後迄足下カ

一千八百七十八年一月中心、後藤氏へ巨額ノ貸
金ヲナセシ後迄、同ノ人ハ足下ノ右坑山ノ代理
権ニ付キ不滿意ナルヲテ述テ述ヘ出セシテア
ラザリシヲ足下ハ申述ルト私ハ理會ス
右ハ左様ナルカ

右ハ左様ナリ

足下ノ會社ハ過ル一月中心シバハル併キルガ
レニフルト氏ノ洋銀二万二千弗ノ拂ヒナセ
シヤ右ノ受取居ハ印号存類ニ見ユルナリノ然
ルヤ

然リ

此拂ハ足下カ既ニ申述タル一千八百七十八年
一月中心、後藤氏へ貸渡シタル額中、何レハカ

包含セラレカ

否のハシバハル並ガレンワルド氏ヨリ
後藤象二郎氏へ掛リテ做サレタル判決ノ
右メニシテ同ノ人カ破産ヲ救ワシタメニ拂
ワレタル別途ノ拂ヒナリ

足下ハ此手跡ヲ知ルカ

此ノ私ハ知ル

右ハ誰ノ手跡ナルカ

後藤氏ノ信任スル通兼若瓜生氏ノ手跡

アニソシ氏ハ右唇面ハ他人ノ申述ニテ且瓜生
氏ハ此訴訟ニ關係ナケレハ右唇面ヲ認扱ニ差
出スナリ拒メリ

(裁判官於テハ瓜生氏カ此事情ニ付代理人タル

同法省

一ノ実カ証明セラルル、迄ハ前文ノ各面ヲ証
拠ニ差出ズヘカラズト裁判ス

(カルクウートト

出ラバ之ヲ証明スルタメニ私ハジョーンソン氏

ヲ呼フヘシ

(デニソン氏

同人ハ既ニ尋問セシレタリ而シテ此各面ニ就

テハ前以テ尋問セラルヘキトノ理由ニテ私

ハ拒ムナリ)

裁判官於テハジョーンソン氏ハ尋問セラルヘカ

ラズト裁判ス

カルクウートト氏

此各面ハ後藤氏ノ信任スル通年者瓜生氏ノ各

記セシテ今ケスウイッテ氏於テ証明セシ
後ニ裁判官於テハ瓜生氏ノ代理人タル一ノ証
明セラルル、迄ハ之ヲ受取ルヲ拒メリジョーン
ソン氏ハ後藤氏ヨリ此各面受取リ同人ハ此事
ニ付後藤氏ト屢々談判リナシ此各面ハ後藤氏
ノ希望ニテジョーンソン氏ハ告知スルカタメニ
瓜生氏於テ各記セシテ証明スル為メジョーン
ソン氏ヲ呼フヲ私ニ許准セラレガ而シテ是
ニ由ラテ各面ハ後藤氏ノ代理人瓜生氏カ各記
セシノミナラス後藤氏自己ニ其文面ヲ認定シ
タルヲ証明スル為メニジョーンソン氏ヲ呼フ
ヲ私ニ許准セラレガ而シテ右ハ証拠ニ受理
スヘキトナラズ後藤氏カ其自己ノ利益ニ對

レテナシタル先諾ナレハ右ハ原告ノ外並ニ右
坑山ノ買受代價ノ未済ノ年賦ノタメ政府ニ對
シテ同人ノ負債アル外ニ諸債主へ返ル六月
ニ洋銀四十万弗以上ノ負債アルトシテ同人
カ申述へタルモノナレハ後藤氏カ其自己ノ利
益ニ對シテナシタル先諾ナレ右ヲ認批ニ受
理スヘキノモナラズ最トモ重要ノ關係アル証
批タルヲ表明スルメナニジヨシソニ氏ヲ呼
ブテ私ニ許准セラレズト裁判官於テ裁判ス
ト私ハ了解ス如何

裁判官ハ前ノ如ク裁判官ハ才六五ニ付ケヌラ
ツキ氏ヲ尋問スルヲ許可セリ也トモ右
裁判ニテジヨシソニ氏ヲ尋問スルヲ許可セ

サリシ而シテジヨシソニ氏ハ此裁判ニヨリテ
ケスウストツキ氏ノ尋問ヲ支柱スル為メニ尋問
セラルヘカラス

問

足下ハ後藤氏トノ談話ヨリシテ一千八百七十
八年一月申ニ足下ノ外他人ニ對シ同人ノ負債
ノ額ハ何程ナリシカ後藤カ証シタルヲ足下
ハ私ニ證ルイテ得ルカ

私ハ後藤氏ノ債主ノ名前番数彙シ見タリ
英ヒニ後藤氏トノ談話ニヨリテモ後藤氏
カ私ノ會社ノ外他人ニ對スル負債ハ稍ニ
洋銀四十万弗ニ殆カリシヲ知ラス也ハ
政府ニ對ヌル高島坑買受代價ノ未済ノ年

賦トハ別途ナリ

同人ハ曰。人ノ負債ニ應スルヲ全ク能ワサルヲ
ノ常ヲ是下ヘ語リシカ

（デロソニ氏ハ此ハ誘引ノ向ナリトノ理由ニテ
拒メリ）

（裁判官ハコノ向ヲ許可ス

出リ。○数度而シテ同人カ軍商ナル事柄ヲ

申述ヘタルノミナラス同人於テハ同人カ

此上ニナキ不信ノ行為ヲナスサシ前迄数年

ノ間タビヤルデインマデイン社中カ其

自己ヲ損シテ左債主輩ノ同人ヲ破産ニ陥

ラシムルヲ以テ是防スヘキ取極メリ做サシ

テツ私ヘ切迫セリ而シテ同人ハ右目的ニ

對シ屢々私ノ扶助ヲ受ケタリ

（被告代~~有~~人ハ一千八百七十八年一月ノ前ニ係

リシトト指称シテ向是ニ答ヲ拒メリ）

足下ハ昨年長崎ヘ赴キシカ

出リ

何時

九月ノ初旬ニ

是下ハ該地ニテ坑山ノ情形ヲ查察セシカ

私ハ查察セリ

何リ是下ハ查察セシカ

右事業ハ不満足ノ取扱ニテ右不満足ノ取

扱ニ因リテ洋銀九万冊ノ損失アリシ迄ニ

至到リシヲ私ハ查察セリ右金高ノ内洋

銀六万二千串ハ給料ナレハ右坑山ニ於テ
先般ノ如キ噪乱ノ一ツニツキ受雇アリシ
ヲ私ハ査察セリ

星氏ハ此ハ凡聞ニテ証拠ハシテ採ルヲ克ワサ
ルトノ理由ニテ拒ナリ其レ故ニ同人ニ於テハ
此卷ヲ記録中ヨリ削除セラル、^(一ツ請フ)

裁判官ハ此卷ヲ制止シ且右ハ凡聞ナレハ之レ
ヲ削除スルヲ命セリ

足下ハ九月中長寄ニテライルホルム氏ニ達セ
シカ

私ハ達セシナリ

ホルム氏ハ何者ノ且其節同氏ハ坑山ノ何ナル
地位ニ立ナシカ

同氏ハ長寄ニテ炭坑社ノ取扱人ノ地位ニ
アリシ

誰ノ雇人ニテ且其節同人ハ誰ヨリ給料ヲ受取
リシカ

後藤象二郎氏ノ雇人ニテ同人ハ後藤象二
郎氏ヨリ給料ヲ受取^ルリ或ハ給料ヲ受取
ルナルヘシ

右坑山ニテ同人カ有セシ地位ニヨリテ同人カ
ソノ場合ニ要スル右坑山ノ工業並ニ其負擔或
ハ賦産、執事足下ニ告知スヘク適者スヘキヤ

星氏ハ拒ナリ^(理由ヲ述フル日本誌ヲ以テセリ)
カルクワード氏ハ星氏ノ申述ヲ拒ナリ私^{(カル}
クワード)ハ星氏カ言フ^ハ裁判官ニ對シカア

ルヲ見スト云フ

(星氏ハ日本誌ニテ答ヘリ)

(裁判官ハ最後ノ向ヲ許可セリ)

答

此ノ向人ハ適当スヘシノ右ハ該地位ニ在
ル同氏ノ職分ナルヘシ而シテ同氏ハ之ヲ
辞スルヲ難ク且炭坑社ノ勘定負擔並ニ賦
産関スル諸事ヲ十分ニ同人ハ識リ得シナ
ルヘシ

是下ニ此ヲ後藤氏ノ為メ長崎ニ在ル炭坑社ノ
取扱人タル職分ヲ有スルホムハ氏ニ對シテ左
坑山ノ其節ノ情状ニ就ヒテノ告知ヲ求メシカ
私ハ求メン

2

如何ナル結果ニテカ

私ハ告知セラレタリ

(星氏ハ前ニ申述ヘタル理由ニテ拒メリ)

(裁判官裁判シテ云フ)

被告代人ノ申述ニヨレハホムハ氏ハジャルデ
インマデソン社中ニ管轄セラレシ者ニテ其代
理人タリシト見ユ是故ニ是下ニ此ヲ其ノ姓
ラナリシト善キ証拠ヲ以テ証明スルニアラ
サレハホムハ氏カ言ヒシ事ハ唯一見聞トノミ
者做ハヘリシテ而シテ許可セラレヌ
カルリウノド云

ホムハ氏ハ其節更ニジャルデイン社中ニ管轄
セラレシトノヲハ裁判官ニ對シ一切証拠ナシ

星氏ハ申述ヲナシタリ出レトニ右申述ハ証批
 ニヤラス而シテ証批トシテ兼認スヘカウガ裁
 判官カ自命知ル処ハ在テ証批人カ申述ヘタル
 事ニ過キス即チホルムハ氏ハ其節後藤氏ニ
 雇使セラレシナリ是故ニ私ハ裁判官ノ裁判ニ
 対シ最^現堅ク拒ムナリ而シテ此事柄ニ就キ此
 止ケスウイツキ氏ニ尋問セサレハ出レトモ
 私ハ方一ニホムハ氏カ長崎ヨリ相越シ此事柄
 ニ就キ日人躬^カ証批立ルテアラムルノ極層
 フ護ヘシ而シテケスウイツキ氏ヲ詰問並ヒニ
 再尋問スルノ旨ヲ私ハホルムハ氏ノ到着迄延期
 スルヲ裁判官ニ願フヘシ
 右ホルムハ氏ノ到着ハ通常ニテハ次週日ノ木曜

日或ヒハ金曜日ナリヘシ原告ノ利益ヲ左程ニ
 太甚ニシク危殆ニセシ後藤氏カ全ク身代限ノ地
 位並ニ右坑山ノ事業ノ危峻ナリ情^状ヲ容易ニ
 兼認セラルヘキニ之ヲ兼認セザレテ被告代言
 人並ニ裁判官於テハ私ニ此ヲ做サレムニ至
 到^リシメタリ

一千八百七十九年一月十七日

原告代言人

モンタギエーカルウード年記

セービーゲスウイツキ手記

被告代言人

本月十五日ニ於テ

裁判官ヨリカルクウード氏ノ

足下ハ被告代言人於テホムハ氏カビヤルデイ

ニマズイッソシ社中ニ置轄セラルハ、フ、一付申述

ハニ、一付駁セサリシ而シテ是故ニ私ハ前文ノ

裁判ヲサセシナリ

カルクウード氏

私ハ左様ニササハリシ何トナレハ私ハ之ヲ累

等ト思考セサリシ而シテ私ハ左様ニ做スナリ

ボメラレサリシ故ナレハナリ也レ私ハ只

今左様ニ做サン且私ハ何レニモホルハ氏ヲ呼

寄ヘシ而シテチヌウイツキ氏ノ尋問詰問並ニ

エーツチカカリウラニソレ
手記

再尋問ノ後ホルハ氏ノ到着迄延期スルコトヲ裁
判官ニ冀フベシ右到着ハ次週日ノ本曜日頃メ
ルヘシト思ハル

裁判官

是下ハホルハ氏ヲ尋問ルコトニ付是下ノ随意ニ
做スヘシ然レトモ裁判官ハ延期ヲ許可スルヤ
可ハ許可セサルヤ整考スヘシ

七十九年一月十七日

原告代理人

モンタヤエーカルウー
手記

原告代理人カ前文ニ押入レタル文句ハ其昂口
人於テ申述ヘサリシ何レニモ此法庭ニ在リシ

モノ一人モ之ヲ仰カサリシ

アト
ラッセル
手記

被告代理人

エーウケタフリウデヒン
手記

東京上等裁判所ニテ

千八百七十九年一月十七日

ニマルデン、マゼソン社中より後差象
二郎へ掛ル一件

裁お所より「カルクウード」氏へ

「ホル」氏カ足下ノ証人トシテ茲ニ出頭スル
タノ足下ヨリ同人ヲ喚ヒシヤ

同人カ来ル様ニ私ヨリ電報セリ

「カルクウード」氏

裁お所ノ裁截ニヨリ私ハ最早「ケスウ井ツク」
氏ヲ調査セサルヘシト過日審問ノ片ニ私ハ
申陳シタリ○係シ「ケウ井ツク」氏ノ詰問カ
始メラル、前ニ私ハ數箇ノ弁説ヲ致シ度

此等ノ訴詔ヲ始メシ早キ頃ニ被告代言人
ニ於テ「カローガ」氏カ記シ無シ署名シタル者
ニテ被告一人宛タル書状ナリト稱スル一通
ノ書付ノ書蹟或ハ署名ハ之ヲ記シ無シ
之レニ署名シタリト稱セラレシ人ノ書蹟或
ハ署名ナリシ「」ニ付キ更ニ証拠ヲ出サス
或ハ此ノ如キ書状ハ記者ヨリ曾テ送致
セラレシカ又被告一人カ之ヲ請取シ「」ニ付
キ更ニ証拠ヲ出サス讀書付ヲ以テ此事
件ノ証拠物トシテ裁断所へ出シタル也ニ
此ノ如キ書付ノ領收セラレ「」ニ對シ私
ハ極メテ強ク論駁シタリ

「」氏ハ左ノ理合ヲ以テ之ヲ論駁ス則チ
「」氏ノナシタル此等ノ并説ハ「」
録へ「」載スヘカラサルヘシ是「」
故ニ我輩ノ今我輩ノ詰問ヲナスヘキ
権ヲ有セリノ貴裁判所ニテハ總テ生セシ
点ニ對シ裁断ヲ与ヘタリ而シテ原告代
言人ハ「」等ノ裁断ヲ論駁スル権ヲ有
スレ「」對シテ論并スル権ヲ有セサル
ナリ○此外「」録ヲ「」スル「」
氏ノ現今ノ「」人ヲ最早調査セサルヘ
シトハ言説セサリシナリ然レ同ノ其時ニ
「」人ニ尋テ「」格別ナル間「」ニ
付キ「」私ハ此事ニ付キ最早「」キツク

氏ハ同ハサルヘシト言説スルナリ

裁判所ニテハ「カルクウード」氏ノ并説ヲ終ラ
シレ

「カルクウード」

然レハ、論駁ニ及シ、祇書自ハ領收セシタ
リ。○日本裁判所ニテ「カルクウード」或ハ收受
マ付キ、何カ成文法アリシカヲ其時ニ私ヨ
リ裁判所ヘ尋子タリ而シテ成文法、ア
ラサレハ裁判所ハ不成文慣習ニ導カレタ
ルト裁判所ヨリ告知マリシコ付キ、此事
件及ヒ他ノ事件ニ付キ、私ノ訴訟ノタメ、私
口導子クヘキ、談点ノ裁裁、裁判所ヘ請ヒ
タリ。○裁判所ニテハ之ヲ裁裁ニ被告ノ

於テ差出スカ如キ、總テノ書付ハ談事件ノ
裁判ヲ構成スルタメ、裁判所ニ於テ之ヲ領
收スヘケレハ、此ノ如キ書付カ、証拠トナルカノ
有無ヲ裁判所ニテ判決スル片迄ハ分ラサル
ベシトセリ。○私ニ於テハ、裁判所ノ裁裁ニ
對シ、論駁セントスル、下判然タレハ、此裁
裁ニ於テハ、私ヲ拘束スル者トシ、而シテ、當裁
判所ニテ、遵守セシロル、訴訟方法ニ於テ、拘
束スル者トシテ、私カ、此裁裁ヲ納受セサル
ヲ得サリシナリ。○過日裁判所ニテ、審問
ノ成ニ「カルクウード」氏カ署名セシ者ト称スル一
通ノ書付ヲ、証拠トシテ、差出ス、下判私ヨリ
申出タリ、談証拠人ニ於テ、申陳ヲナシ、此

司法

リユレ氏ナル者ハ長崎ニアル後藤氏ノ信任
ノ通辯者トセリ而シテ其通辯者ノ署名
及テ書蹟ヲモ誼証拠人カ先証シタリ○私
カ裁判所ヘ告知セシ如ク誼書付カ原告
人ノ占有トナリシ事情ヲ証明スル準備ヲ
ナシタリ而シテ私ニ於テ尚ホ「ビヨンソレ」氏ノ
証拠ニヨリ被告人ハ誼書付ニ記シタル申述
ヲ正シキ者ト先諾シ、ソレハ被告人ノ指揮
ニヨリ原告人ノタメ認ソ而シテソレハ被告人ノ
依頼ニテ原告人ヘ付與シタリシコトヲ証明
セシト申出シタリ○然ルニ私カ前上ニ申陳セ
シ壹通ノ書面ノ文言ノ「」ニ付キ私カ言説
セシ如ク被告代理人ニ於テハ誼書付ノ記

者ト称セラレタル人ノ署名ヲ更ニ証明セン
トセス或ハソレヲ允証セントセス而シテ此、如キ
事情ナルニ付キ私カ「」知スル各裁判所ノ裁
截ニテハ此ノ如キ書付ヲ証拠トシテ領収ス
ヘカラサル者ト信思スレバ裁判所ニテハ被告
代理人ヨリ差出シタル書付、「」ニ付キ典
ヘシ裁截トハ直々ニ及對ノ裁截ヲナシ原告
人ニ於テ文言ヲ証明スヘキ準備アリシ者ニ
レテ法理ノ存スル國ト至當ニ称セラレタル場
所ニアル各裁判所ノ定コリタル方法ニ於テハ
証拠トシテ領収スヘキ書付ヲ原告人ヨリ領
収スル「」ヲ控シタリ
星氏ハ日本語ヲ以テ論駁ス

星氏ニ對スル答弁。若シ裁判所ニ書付
ヲ領收スル丈ケハ何レノ書付ヲモツテ出ス
ト同人於テ代官人ナル位地ノ威容ニ適スル者
ト同人於テ思考スルハ私ハ同人ヲ以テ全
ク正シキ者ト思量スルヲ言説スヘシ。私ノ
并説ハ同人ニ對シテヤセシコトラス裁判所ヘ
對シテヤセシ者ナリ裁判所ニテハ同人ノクメ
一箇ノ方法ニテ裁截ヲナシ而シテ只不成
文慣習ニ違フヤレタル付キ私ノクメニモ同シ
方法ニテ裁截セラル。予ヲ私ハ希フナリ。私
ニ於テ証拠トシテ差出し而シテケスウキツ
氏ヲ調査し而シテ私カ此等ノ并説ヲナ
シハ或ル書付ノクメ此ノ如キ裁截ヲ得シ

トスル目的ヲ以テナリ又過日審問ノ件ノ裁
截ニ對シ現今和ノ論駁ヲ正明ニ言説スルノ
時機ヲ得ルナリ。○私ノ見込ニテハ領收ノクメ
此ノ如キ書付ヲ和ヨリ現示シ而シテ裁判所
ニテ之ヲ領收スルヲ拒ララハ裁判所於テ之
ヲ拒ルハニ左様ニ拒リテノ理合ヲ明カニ言説
スルナラハ甚時日ノ費ヲ省クヘシ。○私ハ今「ケ
スウキツ」氏ノ詰問ヲ繼續スヘシ
裁判所ヨリ「カルクワード」氏ヘ「コレハ日本語ニテ
記シタリ」
「カルクワード」氏ハ「ケスウキツ」氏ヲ調査ス
是下ハ其書蹟ヲ認識スルヤ
和ハ認識ス

ソレハ誰レノ書蹟ナルヤ

「ウリエール氏ノ書蹟ナリ」

(「デニソン」氏ハ之ヲ駁ス)

(裁判所ハ之ヲ許容ス)

此書付ハ如何ナルモノナルヤ

「ウリエール」氏カ署名セシ者ニテ後藤象二郎氏

ヨリノ一通ノ書状ナリ

(此ノ如キ書状ヲ記スル權ヲ有セシトカ証明セ

ラレサリニ他人ニ於テ署名セシ故ニ「ウリエール」氏

ハ該書状ノ「付」キ該証人ヲ調査スル

ヲ駁ス)

裁判所ヨリ「カルクワード」氏ハ

「ウリエール」氏ハ後藤氏ノ「タ」代ナリト足下

ハ言説スルヤ

「カルクワード」

私ハ左様ニ言説セス○然レ同人ハ此書状ニ

署名セリト私ハ言説スルノコトナリ

此書状トハ「ウリエール」氏カ認メシ後藤象二郎ノ

書状ナリ

裁案所

「ウリエール」氏カ後藤ヨリ代人權ヲ有シタル

或ハ同人ハ此書状ヲ認メル様ニ後藤ニ申付

ケラレシトテ足下ニ於テ証明シ能フヤ

他人ノ「タ」書状ヲ認ム各人ニ於テ代人權ヲ有

スル「切」要ナラス然レ裁案所ノ「問」末ノ部

分ニ付テハ該書状ヲ認ム様ニ同人カ後藤ヨ

リ申付ケラレシヲ該証人ヲ以テ私ヨリ証
明シ能フト私ハ思考ス

(茲ニ星氏ハ日本語ニテ論駁ス)

「カルラウード」氏ノ答弁

被告代言人若シ該書付ヲ請ヒ而シテソレヲ
閲覧スルモ該書付カ領収セラレシ「ノ有無
ヲ論駁スルハ同人ノタメ極メテ遅キナリ」勿
論同人ハソレカ全ク貴重ナラサル「ヲ悔テ示
ス」ハ自由ナリ

(「デニッ」氏○我輩ハ裁審所ニテソレヲ領収シ
而シテ書類トシテ記号ヲ付ケシ迄該書付ニ
對シ論駁シ能フナリ而シテ該証人カソレヲ
認識セシ悔直チ「ソレヲ調査スル權ヲ有スルナ

リ)
裁審所ハ裁駁ヲナシ

被告代言人「於テ「ウー」氏ハ藤氏ノ雇
人ナリシト先諾ス然レ同人ハ悔サ藤氏ノタメ事
業ヲナスヘキ代人權ヲ有セシ「ヲ拒絕セリ故
ニ裁審所ハ足下ノ調査ヲセト足下ニ指令ス
而シテ若シ被告代人ノ申供カ正シカラサル「ヲ
足下ニ於テ証明シ能フ「ハ左様ニナスヘシ然レ
該「筆記者權カ証明セラレシ迄ハ尚ホ該書
状ノ「ヲ調査セサルヘシ
該「筆記者ハ悔藤氏ノタメ該書状ヲ認ムル「
ハ其權限内ニテナセシ「事業ナリト裁審所ニテ
見留メ得ル様「カ該書状ヲ証拠トシテ差

出ス前ニ私ハ「ケスウ井ツク」氏ヲ以テ証明セントスル
ナリ

問 何時足下ハ此書状ヲ請取リシヤ

（星氏ハ日女語ヲ以テ敷ス）

答 昨日ナリ

裁審所ヨリ「カルクウード」

此最後ノ問ニ於テ「ウリエ」ハ代理人権ヲ有セ
シト否ト或ハ此書状ヲ認ル権ヲ有セシヤ否
ト示明スルニ足ラス而シテ尚ホ該書状ノ「ヲ」
調フル前ニ「藤」ト「ウリエ」トノ此關係ヲ示明
スヘキ問ヲナス様ニ裁審所ヨリ足下へ需ム

七十九年一月十七日 原告代言人

モンタギエー、カルクウード

ジエー、ジエー、ケスウ井ツク

被告代言人

エイチ、ダブルエー、デニソン

明治十二年一月十七日口供

被告代官人

星 亨

デニソソ

被告代官人ハ原告代官人カ自分ノ学問ヲ為
ヌタメニ殆ド三十分程無益ニ時間ヲ過セリ
故ニ此償ヲ要ス且原告代官人ハ被告カ差出
レタル第五号證ニ付テ種々申立候ニ付裁判
所ノ時間及原被ノ時間ヲ省クカ為メ被告代
官人ハ既ニ呈シタル第五号證ハ(其此ヲ昏シ
タル人ノ記名セシテガ証明セラル、迄ハ)取
下ク可申虽然原告代官人カ尚該證ニ付喋々
論弁其申立ヲ止メサレハ被告代官人ハ素ヨ

リ大日本國裁判所ノ例規ニ仍テ第五号ノ如キ証ヲ呈スルノ權ハ充分有之モノナレバ尚之ヲ呈シ置クテラ主張ス

原告代理人ハ一ノ証物トスヘキ昏類ヲ証人ニ示シ其証人ハ其昏類ヲ見知りタリト認メタル以上ハ被告代理人カ之ヲ望ムニ在リテハ其書付ヲ見セシムヘキモノト存候且被告代理人ハ其昏類ヲ見ルヘキ權アルモノト存候

判事曰

一 瓜生ナルモノハ後及ノ雇人タルモノナリレヤ

答

一 然リ

問

一 昨年モ此雇期限ニ係リシヤ

答

一 其期限ハ只今記憶セス

一 瓜生ハ雇人ニハ候ヘドモ後及ノ代理人又ハ其代理權ヲ以テ事ヲ取扱フヘキ人ニハ無之候

一 原告代理人ガ只今問ハ此手紙ヲ書キタル人カ代理權ヲ有シタルヲ証スヘキ問ニアラスト存候因テ此問ヲ裁判所ノ記録ヨリ法取除相成度候

右之通相違ハ申上候以上

明治十二年

一月十七日

右

星

亨

下

デニソソ

東京上等裁判所
西瀆判事殿

明治十二年一月十八日口供

カルクード氏「ヤジツク」氏ニ問テ曰ク

問 是下ハ何所ヨリ此層翹ヲ受取リシヤ

答 長富ヨリ

問 其層翹ハ是下カ認メ差立テタル層状ノ返

層ナルカ若シ是下カ認メサレハ何基ニ宛

タル層翹ノ返層ナルヤ

答 余ノ會社中ニ於テ認メ後藤氏ニ宛タル者

翹ノ返層ナリ

此時星氏故障ヲ申立ツ但シ和文記録ニ明カナ

リ

カルクード「右故障ニ答テ曰ク余ハ昨日裁判

官ノ命モシテ是ニ據リテ今ニ問ヲ致ス

同法

其故ハ此同ノ体録ハ用違ヲ証拠立テル為ニ
致スモノナレハナリ

余ハ今事實ニ関セズ唯瓜生氏ノ用違ヲ証明ス
ル為ニ此昏翰ヲ進呈ス候昏翰ハ原告會社ノ
一員ガ後藤宛ニテ認メ遣ハシタル昏状、返昏
ニシテ後藤代瓜生ノ記名セシモノナリ

余ハ今其書翰、本昏(口ノ号)ヲ呈ス而シテ後日
ノ審問ニ於テ其写ヲ差出スヘシ

問 是下、後藤ニ宛差遣シタル昏翰返昏ノ瓜
生カ認メ記名セシモノヲ屢々受取リシヤ

答 余輩ハ屢々之ヲ受取リタリ

此時星氏故障ヲ申立但ニ和文記録ニ明カナリ
シレリニ曰ク此昏翰ニ関スルヤジツシ氏ノ托

言ハ只々弟ニ、証言ナリ

其昏翰、筆者ハ現ニ存命ス然ラハ当人ヲ直接
ニ問デハシ

繼今其証言ハ瓜生氏ノ現然ノ用違ヲハコ証明
スト虽氏同氏、九月月前ノ用違タリニテハ証
明セサルベシ

抑モ証拠人ハ人ノ記名ヲ証明スルニ先タキ躬
自ラ其筆者ヲ記名スル所ヲ現ニ眼ニ觸レ又ハ

其他古記名、真正ヲ明カニスルニ充分ノ証言
ヲ為サ、ルヲ得ス而シテ此証言ハ苟モ其完全ヲ

得ルト虽氏弟ニ、証拠ニシテ其記名者カ死ス
ルカ或ハ裁判所ノ管轄外ノ場合ニアラサレハ
之ヲ受取セス

「カルクウー」曰ク第五出版「ベスト」証拠法三百廿五丁手跡ト題セル部ヲシテ裁判所ノ参考ニ供セントシテ其書ニ曰ク

此昏類ハ某ノ手跡ナルカ或ハ否ラサルヤ、証言ハ仮令其誤主ト認ル所ノ筆者ヲ謂ハスト虽氏充分収理スルニ堪工其筆者カ法庭ニアル氏モ亦然リ

同昏三百ニテ六丁ニ曰ク

手跡ノ同異ニ因テ其真正ヲ決スルハ次ノ法方ニ依リテ為ストヲ得ベシ

第一 曾テ其筆者ノ昏スル所ヲ見タルヲ以テカ

第二 未タ面日テ其筆者ノ昏スル所ヲ見

スト虽氏或ハ其筆者ト曾テ昏中ヲ以テ交通セシカ又夕或ハ兼テ換筆者ノ手跡ナリト信スルニ堪ユベキ理由マル手跡ヲ見タルトアルヲ以テカ

第三 其筆者ノ手跡ト確定セタル昏類ト比較スルヲ以テカ

而シテ余カ裁判官ヲシテ其餘閑ニ閑セシモノト参考ノ為トニハ同昏中三百廿八丁「ドト」ヨリ「サツクモ」アルニ掛ル一件ヲ閲讀セシヲ乞フ

「デ」ニ「氏」答曰ク余カ前ニ陳述セシ如ク証拠人ハ第一ニ手跡ヲ知リタル理由ヲ述べルヲ要ス然レモ同氏ハ未タ曾テ之ヲ開陳セズ

同法

且ツ「カルクウード」氏ノ論セニ所ノ点ハ未ダ曾
テ判決ヲササルモノナリ余信スルニ諸裁判官
ハ之ヲ決セサルベシ
加之「バースト」証拠法手跡証拠ノ章ヲ全讀セハ余
ノ前ニ陳述セシ理由ヲ補翼ス
「カルクウード」曰ク裁判官ハ已ニ余ニ示シタル
訴訟案即チ

聞スル先例ヲ閱後セハ裁判官輩ノ曰意セサル
点一該点ニマテスミテ全ク他ノ点ナリ
裁判官「カルクウード」ニ令ス証拠人ノ前ニ答ニ
「ヤルデシコセソ」會社ニ於テハ後藤ノ代人
瓜生カ昏且ツ記名セシ昏翰ヲ屢々請取リニト
陳述セシ所口右ノ昏翰ヲ進呈シ且証拠立ルニ

アラサレハ此証言ハ証拠ニ立タス其故ハ此ノ
昏ハ当一月所ナルヲ以テ決テ一月已前ノ「
表セサレバナリ
「カルクウード」曰ク余ハ右ノ昏翰ヲ今爰ニ有セ
ズト後ノ審問ニ進呈スベシ
裁判官曰ク其方ハ第一ニ此ノ書翰ハ後藤ノ用
達瓜生ノ手跡ナルヲ証明スヘシ而シテ右ヲ
証明セント欲セハ当証拠人ヲ足レリトセズ
既ニ当証拠人が受取リタルト具陳シタル所ノ
數通ノ昏翰ヲ進呈シ而シテ右昏翰ノ悉ク瓜生
ノ手跡ナルヲ証明スルヲ要ス
而シテ只ニ右昏翰ハ瓜生ノ手跡ナリトノ証言
ヲ以テ完全セス又テ該書翰ヲ後藤カ命シテ認

ノレノタルヲ明証セムンハアラス而シテ裁
判官ハ其証拠ヲ認メサルヲ得ス若シ如此ナラ
サレバ裁判官ハ被告代理人ノ故障ヲ以テ正直
ナリト認ム

「カルクウード」曰ク其「ワイ号」ノ各翰ハ瓜生ノ手
跡ヲ証明スルヲノ証拠トシテ進呈サレタル
モノナルヤ或ハ否ヤ

裁判官曰ク未タ而シテ前申渡ニ基キ該書翰ヲ受
理セサル旨申渡サレタリ

「カルクウード」曰ク余ハ已ニ当証拠人ノ答ニ於
テ此書翰ヲ瓜生ノ手跡且ツ用達ノ証拠トシテ
之ヲ進呈ス然レ氏各中ニ認在サル事實ノ証拠ト
シテハ之ヲ進呈セス

裁判官ハ之ヲ受理スルヤ否ヤ

裁判官曰ク此方ハ今之ヲ受理セス

「カルクウード」曰ク余ハ該判令ニ故障ス故ニ尚
ホ「ケジツ」氏ヲ調ブルヲ止ム

余ノ証拠人調ガ如此束縛サル、上ハ托訟者ノ
利益ヲ維持シ難シ

裁判官ハ余ノ「ケジツ」氏ノ証拠調ヘテ束縛シテ
千八百七十八年一月以來ノ事實ニノミ就キ之
ヲ免シタリ

右ノ如クナレハ原告カ鑛山支配セシ間ハ當ニ
一ヶ月ノ情況ヲ會ムノミ而シテ余ノ訴訟ヲ補
翼セントセハ余ハ尚ホ「ケジツ」氏ノ証拠調ヘ
テ裁判官ニ明表セサルヲ得ス而シテ原告人カ

該鑛山ニ關係ヲ始メシ時ヨリ今日ニ至テノ被
告人ノ可破産ノ情况且ツ被告カ原告ヘ對スル
取引ノ奸偽ナリシヲ明表スルハ實ニ要用ナ
リ
「カルクウー」曰ク余ハ裁判官ノ取ラル可キ裁
判手續即チ「ケ」氏ノ証調上ノ束縛等ハ
之ヲ非難シ而シテ右裁判手續ノ責ノ裁判官ハ
免ルヲ能ハサルモノナリ

明治十二年一月十八日口供

被告代理人

星亨

デニソソ

一 原告代理人ハ昨十七日ニ於テ今日問ツ、ア
ル昏翰ヲ昏キタル人カ後後ノ代理人タルヲ
以テ此昏翰ヲ呈キタルヲ証拠立然ル後其
書翰ニ付テノ問ヲ起スヘト判決セラレタ
ルヲ知ルナルヘシ然ルニ未ダ其手紙ノ筆者
ハ後後ノ代理人タルノ証ヲ奉ケスレテ直チ
ニ該手紙上ニ付問ヲ起スハ甚不当ナリトス
依テ先ツ昨日ノ判決ノ如ク該手紙ハ代理推
ヲ持タル人が呈キタルヤヲ証拠立候様魚者

代 言 人 へ 申 付 有 之 度 候

一 只 今 原 告 代 言 人 カ 差 出 シ タル 手 紙 ハ 未 タ 該
昏 ラ 書 キ タル 人 ノ 筆 跡 ラ 征 拠 立 サ ル ニ 付 征
拠 物 ニ 差 出 ス 一 ヲ 拒 ム 候

右 之 通 相 違 不 申 上 候 以 上

右

明 治 十 二 年

星 亨

一 月 十 八 日

デ ニ ソ ン

東 京 上 等 裁 判 所

西 瀉 判 事 殿

追 加

一 明 治 十 一 年 二 月 八 日 付 ラ 以 テ 後 迄 ヲ 征 拠

人 ケ ス ウ 斗 ツ キ 宛 ニ テ 遺 レ タ ル 手 紙 原 書 ヲ
次 ノ 對 審 ノ 片 差 出 候 様 京 告 へ 仰 命 相 成 度 候

附録一月十七日

明治十二年一月十七日

判事原告代理人ニ對シテ

一 ホーロ呼寄ノ手續ハ已ニ決行シタルヤ

原告代理人曰

一 已ニ電信ヲ以テ通知セリ

判事曰

一 去ル十五日口供ニホーロ呼寄スルハ裁

判官及被告代理人ノ為メニ如此場合ニ

至リト原告代理人カ申立タル後判事

ニ於テ被告代理人カホーロノ付ホーロカ

身分ノ事實ヲ述ヘ云コ判決セシキ原

告代理人ハ今申スト申セリ然ルニ其ノ

口供ニ記載ナシ故ニ書記ニ命シテ記載

同法

セシム

一 由テ十五日口供餘白ニ其下ヲ記シ原告代
言人へ記名セシムルニ

原告代言人曰ク

一 被告代言人ノ議論ヲ破ルニ及ハサル
トト思料スル故ニ申サス又之ヲ余スル
者ナキ故ニ為サス

判事曰

一 右原告代言人申立ハ未タ聞カサルトナリ
是ハ原告代言人ノ一己ニ書入シタルトナルヘ
シ

因テ書記ニ余シ其趣ヲ記入ス

判事曰

一 昨日ノ續具キヲ始メ可シ

原告代言人曰

一 原告代言人ハ先ノ對審ニ於テ申立
タル通裁判官ノ判決ニ因テケスウ井キ氏
ノ証拠調ヲ為サス被告代言人ノケスウ井キ
ヲ調返ス前ニ申立ルトアリ此事ノ起ル
初ニ被告代言人ハ証拠物ヲ差出セリ
其証拠ハカローガカ自書シ記名シタル
書面ナリ然ルニ被告代言人ハ該書面
ハ誰ヨリ送りタルヤ程カ受取タルヤ又記名
書記等ノ証拠立ナシ因テ原告代言人如
此書面ヲ差出スコトヲ非難ス
此時被告代言人デニソレ之ヲ非難ス

司法省

判事曰

一 原告代理人ハ前申立ヲ言ラシム

因テ原告代理人申立ヲ繼續ス

一 右申立ニ付被告代理人ホノ申立アリ別ニ供

一 右被告ノ申立ニ對シ原告代理人之ヲ非難ス

午後

判事原告代理人ニ對シテ

一 原告代理人ハ故ラニ議論ヲ設ケ徒ラニ

時間ヲ費ス似タリ十五日ノ對審ニホリ

ノ言説ヲ聞クニ付ケスウ井キヲ調フル

止ムト云ヒ唯今ハケスウ井キヲ調フル

ヲ止ムカ如クニ申立其終リニ至テハ此

ケスウ井キヲ調フルト云ヒ前後不揃ノ申立

又証拠書類ヲ裁判所ニテ受取ル

トニ付先達ノ判決ヲ援引シ往々

論難アリト虽凡前ノ判決ニ於テ

其事事件ニ付關係ナシト認ルモ

ノハ之ヲ存クルヲアリト云ヘルヲ忘

レタルカ如シ且日本人カ日本風ニ依

テ証拠書類ヲ差出スハ従前ノ

慣習ニ據リ之ヲ措分スルハ素ヨリ當

然ナリ然レ凡外國人トノ對審ニ於テ其

外國人カ外國風ヲ以テ証拠書類ヲ差

出スニ付一方ヨリ外國風ヲ以テ之ヲ拒

ムニ方リニハ條理ニ照シ之ヲ取捨セザル

ヲ得ス但シ被告代理人ハ最早其五

口方一旦取下ルト云フニ付此事ニ付最早
議論ハナクルヘシ又原告代理人ハ似生ノ
証書ヲゲヨシツシニ據テ証拠立ルヲ求
メタルニ付ケスウ井キニ對シタル証拠調ノ
場合ニ於テハ之ヲ許サスト云ヘルモナリ
故ナク之ヲ任ケタルニアラス實ニ原告代
言人ハ此等ノ理由ヲ解セサリシト見ヘタリ
又ホームカフニ於テハ十五日對當ノ終
リニ當リ原告代理人ニ於テ口今事實
否ニスト申スト云フカ故ニ裁判官ハ被告
ノ雇人ト云フノミナルハ原告申立ノ如ク
果シテ後藤ノ支配人又代理人ナルヤ否
ヤヲ尋問ノ上若シ然リト認ムル廉アル

ナレケスウ井キノ其聽キタル言説ヲ陳
述スルヲ許スヘクト思料セシニ原告代
言人ハ免ニ角ホームヲ呼寄ルト云ヘルコ
ト此原告ノ自ラ欲スル所且ツ是レヲ呼フ
ニ答フナシト思料シ其呼寄可スルヲ止
メサルナリ以上ハ格別ニ説明スルヲ要セ
スト虽モ或ハ其趣旨ノ貫徹セサルヲ慮
ルヲ以テ如此説明セシナリ而シテ判事
ハ代理人トシテ議論ヲ為ス職當ニ非レハ再
ヒ此等ノ論説ヲ聽クニ及ハス依テ徒
ラニ時間ヲ費ヤサス「ケスウ井キ」ノ
ニ取懸ルヘシ
原告代理人 証據調ヲ始ル

司法省

口ヲ一旦取下ルト云フニ付此事ニ付最早
議論ハナラルヘシ又原告代理人ハ似生ノ
証書ヲゲヨシソシニ據テ証拠立ルヲ求
メタルニ付ケスウ井キニ對シタル証拠調ノ
場合ニ於テハ之ヲ許サスト云ヘルモナリ
故ナク之ヲ任ケタルニアラス實ニ原告代
言人ハ此等ノ理由ヲ解セサリシト見ヘタリ
又ホームカフニ於テハ十五日對當ノ終
リニ當リ原告代理人ニ於テ口今事實
否ニスト申スト云フカ故ニ裁判官ハ被告
ノ雇人ト云フノミナルハ原告申立ノ如ク
果シテ後藤ノ支配人又代理人ナルヤ否
ヤヲ尋問ノ上若シ然リト認ムル廉アル

ナレケスウ井キノ其聽キタル言説ヲ陳
述スルヲ許スヘクト思料セシニ原告代
言人ハ免ニ角ホームヲ呼寄ルト云ヘルヲ以
テ此原告ノ自ラ欲スル所且ツ是レヲ呼フ
ニ答フナシト思料シ其呼寄可スルヲ止
メサルナリ以上ハ格別ニ説明スルヲ要セ
スト虽モ或ハ其趣旨ノ貫徹セサルヲ慮
ルヲ以テ如此説明セシナリ而シテ判事
ハ代理人トシテ議論ヲ為ス職當ニ非レハ再
ヒ此等ノ議論ヲ聽クニ及ハス依テ徒
ラニ時間ヲ費ヤサス「ケスウ井キ」ノ
ニ取懸ルヘシ
原告代理人 証拠調ヲ始ル

司法省

一 被告代理人ハ原告代理人カ証拠人ニ示シタル
所ノ書面ヲ一臨見致度願出タリ

原告代理人曰 証拠トシテソ差出シタル上被告ヘ示ス可也

又証拠調ヲ始ム

一 デニソレ之ヲ非難ス

原告代理人曰 相續書面ニ何ト認ソ有之哉

一 瓜生カ後藤ニ代テ書クト有之

判事曰

一 瓜生ハ代人権アツタル証アルヤ又後藤

カ命令シタル証アルヤ

原告代理人曰

一 瓜生ハ後藤ニ命令ヲ受ケ書面ヲ認

ルル権アリ此ハ雇人ナレハナリ云々

判事曰

一 何項ノ一ナリヤ

原告代理人曰

一 只今証拠人ニ問ヒテ起ス積ニ有之

此時被告代理人星亨ヲ申立アリ口供ニ記ス

原告代理人曰

一 被告カ該書面ヲ一臨見シタル上ハ証拠ト

ナラサル一ヲ非難スルヲ得ヘカラス云々

デニソレ曰

一 該書類ヲ裁判官カ認ソザル内ハ非

難ニ得ヘシ云々

此間判事星ト問答ナリ

判事原告代理人ニ對シテ

一 被告代理人ニ於テ瓜生ハ象二郎ノ雇人ナリト雖モ代理人又ハ代理權ヲ以テ事ヲ取扱フモノニ無之趣依テ代理人又ハ代理權ヲ有スル証據立テ為ハナレハ其証據調ヲ為ハテ許ス

原告代理人曰

一 被告ノ申立ハ証據ニナラス

判事曰

一 瓜生カ後藤ノ雇人タルコト迄ハ明ナリ此上ハ後藤カ命令ニ依テ該書面ヲ認ノ果シテ代理權ヲ有スルトノ証據立テ為シ然ル後該手紙ノ有効無効

ニ推及ス可シ

原告代理人曰

一 此ハ福扱人ニ對シ福扱立ル積ナリ

判事曰

一 其調ナレハ可ナリ

又曰

一 原告ハ何頃該書面ヲ受取タルヤ

此時被告代理人星亨ハ原告代理人ノ問付此難ノ言アリ

判事原告代理人ニ對シテ

一 原告代理人ハ瓜生ハ後藤ノ代理人ナルヤ又ハ其命合ヲ受テ相認メタルヤニ意ヲ福扱立ル様注意ス可シ

明治十二年一月十八日口供

原告代理人証拠調ヲ始ム

被告代理人星亨、右証拠調ニ付上

申セリ お口供
証ス

原告代理人曰

昨日ノ判決ニ随ヒ尚ラ起セリ此ハ瓜生ハ格

藤ノ代人タル云々

書事曰

尚フテ可ナリ

原告代理人カ差出シタル書面ヲ見テ

被告代理人星亨之ヲ水難ス お口供
アリ

テニソシモ海之ヲ水難ニテ曰

該書面ハ証拠トナラス何トシハ書キタル

人ノ存命ナレバ其人ニ問ハサル云ク

星亨曰

一該手紙ハ本年ノ一月付ナリ而シテ原告
代官人ニ此ヲ以テ九月月前ノフヲ証セン

トスルナリ

原告代官人ハ古ニ對シテ答弁シ又ベストノ著
シタル書面ニ付云々上申セリ

一テニソシ之ヲ水難ス

書事曰

一瓜生書跡ノフニ付証人ト問答有之被
告代官人故障ヲ申立然ルニ証人ハ此
筆跡ヲ証スルニ此ト同筆ナル書面ヲ度
ニ受取タリト云フノミナリ度ニ受取タリ

ト云フノミナリ甚タ不十分ナルナリ其座
ニ受取タル書面ヲ出シ今呈スル所ノ証書

ト同筆ナルヲ証シ而シテ其書面中被
告ノ曾テ認メタルモノアルカ又今日被告

ノ呈出シタルモノト認ムヘキモノアルカ水
ハ之ヲ瓜生ノ筆跡ナリトシ又之ヲ培藤象

二郎ノ常ニ書記セシメタル人ト云フヲ
証スルニ足ラサルハ被告代官人カ此証

書ノ差入ルヲ拒ム道理アルモノト思
考ス

原告代官人曰

一該手紙ハ証據物ニ相成居ルヤ

判事曰

刑
法
省

一 未夕 証物 云々

原告 代理人 曰

瓜生、子路ヲ示サレカ 為メ 該子 賦ラセ
也セリ 未夕 証物 云々

判事 曰

証物 云々

未時 原告 代理人 云々 前 判決 之ヲ 水
難ス

但此 外ケス ウ井 云々 取調 サル

明治十二年一月廿四日 供

カルク ウー ド 今 裁判官 下 令 スル 以テ ヤ
ハ 裁判官 前ノ 判令 及ビ 下 令 スル 氏ヲ 調 フル
ノ 点ヲ 束縛 シル 根ル ト スル カ 或ハ 余ヲ
シテ 裁判官 後 判令 改ムルト 解セシムル
ヲ 疑スル 乎

裁判官 曰ク 其方ハ 何ノ 判令 束縛 ヲ 云フカ

カルク ウー ド 曰ク 余ノ 主トシテ 云フ 処ノ 束縛
ハ 即チ 裁判官 事情アリテ 前 審問ノ 証物ト
シテ 呈セシ 処ノ 書翰 拒ミル 且 其 筆者カ
記名セシ 処ノ 書 親 即チ 六 月中ノ 後 藤 氏ノ 負債
ノ 表マル 処ノ モ ノヲ 受理スル 拒ミル 一 加
之 千八百七十八年一月前ノ 事實ニ 付ケジツク

氏ヲ拘フルコトヲ拒止セルコトナリ(余ハ裁判官ハ
今令セシ如ク余ハ前ノ判令ヲ故ニ誤解セシト
云フ権ナシ又裁判官ハ代人ニ對シテ故ノ文字
ヲ用フルハ大ニ其権限ヲ超過スト考フ余ハ裁
判官ノ申渡シノ意味)
以上()ノ中ニ在ル後ハ裁判官ノ間ニ通シセサ
ルコト以テ之ヲ禁除ス

「カルクウード」曰ク然ル上ハ裁判官ハ「ケジツク」
氏カ他ノ肩頼ヲ進呈スルコトヲ要スト解之其故
如何トナレハ既ニケロトガ氏ノ肩頼ヲハ日本
ノ法律及ニ其裁判手續ノ法方ニテ受理スハキ
モノトシテ之ヲ受理セシ如キ要求ハ蓋シ日本
ノ法律ニ拠ルナレヘシ然レ氏後藤氏ハ生ノ記

名セシ書翰ヲ受理セサルハ英國法律ニ依テ受
理スヘカラサルト思考マレ故ナルカ

「カルクウード」ト裁判官ニ答テ曰ク余ハ前審問ノ
際ニ於テ余ノ適用スル手續ヲ申述スリ而シテ余
ハ今既ニ履行セシ処ノ手續ヲ変更ス可キハ何
レノ理由ニテ之ヲ為スカ余ハ解セス余ハ最早
「ケジツク」氏ヲ調ヘサルヘシ

裁判官「カルクウード」問フ其ノニクハ何時法律上
ノ論安否ヲ進呈スルヤ

「カルクウード」答フ余ノ証拠調完全ノ後之ヲ進
呈スヘシ余ハ此ニ調フヘキ証拠人アリ「ケジツ
ク」氏ハ對答ヲ受ケルヲ本日出廷ス

裁判官曰ク然リト虽モ其方ハ東京裁判所ノ判

決ヲ不法ナリトシテ當廳へ控訴セリ故ニ最一
ニ其不法ナリトスル為^權ヲ明ニセサルヲ得ス
「カルクウー」ト曰ク日本外務卿、司法卿及ヒ英
國公使「ハ」ト「バ」アクス、美諾ヲ経タル當廳所
長ト横濱英國領事ト、条約ニ依レハ^柳モ當廳所
ニ出訴スル訴訟ニ英國人ノ関スル^柳ハ都テ再
審ナル「」ヲ裁判官ハ豫メ知ラサルヲ得ス
「」ニソシク曰ク該条約ハ所謂収尾判決或ハ豫審
ニアラサル判決ニ関スルモノニシテ一時、訴
訟ノ許否ノ令ニ適應セス
「」カルクウー「」ト曰ク右條約ハ裁判官ノ許諾ヲ経
テ初メ代理人ノ間ニ取結ヒ先ツ余カ余ノ証拠
物ヲ進呈シ且ツ余ノ証拠人ヲ呼出シ之ニ次

被告代言人ハ其証拠人ヲ呼出シ且ツ其証拠物
ヲ進呈ス然レ後被告代言人カ法律上ノ論を考
テ呈シテ証拠ヲ悉ク再閲シ次テ余ハ之ニ答
答テ進呈シ以テ當訴訟ノ審問ヲ終ルモノナリ
次ノ日星氏ハ如此ハ日本法庭ノ裁判手續ニ
背スルヲ以テ之ニ故障ヲ容^ルリ
余ハ右条約、^免モ角モ其變更セシテ強テ故障
ス
一ニノ論議ノ後ニ裁判官ハ星氏ノ故障ヲ容レ
ルル如ク該条約ヲ主張スル能ハサル「」ニ判決
セリ而シテ初メ余カ余ノ証拠ヲ呈シ且ツ余ノ証
拠人ヲ呼出シ星氏之ニ次テ証拠ヲ呈シ証拠人
ヲ呼出シ而シテ後余カ第一ニ証拠ヲ再閲スル

調
法
書

為メ、法律上ノ論争ヲ進呈シ星氏ハ次テ之
ニ答答肩ヲ進呈ス又シ余カ右答答肩ヲ尚ホ答
弁ヲ要スルト認ムルハ之ニ答論スルノ許可
ヲ得ルト確令セリ又余ノ論争書ヲ呈スル前ニ
適當ノ理由ヲ述ビ被告ノ進呈セシ処ヲ証拠
ヲ破毀スルニ足ルヘキ証拠ヲ進呈スルノ許可
ヲ得ルトノ款條ヲ添加セリ

裁判官ノ退任申出之レアリ夫レニ基キ余ハ
今日マテ論争為ニ来リシモノヲ今日ニ至テ裁
判官カ之ヲ顛覆スルハ余ヲ解シ難キモノナリ
余ハ都テノ証拠ヲ呈スルノ權ヲ得レハ裁判官
ニ於テハ後証拠ハ当訴訟ニ余ノ關係サルモノ
ト認メ之ヲ拒ムニ非レハ余ノ進呈且ツ陳述ス

ルハ、証拠ハ悉ク之ヲ聞キ且ツ之ヲ受理セズ
ンハアラスト思考々而シテ後証拠ヲ拒ムノ責任ハ
獨リ裁判官ニ在リ若シ余ハ當訴訟ヲ補翼スル
ニ証拠ヲ呈スルノ權ヲ得サレハ考フルニ裁判
官今日ニ至ラサル前ニ之ヲ決シタルヘシ而シ
テ今不^要且徒消ノ時日ヲ省略シタルヘシ左ノ
二箇ノ方法ヲ採キテハ其他ノ方法之レアラサ
ルモノナリ余ハ証拠ヲ呈スルノ權アルヤ否ノ
道ナシ故ニ今余ハ何ノ法方ヲ適用スルヲ述レ
前ニ此点ニ付テ裁判官ノ意見ヲ聞カンヲ乞フ
テニソシ曰ク法律上ノ論争ヲ進呈スル期限ニ
關シテノ条約ハアラサルヘシト思考ス裁判官
曰ク余被告代理人何レカ法律上ノ論争ヲ差

布ノミ

出マシ先ニスルノ終議起リシ由ハ先ツ原告代
言人ヨリ之ヲ照メ被告代言人ハ之レニ答弁ス
ハク旨曾テ令セシ処^注令ハ論弁^注呈スルニ
就テハ原告カ証拠ヲ呈スル前後ノ論ハ之ヲ定
メサリシ然レモ裁判官ハ前ニ初メノ証拠ヲ呈
スル^注ニ付被告^注方ノ
登進呈ノ^注ヲ聞キ^注其時ハ裁判官ハ之ヲ好
思セリ然レモ今之ヲ熟考スルニ不好ト思量ス
其故ハ只ニ事實ノ証言ヲ聞クノミニテ法律上
ノ論^注無^注ク問ハサレハ判決スル能ハサレハナリ
当訴訟ハ法律上ノ論辯ヲ聞クノミニテ蓋シ裁
判官ハ判決スル^注ヲ得^注ヘシ如此ナルヲ以テ裁
判官ハ事實ノ証拠^注ハ不要^注ナリ而シテ既ニ余

カ申渡シタル如ク原告人ハ東京裁判所ノ判決
ヲ不法ナリトシテ^注当廳^注ハ控訴セシナレハ其ハ
裁判官ハ法律上ニ就テ論議スルハ原告ノ望ム
所ナリト思量ス如此セハ当訴訟ニ関シテハ甚
多容易ニシテ且控訴ノ常法ナリ爰ヲ以テ今裁
判官ハ原告兩間ニ取結ヒタル^注契約^注別^注々^注初^注メニ
証拠次ニ法律上ノ論弁^注呈^注スル^注ト^注事^注ヲ
取消シ更ニ裁判ノ手續ヲ変更スナレモ裁判官
ハ決テ今明兩日ノ後ニ至リテ原告ノ証拠ヲ呈
スルヲ許サ^注ル^注ニ^注ア^注ラ^注ス^注法律上ノ論弁^注呈^注ニ就
テ見聞ヲ經タル後証拠人調ヲ要用ナリト認め
ル場合ニハ之ヲ許スヘシ原告人ハ証拠^注油^注ヲ本
日止ムルカ或ハ明日止ムルカラ其適当ヲ計ル

司
去
當

カタクウード曰ク裁判官ハ余ニ未だ裁判必
 判決ハ該廳ニ呈シテ証拠ノモニ依リ不正ナ
 リレトヲ表スル所ノ論及肩ヲ進呈スルイノ令
 ハ余之レニ從ハサルヲ得ス然レ此ノ判決
 ニ從テ故障ヲ容レサルヲ得ス當裁判所ハ下等
 裁判所ニ於テ既ニ設ケラレリ訴訟ノ再審ニ
 於テノ法律上ノ非ハ控訴廳ニアラスモ此ノ
 如クナラサレハ二ヶ月未ノ証拠ヲ免セシヨ
 リ之ヲ拒止スルヲ以テ當廳ノ職掌トスナレ氏
 裁判官ハ只今ノ判令ヲ主成スルハ密口不要
 ニ偏スハ此當訴訟ノ記録ヲ閱讀スルモノハ當
 裁判官及京被双方ノ代官人ノ意ハ當訴訟ハ決

テ下等裁判必記録ノ控訴ニアラスレテ再審ナ
 リト云モ只當裁判官ノミ之ヲ控訴ト認ルモノ
 トセサルヲ得サルハ明瞭ナリ爰ノ点ハ甚ク肝
 要ト考テ故ニ余ハ裁判官ノ判令ハ収尾ナルカ
 或ハ裁判官ハ當訴訟ヲ只當裁判所ニ進呈セシ
 論及及シ証拠ノミニテ判決スルカヲ聞カンヲ
 亡フ余ハ如此ナルヘシト信認ス
 裁判官曰ク上等裁判所ハ控訴スル所ナリ
 「ガルクウード」君曰ク然リ然レ氏英國人ノ関
 マルハハ悉ク再審トナル
 裁判官曰ク設ニ再審ト云モ自ラ控訴ノ意ヲ含
 有ス裁判官ハ當訴訟ノ判決ハ未だ裁判所及シ
 當廳ハ西記録ニ依テ之ヲ下スヘシ

「ルニッ」曰ク当訴訟ニ控訴シテ再審ニ非ス
再審ナルモノハ本件收尾判決ヲ不服トシテ控
訴スルモノハ再審ナルモ裁判官ノ勝手下命ヲ不
服トシテ控訴スルモノハ再審ニアラス

附録
一月廿四日

明治十二年一月廿四日

判事原告代理人ハ若シテ
一去ル十八日ニ於テ原告代理人ハケスウキ
証拠調ヲ當裁判所ニ於テ東隣スル
云々此上ケスウキキノ証拠調ヲ成サ、ルヘ
キ旨申立タルハ此方ハケスウキキノ証拠調
ニ付原告代理人ノ申渡シタル趣意ヲ取違
ヘタルモノト見ヘタリ蓋シ原告代理人ハ此方
ノ申渡シタル趣意ヲ知リテカラ故ラニ知サ
ルヲ為シテ如此申立ヲ為シタルモノト考フ此
方ニ於テハ該訴訟ニ付直接ニ關係アリト認
ムル証拠調ハ後令此訴訟カ長引トモス

同法書

止ムルハ各之只原告代
言人カ訴許証
ニ直接關係ヲ有セサル証
拠調ヲ差止ム
ル趣意ナリ然ルニ原告代
言人ハ故ラコ
此方ノ申渡、趣意ヲ取違
ヘ裁判所ハ
ツケスウキキ、証拠調ヲ
東縛スル方申立テ
シルハ甚多不却合ナリ自
今如此申立ハ
不相成此方ニ於テハ訴
許証ニ直接ノ
關係アリト認ムル証拠調
ハ差止ムル義
ニハ之レナシ

原告代
言人曰

右利事申渡ハ解シ方ニ
ナリ過日御裁
断ニテハケヌウキキ、証
拠調ニ付幾分
カ東縛サレヨリ右御裁
断ハ幾分カ更改

サレタルヤ又ハ其通御
据置相成タルヤ云

到事曰

一過日東縛云レトハ何レノ
處ヲ云フヤ

原告代
言人曰

一東縛トハ第一過日御
審問ノ内一ノ年
抵テ証拠トシテ差出シ
タルニ採用セラシ
ス第一ニ其内モ其前モ
後々藤カ原告ニ
對シテ責任ヲ帯フル所
ノ証拠多數ハ
十一月付テハ差出シタル
ニ採用セラシス第一
三二千八百七十八年
月以前ニ係ルハ
悉皆ケヌウキキ、証拠
調ヲ許サレザル
是ナリ云レ

別事曰

一 只今原告代理人カ申立タル廉カ、今
又改テ差訴スト云フ趣意ニ非ス、ケス
ウ井キレカ證據調ニ付此方ノ申渡シタル
趣意ヲ取違ヘテ答ルト云フ、ケル云ハル
モ、ナリ而シテ尚詳ラカニ此方ノ趣意
ノ在ル所ヲ言渡ス可シ
一 ケスウ井キノ、證據調ニ付去ル八日原告代
人カ申立タル問題七項ニ付過日モ言ッカ
如ク第一ハ計算上、第二ハ已ニ差出
シタル證據書類ニ記載有之第三ハ法
律上、第四第五ハ本訴ニ屬スルモノ
ナリ而シテ第六ハ、訴訟ニ直接ニ關係

アルモノト認ムルニ付其證據調ヲ許シタ
リ第七ハ格別關係ナシト認ムル原告
代理人ニ於テ極メテ所要ナリト思フ、右
七項ニ損害、ケル云フニ付其損害アル
性質ヲ證據ミル、ケル妨ケナシ
一 又原告代理人ハケスウ井キノ、證據調有
時間ヲ制限セラレタルヲ以テ取調方不
相成多申立ルト虽氏前ニモ言ッカ如
ク此方ハ、訴訟ニ直接ニ關係アル證據
調ニアラスレハ、差止ムルト、趣意ナル故
ニ、訴訟ニ直接ニ關係アル、ケル調フヘ
レト云フ、趣意ナリ然ルニ原告代理人ハ
何項ヲ、ケル取調可能ナト問フニ付

同法

去年頃より、可能ト云ヒ原告代理人
ハ何月何日ヨリ可能ヤト問フニ付一月一
日ヨリ可能ト云ヘルモノナリ其時間ヲ制
限セラレタルハ原告代理人カ需メニ出テ
タルモノナリ此方ヨリ故ヤラニ時間ヲ制限
セシモノニアラス且該訴訟ニ直接ナル関係
ヲ有スル證據調ヲ差止タル趣意ニアラ
サルナリ

又カローガカ手紙、取方ト依生、手紙ノ
取方ト相違アルヲ以テ不服ノ申立マリト
虽此此方ハ日本国裁判所、判事故日
本国ノ規則ヲ主張スルモノナリ初メ星
亨カ日本風ノ手続ヲ以テ被告第五号

カローガカノ手紙ヲ差出ス故ニ其依之ヲ受
取置タリ原告代理人モ日本風ニ依生カ
手紙ヲ差出スナラハ其依之ヲ請取置ヘ
キニ原告代理人ハ英国ノ規則ニ據テ証
據者類ヲ差出サレトスルカ故ニ被告代
言人モ亦英国ノ規則ニ仍テ之ヲ抗論ス
ル權ヲ生シタリ此原告代理人カ自ら招
ク所ナレハ不服ヲ唱フル理由ナカレヘシ
又依生カ各跡ヲケスヤキレニ於テ被告
シタル者類ヲ差出サレハ云ヒト申渡シ
シル理由ハ當裁判官ハ法律ニ依テ事實
ノ裁判官ニ依リ右者類一覽ノ後或ハ法律
上ノ思料ニ依リ或ハ事實上ノ熟考ニ

同法

指り蓋し申す証據人ト相異ナル意見ヲ抱
クヘキトアレハナリ

原告代官人曰

一 裁判官ハ第一ケスウキヤ所持スル面ヲ
差出スヘキ命令アリタリ是レハ日本律ニ
據テ申セラレタリト解シテ可ナルヤ第二ダ
ロ一ザノ手紙ハ日本律ニ據テ受取ラレタリ
ト解シテ可ナルヤ第一瓜生カ手紙ハ英國
律ニ據テ採用セラレスト解シテ可ナルヤ云々

判事曰

一 第一瓜生カ手紙ノ一ニ付ケスウキヤ宅
ニ箴ツモ所持シテ居ル手紙ヲ差出ス
ヘキトテ致シタルハ日本國ノ法律ニ據ル

エアラス裁判官カ條理ニ照シテ如此ナラサ
レハ充分ニ証據ヲ得タルト能ハサル道理
ニ照ラシタモモナリ第二証告牙五等ノダ
ロ一ザノ手紙ヲ請取タルハ日本裁判
所ノ例規ニ據ルモノナリ第三瓜生ノ手
紙ヲ受取ラサルハ英國ノ法律ニ據ルニア
ラス原告ノ第一ケ依テ條理ニ照ラシ受取
ラサルモノナリ

一 サテ後訴証ニ付此迄ハ事實ノ確證ニ
許シテアレバ其初原告ハ審判ノ使ヲ
不法ナリトシテ控訴セシモノナレハ法律
上ノ論ヲ先キスヘキトナリ然ルモ原告
代官人ハ之ヲ論後ハ事實ノ調ヲ先キ

同法書

こせり如此こテハ方法不宣仍テ今日日
ハ尚原告代言人こ於テ証拠調ヲ欲スル
テラハ此迄ノ如ク其調ヲ許スト虽氏其後
ニ於テハ法律上ノ論ヲ申立ツヘシ到底法
律上ニ於テ勝ヲ得サレハ詎控訴ハ之ヲ
ヘカラス故ニ法律上ノ論ヲ申キ其上ヲテ
尚事實ノ調要申サレ場合マラハ之ヲ
許スノマレ可シ

又曰

一 尚証拠調ヲ為スヤ

原告代言人曰

一 取調致ラス

星亨曰

一 ケス内井キノ証拠調ヲ致度

別事曰

原告互對ノ吟味ハ法律上ノ論ヲ確キ
タル上右調要申サリト思科セハ之ヲ
許ス可シ仍テ法律上ノ論ヲ了ル迄互
對ノ吟味ヲ止ム可シ

又曰 原告代言人ニ對シテ

一 過日法律上ノ論ハ書面ヲ以テテ差出ス
趣申立タリ何項迄テ差出スヤ

原告代言人曰

一 尚他ノ証拠人ヲ取調度其証拠調了
ハラサレハ法律上ノ論辯ヲ為ス能ハス

別事曰

同法

原告代理人ハ東京裁判所ノ裁判ヲ不法トシテ控訴スルニ未ダ曾テ其点ヲ論セス宜ク其論辯ヲ為ス可シ

原告代理人曰

英国人許記ノ付テハ日本政府ト英国領事トノ契約アリ云々

判事曰

如此多年ヲ費スニ及ハス原告ハ審判ノ判決ヲ不法ナリトシテ控訴スルモノナレハ先ノ其不法ノ論ヲ申立ルハ当然ナリ裁判官ハ先ノ其法律上ノ論ヲ聽ク權アリ故ニ法律ノ論ヲ申立ルニ其模様ニ依リ尚事實ノ點ヲ

ナスヘシ

予コソレ曰

原告代理人ハ言フ所ハ全体ノ裁判ニハ関係アリ如此論辯差止願等ハハ関係ナシ云々

原告代理人曰

法律上ノ論ヲ了ラサレハ證據調ヲサハルカ

判事曰

今明白ニ證據調ヲ許ス

原告代理人ハ法律ノ論年ノ付申立アリ

詞法譜

刑事日

一 過日原被告、間ニ於テ法律ノ論ヲ申スル
一、前後、如東ニ就キ判決ヲ下シタル趣
意ハ都テ先ツ原告ヨリ申立、被告之ニ答
辯スルノ順序ヲ言渡シタルモノナリ
據テ法律論ノ順序ヲ確定シタル
趣意ハ、アラス且、依據調ヲ先キシ法律
ノ論ヲ後ニスルヲ原被告、承諾ハ其節
ニ在テ右ノ如ク致スモ宜シカルヘク此方モ
鬼料セリ然レモ今日ニ至リ其方法
、宜シカラサルヲ見出シタリ何トシハ事
實ハ調ヲ先キ程致シテモ法律ノ論ヲ
後ニスルヲ原告、判決ハ為レ然ラズ之ニ

及シ法律ノ論ヲ聽クハ或ハ其論ノ判定
ニ依テ決断ノ勝敗定マレアルヘシ然レ
ハ他、証據調ニ實ニ必要ノナリ且原告
控訴ノ趣意ハ、其審判決ヲ不法ナリトシタ
ルニ付法律ノ論ヲ先キスルハ素ヨリ原告
ノ望ム所ナレバ如此証訴ノ方法ニ於テ便
利ナリ又控訴ノ趣意ニモ適ヒルナレバ今
ヨリ其証訴ノ手續ヲ改良スルヲ申渡シタル
ナリ夫故先キ原告ノ控訴証據調ヲ先
ニ後ニ法律ノ論ヲ先キスルヲ承諾ハ此申
渡シニ依テ消サレタルナリ且原告ノ証
據調ヲ今日限テ最早其他ノ日ニハ之
レヲ許サスト云フニ非ズ法律ノ論了リ事

詞法書

字、既調ヲ聴カサルコト得サル場合ニ於テハ、尙其指調ヲ許スヘシトシテ、脚意ナリテ、原告代言人カ今日ニ止ルモ明日止ルルニ随意ニシ、只裁判所ハ今日日ヲ許シ、其他ハ法律ノ指調ニ依ルニキ、トテ申渡タリ

原告代言人曰

一、己ニカカ差出シル訴状ニモ記載セリ法律ノ指調ハ何ヲ指スヤ

予ニシテ曰

一、指調調リテ、指調ナルコトヲ法律ノ指調トシ、様ナリ云々

原告代言人曰

一、指調調ノ確實トシ、指調云々

原告代言人曰

原告代言人於テ、何様ノ思科ヲ以テ、指調スルカ夫ハ指調也ス、併シ原告代言人ハ、如審裁判ヲ不法トシ、指調シ、又此ニ未タ其法律ノ指調キ、以テ裁判官ハ之ヲ聴クコト要スルナリ

原告代言人曰

一、訴状ノ第一條ニ、法律ニ反スル云々、次條ニ、其他ノコト記載セリ、夫レハ、為メ指調スルコト要スルナリ

原告代言人曰

一、其指調ニ、聴カサルコト非ス法律ノ指調ナリ

同法

テ其証據を以て聽クべし可シ

テコソシト曰

一 誤差止一併ハ全ク控訴スル故東京裁判所一差出シタル証據物ハ當廳ニモ差出シタル依テ其法律論ヲナス一キナリ云

一 刑事被告代言人ニ對シテ

一 法律論年書ハ以て頂上差出スヤ

原告代言人曰

一 今日近証據を以て事實ハ法律ノ論年ヲナスヘシ云

刑事曰

一 今日近ノ証據を以て聽クベシ要セヌ審判裁判

ハ法律ニ於テ正シカラサル旨右ニ對シタル法律論年ヲ聽クベシ要ス今日近証據を以て聽クベシ法律論年ヲ以テ之ヲ聽クベシ

原告代言人曰

一 控訴コトヲス再審ナリト思フ云、結局東京裁判所ハ証據ヲ裁断セラル、ヤ又ハ此カ多聽、呈シタル証據ニ基キ裁断セラル、ヤ

刑事曰

一 法律上ニテ裁判スルベシ事案上ニテ裁判スルベシ又ハ法律上及ヒ事實上ニテ裁判スルベシ

詞法

又曰

一 上等裁判所、控訴スル場所ナリ然レハ再審、性質ヲ含ム

原告代言人曰

一 当廳ニ控訴聽テリ然レハ英人カ原告ガ為出ルヤ、毎ニ再審ナリ

テニッレ曰

一 控訴カ控訴ナレハ再審ナレハ然レハ該件ハ本訴ニ附屬スル訴ナレハ条約外ノモノナリ

原告代言人曰

一 控訴ハ控訴ト見做サル、ヤ再審ト見做サル、ヤ

判事曰

一 素ヲ控訴ナリ

原告代言人曰

一 東京裁判所、記録ニ據ラレ、ヤ又ハ新タナル證據ニ據ラレ、ヤ

判事曰

一 東京裁判所、記録ニモ據リ又新シキモノニモ據ル即チ再審ノ性質ヲ含ムモノト見ナリ

原告代言人曰

一 東京裁判所、記録ニ自カ承諾ナレハ

判事曰

詞性譜

原告代理人ノ承諾ヲ待テ判決セズ
原告代理人曰
英國人ノ取扱ハ日本外務卿ト英國領
事ト、お条ニ基クテ

判事曰
原告代理人ノ承諾ヲ得サレハ東京裁判
所ノ書類ヲ見ル能ハサルハ誤ナシ

原告代理人曰
東京裁判所既ニ原告承諾セサレハ
見ル譯ナシ

判事曰
法律上ノ論ハ如何
原告代理人曰

お条ヲ一讀マラシテ要ス

判事曰
東京裁判所ノ書類ヲ見ルト否ト論
セサル可ナリ

原告代理人曰
何レノ事實ニ基クヤ

判事曰
控訴状ニ不法云ヒトアリ其論辯ハ總
リテ要ス

又曰
到底其法律上ノ論ヲ存サルハ控訴状
ニ虚言ヲ記載セシヤ否ラサレハ東京裁
判所ノ裁判ハ法ニ適シタルモノト思

同法書

与上等裁出有様

午の百七十九年一月二十日

「チャルテニマゼ」に在り

ヨリ後簿象より出

ル一件

裁出有様ヨリ「カルクウ」に代へ

控所 是より再審ノ「付」所は是下が去後ニタル
事、関シ裁出有様 控所ハ收結ニテ是下ハ裁出有
所ハ控所スル「付」方法ヲ付キ 器謬アルベキ者見
ユルトセリ故ニ裁出有様ハ唯今是下ハソレヲ詳細ニ
弁解スベシ ○當裁出有様ハハ論控所ヲ「スタ」
ノ裁出有様ヨリ 然レハ當裁出有様ハ下等裁出有様ノ
証據ヲ「再審」ス故ニ此ノ裁出有様控所ニ去後セシ

出り再審ノ性質ヲ分用スルナリ○然レモ新キ
再審ハ控訴ノ趣意トハ別ナルモノニアラス○故ニ
當裁判所ニ控訴ハ下等裁判所ノ既決ニ對シテ
國ニ而シテ時ヨリテ之ヲ用ルナリ○是レ當裁判
所ニ於テ控訴スル件ヲ付キ手續キノ方法ナリ○然
レモ昨々是下控訴ハ唯再審ヲ已トシテ
陳述セシ様ナル契為ハ決シテアラサリシナリ何ト
ナレハ若シ控訴スルモノノ趣意アラザレバ當裁判
所ニテハ實ニ控訴ヲ允件セザレバナリ○其外是下
ハ是下ノ訴狀中ニ(控訴ヲナシタリ)トシテ詳
細ニ申立テ、アテザリシヤ○是是下ハ決レカタメ
先例ヲ指スルナリ○(アテトアテ)ヨリ片断ナリ
安否ノ裁ハ一件ニ付是下控訴ノ要件ハ再審ニ付

控訴ニアラザリシテ言從シタリ○其ノ際余ハ
オノ事ニ付當裁判所控訴ノ手續キヨロ下ニ
并解シタリ然レモ是下ハ其ノテ總テ忘却セシト
見ユルナリ裁判所控訴此事ヲ二ヶ月以テ内
へ申聞ケタルナルベシト是下控訴又言從ス然レ
裁判所ハ昨ハ此事ヲ付 充テナル并解ノ内ニ
トヘタリ
原告代官ノ(ハ法律ノ点ニ於テ右編并書ヲ
差出ス)テ裁判官ヨリテ名セラレシナラハ左様
ナスヘシト言從シタリ而シテ昨ハ、余今ハ除キ
セラレガルモノナルカ故ニ裁判所控訴ハ何故原告
代官ノ(カ)右編并書ヲ差出スヘキヤ確カニ言從
スルコトナリ(二)安ス

カルクウード氏

私ハ諒裁裁ヲ正シカラスト思慮スル一ヲ指示
シタシ

裁判官

「カルクウード氏、後ヲ聞クヲ拒ナリ」

只今私カ差出ス一ヲ命セラレシ 論并書ヲ差出
ス一ヲ差ニ私ヨリ之ヲ差出スヘキ時トテ裁判官
下ニ立候シ能フニ先キ立テ私カ何レニヨリテ論并
スヘキカヲ知リタシ 右ハ下等裁判所ノ記録ニヨルカ
或ハ尚裁判所ノ目前ニ立出シタル書面ノ記録
其ニ口上ノ記録ト共ニ下等裁判所ノ記録ニヨル
カ或ハ尚裁判所ノ目前ニ立出シタル書面ノ記録
其ニ口上ノ記録ト共ニヨルヘキヤ

私ハ法律ニ於テ正シカラズトノ詞ノ後チハ而シ
テ証拠ニ反對スルトノ詞ヲ附シタルニヨリ誤解ヲ
除クタメ差留メノ一ヲ付キ當裁判所ヘ差出シタ
ル私ノ願ヲ 補正スル一ヲ許可ヲ得タシ而シテ
尚裁判官ノ目前ニテ右願ノ再審セララル一ヲ
願フナリ

「ニソン氏」

私共ハ右願ヒノ補正或ハ願ヒノ再審ヲ拒マサル
ヲ得ヤルナリ

原告代言人ハ下等裁判所ノ命令カ法律ニ於テ
正シカラサルカハ廢棄セラレヘシトノ 理合トシ
テ言説ヲナシタリ○尚裁判所ニハ同人カ甚シク以テ
罷命トシテ詳説ヲ要スル規則ナシ而シテ同人ハ

自儘に其レヲナシタリ而シテ是レ留メテ拒ミシ
 坊令ヲナスヲ謬リタル下等裁判所ノ記録ヲ示シ
 同人ノ願ヲ第一ニ補助スヘキ準備ナスヘキナリ
 ○控訴規則第一條第七款ニ下等裁判所ノ記録
 ハ双方ノ承認ナシニ当裁判所ノ同前ニ提出セラレ
 得ベシト記載セリ○昨カ「カルクウキド」ニ於テ当裁
 判所ノ所長ト英國皇帝陛下ノ領事トノ間ニ
 ナセシ取極メニヨリ下等裁判所ノ記録ハ四人
 (原告代官人)ノ承認ナシニ当裁判所ノ同前ニ
 提出セラレ、コ得サリシト言ヒシト付キ私ト
 言説セサルコ得サルナリ
 私ハ該取極メノ中ニ當裁判所ニ自己ノ所為ヲ
 以テ當裁判所ノ同前ニ下等裁判所ノ記録ヲ

提出スルヲ妨礙セラレタリシトテ文ニ見出サス○
 原告代官人ハ此裁判所ニ於テ留セラレタル如ク此
 裁判所ニアル同人ノ取極ヲ補助スヘキ準備アラ
 ガリシナラハ學ナル方ニ於テ是レ取極ヲ却下ス
 ヘキコト私ニ見ユルナリ

裁判官

是下ニ訴状中ニ東京裁判所ノ裁判官ハ法律ニ
 於テ正シカラス又是下ニ東京裁判所ニ對シ當裁
 判所ニ控訴シタリトテ言説セリ是レ何人トモ
 之ヲ見ル者ノタメ甚タ判然タラサルヲ得ス故ニ
 余ニ於テハ補正ヲナスコトハ必用ナラスト思考スル
 ナリ○是レ補正ヲナセシナラハ其レハ全ク異ナル
 意味ニナルヘシ左スレハ當裁判所ハ如斯キ補正

譯者曰
原文中ニ余白アリテ
ソノ意味不十分ナ
レドモ原文ノ終ニ
余白ヲ存ス

譯者曰
原文中ニ余白アリテ
ソノ意味不十分ナ
レドモ原文ノ終ニ
余白ヲ存ス

ラ允許セザルベシ。○法律ノ点ニ於テ是下カ論
及書ヲ差出ス。ト付キ是下ハ三ヶ条ヲ申
附シタリ。其第一

其レハ當裁判所ニ於テ甚ク奇異ニ思考
ス。ナリ。○是下ハ是下ノ控訴状ヲ差出ス時ニ
控訴状所ノ裁判カ法律ニ於テ正シカラサリシト
テ説セサリシヤ故ニ是下於テハ控訴状所ノ何レカ
正シカラサル法律ニテアルカヲ當テ示スヘキ業ナ
リ。○裁判所ヨリ昨ハ是下ニ申聞ケタル論及書ハ
是下カ法律ニ於テ控訴セシ点ヲ指シテ所ノモ
ノナリ。○故ニ當裁判所ニテハ當裁判所ノ記録ニ
ヨリタル論及書ヲ差セズ。○實ニ示告代々人ハ
能ク

知ラスンハアルヘカラス
「カルクウート」

私於テ論及書ヲ差出スナラハ十日内ニ之ヲ差
出スベシ。○私ニ於テハ此等ノ裁裁ニ関シ私カ至
當ニナスヘシト思考スルニ處置ヲナス權ハ私
自身ニテ保持スルナリ

裁判官於テ能ク知ル通り「ホー」氏ハ長崎ヲ
大ナル入費ニテ携帶サレタリ而シテ私ハ何項
裁判所於テ同人ヲ取調ブルニ都合ヨキヤ則チ
此一件再審ノ次期ハ何レノ日ニアルヤ之ヲ知ラ
ハ大慶ナルヘシ

裁判官
是下若シ論及書ヲ差出スナラハ明日ヨリ十

日内ニ差出スヘシト言況ス而シテ其レハ甚ク
不定ナリ。○若シ是下カ十日内ニ其レヲ差出サ
ス或ハ差出サバブルトニ付キ至當ノ誤ヲ示サ、
レハ當裁判所ハ此願ヲ却下スヘシ
ホーム氏ハ當所ニ着セシヤ
カルクワード

私共ハ同クヲ見サリシ知レシ此私共ハ同人カ
今朝到着シタル蒸氣船ニ乗込シテ知ルナリ
千八百七十九年一月二十日

原告代理人
モンタギニカルクワード手記

明治十二年一月二十五日口供

被告代理人

星 亨
デニソン

一 被告代理人申上候若シ原告代理人カ本日申
上タル通十日以内ニ其法律上ノ論ヲ差出サ
レハ當差止願ハ却下相成候様致度ハ
一 原告代理人カ該法律上ノ論ヲ差出候日マテ
對審ハ由日延有之度候
一 原告代理人カ法律上ノ論ヲ差出候ハ被告
ハケスウ井ツキノ及對吟味ヲ致度其他被告
ノ証拠人ノ吟味致度候
右之通相違不申上候以上

明治十二年

一月廿五日

右

星

亨

不

右

テニソシ

東京上等裁判所
西瀨判事殿

判事曰

一 日延云々ノ儀ハホ一ムノ一ニ付テハ別段之
ヲ許ス一アルヘシ

一 原告代言人カ法律ノ論ヲ差出シタルハ即ケ
被告代言人カ對論ヲ略閉定ノタル上ニテケ
スウ丹ツキガ及對吟味ヲ許ス一モアルベシ

附録 二月廿五

明治十二年 一月廿五日

お事原告代理人ニ對シテ

原告代理人ノ申立ノ考フルニ原告代
言人ニ當裁書所ノ控訴吟味ノ方法
ニ心得違有之様見ヘタリ依テ今明
カニ之ヲ説明ヤン當裁書所ニ素ヨリ
控訴ヲ受ケル所ナリ其控訴吟味ノ
仕方於テ初審裁書所ニ吟味ナシ事
實ヲ再々吟味スルナリ此昨日再
審ノ性質ヲ含ムト云ヒシモノナリ
故ニ控訴ノ趣意ヲ離レテ再審
アルニ非ス初審裁書所ノ書類ヲ見

司法省

又其証拠証言ヲモ採用セラル、
ナリ是当裁審所ノ控訴吟味ノ方
法ナリ夫故ニ原告代官人カ言フ
ルメキ控訴ハ非スレテ再審ヲ為ス等
ノ約束モ亦法律ニ無キ若シ控
訴ノ趣意ニ非サルモノナラハ当裁審
所ハ受理セズ且原告控訴状ヲ於
テ明カニ控訴スルト云フヲ記セル
非スヤ其上原告代官人カ嘗テ其
ノニ典ツタルレトアールヨリ是
岡
利和ニ係ル一件ニ付テ当裁審所
ハ控訴ヲ聽ク所ニ非スレテ再審ヲ
聽ク所外ルヲ申立タリ其節明

カニ吾ラサルヲ此方カ裁決セリ原
告代官人ハ之ヲ忘却セシヤ又原告
代官人ハ二ヶ月前、モ御示被成度
趣云シ申立タリシカ其ノハ昨日已
ニ申渡シタル趣意ニテ充分相分
リ居ルヲナリ而シテ原告代官人
ハ法律上ノ論ヲ申立ルヲ裁審
所カ命令スルナレハ之ニ随ハサルヘカラス
ト申立居レリ昨日、命令ハ動カス
ヘカラサルヲナル故何頃迄ニ其法律
上ノ論ヲ申立ルヲ確カニ申立ヘ
シ

原告代官人曰

明治

法律ノ論辨書ヲ差出スヲ上申
スル前申上度ヲアリ該論辨書
ハ東京裁事所ノ口供ニ拠テ申立ヘキ
ヤ又其口供証拠証言ニ拠テ申立
ヘキヤ或ハ当廳ニ差出シタル証拠等
ニ拠テ申立ヘキヤ兼知致度且又
訴状中誤解アラニクテ慮リ改
正ヲ願フ廉アリ訴状中法律上ニ
悪キト云フヲ記載セリ右法律上ニ
シテ証拠ニ背テ法律上ニ不充分ナ
ルト云フヲ改正致シ度而シテ原告人
等ノ改正シタル訴状、由テ再ヒ審伺
アラニクテ冀望ス

デニソシ之ヲ非難ス

お事曰

訴状ニ於テ東京裁事所ノ裁事ハ法律
上ニ於テ不正ナルト、理合ヲ以テ控訴
スルト云フ趣意ハ誰カ見ルモ明カニ知
ラル、トナリ夫故ニ別ニ改正スルニハ不及
改正スルヲハ却テ異ナル意味ニナル
ノ憂アラニク由テ此改正ヲ許シ難シ
原告代官人ハ三項ノ申立ヲナセリ

お事曰

原告代官人ハ法律ノ論ヲ差出スニ付
三項ノ各条ヲ設ケお事ノ意見見ヲ問
フハ甚タ奇ナルトナリ原告代官人カ

此訴状ヲ差出ス成ニ於テ己ニ法律ニ
於テ正シカラサルヲ言ヘル、非スヤ
然レハ東京裁判所ノ裁判ニ對シ法
律ノ論ハ己ニ其腹中ニ蓄ヘタル答ナリ
書事カ昨日東法律上ノ論ヲ聽カン
ヲ求ムルハ則チ控訴状ノ法律云々
ノ論ヲ聽ントスル譯ナリ故ニ素ヨリ
當裁判所ニ於テ今日迄調ヘタルノ
上ニ付テハ法律ノ論ヲ聽カンヲ
望ムニアラス實ニ如此問ハ原告代
人ニ於テ其不都合ナルハ自カラ明
ニ知リ居ルヲナルヘシト思料ス
又曰

一法律ノ論ヲ指出ス日ヲ申立ヘシ
原告代 言人曰
一差出スナラハ十日間ニ差出スヘシ
書事曰
一差出スナラハ十日内ニ出ストハ不確定
ノ申立ナリ若シ十日内ニ於テ法律ノ論
并書ヲ差出サスレテ他ニ何モ申立
無之節ハ裁判所ニ該訴状ヲ取附
スヘシ
又曰
一ホームハ己ニ致着レタルヤ
原告代 言人曰
一未ク面會セサレハ今朝着ノ若ナリ

書事曰

一ホームニ遠方ノ存呼寄格別ナレ儀ニ付
右法律編年書差出サレ前ニテモ
或ハ其証取調ヲ聽ク一アルニ審問
日ハ追テ取極通知スヘシ

